

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 22

— 北館部分の調査 (1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1300 集

2016

福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館跡 跡

鴻臚館跡 22

— 北館部分の調査 (1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1300 集

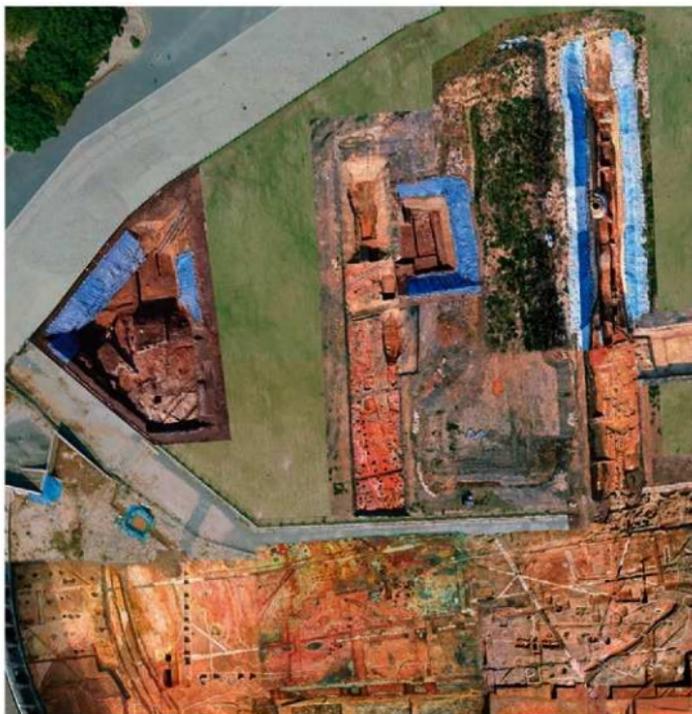


2016

福岡市教育委員会



鴻臚館跡調査区全景デジタルモザイク写真



1 鴻臚館跡北館部分全景デジタルモザイク写真



2 石垣 SX14528 (南から)



1 北館北西隅（鴻臚館末期の地形、西から）



2 北館北西隅（斜面の暗灰色の掘り残した部分は中世の整地層、北東から）



1 トレンチ1斜面下T1 瓦敷（南東から）



2 トレンチ3 推定築地塀遺構 SX19610（南東から）

序

7世紀後半に那の津を見下ろす小高い丘を切り開いて造られた筑紫館、のちの鴻臚館は我が国古代の外交施設として、中国・朝鮮半島から来日する使節にとっての玄関口、あるいは遣唐使・遣新羅使等の出国と帰国の拠点としての役割を担っていました。遣唐使の派遣停止など、外交使節の往来が途絶える9世紀には、これに替わって「唐物（からもの）」を初めとする唐文化を日本へもたらす中国や朝鮮の商人らの交易の場へと役割が変わって行きました。約400年間にわたって古代の日本外交を支えた鴻臚館は、その後土の中に埋もれてやがて福岡城の一部となり、近代には陸軍兵營、戦後には舞鶴公園へとかわり、鴻臚館の遺跡は壊滅したかに見えましたが、昭和63年から続く発掘調査によって遺構や遺物が残っていることが分かりました。27年に及ぶ発掘調査により、鴻臚館には南北二つの施設があったことや東向きに建っていたこと、丘陵を巧みに取り込んだ立体的な構造であったことなどが明らかになり、平成16年には史跡福岡城跡三の丸の一角が国史跡鴻臚館跡として二重に指定されました。

鴻臚館跡は日本の古代外交史を考える上で重要な史跡であるとともに、市民にとって貴重な歴史遺産でもあります。鴻臚館を現代によみがえらせ、福岡城跡とともに歴史公園として整備公開していくことが、今求められています。整備を行う上で鴻臚館跡の発掘記録をまとめた調査報告書を作成することが不可欠であるため、福岡市ではこの作業を進めているところです。本書は「北館」についての報告書であり、主に平和台野球場跡地内北半で行った調査についてまとめたものです。

調査に際し「鴻臚館跡整備検討委員会」をはじめ文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係機関にご協力を頂き、調査や整理を円滑に進めることができましたことを厚くお礼申し上げます。調査に関われた全ての方々に対し深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、鴻臚館跡の保存と活用に対する理解を深める一助となることを願います。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が行った、国指定史跡 鴻臚館跡の発掘調査報告書である。
2. 鴻臚館跡の発掘調査報告書は、平成 2（1990）年度から継続して刊行しており、本書が 22 冊めであるが、「鴻臚館跡Ⅱ」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 315 集）、及び「鴻臚館跡 18～21」（同第 1022・1175・1213・1248 集）を除き概要報告書である。従って、本書は 6 冊めの本報告書となる。
3. 本報告書の刊行については、調査が長期にわたり相当の分量があるため分割刊行を予定しており、遺構の性格により区分した「谷部分」、「南館（仮称）部分」、「北館部分」の順に刊行する。（鴻臚館跡調査では、谷の北側施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南側施設を「南館」と仮称している。）
4. 上記のうち、本書は「北館部分」の第 1 分冊であり、北館の建物関係遺構についてまとめたものである。
5. 鴻臚館跡の発掘調査、及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
6. 本書に使用した遺構実測図の作製は、各年度の調査担当者、及び調査員・作業員が行った。
7. 本書に使用した遺物実測図の作製は、大庭康時・吉武学・池崎譲二・吉岡涼子・熊埜御堂和香子・篠田千恵子・冨永静子・安田美哉・吉本久美子が行った。
8. 本書に使用した写真は各年度の調査担当者が撮影した。
9. 本書に使用した図の製図は大庭・吉武・池崎・吉岡・熊埜御堂・吉野満美子が行った。
10. 本書に用いた座標系は、平面直角座標系第Ⅱ座標系（日本測地系）である。図に使用した方位は全て座標北（Y 軸）を示し、この地域では真北より 0°19' 西偏し、磁北より 6°02' 東偏する。
11. 本書の執筆は、大庭康時、吉武 学、菅波正人が行い、文末に文責を記した。
12. 文中の軒瓦の型式は、「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館 2000 による。
13. 図中の瓦分類番号は「鴻臚館跡 21」福岡市教育委員会 2014 の叩き文様分類に掲げる。
14. 本書の編集は各担当者の協議の上、菅波が行った。
15. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	0008・0109・0218・0617・0706・0821・0906・1013・1116・1205・1314		
遺跡略号	KRE（鴻臚館跡）、FUE（福岡城跡）		
所在地	中央区域内 1-1	分布地図番号	60-0192
調査対象面積	48,027㎡（国史跡指定面積）	調査面積	計 13,654㎡（詳細は Tab.4 参照）
調査期間	（Tab.4 参照）		

目 次

第一章 はじめに	1
1. 調査の経緯と経過	1
2. 調査体制	2
3. 報告書の作成	3
第二章 鴻臚館の概要と発掘調査の成果	5
1. 鴻臚館の概要と周辺遺跡	5
2. 周辺地形	6
3. 鴻臚館南館の概要	7
(1) 鴻臚館跡の建物関係遺構の概要	7
(2) 各時期の建物遺構	7
第三章 調査の記録	13
1. 調査の概要	13
(1) 北館に関わる調査概要	13
(2) 第18次調査(0008)	15
(3) 第19次調査(0109)	16
(4) 第20次調査(0218)	17
(5) 第23次調査(0502)	18
(6) 第24次調査(0617)	19
(7) 第25・26次調査(0706・0821)	21
(8) 第27・28次調査(0906・1013)	23
(9) 第29次調査(1116)	25
(10) 第30次調査(1205)	27
(11) 第31次調査(1314)	29
2. 造成前の旧地形と整地遺構	32
埋め立て遺構(SM1132)	34
3. 北館(台地上)の建物関係遺構と出土遺物	35
(1) 鴻臚館築造以前の遺構と出土遺物	35
古墳(SO14512・SD14530)	35
(2) 第Ⅰ期の遺構と出土遺物	40
掘立柱列(SA14602、SA14603、SA19400)	41
第Ⅰ期の門遺構(SP23036・23311・23312・23313)	44
掘立柱建物(SB14601)	48
石積み(SX1245・SX14527)	50
(3) 第Ⅰ～Ⅱ期間の遺構と出土遺物	54
石積み(SX1278・SX14528・SX17703)、第Ⅲ期石積(SX17704)	54
(4) 第Ⅱ期の遺構と出土遺物	69
布掘り塀(SA1104・SA1237・SA14526・SA15002・SA18601・SA25055)	69
東門(SB1238・SB23300)	82
便所(SK1124・SK1125・SK25043)	88
(5) 第Ⅲ期の遺構と出土遺物	111
礎石建物(SB1228)及び雨落ち溝(SD1216)	
(6) その他の建物関係遺構(礎石掘付穴・掘立柱建物・柱穴)と出土遺物	120
SK1129、SK1150、SX1151、SX14272、SX14535、SB17701、SB17702、	
SP18111(18366)、SP18295(18400)、SP18318(18320・18386)、	
SP18370(18606・18609・18610)、SP18403(18404)、SX19506	

4. 北館の北側～東側の斜面と低地	131
(1) トレンチ 1	132
(2) トレンチ 2	136
北斜面 (SX18600)、瓦の散布 (SX18500)	
(3) トレンチ 6	145
(4) トレンチ 3	151
北斜面 (SX19500)、掘り込み (SX19520)、瓦敷き (SX19512)、 推定築地塼遺構 (SX19610)、瓦の散布 (SX19606・19607)	
(5) トレンチ 4	171
(6) トレンチ 5	174
(7) グリッド 4	175
5. 小結	
(1) 北館の主要遺構	179
(2) 第Ⅰ～Ⅱ期の建物遺構の変遷について	179
(3) 石垣遺構について (および北館第Ⅰ期から第Ⅱ期の年代観について)	181
(4) 築地塼の可能性のある整地遺構 SX19610 について	185

付篇

鴻臚館における自然科学分析	株式会社古環境研究所	187
鴻臚館石垣の石材	西南大学名誉教授 唐木田芳文	199

挿 図 目 次

Fig.1 鴻臚館跡発掘調査計画図 (平成 28 年 3 月現在)	1
Fig.2 周辺道路分布図 (1/200,000)	4
Fig.3 鴻臚館跡周辺旧地形復元図	6
Fig.4 鴻臚館跡建物遺構概略図 (1/1,000)	8
Fig.5 鴻臚館跡遺構変遷図	10
Fig.6 鴻臚館跡第Ⅱ期・Ⅲ期建物変遷図	11
Fig.7 鴻臚館跡第Ⅳ期、Ⅴ期調査地点位置図	13
Fig.8 鴻臚館跡北館遺構配置図 (1/1,000)	14
Fig.9 第 18 次調査 古代遺構配置図 (1/300)	15
Fig.10 第 19 次調査 古代・中世遺構配置図 (1/300)	16
Fig.11 第 20 次調査 古代・中世遺構配置図 (1/300)	17
Fig.12 第 23 次調査 下層遺構配置図 (1/300)	18
Fig.13 第 24 次調査 上層遺構配置図 (1/300)	19
Fig.14 第 24 次調査 下層遺構配置図 (1/300)	20
Fig.15 第 25・26 次調査 上層遺構配置図 (1/300)	21
Fig.16 第 25・26 次調査 下層遺構配置図 (1/300)	22
Fig.17 第 27・28 次調査 上層・下層 (中世) 遺構配置図 (1/300)	23
Fig.18 第 27・28 次調査 下層遺構配置図 (1/300)	24
Fig.19 第 29 次調査 上層遺構配置図 (1/300)	25
Fig.20 第 29 次調査 下層遺構配置図 (1/300)	26
Fig.21 第 30 次調査 上層遺構配置図 (1/300)	27
Fig.22 第 30 次調査 下層遺構配置図 (1/300)	28
Fig.23 第 31 次調査 上層遺構配置図 (1/300)	29
Fig.24 第 31 次調査 上層及び下層築地層土層断面図 (1/80)	30
Fig.25 第 31 次調査 下層 1 遺構配置図 (1/300)	30
Fig.26 第 31 次調査 下層 2 遺構配置図 (1/300)	31
Fig.27 造成前の旧地形推定図 (1/2,000)	33
Fig.28 埋立遺構 SM1132 土層断面図 (1/150)	34
Fig.29 埋立 (事業) 遺構全体図 (1/2,000)	34
Fig.30 SM1132 出土遺物実測図 (1 は 1/3, 2 は 1/4)	34
Fig.31 古墳 (SO14512・SD14530) 全体図 (1/80)	35
Fig.32 石室 (SO14512) 実測図 (1/40)	36

Fig.33	周溝 (SD14530) 実測図 (1/20)	36
Fig.34	02-5 トレンチ土層断面図 (1/40)	37
Fig.35	SO14512・SD14530 出土遺物実測図 1 (1/3)	38
Fig.36	SO14512・SD14530 出土遺物実測図 2 (1/1、37・38 は 1/2)	38
Fig.37	SO14512・SD14530 出土遺物実測図 3 (1/2)	39
Fig.38	北館第 1 期遺構配置図 (1/500)	40
Fig.39	掘立柱列 SA14602 実測図 (平面図は 1/80、土層断面図は 1/40)	41
Fig.40	SA14603 出土遺物実測図 (1/3)	42
Fig.41	掘立柱列 SA14603 実測図 (1/80)	42
Fig.42	掘立柱列 SA14603 土層断面図 (1/40)	43
Fig.43	第 1 期柱列東辺実測図 (1/200)・南東角土層断面図 (1/60)	44
Fig.44	掘立柱列 SA19400 実測図 (1/120)	45
Fig.45	掘立柱列 SA19400 土層断面図 (1/40)	46
Fig.46	第 1 期推定門遺構 SB23330 実測図 (平面図は 1/80、土層断面図は 1/40)	47
Fig.47	柱穴出土遺物実測図 (1/3)	47
Fig.48	掘立柱建物 SB14601 実測図 (1/80)	48
Fig.49	掘立柱建物 SB14601 土層断面図 (1/40)	49
Fig.50	SX1245 出土遺物実測図 (1/3)	50
Fig.51	第 1 期石垣 SX1245 実測図 (1/40)	51
Fig.52	第 1 期石垣 SX1245 土層断面図 (1/40)	52
Fig.53	第 1 期石垣 SX14527 実測図 (1/100)	53
Fig.54	石積み列 SX1278 実測図 (1/50)	54
Fig.55	SX1278 出土遺物実測図 (1/3)	54
Fig.56	石垣 SX14528 実測図 (1/100)	56
Fig.57	SX14528 出土遺物実測図 1 (1/3)	57
Fig.58	SX14528 出土遺物実測図 2 (1/4、17 は 1/5)	58
Fig.59	石垣 SX17703 上部整地傾斜面実測図 (1/100)	59
Fig.60	石垣 SX17703・17704 全体図 (1/100)	59
Fig.61	石垣 SX17703 実測図 (1/50)	60
Fig.62	石垣 SX17703・17704 土層断面図 (1/40)	61
Fig.63	SX17703 出土遺物実測図 1 (1/3、4～6・10・11 は 1/4)	62
Fig.64	SX17703 出土遺物実測図 2 (1/3)	63
Fig.65	SX17703 出土遺物実測図 3 (1/3、43～48 は 1/4)	64
Fig.66	SX17703 出土遺物実測図 4 (1/3)	65
Fig.67	SX17703 出土遺物実測図 5 (1/3、82 は 1/4)	66
Fig.68	石列 SX17704 実測図 (1/50)	67
Fig.69	SX17704 出土遺物実測図 (1/3)	68
Fig.70	北館第 2 期遺構配置図 (1/500)	70
Fig.71	布張り塀 SA1104 実測図 (平面図・縦断面図は 1/120、横断面土層図は 1/40)	71
Fig.72	布張り塀 SA1104 土層断面図 (1/40)	72
Fig.73	SA1104 出土遺物実測図 (1/3)	73
Fig.74	布張り塀 SA1237 実測図 (平面図は 1/200、土層断面図は 1/60)	74
Fig.75	SA1237 出土遺物実測図 (1/3)	75
Fig.76	SA14526 出土遺物実測図 (1/3)	75
Fig.77	布張り塀 SA14526 実測図 (平面図は 1/120、土層断面図は 1/40)	76
Fig.78	布張り塀 SA15002 平面図 (1/120)	77
Fig.79	SA15002 土層断面図 (1/40)	78
Fig.80	SA15002 出土遺物実測図 (1/3)	78
Fig.81	布張り塀 SA18601 他実測図 (1/60)	79
Fig.82	SA18601・SP18602・SP18603 出土遺物実測図 (1/4)	80
Fig.83	布張り塀 SA25055 実測図 (平面図は 1/120、土層図は 1/40)	81
Fig.84	東門 SB1238 平面図 (1/60)	83
Fig.85	東門 SB1238 土層断面図 (1/60)	84
Fig.86	SB1238 出土遺物実測図 (1～2 は 1/3、他は 1/4)	84
Fig.87	南館と北館の第 2 期東門の比較図 (1/60)	85
Fig.88	0309 追加調査区遺構配置図 (1/200)	86
Fig.89	0218・0309 追加調査区位置図 (1/600)	86
Fig.90	0309 追加調査区土層断面図 (1/40)	87
Fig.91	便所遺構 SK1124 実測図 (1/40)	88
Fig.92	SK1124 出土遺物実測図 1 (1/3、5～9 は 1/5)	90
Fig.93	SK1124 出土遺物実測図 2 (1/3、12～16 は 1/5)	91
Fig.94	SK1124 出土遺物実測図 3 (1/3)	92
Fig.95	SK1124 出土遺物実測図 4 (1/5)	93
Fig.96	SK1124 出土遺物実測図 5 (1/3)	94
Fig.97	SK1124 出土遺物実測図 6 (1/3)	95
Fig.98	便所遺構 SK1125 実測図 (1/40)	98
Fig.99	SK1125 出土遺物実測図 1 (1/3、1・2・15～17 は 1/5)	99
Fig.100	SK1125 出土遺物実測図 2 (18 は 1/3、他は 1/5)	100

Fig.101	SK1125 出土遺物実測図 3 (1/5)	101
Fig.102	SK1125 出土遺物実測図 4 (1/5)	102
Fig.103	SK1125 出土遺物実測図 5 (1/5)	103
Fig.104	便所遺構 SK25043 実測図 (1/40)	104
Fig.105	SK25043 出土遺物実測図 1 (1/3)	105
Fig.106	SK25043 出土遺物実測図 2 (1/3)	106
Fig.107	SK25043 出土遺物実測図 3 (1/4)	107
Fig.108	SK25043 出土遺物実測図 4 (1/4)	108
Fig.109	SK25043 出土遺物実測図 5 (1/4)	109
Fig.110	SK25043 出土遺物実測図 6 (1/4)	110
Fig.111	北館第Ⅲ期遺構配置図 (1/500)	111
Fig.112	礎石建物 SB1228・雨落溝 SD1216 実測図 (1/150)	113
Fig.113	SB1228 礎石及び礎石垂付穴実測図 1 (1/40)	114
Fig.114	SB1228 礎石及び礎石垂付穴実測図 2 (1/40)	115
Fig.115	SB1228 礎石垂付穴出土遺物実測図 (11～13 は 1/4、他は 1/3)	116
Fig.116	SB1228 整地層出土遺物実測図 1 (1/3)	116
Fig.117	SB1228 整地層出土遺物実測図 2 (33～36 は 1/4、37・38 は 1/2、他は 1/3)	117
Fig.118	SD1216 出土遺物実測図 (60～64 は 1/4、67・69 は 1/2、他は 1/3)	118
Fig.119	SB1228 整地層・SD1216 出土石製品・金属製品・ガラス製品実測図 (1/1)	119
Fig.120	その他の建物関係遺構の配置図 (1/600)	120
Fig.121	その他の建物関係遺構 SK1129・1150・SX1151 実測図 (1/40)	121
Fig.122	SP14272・SP14535 実測図 (1/40)	122
Fig.123	SB17701 柱穴土層断面図 (1/40)	122
Fig.124	掘立柱建物 SB17701 平面図 (1/80)	122
Fig.125	SB17701 土層断面図 (1/40)	123
Fig.126	掘立柱建物 SB17702 平面図 (1/80)	124
Fig.127	SB17702 土層断面図 (1/40)	125
Fig.128	SB17701・SB17702 柱穴出土遺物実測図 (1/3、4～10 は 1/4)	126
Fig.129	建物関係遺構 SP18111・18366、SP18295・18400、SP18318・18320・18386 実測図 (1/60)	128
Fig.130	建物関係遺構 SP18403・18404、SP18370・18606・18607・18610 (1/60)、SX19506 (1/40) 実測図	129
Fig.131	SP18295・18400、SP18386、SP18606・18607、SP18403・18404 出土遺物実測図 (1/4)	130
Fig.132	北館北側～東側の斜面・低地部の遺構配置図 (1/1,000)	131
Fig.133	トレンチ 1 遺構配置図 (1/300)	132
Fig.134	崖下トレンチ土層及び整地層下層瓦敷き遺構実測図 (1/80、1/40)	133
Fig.135	崖下出土遺物実測図 (1/4、1/3)	135
Fig.136	トレンチ 2 北半部下層遺構配置図 (1/300)	136
Fig.137	斜面 SX18600 実測図 (1/80)	137
Fig.138	斜面 SX18600 土層断面図 (1/40)	138
Fig.139	SX18600 出土遺物実測図 (1/3)	138
Fig.140	砂丘上の瓦の散布 SX18500 実測図 (1/80)	139
Fig.141	SX18500 出土遺物実測図 1 (8～14 は 1/4、他は 1/3)	140
Fig.142	SX18500 出土遺物実測図 2 (1/4)	141
Fig.143	SX18500 出土遺物実測図 3 (1/4)	142
Fig.144	SX18500 出土遺物実測図 4 (1/4)	143
Fig.145	SX18500 出土遺物実測図 5 (1/4)	144
Fig.146	トレンチ 6 遺構配置図 (1/300)	145
Fig.147	整地層下層瓦敷き遺構及び崖下トレンチ土層実測図 (1/40、1/80)	146
Fig.148	崖下出土遺物実測図 1 (1/4)	148
Fig.149	崖下出土遺物実測図 2 (1/4)	149
Fig.150	崖下出土遺物実測図 3 (1/3、1/2)	150
Fig.151	トレンチ 3 北半部下層遺構配置図 (1/300)	151
Fig.152	トレンチ 3 斜面・低地部の遺構配置図 (1/100)	152
Fig.153	斜面 SX19500 東壁・西壁土層断面図 (1/60)	153
Fig.154	斜面 SX19500 B 層遺物 (R1) 出土状況 (1/20)	154
Fig.155	SX19500 A 層出土土器実測図 (1/3)	155
Fig.156	SX19500 B 層出土土器実測図 (1/3)	156
Fig.157	SX19500 B 層 (R1) 及び旧表土層出土土器実測図 (1/3)	157
Fig.158	SX19500 出土瓦実測図 1 (1/4)	158
Fig.159	SX19500 出土瓦実測図 2 (1/4)	159
Fig.160	SX19500 出土瓦実測図 3 (1/4)	160
Fig.161	SX19520 出土遺物実測図 (1/3)	160
Fig.162	瓦敷き遺構 SX19512 実測図 (平面図は 1/80、土層図は 1/40)	161
Fig.163	SX19512 出土遺物実測図 1 (74・75 は 1/3、他は 1/4)	162
Fig.164	SX19512 出土遺物実測図 2 (1/4)	163
Fig.165	トレンチ 3 低地部の遺構配置図 (1/100)	164
Fig.166	推定築地塙遺構 SX19610 実測図 (1/40)	165
Fig.167	SX19610 出土遺物実測図 (91 は 1/3、他は 1/4)	166
Fig.168	SX19606 出土遺物実測図 (1/4)	167

Fig.169	SX19607 出土遺物実測図 1 (98～100 は 1/3、他は 1/4)	168
Fig.170	SX19607 出土遺物実測図 2 (1/4)	169
Fig.171	北館東面の調査区と地形推定線 (1/500)	170
Fig.172	北館東面調査区の断面の比較 (1/300)	171
Fig.173	トレンチ 4 の古代遺構配置図 (1/300)	172
Fig.174	斜面 SX21110 周辺遺構配置図・土層断面図 (1/80)	173
Fig.175	SD21122 出土遺物実測図 (1/3)	173
Fig.176	トレンチ 5 斜面 SX23200 実測図 (平面図は 1/200、土層断面図は 1/80)	174
Fig.177	第 23 次調査グリッド 3・5 西壁土層実測図 (1/50)	175
Fig.178	第 23 次調査グリッド 1～4 土層実測図 (1/50)	176・177
Fig.179	第 23 次調査グリッド 1～4 古代地形推定図 (1/300)	178
Fig.180	第 1 期南館・北館想定復元図	180
Fig.181	田主丸大塚古墳・古畑古墳群石実測図 (1/100)	182
Fig.182	03-2 トレンチ土層・出土遺物 (土層は 1/50、遺物は 1/10)	183
Fig.183	SX19610 推定線と関連遺構 (1/1,000)	186

付図 1	検出遺構配置図 (1/500)
付図 2	SX14528 土層実測図 (1/50)
付図 3	礎石建物 SB1228・雨落溝 SD1216 実測図 (1/100)

図 版 目 次

巻頭 1	鴻巣館跡調査区全景デジタルモザイク写真
巻頭 2	1 鴻巣館跡北館部分全景デジタルモザイク写真
2	石垣 SX14528 (南から)
巻頭 3	1 北館北西隅 (鴻巣館末期の地形、西から)
2	北館北西隅 (斜面の暗灰色の塊り残した部分は中世の整地層、北東から)
巻頭 4	1 トレンチ 1 斜面下 T1 瓦敷 (南東から)
2	トレンチ 3 推定築地解遺構 SX19610 (南東から)
PL 1	1 18 次調査地点全景 (南から) 211
	2 19 次調査地点全景 (東から) 211
	3 20 次調査地点全景 (南から) 211
	4 22、23 次調査地点全景 211
PL 2	1 24 次調査トレンチ 2 上層全景 (北から) 212
	2 24 次調査トレンチ 2 下層全景 (北から) 212
	3 25 次調査トレンチ 3 上層全景 (南から) 212
	4 26 次調査トレンチ 3 下層全景 (北から) 212
PL 3	1 27 次調査トレンチ 4 上層全景 (東から) 213
	2 28 次調査トレンチ 4 下層全景 (東から) 213
	3 29 次調査トレンチ 5 上層全景 (東から) 213
	4 29 次調査トレンチ 5 下層全景 (東から) 213
PL 4	1 30 次調査トレンチ 6 上層全景 (南から) 214
	2 31 次調査トレンチ 6 下層全景 (北から) 214
	3 31 次調査トレンチ 1 上層 (南から) 214
	4 31 次調査トレンチ 1 下層 1 (北から) 214
PL 5	1 石室 SO14512 (南から) 215
	2 SD14530 遺物出土状況 (南東から) 215
PL 6	1 SA14602、14603、SB14601 (西から) 216
	2 SB14601 (南から) 216
	3 SA19400・SA15002 (南から) 216
	4 1 期推定門遺構 SB23330 (東から) 216
PL 7	1 石垣 SX1245 (南東から) 217
	2 SX1245 南面 (南から) 217
	3 SX1245 隅角 (南東から) 217
	4 SX1245 土層断面 (東から) 217
	5 SX1245 石垣背後盛土土層 (東から) 217
	6 SX14527 立面 (南から) 217
PL 8	1 石垣 SX14528 (南から) 218
	2 SX17703、17704 (南から) 218
	3 SX17703 石垣 (南東から) 218
	4 SX17704 (南東から) 218
PL 9	1 布張り壁 SA1104 断ち割り (北から) 219
	2 SA1237 検出状況 (南から) 219
	3 SA25055 検出状況 (南から) 219

4	SA25055 断ち割り (東から)	219
5	SA25055 SP01 断ち割り (東から)	219
6	SA25055 SP02 (西から)	219
7	SA25055 西側トレンチ基礎断落ち (東から)	219
PL 10	1 東門 SB1238 (北から)	220
	2 SB1238 SP24305 土層 (東から)	220
	3 SB1238 SP24303 土層 (東から)	220
	4 SB17701、17702 (北から)	220
PL 11	1 SK1125、1124 (北西から)	221
	2 SK1124 (北から)	221
	3 SK1124 (南から)	221
	4 SK1125 (南から)	221
PL 12	1 礎石建物 SB1228 (東から)	222
	2.1 SB1228 礎石根石 NP02 (東から)	222
	2.2 SB1228 礎石根石 NP0 (東から)	222
	2.3 SB1228 礎石根石 NP1 (東から)	222
	2.4 SB1228 礎石根石 NP2 (東から)	222
	2.5 SB1228 礎石根石 NP3 (東から)	222
	2.6 SB1228 礎石根石 NP4 (東から)	222
	2.7 SB1228 礎石根石 NP5 (東から)	222
	2.8 SB1228 礎石根石 NP7 (東から)	222
PL 13	1 トレンチ 1 北側斜面及び斜面下 (北から)	223
	2 トレンチ 1 斜面下土層堆積 (西から)	223
PL 14	1 トレンチ 1 斜面下 T1 瓦敷層 (北から)	224
	2 トレンチ 1 斜面下 T2 瓦敷層 (北から)	224
	3 トレンチ 1 斜面下 T2 瓦敷層下層 (東から)	224
	4 トレンチ 1 斜面下 T3 整地層 (北から)	224
	5 トレンチ 1 斜面下 T4 整地層 (東から)	224
PL 15	1 トレンチ 2 斜面 SX18600 (北から)	225
	2 トレンチ 2 斜面 SX18600 完掘後 (北西から)	225
	3 トレンチ 2 斜面下 SX18500 検出状況 (北西から)	225
	4 トレンチ 2 斜面下 SX18500 西壁砂丘堆積ラミナ層 (東から)	225
PL 16	1 トレンチ 6 斜面下 中世溝内瓦出土状況 (北から)	226
	2 トレンチ 6 斜面下 T1 整地層土層 (東から)	226
PL 17	1 トレンチ 6 斜面下 T1 瓦敷層 (北から)	227
	2 トレンチ 6 斜面下 T2 瓦敷層 (北から)	227
	3 トレンチ 6 斜面下 T1 瓦敷検出状況 (東から)	227
	4 トレンチ 6 斜面下 T2 瓦敷検出状況 (東から)	227
PL 18	1 トレンチ 3 北半 (北から)	228
	2 トレンチ 3 北側斜面下 (北東から)	228
PL 19	1 トレンチ 3 SX19500 (北から)	229
	2 トレンチ 3 SX19512 (西から)	229
	3 トレンチ 3 推定築地層遺構 SX19610 検出状況 (南東から)	229
	4 トレンチ 3 SX19610 サブトレ 4 南端土層 (北西から)	229
PL 20	1 トレンチ 4 斜面 SX21110 (南東から)	230
	2 トレンチ 5 斜面 SX23200 (南東から)	230
	3 トレンチ 5 斜面下 低地面 (北東から)	230

表 目 次

Tab.1	調査計画表	1
Tab.2	鴻巣館跡調査研究委員会委員 (昭和 63 年～平成 24 年度)	3
Tab.3	鴻巣館跡関係調査報告書一覧	4
Tab.4	鴻巣館跡調査地点一覧	12
Tab.5	鴻巣館跡周辺地形調査委託 ボーリングデータ表	32
Tab.6	金製品 (Fig.119-71) の成分分析	119
Tab.7	SD1216・SB1228 出土瓦葺打痕分類表 (出土している種類のみ表示)	119
Tab.8	SX18500 出土瓦葺打痕分類表	141
Tab.9	トレンチ 3 下層出土瓦葺打痕分類表 (出土している種類のみ表示)	168

第一章 はじめに

1. 調査の経緯と経過

昭和62年(1987)、福岡市中央区城内の平和台野球場外野席の改修工事に伴い、鴻臚館跡第3次調査として行った試掘調査により、遺構の残りが想定外に良いことが判明するとともに、土坑から出土した多量の中国陶磁器の他、イスラム陶器やガラス等により、この遺跡が鴻臚館跡である可能性が極めて高いことが明らかとなった。

翌昭和63年度から確認調査を開始し、緑地部分の南側テニスコート(第I期調査)やその周囲の福岡城土塁下部(第III期調査)、平成11年からは、撤去された平和台野球場跡地内南半(第IV期調査)の調査を実施し、平成18年度から平成25年度に実施した野球場跡地北半(第V期調査)をもって、ようやく鴻臚館跡の主要部分の確認調査は終了した。これらの調査により、筑紫館以来の施設の構造や変遷が明らかになるとともに、大宰府における外交、交易面での鴻臚館の在り方の理解につながった。

Tab.1 調査計画表

長期計画	調査対象地	調査面積	実施及び計画期間	調査目的
第I期	平和台野球場南側	6,456㎡	昭和63～平成4年度	鴻臚館跡の遺構の有無と範囲の確認
第II期	舞鶴公園西広場	1,410㎡	平成5～6年度	鴻臚館跡の範囲確認、及び福岡城築城時旧地形の復元と藩主邸の確認
第III期	平和台野球場南側土塁ほか	2,114㎡	平成7～10年度	平和台野球場南側土塁下の遺構確認・平和台野球場解体工事立会・試掘
第IV期	平和台野球場跡南半分	15,095㎡	平成11～17年度	鴻臚館跡の史跡指定に向けての範囲確認・鴻臚館時代の地形復元
第V期	平和台野球場跡北半分	対象面積16,000㎡	平成18～25年度	鴻臚館北館の構造確認と北側汀線の確認、外郭施設の検出
第VI期	福岡高等裁判所とその周辺	対象面積12,000㎡	平成31～34年度(予定)	鴻臚中島館の可能性が指摘されており、その確認
第VII期	舞鶴球技場とその周辺	対象面積12,000㎡	平成35年度以降(未定)	鴻臚館客館部分(第I期～第V期調査区)に隣接する諸施設の確認

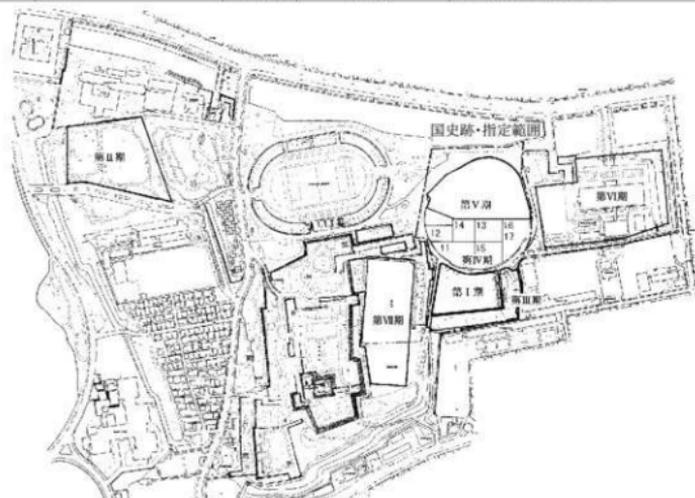


Fig.1 鴻臚館跡発掘調査計画図(平成28年3月現在)

今後は鴻臚館の全容解明に向けて、史跡指定地外の遺構確認調査（第Ⅵ期、第Ⅶ期調査）の継続とともに、発掘調査が終了した史跡指定部分の環境整備にどのように取り組んでいくかが課題となっている。このため、平成25年度にはこれまでの「鴻臚館跡調査研究指導委員会」に代わって新たに鴻臚館跡整備検討委員会を組織し、発掘調査や今後の整備について学識経験者等の指導・助言を受け、また文化庁や福岡県とも協議を行いながら事業を進め、平成26年度には鴻臚館跡の将来にわたる整備の考え方を示す「国史跡鴻臚館跡整備基本構想」を策定した。さらに、平成27年度からは早期に整備事業を推進するため「国史跡鴻臚館跡整備基本計画」を策定に着手した。（菅波）

2. 調査体制

今回報告する第Ⅴ期調査より前の組織体制については「鴻臚館跡18」に詳細があるので、ここでは第Ⅴ期調査にかかる平成18年以降の体制を示す。（菅波）

調査主体	福岡市教育委員会教育長	植木とみ子（～H18年度）、山田裕嗣（～H22年度）、 酒井龍彦（H23年度～）
	〃 教育次長	陶山博通（H18年度）、貞刈厚仁（H18～19年度）、 中島淳一郎（H21～22年度）、中沢浩（H23年度）
調査総括	文化財部長	山崎純男（～H18）、矢野三津夫（H19～20年度）、 宮川秋雄（H21～22年度）、藤尾浩（H23年～24年度） 西嶋祐二（H25～26年度）、菊田浩二（平成27年度）
	文化財整備課長	横山邦継（H18～20年度）、井澤洋一（H21年度）、 秋吉誠（H22年度）、有川由美（H23年度）
	大規模史跡整備推進課長	田中壽夫（H24～25年度）、宮井善朗（H26～27年度）
調査担当	文化財整備課整備第2係長	大庭康時（H18～20年度）、吉武 学（H21～22、24年度）
	行政企画担当主査	常松幹雄（H23年度）
	鴻臚館跡整備係長	菅波正人（H25～27年度）
	専門調査員	山口譲治、池崎譲二
整理協力	熊埜御堂和香子、田中克子、吉岡涼子（技能員）、石田晴美、後藤富美、篠田千恵子、 徳田裕子、富永静子、安田美哉、吉野満美子、吉本久美子	

（五十音順、敬省略）

【鴻臚館跡整備検討委員会】（平成28年3月現在）

岩永省三（考古学）、小田富士雄（考古学/委員長）、包清博之（環境設計学）、狩野 久（国史学）、
河原純之（考古学）、坂上康俊（国史学）、佐藤 信（国史学/副委員長）、沢村明（文化経済学）、
杉本正美（造園学）、鈴木嘉吉（建築史）、箱崎和久（建築史）、松村恵司（考古学）

（五十音順、敬称略）

Tab.2 鴻臚館跡調査研究委員会委員（昭和63年～平成24年度）

専門	氏名	就任時の所属（就任期間/退任時の役職）	氏名	就任時の所属（就任期間/退任時の役職）
国史学	平野邦雄	東京女子大学教授（S.63～H.8/委員長）	田村圓澄	九州歴史資料館館長（S.63～H.4）
	川添昭二	九州大学教授（S.63～H.16）	八木 充	山口大学教授（S.63～H.24）
	笹山晴生	東京大学教授（S.63～H.16/委員長）	狩野 久	岡山大学教授（H.4～）
考古学	佐藤 信	東京大学助教授（H.6～）	服部英雄	九州大学教授（H.16～H24）
	坪井清定	大阪文化財センター理事長（S.63～H.22）	横山浩一	九州大学教授（S.63～H.16/委員長）
	小田富士雄	福岡大学教授（S.63～）	西谷 正	九州大学教授（S.63～H24）
	田中 琢	奈良国立文化財研究所所長（H.6～10）	町田 章	奈良国立文化財研究所所長（H.11～16）
建築史学	田辺征夫	奈良文化財研究所所長（H.17～22）	松村恵司	奈良文化財研究所所長（H.23～）
	河原純之	川村学園女子大学教授（H.14～）	高島忠平	佐賀女子短期大学学長（H.16～H24）
	渡辺正気	県文化財保護審議会委員（S.63～H.8）	石松好雄	九州歴史資料館副館長（H.4～8）
	鈴木嘉吉	奈良国立文化財研究所所長（S.63～）	澤村 仁	九州芸術工科大学教授（S.63～H.16）
	上野邦一	奈良女子大学教授（H.16～19）	島田敏男	奈良文化財研究所（H.19～23）
造園学	林 良彦	奈良文化財研究所（H.23～H24）		
	中村 一	京都大学教授（S.63～H.20）	杉本正美	九州芸術工科大学教授（S.63～）
都市工学	安原啓二	元文化庁調査官（H.16～22）	田中哲雄	前東北芸術工科大学教授（H.22～H24）
	渡辺定夫	東京大学教授（S.63～H.24）		

3. 報告書の作成

鴻臚館跡では発掘調査により自然地形を利用した谷（堀）を挟んで南北に相似形の施設があったことが判明し、北の施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南の施設を「南館」と仮称している。発掘調査は「南館」が先行して平成15年度に終了し、「谷（堀）」部分は17年度終了、「北館」についても25年度に終了した。報告書は調査が先行した谷部分・南館部分の報告書作成にまず取り組み、次に北館へと移行し、20年度に「鴻臚館跡18-谷（堀）部分の調査-」で谷部分について報告した。ついで23年度に「鴻臚館跡19-南館部分の調査（1）-」で南館部分の建物遺構について、24年度の「鴻臚館跡20-南館部分の調査（2）-」では建物遺構以外の遺構のうち第Ⅰ・Ⅲ期調査分について報告した。25年度に建物遺構以外の遺構のうち第Ⅳ期調査分（平和台野球場跡地南半）について報告し、南館部分の鴻臚館関係遺構の調査報告は完了となった。北館については本書で建物遺構を中心に報告し、来年度、建物遺構以外の遺構を含めて報告する予定である（菅波）。

Tab. 3 鴻臚館跡関係調査報告書一覧

No	発行	報告書名	刊行年
1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」福岡県文化財調査報告書第34集	1964
2	高野孤鹿	「平和台の考古史料」橋本	1972
3	福岡市教育委員会	「福岡城址、内堀外壁石積の調査」福岡市第101集	1983
4	池崎謙二・森本朝子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」福岡市第101集	1983
5	弓場知紀	「出光美術館の高野コレクション」福岡市第101集	1983
6	田崎博之・矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」福岡市第101集	1983
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報」福岡市第270集	1991
8	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」福岡市第315集	1992
9	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」福岡市第355集	1993
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡4 平成4年度発掘調査概要報告」福岡市第372集	1994
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡5 平成5年度発掘調査概報」福岡市第416集	1995
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡6 平成6年度発掘調査概要報告」福岡市第486集	1996
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡7 鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告」福岡市第487集	1996
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡8 平成7・8年度発掘調査概要報告」福岡市第545集	1997
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡9 平成9年度発掘調査概要報告」福岡市第586集	1998
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10 平成10年度発掘調査概要報告」福岡市第620集	1999
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11 平成11年度発掘調査報告」福岡市第695集	2001
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12 平成12年度発掘調査報告」福岡市第733集	2002
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡13 平成13年度発掘調査報告」福岡市第745集	2003
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡14」福岡市第783集	2004
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡15 平成14年度発掘調査報告書」福岡市第838集	2005
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡16 平成15年度発掘調査報告書」福岡市第875集	2006
23	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡17 平成16・17年度発掘調査報告書」福岡市第968集	2007
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡18 谷(堀)部分の調査」福岡市第1022集	2009
25	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡19 南館部分の調査(Ⅰ)」福岡市第1175集	2012
26	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡20 南館部分の調査(Ⅰ)」福岡市第1213集	2013
27	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡21 南館部分の調査(Ⅰ)」福岡市第1248集	2014
28	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡22 北館部分の調査(Ⅰ)」福岡市第1300集(本書)	2016



Fig.2 周辺遺跡分布図 (1/200,000)

- A 鴻臚館跡 B 博多遺跡跡群 C・D・E 官道 F 赤城 G 大宰府行政跡 H 大野城跡
 I 元興・金原遺跡跡群 J 他土城跡 K 有田遺跡跡群(早良郡那津) L 粕屋M遺跡(「新」・「旧」)
 M 粕屋 N 三宅南寺跡 O 多々良島田遺跡 P 海の中道遺跡 Q 老可瓦葺跡 R 新・道瓦葺跡 S 大塚原瓦葺跡

第二章 鴻臚館の概要と発掘調査の成果

1. 鴻臚館の概要と周辺遺跡

博多湾は湾口に点在する志賀島・能古島・玄海島や、海の中道の砂州によって外海から護られた天然の良港として、古くから対外交流の窓口となってきた。鴻臚館は、この博多湾のほぼ中央部に突き出した福岡丘陵の先端部に位置し、舟運や古代官道により大宰府等の国内拠点と結ばれていた。

鴻臚館は、「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府のもと、外国からの賓客の饗応・帰化入国を担う施設であり、後には中国商人らによる滞在場所・交易の場と変容し、また我が国から中国・朝鮮に派遣された遣唐使・遣新羅使、あるいは留学僧・留学生の船出の待機所としても用いられた。

先に、鴻臚館跡で確認されている南北の施設については、「南館」「北館」と呼称しているが、「北館」については、天安二年(858)「鴻臚北館門樓」(「園城寺文書」)や貞観八年(861)「鴻臚北館」(「頭陀親王入唐略記」「入唐五家傳」)などに相当するものと考えられている。一方で、「南館」については対応する名称は確認されていない。

古代の博多湾周辺には、他にも大宰府直轄の施設として、さまざまな施設が設置されていたと考えられる。これまでの発掘調査によって確認された遺構・遺物や地形により、「鴻臚中島館」を博多遺跡群または福岡城内の高等裁判所に、食料の供給をした「津野」を海の中道遺跡に、舟の修理などを行う主船司を西区周船寺周辺に比定する説があり、外敵に備える「警固所」については福岡城本丸にかつて「警固大明神」の祠があったことから候補地の一つと考えられている。また、大宰府等と連絡する官道や駅が整備され、官道沿いには「三宅庵寺」等の寺院が配置されていた。この他、鴻臚館の屋根瓦を供給したとみられる瓦窯が、西区の元岡、女原、斜ヶ浦で確認されている。

女原瓦窯跡は、福岡市西区の今宿平野に位置し、低丘陵端部の西側斜面に立地する(Fig.2の10)。平成22年度に行われた福岡市教育委員会による区画整理事業に伴う試掘調査において確認され、平成23～24年度にかけて発掘調査が行われた。その結果、遺存状態が良好な5基の瓦窯跡とそれに付随する灰原2箇所を確認することができた。

いずれも地下式登窯であるが、1～3号窯跡及び5号窯跡が有階無段であるのに対し、4号窯跡のみ、無階無段の構造である。2基の灰原はそれぞれ1号窯跡と2～3号窯跡に付随している。4号窯跡を除いて、最終操業床面以下にも還元層や炭化物層が互層に厚く堆積していることから、複数回の操業が窺える。出土した瓦の時期などから、これらの瓦窯跡の操業時期としては、3号窯跡及び5号窯跡が9世紀後半であり、1号窯跡、2号窯跡及び4号窯跡が10世紀前半と推定される。なお、最も遅く築かれた4号窯跡は瓦陶兼業窯もしくは土師器専用窯と考えられる。

出土遺物には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、熨斗瓦を主体とし、土師器や黒色土器、須恵器等がある。軒丸瓦及び軒平瓦はいずれも鴻臚館跡出土瓦と同関係にあり、範范が一致するものも認められる。また、平瓦の凸面に認められる叩き目の種類も、鴻臚館跡出土のもの共通している。以上のことから、女原瓦窯跡で焼成された瓦は鴻臚館に供給されたと判断できる。

このように、女原瓦窯跡はその残存状況が良好であり、鴻臚館へ瓦を供給した生産施設のあり方を具体的に示している点で、極めて重要であることから、平成26年3月18日に鴻臚館跡の附として追加指定され、名称は「鴻臚館跡附女原瓦窯跡」となった。なお、追加指定により指定範囲は49,181.37㎡に変更となった。(菅波)

2. 周辺地形

鴻臚館跡が立地する旧地形 (Fig.3) は、文献資料や発掘調査で得られた地形データとあわせると、以下のように推定することができる。

南の大休山 (現動植物園) から博多湾に伸びる丘陵の先端が鴻臚館跡の立地する「福崎」であり、この丘陵は南東～北西方向に伸び、福岡城天守台と本丸北部、御鷹屋敷の3箇所に丘陵の頂部があり、最も高い頂部は御鷹屋敷にあった。丘陵西側は入江 (草香江) で、対岸 (西岸) から荒津山に向かって砂洲が伸びていた。荒津山の直下は水深のある海で、古代には大型船の停泊地になっていたとみられる。天守台～御鷹屋敷に伸びる丘陵から枝別れた2筋の小枝丘が東へと伸びており、この枝丘を古代に削平造成して二つの平坦地を造り、鴻臚館 (筑紫館) を建設している。鴻臚館の東は谷部を経て小さな丘陵 (現; 高等裁判所) があり、この周辺には陸地化して間もない沖積地が広がっていたと推定される。枝丘陵の北辺には海浜砂丘が形成され、砂丘は海へ向かって浅く窪んだのち一度高まり、遠浅の海へと続いていた。一方、枝丘陵の南辺は鴻臚館の南から福岡城本丸中央に向かって深い谷が食い込んでいた。

鴻臚館は自然の谷をそのまま4 m以上の深い堀として取り込み、周囲も同程度の高さの崖面なし斜面とした台地上の平坦地に築造されていた。客館とはいえ隔離性の強い構造をなし、新羅海城などへの備えのためか防衛性も高く、かつ眺望がよく、逆に周囲からも良く見え、監視しやすいという地形的な特徴を備えていたと言える。中世後期には寺院が設置されたと考えられ、また近世初期には黒田長政により福岡城が築城されたが、このような地形的特徴を活かして土地利用された可能性が高い。(吉武)

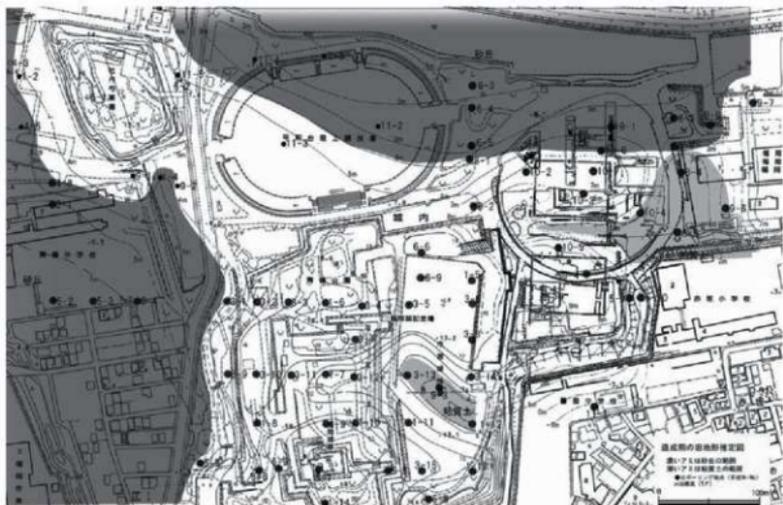


Fig.3 鴻臚館跡周辺旧地形復元図

3. 鴻臚館跡南館の概要

(1) 鴻臚館跡の建物関係遺構の概要 (Fig.4)

鴻臚館(筑紫館)の築造前には東に伸びる2つの丘陵があり、これを削平造成して平坦な台地を造り、南北に2つの施設を設けた。丘陵間の谷を活かして東に開口する東西方向の堀とし、南北を隔てるとともに、谷の東西に土橋・木橋・陸橋などを設けて連絡路とした。南館は北館より1～1.5m程高い位置にある。南北の台地上には、それぞれ柱列(柵)や布掘り堀、建物群があり、東門やトイレなどが設けられた。台地は周辺低地から3～4m程度高く、台地下の低地部には外郭施設である築地堀が巡らされた可能性がある。

遺構・遺物の検討の結果、鴻臚館跡南館部分検出の建物遺構は五時期(第Ⅰ～Ⅴ期)に区分される。建物関係遺構は第Ⅰ～Ⅲ期で確認しており、第Ⅳ・Ⅴ期については区画溝の一部を確認したが、明確な建物遺構は確認できない。ただしこの時期に比定される瓦が多数出土することから瓦葺建物が存続したことは間違いない。また、概ね11世紀代とみられる瓦が谷の北斜面に多く出土する状況から、鴻臚館末期には建物が北館に集約された可能性が指摘されている。

(2) 各時期の建物遺構 (Fig.5)

第Ⅰ期(7世紀後半～8世紀初頭頃)

古墳群のあった東に伸びる2つの丘陵を造成して平坦な台地とする。南側に比べて北側の台地は南北幅が狭い。台地間の谷を挟んで南北に建物が配置されるが、南北で建物の主軸が異なる。第Ⅰ期整地土に瓦が含まれており、第Ⅰ期にも瓦葺建物が存在したと推定される。

南館部分では、東半部で「L」字形に配置された建物4棟と、その内側の1棟の建物を確認したが、西半は第Ⅲ期建物保存のため未調査である。建物柱穴から遺物が出土せず、建物方位が第Ⅱ期以降と異なるため最も古く位置付けている。ちなみに、梁行2間の南北棟(SB322・323)の切れる部分を中心と推定し、東西棟(SB320・321)を梁行2間と想定すれば、「コ」字形ないし「ロ」字形の建物配置を復元することが可能である。

一方、北館は、掘立柱列を長方形に巡らせた区画と、区画内に配された掘立柱建物1棟からなる。柱列と平行する土留め石垣(高さ1.6m)が谷の北斜面に築かれている。

第Ⅰ期の建物は南館・北館ともに柱穴の残りが悪く、特に南館では基底部のみの残存か、または完全に消失しているものもある。第Ⅱ期柱穴の残りが比較的良好いことから、第Ⅰ～Ⅱ期間に1m以上の大きな削平が行われ、土砂を周辺に押し出して敷地の拡張を行ったと考えられる。

第Ⅱ期(8世紀前半～中頃)

谷を挟んで南北に同規模・同方向の布掘り堀を配置し、堀の東辺に門、南西区画外にトイレを設ける。谷は整形して北斜面に高さ4.2mの石垣を築き(第Ⅱ期以前に築造の可能性がある)、東側に土橋を架けている。谷頭には二つの池を設けるが、ひとつは第Ⅱ期のうちに埋没している。

南館では、布掘り堀1、東門1、掘込地業1、トイレ3の遺構を確認した。これらは主軸方位が等しく、出土遺物からも同時期の遺構と推定される。トイレ遺構出土遺物から時期比定しており、布掘り堀と地下地業からも鴻臚館式軒丸瓦が出土している。地下地業(SK140)は対照位置(北西隅)に確認できず、北館にも確認できないため、性格不明である。また、約43m離れた台地南端に幅3.5mの布掘り状遺構(SX865)があり、形状・方位・出土遺物から第Ⅱ期に比定している。

布掘り堀内部では第Ⅱ期建物遺構が確認できないことから、掘立柱式ではなく礎石式であったと想

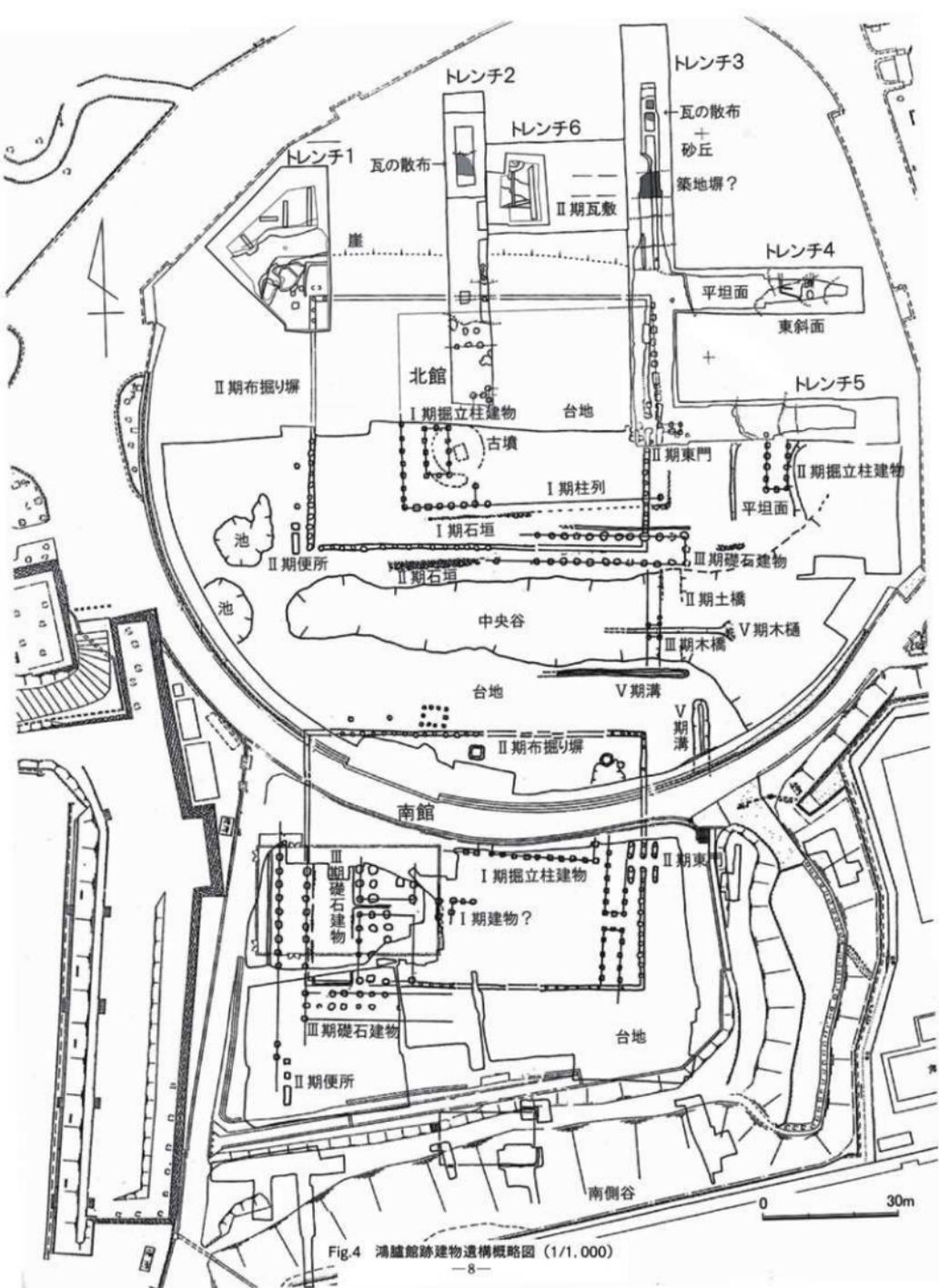


Fig.4 鴻臚館跡建物遺構略図 (1/1,000)

定している。整地層下の礎石据付け穴（SP824・828・829）やSB32・330馬道石組排水溝の下層の瓦を立てた排水溝など、二時期以上の建物が重なっている状況が窺え、これらの下層遺構が第Ⅱ期に合致する可能性がある。

一方、北館は、現在までに、布掘り堀1、東門1、トイレ3の遺構を確認している。北館東門の東側の約1m低い平坦地には南北棟の掘立柱建物がある。

第Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）

谷はさらに埋められて幅が狭くなり、木橋が架けられる。建物主軸は第Ⅱ期を踏襲しており、主軸を変えずに建物の拡張を行ったと考えられる。

南館は、礎石建物3（南北棟2、東西棟1）のほか、梵鐘铸造遺構1などを確認した。雨落ち溝等から8世紀後半～9世紀前半の遺物が出土し、9世紀後半の土坑が建物に重複し、礎石抜き穴から陶磁器が出土するなど、9世紀中頃には廃絶したと推定される。推定南門については9世紀頃の基壇状の遺構を検出したが、調査範囲が限定されて狭く、明確さを欠く。

一方、北館は、礎石建物1（東西棟）を確認し、布掘り堀との重複から早くて8世紀後半の造営で、9世紀後半には建物に重複して土坑を掘る。

時期不詳の建物関係遺構

上記の他、所属時期が明らかにできなかった建物関係遺構として、柱列、掘立柱建物、通路状遺構、礎石据付け穴、瓦敷通路、基壇状の斜面、一段高い地山などがある。（吉武）

第Ⅰ期から第Ⅲ期の建物の変遷

まず、成立期の第Ⅰ期であるが、南館と北館では方位も若干異なり、建物配置も異なっている。本来の南館建物群は口の字形を呈する配置であったと想定される。内部にある建物は中心建物であった可能性が高い。北館は建物を柵で囲むもので、内部に数棟程度の建物が想定される。南館は推定復元であるが、規模は東西52m、南北37m程度となる。建物配置に注目すると、長舎が中心建物を取り囲む構造は初期の郡庁の建物配置に類似する。例えば、7世紀後半から8世紀前半に位置づけられる早良郡庁と比較すると、縦横の比率や中心建物の配置に相違はあるが、規模や長舎からなる構造は類似点が多い。郡庁は政務の実務的な場である一方で、儀式や饗宴の場としての機能も想定されており、類似する構造の南館についても同様の機能を想定できるのではないであろうか。

次に第Ⅱ期、Ⅲ期の構造について見ていく。第Ⅱ期は中央の谷や周囲を埋め立てて敷地を拡張した上で、南館、北館ともに同一の規格のものとなる。堀の内部の建物構成は不明であるが、瓦葺建物を配置したと考えられる。第Ⅰ期と比較すると、堀で囲まれる構造は北館で見られたものであり、第Ⅱ期では南館も同様の構造になっている。

第Ⅲ期は第Ⅱ期の中軸線と踏襲し、施設の拡張と大型の礎石建物を回廊で取り囲む構造に改変している。大型の礎石建物は宿舍と考えられ、第Ⅱ期でも宿舍となる同様の建物があったと想定する。第Ⅲ期は新羅の使節の往来が途絶える時期にも関わらず施設が拡大しており、対外関係や客館としての役割の変化を含めた検討が必要である。

これまで「推定南門」としてきた基壇状の遺構については、調査範囲が狭く遺構が不確定であることに加え、現在までの調査の蓄積においても、この遺構以外に「鴻臚館南門」を支持する要素が皆無であることなどの課題がある。この遺構については、第Ⅱ期の布掘り状遺構SX865が第Ⅲ期に造り替えられたものである可能性を考えておきたい。（菅波）

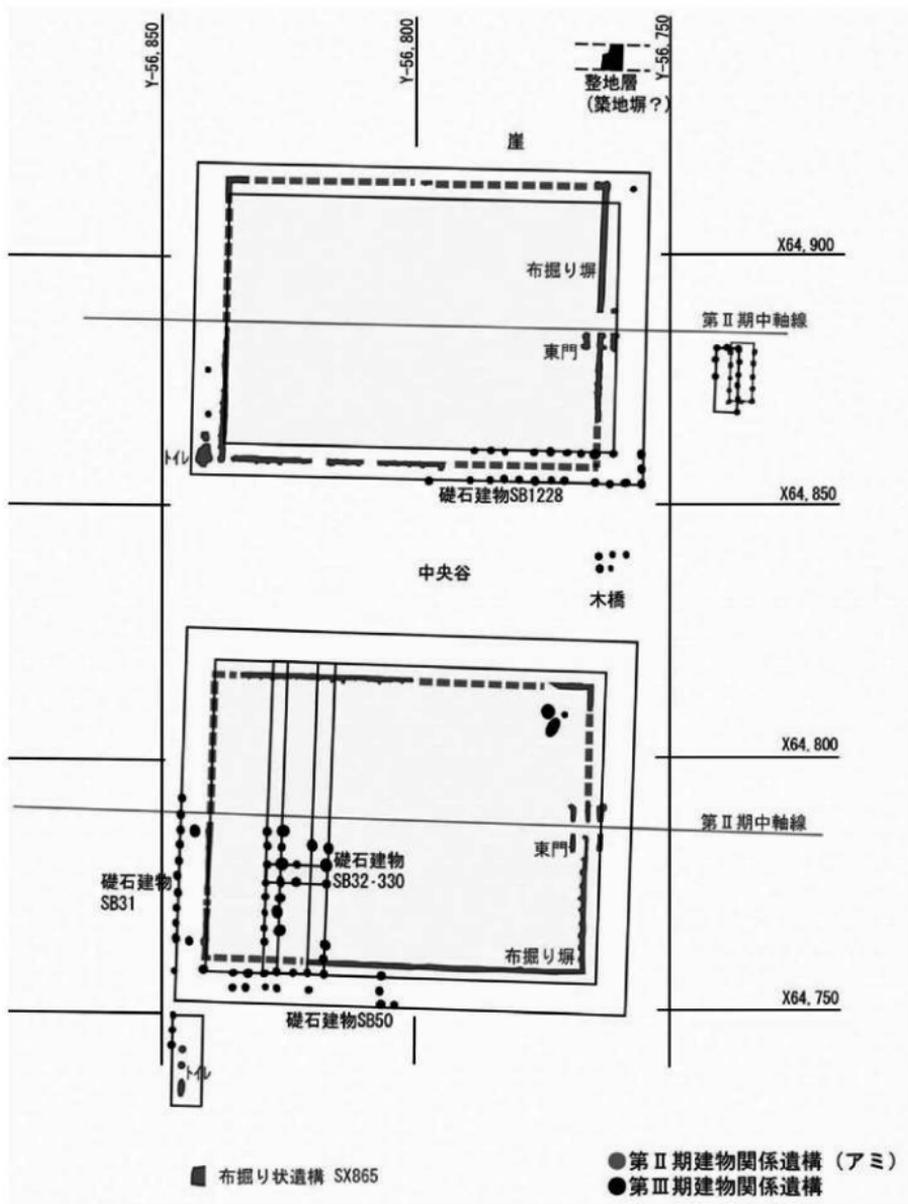


Fig.6 鴻臚館跡第Ⅱ期・Ⅲ期建物変遷図

Tab.4 鴻巣館跡調査地点一覧（※網掛けは本書に関する調査）

平成 28 年 3 月現在

年度	調査番号	鴻巣館跡調査回数	福岡城跡調査回数	調査地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
S.26	5102	1		三の丸中央部	テニスコート建設		5108（3日間）	九州文化総合研究所
S.38	6301	2	1	三の丸東郭	裁判所建設	596	631007～631105 640327～640331	福岡県教育委員会
S.62	8747	3	9	三の丸中央部	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学
S.63	8829	4	10	三の丸中央部	範囲確認	856	880727～881210	山崎純男・吉武学
H.1	8910	5	13	三の丸中央部	範囲確認	1,200	890420～891207	山崎純男・吉武学
H.2	9005	6	15	三の丸中央部	範囲確認	1,300	900409～910131	山崎純男・吉武学
H.3	9130	7	17	三の丸中央部	範囲確認	1,000	910501～920331	山崎純男・瀧本正志
H.4	9218	8	19	三の丸中央部	範囲確認	1,670	920615～921030	山崎純男・瀧本正志
	9236	9	20	三の丸中央部	範囲確認	430	920910～930331	山崎純男・瀧本正志
H.5	9326	10	22	三の丸西郭	範囲確認	450	930816～940228	田中壽夫・瀧本正志
H.6	9420	11	27	三の丸中央部	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫・瀧本正志
	9432	11	28	三の丸西郭	範囲確認	850	940801～950320	田中壽夫・瀧本正志
	9463	11	30	三の丸東郭土塁	範囲確認	60	950201～950217	田中壽夫・瀧本正志
H.7	9537	12	31	三の丸西郭・中央部	範囲確認	300	951101～960329	田中壽夫
H.8	9620	13	35	三ノ丸中央郭	範囲確認	450	960704～961204	田中壽夫
H.9	9736	14	39	三ノ丸中央郭	範囲確認	204	970818～980131	田中壽夫
H.10	9807	15	41	野球場解体	公園整備	230	980410～980416	田中壽夫・池崎譲二
	9831	16	42	野球場跡全体	試掘	930	980922～990120	塩屋勝利・池崎譲二
H.11	9910	17	43	野球場跡南半	範囲確認	3,500	990422～000315	塩屋勝利・池崎譲二
H.12	0008	18	44	野球場跡南半	範囲確認	1,750	000425～010316	塩屋勝利・池崎譲二
H.13	0109	19	47	野球場跡南半	範囲確認	2,000	010521～020329	折尾学・池崎譲二
H.14	0218	20	49	野球場跡南半	範囲確認	1,200	020513～030331	折尾学・大庭康時
H.15	0309	21	50	野球場跡南半	範囲確認	2,425	030506～040331	折尾学・大庭康時
H.16	0415	22	51	野球場跡南半	範囲確認	2,110	040401～050331	折尾学・大庭康時
H.17	0502	23	52	野球場跡南半	範囲確認	2,110	050404～060331	横山邦継・大庭康時
H.18	0617	24	57	野球場跡北半	範囲確認	820	060401～070331	大庭康時・中村啓太郎
H.19	0706	25	59	野球場跡北半	範囲確認	504	070401～080331	吉武学・中村啓太郎
H.20	0821	26	60	野球場跡北半	範囲確認	860	080701～090331	吉武学・中村啓太郎
H.21	0906	27	61	野球場跡北半	範囲確認	900	090401～000331	吉武学・中村啓太郎
H.22	1013	28	62	野球場跡北半	範囲確認	970	100602～110331	吉武学・久住猛雄
H.23	1116	29	65	野球場跡北半	範囲確認	500	110601～111222	常松幹雄・吉武学
H.24	1205	30	69	野球場跡北半	範囲確認	1,180	120417～130329	吉武学
H.25	1314	31	70	野球場跡北半	範囲確認	860	130701～140328	菅波正人

第三章 調査の記録

1. 調査の概要

(1) 北館に関わる調査概要

北館に関わる調査は第Ⅳ期調査区(第18～20・23次)及び第Ⅴ期調査区(第24～31次)が該当する。

第18次調査(H12)では、南館同様の布掘り堀を確認し、南北に相似形の施設が存在したことを確認した。第19次調査(H13)では第Ⅲ期の礎石建物を確認した。第20次調査では中央の谷の北側に第Ⅱ期の石垣遺構が存在することを確認した。また、先行する第Ⅰ期の区画施設、掘立柱建物を確認した。

第24次、25次調査(H18～H19)のトレンチ2では、北へ落ちる崖の落ち際と、北側低地の砂丘上に鴻臚館の瓦が広がる状況等を確認した。第25～26次調査(H19～21)のトレンチ3では、台地上において第Ⅰ期柱列を検出し、柱列の東辺に門遺構が取り付くことや、第Ⅱ期布掘り堀の北東角、第Ⅲ期建物に伴うとみられる礎石等を確認した。崖下砂丘上においては、平安時代の粘土整地層等を検出し、築地の存在の可能性が指摘された。第27次、28次調査(H21～22)のトレンチ4では、鴻臚館の北東角の状況を確認し、東側(正面側)が擁壇状に高くなる構造であったことが判明した。また第28次(H22)のトレンチ5では、第Ⅰ期東門に付属する施設があることを確認している。第31次調査(H25)のトレンチ1では、北館の北西隅の造成の状況を確認した。北館の北では台地が落ち、約4mの段差で砂丘へと続く。更に砂丘上には粘土による整地層が認められた。第30次、31次調査(H24～25)のトレンチ6でも同様の整地層が確認したが、この場所に外郭施設(築地堀)が存在したかについては、なお検討を要する。(菅波)

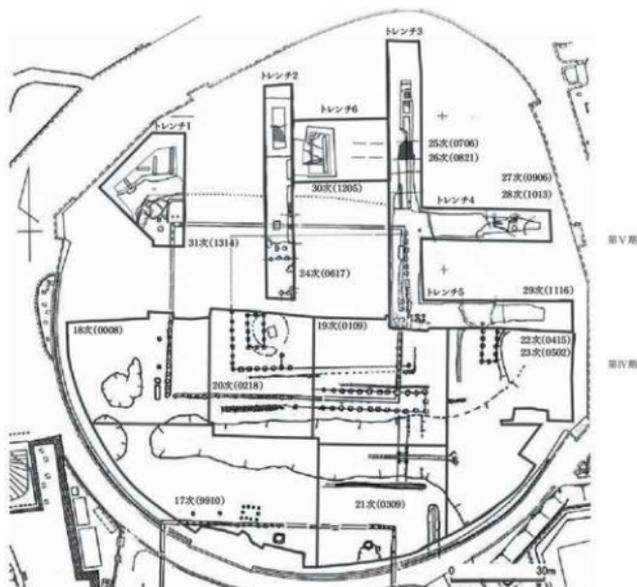
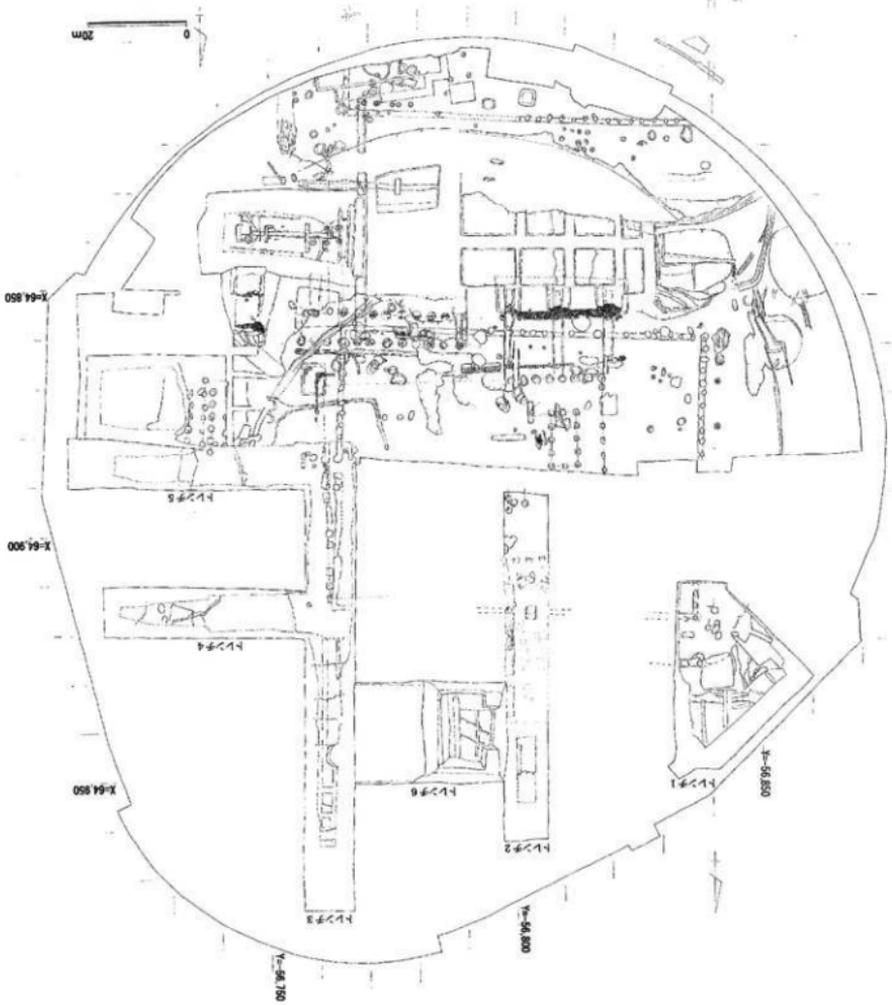


Fig.7 鴻臚館跡第Ⅳ期、Ⅴ期調査地点位置図

Fig.8 鴻臚廳跡北庭遺構配置圖 (1/1,000)



(2) 第18次調査(0008) Fig.9, PL.1

第IV期調査区の北西隅に位置し、平成12年度に調査を行った。概要は「鴻臚館跡12」に掲載している。調査面積1,750㎡。遺構番号は1101～1151。遺構面は風化頁岩岩盤及び整地層で、近代、特に平和台野球場建設時の削平が著しい。

戦後の国体関係の土坑や溝、戦前の旧陸軍第24連隊の被服庫や物干場等の近代遺構のほか、福岡城跡三の丸を東西に横断する道路路面と側溝、及びその北側に接する重臣屋敷地内の桶側井戸・整地遺構等を検出した。中世遺構には、鴻臚館の中央谷を再利用した池、池に流れ込む溝、近世まで使用した可能性のある中世井戸がある。古代の筑紫館・鴻臚館跡に関連する遺構としては、中央谷、谷を埋めて造成した事業SM1132、第II期布掘り塀SA1104と便所SK1124・1125、土坑、溝、池等を確認した。便所遺構は平面確認に留め、掘り下げ調査は第21次調査で行っている。なお、谷・溝・池は「鴻臚館跡18」の中で「谷」部分の遺構として報告済みである。

主な調査成果としては、中央谷を挟んで北側に南館と相似する布掘り塀が存在することが確認され、鴻臚館が南北ふたつの施設から構成されていたことが明らかとなった。また、出土瓦の比較から北館造営が南館よりやや新しく、終焉時期についても11世紀代の瓦が中央谷の北斜面に多いことから、終末期の鴻臚館が北側に収斂され、南館側には大きな建物が作られていなかった可能性が高まった。

本書では、上記のうち古代の事業跡(SM1132)、布掘り塀(SA1104)、便所SK1124・1125について報告する。(吉武)

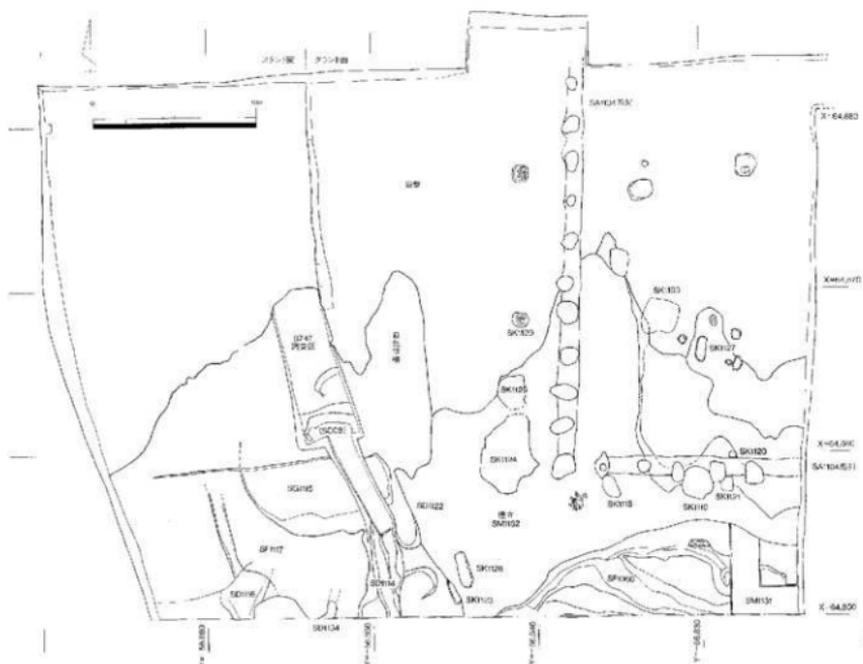


Fig.9 第18次調査 古代遺構配置図(1/300)

(3) 第19次調査 (0109) Fig.10、PL.1

第18次調査で確認した布掘り塀の東辺を確定することを主目的に平成13年度に調査を実施した。概要は「鴻臚館跡13」に掲載。調査面積2,000㎡。遺構番号は1201～1281。古代遺構面は風化頁岩岩盤及び整地層で、削平が比較的少なく礎石建物等の遺構が良好に残っていた。

検出遺構は、戦後の平和台野球場の給排水管、戦前の旧陸軍第24連隊の建物基礎・ゴミ穴・井戸等の遺構、近世では福岡城三の丸を東西に横断する道路路面と側溝、及び道路北側に接する重臣屋敷の柱列(塀)、中世では鴻臚館の谷跡を利用した池や、溝、井戸、土坑などである。古代の筑紫館・鴻臚館跡に関連する遺構としては、埋立造成(事業)跡SM1209、第Ⅱ期布掘り塀SA1237と東門SB1238、第Ⅱ期以前の石垣SX1245・SX1278、第Ⅲ期礎石建物SB1228・雨落溝SD1216、土坑等を確認した。うち、東門SB1238については第29次調査で再調査を行った。

第Ⅱ期の建物が南館と相似形であることが明確となり、加えて第Ⅲ期の北館礎石建物を確認し、時期的にみて文献に見える「鴻臚北館」に相当する建物である可能性が高まった。

本書では、上記のうち古代の事業跡SM1209、第Ⅱ期布掘り塀SA1237と東門SB1238、第Ⅱ期以前の土留め石積みSX1245・SX1278、第Ⅲ期礎石建物SB1228・雨落溝SD1216について報告する。(吉武)

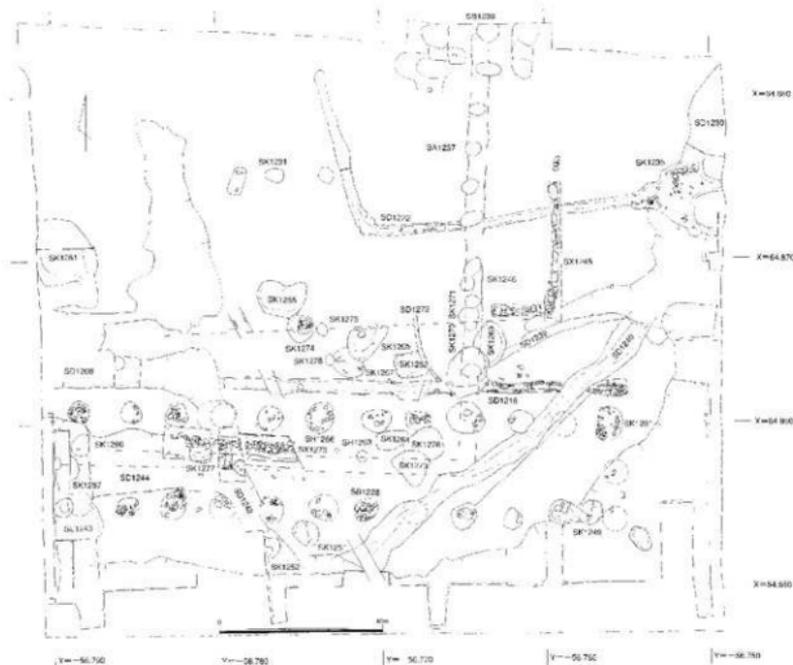


Fig.10 第19次調査 古代・中世遺構配置図 (1/300)

(4) 第20次調査 (0218) Fig.11, PL.1

第IV期調査区の中央に位置し、平成14年度に調査を行い、概要は「鴻臚館跡15」に報告している。調査面積1,800㎡。遺構番号は、14001～14535。遺構検出面は、風化頁岩岩盤及び整地層で、地山の岩盤は、調査区西辺の北半分から、北辺の西半分のほぼ三角形部分で露出していた。調査地点は平和台球場グラウンド部分にあたり、大きく削平を受けている。

旧陸軍歩兵24連隊関係遺構に関しては、ゴミ穴2基が検出されたに過ぎない。近世では、福岡城三の丸を東西に走る道路部分が大半を占め、道路側溝、側溝の北に展開した家臣屋敷の跡跡、掘立柱穴、池と思われる不整形土坑、廃棄土坑などが出土した。中世の遺構としては、柱穴、土坑、池状遺構などがある。鴻臚館時代の遺構としては、柱穴、土坑、石垣、谷(堀)などを検出した。

主な調査成果としては、第I期の掘立柱建物・塀を復元することができ、第I期の建物構成を推定する手がかりを得た。また、第I期と、第I期から第II期にかけての二時期の石垣遺構を調査した。

さらに、鴻臚館造成にともなって破壊された古墳の周溝と石室敷石が出土した。

平成14年度の発掘調査では、鴻臚館造成の変遷をさぐる手がかりを得ることが出来た。

本書では、上記のうち、古墳に関わるSO14512・SD14530、第I期掘立柱列SA14602・14603、掘立柱建物跡SB14601、石垣SX14527、第I期から第II期間に位置づけられる石垣SX14528、第II期布張り塀SA14526について報告する。(大庭)

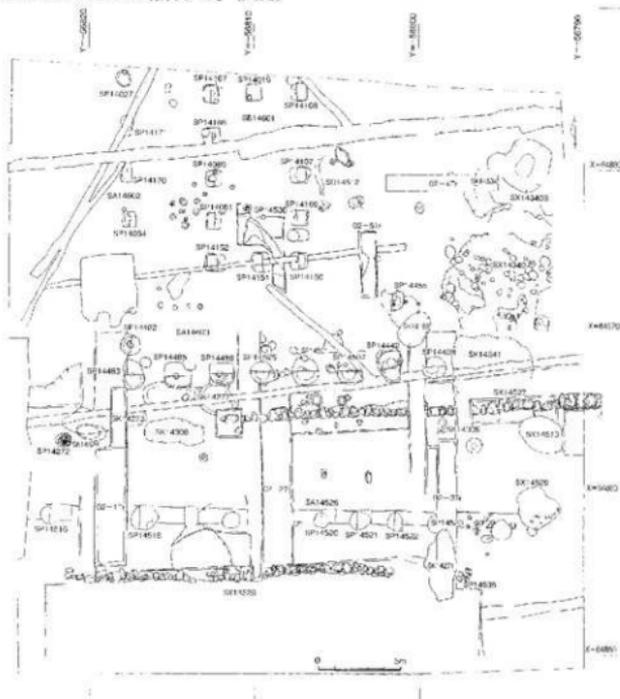


Fig.11 第20次調査 古代・中世遺構配置図 (1/300)

(5) 第23次調査 (0502) Fig.12, PL.1

第IV期調査区の東端に位置し、平成17年度に調査を行い、概要は「鴻臚館跡17」に報告している。平成16年度調査(0415)の下層部分にあたり、調査面積は1,520㎡である。遺構番号は、17001～17208。遺構検出面は、基本的に茶褐色の粘質土で盛土整地面である。西から東に大きく三段に下降するが、中世の屋敷地造成にかかる段切り造成によるものである。しかし、古代においても調査区東側に大きな谷が存在したことは1963・1964年の第2次調査から明らかであり、中世の段切り造成は古代の地形を利用したものであったことが推測できる。

中世の遺構としては、谷斜面を登る堀(堀底道)、段切り造成、溝、土坑、柱穴などを検出した。古代の遺構としては、柱穴、土坑、広場状造成面、石垣を調査した。広場状造成面は、均質な砂質土を平坦に敷いたもので、この整地面に伴う遺構は皆無であった。13年度調査で第II期の東門遺構を検出した遺構面につながるもので、東門の前面に奥行き20mほどの広場が設けられていたものと推定される。柱穴からは、掘立柱建物二棟検出した。いずれも桁行五間、梁間二間の南北棟と考えられる。時期を判断するのに十分な出土物はえられなかったが、柱穴の規模・形状から鴻臚館時代であることは間違いないだろう。石垣は、第22次調査で検出した第I期から第II期にかけて築造された石垣の延長にあたる。

主な調査成果としては、鴻臚館北館東門の前面の地形および造成状況の解明に資する手がかりを得たことがあげられる。

本書では、上記のうち第I期から第II期の間に位置づけられる石垣 SX17703、古代の掘立柱建物跡 SB17701・17702、東門東側の谷地形を調査したグリッド4などについて報告する。(大庭)

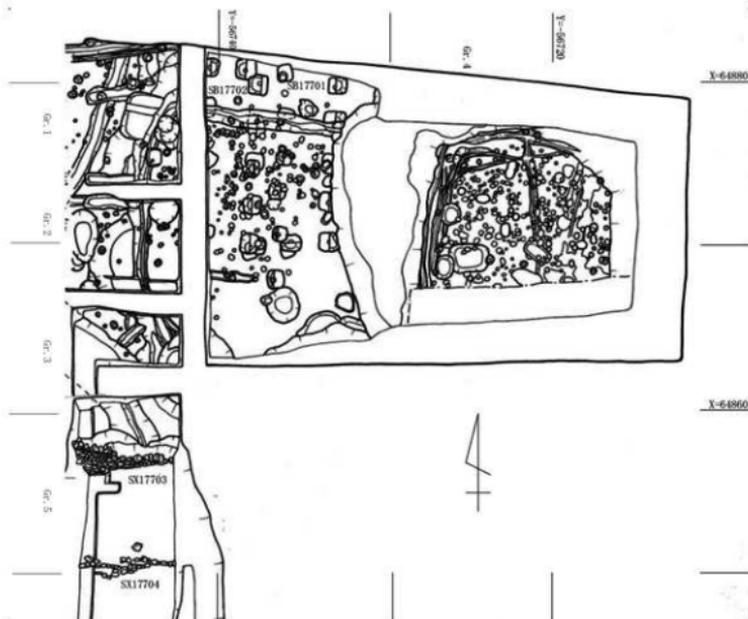


Fig.12 第23次調査 下層遺構配置図 (1/300)

(6) 第24次調査(0617) Fig.13・14、PL.2

第V期調査について

第24～31次調査は、鴻臚館跡調査計画における第V期調査に位置付けられる。第V期調査は旧平和台野球場北半を対象とし、鴻臚館北館の地形、東門入口の造作、海岸へと至る景観等の解明を目的とする。文化庁指導等により遺構保存を優先するために第IV期までのような全面的な調査方法とはらず、幅10mの大型トレンチを設定して必要に応じてトレンチの拡張や追加を行う方法を用いた。当初設定したトレンチは4本で、西から順に1～4と呼称し、その後の調査で2ヶ所を追加し、最終的にトレンチ6まで調査を実施している。

第24次調査(トレンチ2)について

第V期調査の最初の調査である第24次調査は、トレンチ2を対象として平成19～20年度に実施した。第II期布掘り堀の中央部を南北に縦断する位置に設定したトレンチである。調査面積約710㎡。遺構番号は18001～で付している。

トレンチ南側約1/4ほどで台地が北へ落ち、北半は海へと続く砂丘となっている。トレンチの南側では遺構面が風化頁岩岩盤で、古代から近代までの遺構が重複して検出されるが、これに対して北側は近世初頭の福岡城築城時に厚く盛土整地されており、遺構面が2面に分けられる。すなわち、上層が近世～近代の遺構面、厚さ3.4mの築城盛土を挟んで下層が古代～中世の遺構面である。

上層の遺構(近世～近代) Fig.13、PL.2

上層の主な検出遺構として、福岡城三の丸武家屋敷建物2棟がある。建物の礎石据付穴が南北に2列並んでおり、礎石は全て失われているが、根石は良好に残っている。東のSB18451は10基の据付穴が南北に直列しており(一つは近代に破壊され失われている)、その後に行ったトレンチ6(後述)の調査により東側に展開する梁行6間(11.7m)、桁行9間(17.6m)以上の南北棟建物であることが分かった。西のSB18450は調査区西側に伸びるもので、南側に庇を持ち、梁行3間の南面する東西棟建物と推定される。柱間はともに195～196cmを測る。これらの建物は福岡城古絵図に示された三の丸重臣屋敷の区画と主軸方位を同じくするが、現在までに蒐集されている古絵図では重臣屋敷の区画内部の建物を描いたものがなく、具体的な建物配置は不明であり、今回確認した建物跡は重臣屋敷内部の姿を初めて具体的に示した遺構ということができよう。この他の近世遺構には柱穴・土坑等の遺構がある。また近代の遺構に関しては、戦前の陸軍施設や戦後の平和台野球場に伴う排水溝などを検出している。

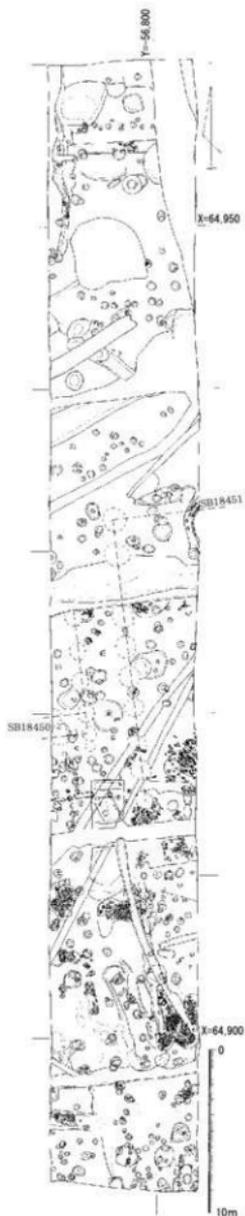


Fig.13 第24次調査 上層遺構配置図(1/300)

下層の遺構（古代～近代） Fig.14、PL.2

調査区南側約 1/4 の範囲は風化頁岩岩盤が遺構検出面であり、柱穴や土坑等の古代遺構を確認した。柱穴は 2～4 つが組み合わせる柱列もしくは建物とみられる遺構だが、調査範囲が狭いため全体を確認できたものはない。

北側約 3/4 は福岡城築城時の盛土に覆われており、武家屋敷建物を保存するため掘削範囲が限定され、必要最小限の範囲にサブトレンチ 3 ヲ所を設定して遺構の確認を行った。サブトレンチ 1 は、第 II 期布掘り堀の推定位置から北へ向けて調査区東壁沿いに幅 2 m で設けた。築城前に削平を受けた岩盤面上において布掘り堀 SA18601 を確認し、この 3 m 北側の位置で、北へ向かって落ちる斜面 SX18600 を確認した。斜面についてはトレンチ幅が狭いため安全上の理由から底までは掘削できなかった。またサブトレンチ 1 の北に 2 m の間において掘削を行ったが、同様の理由から深掘には至っていない。斜面 SX18600 には古代又は中世の旧表土層と見られる黒色土層が 2 層堆積しており、これに挟まれるように鴻臚館建物の礎石 6 個が落とし込まれた状態で出土した。サブトレンチ 2 は布掘り堀の西側推定位置に確認のため設けた 2.0 × 2.8 m の調査区で、SA18601 の平面確認のみ行った。サブトレンチ 3 は、福岡城遺構に影響のない北端部に対して調査区幅いっぱい大きく設定した。地表面から遺構検出面まで 4 m と深く、法面勾配を取ったため遺構面に確保できた調査範囲は 13 m × 4 m である。福岡城盛土直下には築城前の旧表土層である黒褐色砂質土が広がっており、これを除去すると古代瓦を大量に含む包含層 SX18500 が現れる。斜面 SX18600 からこの SX18500 まで 24 m 離れていることから、斜面上に造られた鴻臚館建物から流れこんだ瓦である可能性は低く、砂丘上に人為的に散布された瓦であると考えられる。

本書では上記のうち、第 II 期布掘り堀 SA18601、南半風化頁岩岩盤上に検出した建物遺構 5 棟、斜面 SX18600、瓦包含層 SX18500 について報告する。(吉武)

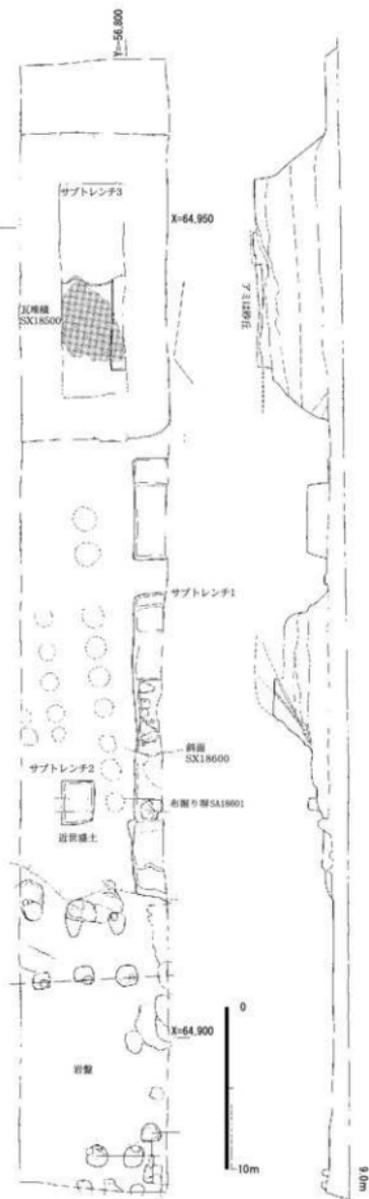


Fig.14 第 24 次調査 下層遺構配置図 (1/300)

(7) 第25・26次調査 (0706・0821) Fig.15・16, PL.2

第V期調査として、平成20・21年度にトレンチ3を対象として実施した調査である。第II期布掘り堀の北東部の確認、及び鴻臚北館の地形、海岸へと至る景観等の解明等を調査目的とする。調査面積860㎡。遺構番号は19001～。トレンチ2と同様、トレンチの中ほどで岩盤が切れて斜面となって落ちており、北半は築城時に厚く盛土整地されている。よって北半では遺構面が2枚となる。

上層の遺構 (近世～近代) Fig.15, PL.2

トレンチ3は福岡城古絵図によると福岡城三の丸の黒田美作屋敷の西端付近に相当しており、屋敷境に当たると推定される部分において近世溝SD19006を確認した。SD19006は調査区の西壁沿いに伸び壁に入り込むが、南端をトレンチ5、北側延長部分をトレンチ6で確認した。他の近世遺構には、石組み井戸SE19110や井戸の周囲に掘られた大型土坑等がある。近代には明治期の城内建物の払い下げに伴うとみられる廃棄土坑が複数あり、椀瓦を含む多量の瓦片が出土した。陸軍時代のゴミ穴などの近代遺構も多い。

下層の遺構 (古代～中世) Fig.16, PL.2

調査区の南半は丘陵を平坦造成した台地部にあたり、鴻臚北館に関する建物遺構を確認した。第I期柱列SA19400は、南側の第IV期調査で確認した第I期石垣SX1245の土層断面で確認した柱穴から北に引いた柱列の推定線上に並び、北端で西に折れるものと推定される (Fig.43参照)。第II期布掘り堀SA15002は想定通りの位置で確認された。布掘り堀の角から東へ4mの位置に礎石SX19506がある。これらの遺構は、平面確認ののち、必要に応じて断ち割り調査を行った。また第I期柱穴に切られる柱穴遺構も認められた。一方、瓦溜りなどの廃棄土坑は全く認められなかった。

斜面から北側砂丘部では、築城時盛土を除去した後、古代・中世遺構の調査を行った。遺構の平面確認の後、南北に縦断する幅1mのサブトレンチを通し、土層の確認等を行った。サブトレンチは南から1、3～6とし、斜面西壁際に設けた幅50cmのサブトレンチを2とした。斜面SX19500の比高差は約3mで、斜面は風化頁岩岩盤ではなく粘質土で、本来の丘陵縁辺に近いと考えられる。落とし込まれた礎石が斜面に引っかかった状態で出土したほか、斜面裾では須恵器甕を礫で叩き割った状態の遺構R1がみられ、祭祀行為の可能性があろう。砂丘部分には築城盛土の直下に中世末の旧表土層が残るが、斜面裾～北へ約15mの範囲には表土層が存在

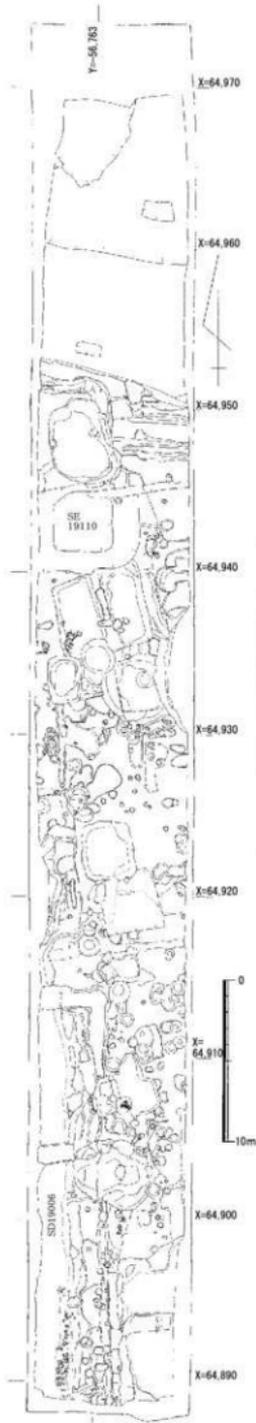


Fig.15 第25・26次調査 上層遺構配置図 (1/300)

(8) 第27・28次調査 (0906・1013) Fig.17・18, PL.3

第V期調査として、平成21・22年度に調査を行ったトレンチ4である。鴻臚館の北東角の確認、及び鴻臚館北館の地形、東側へと落ちる景観の解明等を調査目的とする。調査面積420㎡。遺構番号は21001～。ほぼ調査区全体が築城盛土に覆われており、風化頁岩岩盤は西隣のトレンチ3と接する部分に僅かに露呈する程度である。従って、調査区のほぼ全域で上・下の2枚の遺構面が調査対象となった。平成21年度に上層、22年度に下層の調査を行った。

上層の遺構(近世～近代) Fig.17, PL.3

上面で確認した主要遺構として、福岡城跡三の丸武家屋敷建物の一部と考えられる礎石据付穴SB21030、土坑群等がある。礎石自体は失われているが、礎の詰まった据付穴を南北2間分検出し、南側は調査区外に伸びると考えられる。北側は東へ折れ、2間分を確認したが、これより東は削平により失われている。土坑群には陶器甕を据えたものがあり、甕底部が残るのみだが、何らかの貯蔵施設があったものと考えられる。その他、近代の遺構として、旧陸軍第24連隊の石組み排水溝や焼却炉、土坑などを確認した。また、野球場建設による破壊が著しく、縦横に走る暗渠溝や、調査区東端ではスタンド基礎解体痕などが認められた。

下層の遺構(古代～中世) Fig.18, PL.3

上層遺構の調査後、築城盛土を除去して下層遺構の調査を行った。調査区の北西部で鴻臚館の台地

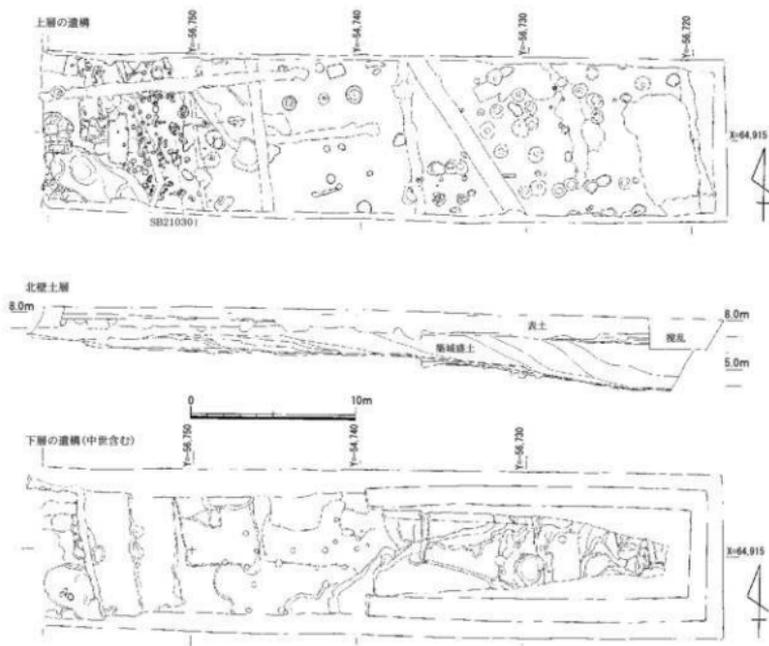


Fig.17 第27・28次調査 上層・下層(中世)遺構配置図(1/300)

の北東角を確認したが中世の地形改変を受け、平面鈍角をなす。この角の東は比高差1m強の段落ちとなり、ここから調査区中央あたりまでは中世に平坦に削られている。調査区中央から東側は東へ緩やかに落ちていく斜面SX21110となる。斜面の基盤土は風化頁岩の粘土層で、斜面下位では岩盤に変わる。斜面には細砂が堆積しており、本来はこの砂層が斜面全体を覆っていたものと考えられるが、大部分は中世に削られて浅い溝状（登坂道か）になっており、細砂は北壁際のみ残る。細砂は2層に分けられ、上層からは中世までの遺物が出土し、下層は土師器小片のみが出土する。細砂を除去すると、平面形が鈍角のL字形をなす直線的な小溝SD21122と、V期の遺物が出土する土坑SX21125が現れる。古代の土坑が残ることから中世の改変はそれほど著しいものではないとみられ、細砂に覆われた部分は古代末（V期以降）～中世の傾斜面の痕跡を残すものと考えられる。斜面下は中世末の表土層に覆われており、これを除去すると全域で風化頁岩岩盤が露呈し、中世の溝や土坑、ピット等が多数確認された。

以上、中世の改変により鴻臚館の北東角の状況を直接に確認することはできなかったが、171頁で述べるように、トレンチ5やグリッド4など鴻臚館東面を対象とした調査成果を総合して考えてみると、鴻臚館の東側（正面側）は緩い傾斜面となっており、東門前では擁壇状に高くなる構造であったと推定することができる。

本書では上記の遺構のうち、斜面SX21110、小溝SD21122について報告する。（吉武）

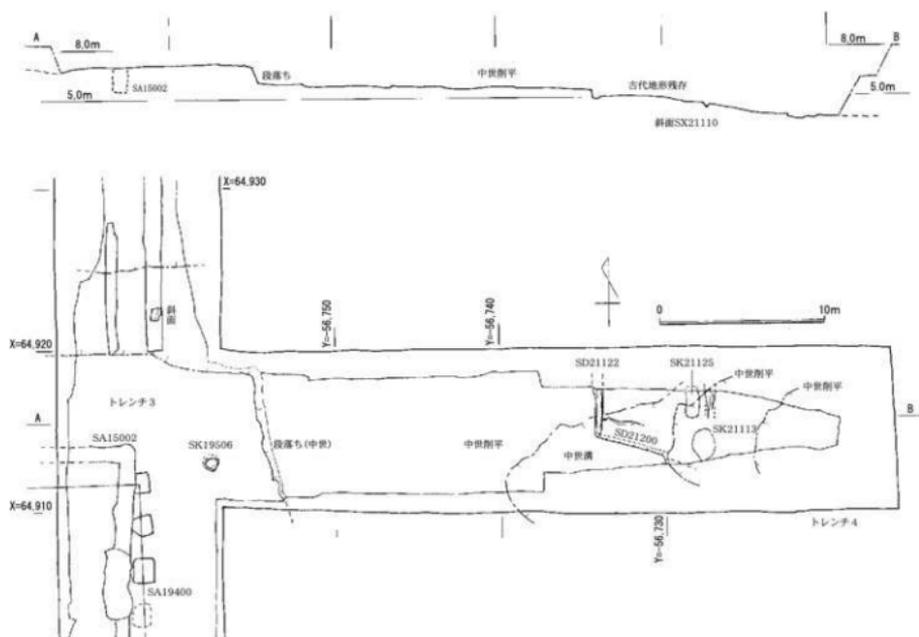


Fig.18 第27・28次調査 下層遺構配置図 (1/300)

(9) 第29次調査(1116) Fig.19・20、PL.3

第V期調査として、平成22～24年度に調査を行った。トレンチ5を対象とする。トレンチ5は、①第19次調査で検出した第II期東門SB1238の再調査と、②東門から東へと至る鴻臚館入口の構造解明を目的とし、東門SB1238の中軸線を東に延ばした位置に新たに設定したトレンチである。このため、西端部は第IV期調査の第19次調査区、及び第V期調査のトレンチ3と一部が重複し、調査区南壁際では第IV期調査地グリッド4と一部が重複している。ただし結論から先に述べると、中世の著しい地形改変のため②の目的は果たせなかった。調査面積590㎡。遺構番号は23001～。

調査区中央部、国土座標で示すとY=-56,748あたりから岩盤が東へ落ち始め、同Y=-56,735あたりまで1.6m降下して行き、ここで約2mの段差SX23200となって急激に落ちている。よって、調査区の西端部では風化頁岩岩盤を遺構面として古代から近代までの遺構が重複し、東側の大半は分厚い築城盛土を挟んで上下2層の遺構面が調査対象となった。

上層の遺構(近世～近代) Fig.19、PL.3

史跡福岡城跡に関係する遺構として、上の橋御門から二の丸東御門へと続く三の丸道路の北側溝SD23024、トレンチ3でも確認した武家屋敷区割り溝SD19006等を検出した。道路側溝SD23024は石組み溝で、本来は両側が石組みであったと考えられるが、南側(道路側)の石は全て抜かれて一部に裏込め石が残るのみである。溝幅は内法で70cm前後とみられる。北側の石組みは残りが良好であるが、近代の陸軍歩兵第24連隊や平和台野球場に伴う構造物により破壊された部分も多く、特に調査区東端部は野球場内野席基礎により全て破壊されている。この石組み溝より南側は近世の道路面となり、砂層を主体とする道路硬化面SM23100が重層して堆積する状況を示す。平面図には示していないが、この道路硬化面の下には石組み側溝に先行する素掘り側溝がある。素掘り側溝は幅40～60cmほどの2条が切り合い、内側(南側)から外側(北側)へ移設された状況を示す。最初の移動は40cmほど、2度目は1mほど北へ溝が移設されており、ある時期に三の丸道路が拡幅または北側へ少し移され、素掘りから石組みへと溝が造り替えられている。調査区中央付近には石組み溝の北隣に溝と平行する大型柱穴3基があり、北側の武家屋敷に伴う遺構と考えられるが、性格は不明である。調査区西端に検出した武家屋敷境の溝SD19006は三の丸城内道路に直交する方向に伸びる溝であるが、道路側溝の3m手前で浅くなって収束する。素掘り溝で底面はヘドロ状堆積をなし、ある時期に一気に埋められた状況を示す。

この他、平和台野球場内野席基礎や陸軍関係建物基礎や石組み溝等の排水施設等が多くみられた。

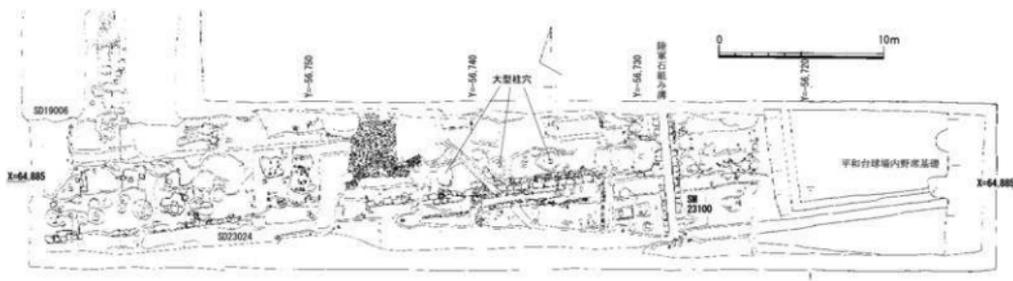


Fig.19 第29次調査 上層遺構配置図(1/300)

下層の遺構（古代～中世） Fig.20、PL.3

上層遺構の調査終了後、安全勾配を取りながら最大3.7mの築城盛土を重機で掘り下げ、古代・中世遺構の調査を行った。遺構検出面は風化頁岩及びこれが粘土化した黄褐色粘質土で、国土地標Y=-56,735のあたりで急斜面SX23200となって落ちており、西側が台地部、東側が低地部となる。遺構面の標高は西端で7.4m、東端で3.0mを測り、4m以上の比高差がある。

台地上に検出した古代遺構は調査区の西端部周辺に集中しており、第Ⅰ期柱列SA19400とこれに取り付け門と考えられる遺構SB23330、第Ⅱ期東門SB1238とこの南北に取り付け布掘り堀がある。この他、礎がまとまる遺構があり礎石据付穴の可能性もあったが、近世遺構との区別ができず確定できない。古代の遺構については平面確認を行い、必要に応じて柱穴の断ち割り調査を行って柱痕跡等の確認作業を行った。

国土地標Y=-56,748あたりから斜面SX23200にかけての範囲は、東に向かって緩く下る緩斜面となっており、この緩斜面上には中世の土壌墓や水溜まり状の遺構、水溜まりから東へ導水する小溝等が掘られ、小溝からは12世紀中頃の初期龍泉窯系青磁等が出土している。また、斜面SX23200の落ち際には11世紀末頃の白磁碗2個体と鉄刀が包含層からまとまって出土しており、掘り方を失った土壌墓と考えられる。水溜まり状遺構の底面では、古代の掘立柱建物SB17701の一部をなすと考えられる柱穴を検出した。深さは20cmと残りが極めて悪いが、かろうじて柱穴が残存することからみて、この緩斜面は中世に削平を受けてはいるものの、ある程度鴻臚館の地形のなごりを留めているものと考えることができよう。

急斜面SX23200の直下の低地部分には中世の削平が著しく、古代の遺構は全く確認できなかった。SX23200直下の底面から16世紀代の朝鮮王朝陶器船徳利が潰れた状態で出土したことからみて、急斜面および低地面の造成は中世末の段階で行われ、群在するピット群も同時期に掘られたものと考えられる。

本書では以上の遺構のうち、第Ⅰ期柱列SA19400及び門と考えられる遺構SB23330、第Ⅱ期東門SB1238と南北に取り付け布掘り堀、掘立柱建物SB17701、急斜面SX23200について報告する。(吉武)

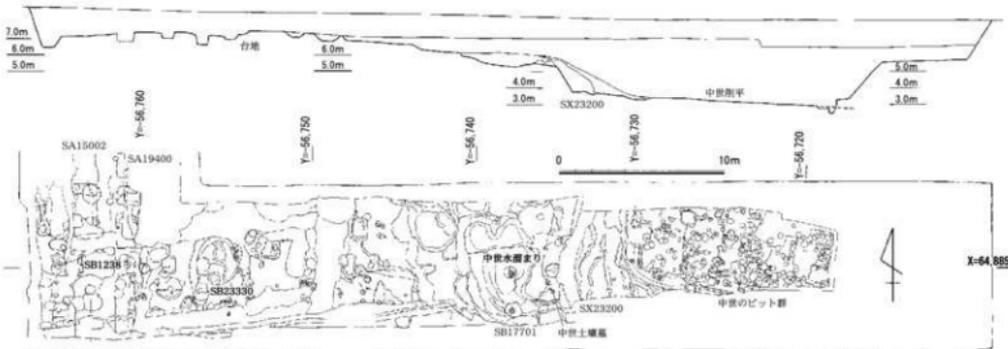


Fig.20 第29次調査 下層遺構配置図 (1/300)

(10) 第30次調査(1205) Fig.21・22、PL.4

平成24・25年度に調査を行ったトレンチ6である。トレンチ3において築地塀の可能性がある整地遺構SX19610を検出したが一部の確認に留まったため、この遺構を確定させるために西側推定線上に新たに設定した調査区である。東西30m、南北20m。ただし結論から言うと上層で調査を行った福岡城遺構の保存のために調査範囲が1/2以下に限定されてしまい、加えて下層では中世溝による地形改変を受けていたため、当初の目的を果たすことができなかった。調査面積600㎡。遺構番号は24001～。

上層の遺構(近世～近代) Fig.21、PL.4

福岡城関係遺構として、三の丸武家屋敷内の建物基礎、武家屋敷の区画施設、井戸等を検出した。建物基礎SB24010は西隣のトレンチ2で検出した武家屋敷建物SB18451の東側の延長部分にあたり、礎石据付穴が3間分東へ伸びて、南へ折れる。北側には建物と並行する小溝SD24020があり、溝内には小柱穴が並ぶことから、建物に伴う塀と考えられる。建物と塀がある範囲は周囲より地形がやや高い。調査区の東半は武家屋敷の区画施設と考えられる遺構で占められる。角礫等を等間隔に3列並べ、その東西両側に石列と並行する2条の素掘り溝を掘ったもので、角礫はいずれも平坦面を上に向けて「十」の線刻を施している。「十」の間は正確に195cmの等間である。さらに、この石列と素掘り溝は江戸期の整地層で埋められ、素掘り溝と同位置に石組み溝SD24070・24089が造り直されている。また、調査区の東端を南北に走る石組み溝は陸軍時代に造られたものだが、この下層には東隣のトレンチ3で検出した武家屋敷区画溝SD19006の延長であるSD24100が伸びている。このSD24100は層位的にみてSD24070・24089より明らかに後出することから、武家屋敷の境が東へ移されたことを示している。

近世には屋敷替えによる所有者の変更がたびたびあり、知行に応じた屋敷地の面積の変更に伴い屋敷境が移動したことを示すものとして興味深い。

この他、近代の遺構として、陸軍のゴミ穴や石組み溝、平和台野球場の排水施設等がある。(吉武)

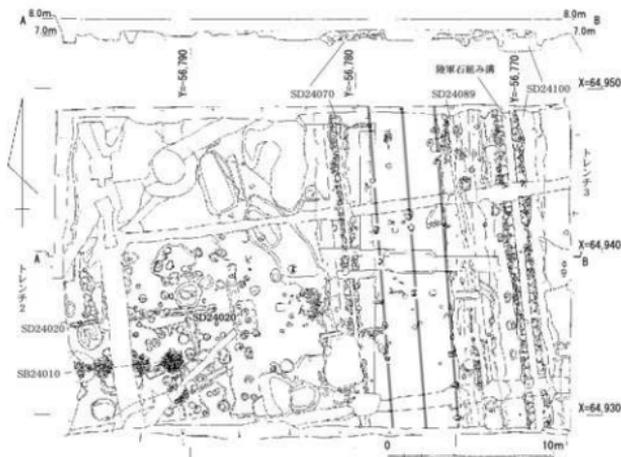


Fig.21 第30次調査 上層遺構配置図(1/300)

下層の遺構（古代～中世） Fig.22、PL.4

下層は近世の遺構の保存と安全確保のため、調査範囲は170㎡となる。福岡城築城時の整地層を除去すると、標高約4.0～4.5mで鴻臚館所用瓦を多量に含む整地層を検出した。その整地層を掘り下げると、幅約3m、深さ約50cmの東西溝を検出した。溝には多量の瓦を含んでいたが、この溝は崖下の砂丘面に瓦を敷きつめて粘土で覆った整地層を切り込んでおり、陶磁器等の出土遺物から15～16世紀の遺構と判断された。

溝が掘り込まれていた整地層は標高約3mの砂丘面に縄目叩きの瓦を敷きつめたもので、調査区北側では途切れて砂丘となる。出土遺物は瓦以外ほとんどないが、瓦の特徴から第Ⅱ期のものと考えられる。この整地層はトレンチ1でも検出されており、トレンチ3の築地塙遺構の可能性がある事業跡と併せると、第Ⅱ期以降に崖下の砂丘部分にも整地が行われ、築地塙遺構などの外郭施設が造られた可能性がある。しかし、6トレンチ下層では中世の大溝により、それを実証することができなかった。整地はその後、何度か行われ、廃絶時まで約60cmのかさ上げが行われていた。

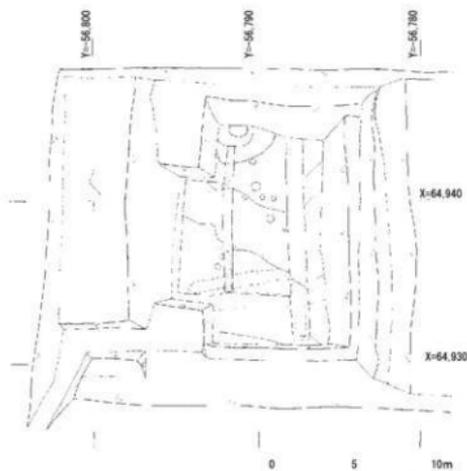


Fig.22 第30次調査 下層遺構配置図 (1/300)

(11) 第31次調査 (1314) Fig.23～26、PL.4

第31次調査は第V期調査区の北西隅トレンチ1と前述の中央のトレンチ6下層について、平成25年度に調査を行った。トレンチ1は調査面積690㎡。遺構番号は25001～25055。トレンチ6は前述のとおりである。遺構面は風化頁岩岩盤及び整地層で、近代、特に平和台野球場スタンド基礎工事により、調査区北側の削平が著しい。

上層の遺構（近世～近代） Fig.23、PL.4

約1mの表土を除去すると、福岡城築城時の整地層となり、戦後の国体関係の土坑や溝、戦前の旧陸軍第24連隊の遺構のほか、福岡城跡三の丸を東西に横断する道路北側の重臣屋敷地内の土坑、柱穴等を検出した。この整地を掘り下げると北側で段差4mの戦国末の断落ちとなり、さらに北側は基盤の風化頁岩を用いて、この段差を埋め立てている。

下層の遺構1（中世） Fig.24、PL.4

中世の遺構は、整地層の下層で検出し、溝、池状遺構、土坑、柱穴等がある。北側の断落ちでは14～16世紀かけての複数の整地層を確認した。整地は福岡城築城の際のものとは異なり、鴻臚館時代の地形を踏襲するように行われている。断落ちの下では溝状遺構などがあり、中世段階での崖下の利用

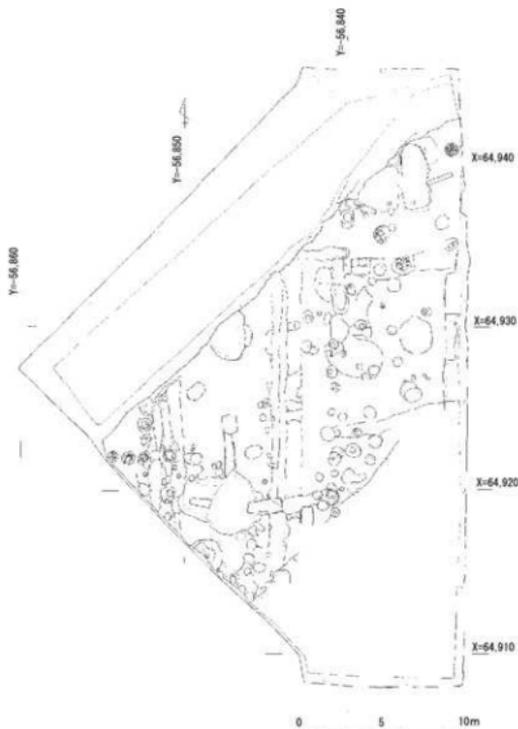


Fig.23 第31次調査 上層遺構配置図 (1/300)

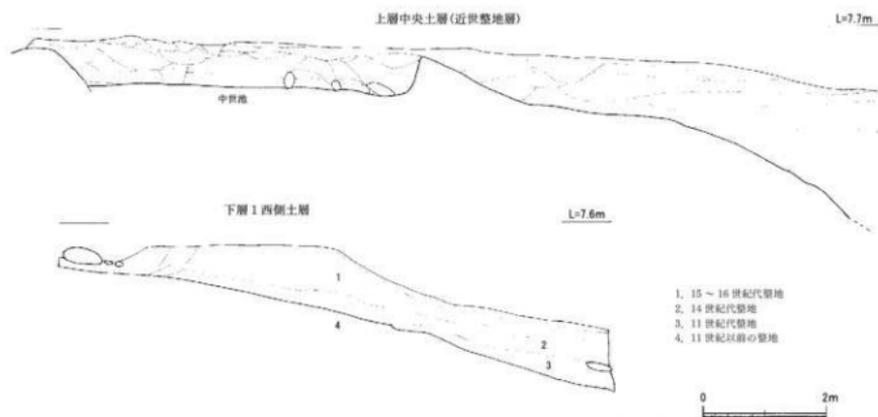


Fig.24 第31次調査 上層及び下層整地層土層断面図(1/80)

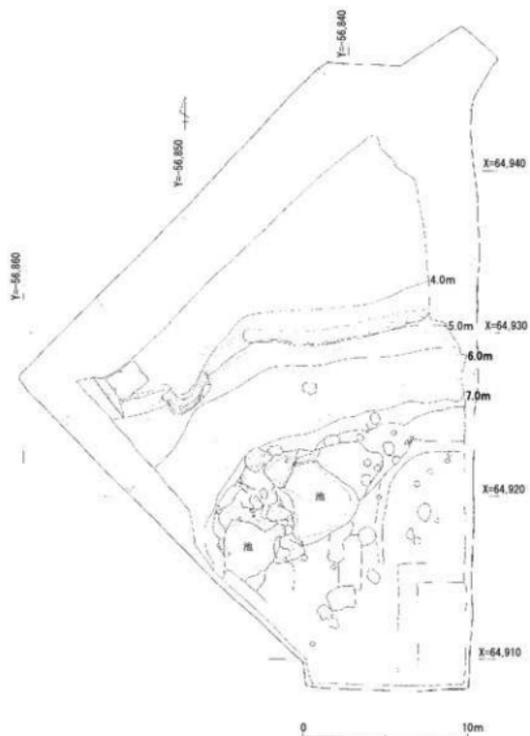


Fig.25 第31次調査 下層1遺構配置図(1/300)

が窺われる。整地層の中には多量の鴻臚館所用瓦が含まれていた。

下層の遺構 2 (古代) Fig.26、PL.4

古代の筑紫館・鴻臚館跡に関連する遺構としては、北側の断落ちを拡張するために行われた第Ⅱ期の整地、第Ⅱ期布掘り堀 SA25055 と便所遺構 SK25043 の他、礎石、土坑等を確認した。整地は第Ⅱ期の施設設置に際して行われたと考えられ、基盤の風化頁岩の断落ちから北側に約 10 m にかけて行われ、急な崖面を呈する。西側は緩やかに傾斜して、北西隅はコーナー状を呈する。崖下は標高約 3 m の砂丘面に瓦を敷きつめて粘土で覆った整地層を確認した。崖の下端から北側に約 20 m を測る。時期比定の資料が少ないが、整地に使用された瓦が縄目叩きの平瓦であることから、第Ⅱ期のものと考えられる。整地はその後、何度か行われ、廃絶時までには約 60cm のかさ上げが行われていた。

主な調査成果としては、Ⅱ期の施設の設置に伴い、敷地拡張のために北側に大規模な整地が挙げられる。以後、その範囲を踏襲しながら、終焉を迎えたと考えられる。その後の鴻臚館時代の地形の名残は福岡城の築城による大規模な造成により、地下深く埋め立てられた。

本書では、上記のうち古代の整地、布掘り堀 (SA25055)、便所 SK25043 について報告する。(菅波)

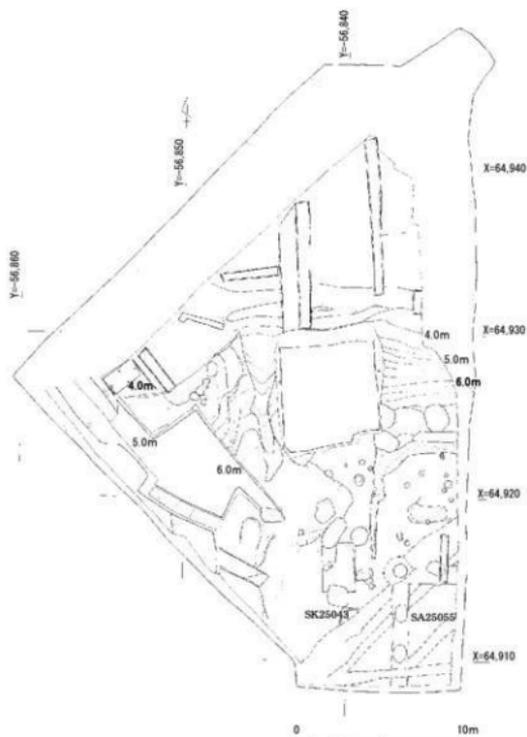


Fig.26 第31次調査 下層2遺構配置図 (1/300)

2. 造成前の旧地形と整地遺構

国史跡鴻臚館跡の立地する福岡丘陵は、福岡城を築城する際に厚く盛土造成され、鴻臚館の時代の地形をうかがい知ることは全くできない。このため鴻臚館跡発掘調査に並行して、福岡城の築城前の旧地形を探るためのボーリング調査を福岡城の史跡指定地内に対して平成1、3、5～10年度に計8回実施している。福岡城の史跡指定地内の全域を対象としたが、うち鴻臚館跡の周辺で実施したボーリングの土質柱状図及び旧地形推定図を Tab.5 及び Fig.27 に示した。

鴻臚館（筑紫館）は東へ伸びる二つの小丘陵を削り、土砂を周辺に落とし込んで平坦面を確保し、南北二つの館を造営しており、南北 200 m、東西 100 m 程度の範囲に中央谷を挟んで二つの平坦台地が広がっている。Fig.29 にアミで示した範囲は小丘陵の周囲を埋め立てて整地を行った遺構が確認された範囲である。埋め立ては南館よりも北館で広範囲に行われており、南館に比べて北館の乗っている丘陵の幅が狭く痩せ尾根であったためと考えられる。この平坦台地の周辺をみると、西側は本来の丘陵へと続いていた可能性が高いが、他の縁辺は斜面となって落ちており、北は海へ至る砂丘へと続き、南は谷となり、鴻臚館の入口が面する東側は緩斜面となって落ちていき現地地表から深さ 5 m 以上の深い谷となっていたことがボーリングデータや発掘調査成果から窺うことができる。

鴻臚館の正面入り口にあたる東側の状況についてさらに詳細に述べると、谷底にあたるボーリング 9-5 地点付近ではここを境に北と南へ傾斜が分かれており、特に 8-4 地点では黒灰砂が低いレベル（標高 1.54 m）に検出されることから後背湿地が埋没しているものと推定される。これまでの発掘調査成果により鴻臚館東面の標高は 2～4 m と推定されるが（171 頁参照）、ボーリングデータ 8-4、9-5 では地山砂層が標高 1.54～2.46 m と低く、この砂層の上部に存在する「盛土」中に鴻臚館造成に伴う整地層が含まれている可能性がある。

鴻臚館の造成については、台地上で確認される第Ⅰ期建物柱穴の深さが南館で 5～10cm 程度、北館では 70cm 以下といずれも浅く、これに比べて第Ⅱ期布掘り塀柱穴は南館・北館ともに 1.3 m 以上の深

Tab. 5 鴻臚館跡周辺地形調査委託 ボーリングデータ表

西				北				東					
地点	標高 [深さ] (m)	地質	N値	地点	標高 [深さ] (m)	地質	N値	地点	標高 [深さ] (m)	地質	N値		
8-3	8.11	0	盛土	7~14	7.92	0	盛土	5~8	8.03	0	盛土	3~22	
	1.51	6.6	精灰砂	20	3.97	3.95	シルト混り赤灰砂	3	3.23	4.8	暗褐色～黒褐色 (細砂・少量の腐植物・木炭混入)	6~17	
	1.06	7.05	精灰砂	20	3.32	4.8	黒褐色～黒灰砂	6~14	1.2	6.8	風化岩	6~15	
	-0.37	8.48	精灰砂	12	0.12	7.8	風化岩	15	1.63	6.4	風化岩	7~17	
	-0.74	8.85	風化岩		7.92	0	盛土	5~8	8.65	0	盛土	6~9	
8-4	8.18	0	盛土	6~10	3.62	4.3	粘土混り精灰砂 (赤褐色粘土含む)	8	2.46	6	黒灰砂 (精細砂土・腐植物 不混入)	3~7	
	2.66	5.5	黄緑砂	7~20	3.12	4.8	精灰砂 (均一精砂)	14	3.85	4.8	暗褐色砂質粘土 (5.5m付近より腐植物 多量混入。乳岩 塊大角検出)	1~5	
	0-4	-0.27	8.48	精灰砂 (腐植物混入)	12	1.82	6.1	風化岩	10~16	0.75	7.9	風化岩	6~24
	-0.52	8.7	風化岩	50	7.69	0	盛土	19	1.54	6.4	黒灰砂 (均一精細砂・ 所々腐植物混入)	3~6	
8-5	8.23	0	盛土	7~19	5.19	2.5	砂混り精細土	4	-0.36	8.3	風化岩	11	
	2.46	5.8	黄緑砂	19	3.59	4.1	シルト質粘土 (腐植物混入)	4	8.55	0	盛土	6~18	
	1.73	6.55	風化岩	30	1.79	5.9	砂混り黄緑シルト	4	8.05	7.5	風化岩	10~18	
8-1	7.93	0	盛土	6~9	1.59	8.1	風化岩	7~14					
	4.13	3.8	精灰砂	4									
	3.93	4	風化岩	15									

* N値 = 地盤の硬さを示す指標。63 kgのハンマーを75cmの高さから自由落下させ、標準貫入試験用シリンダーを30cm打ち込むのに要する打撃数を言う。



Fig.27 造成前の旧地形推定図 (1/2,000)

さがあることから、第Ⅰ～Ⅱ期の間に南館で1m以上の、北館でその半分程度の大規模な削平が行われたと推定される。次の第Ⅲ期への建て替えに際しても平坦台地の拡張が行われているが、この時の削平は大きなものではない。この削平によって生じた土砂は台地周囲の埋め立てに使用されたものとみられ、中央谷の北斜面では特に埋め立てが顕著で、土留めの石垣や石積みが重複して構築されており、繰り返し造成が行われたことが窺われる。



Fig.28 埋立遺構 SM1132 土層断面図 (1/150)

埋め立て遺構 SM1132

Fig.28・29

風化頁岩に盛土を行った古代の整地痕跡は Fig.29 にアミで示す範囲で確認している。遺構保存のため原則掘り下げてないが、第 18 次調査では攪乱溝を利用して土層観察を行った。SM1132 は風化頁岩岩盤を削り、その残土で自然の谷を埋め立て造成し平坦面を造った事業跡である。東に開く谷の北側に開析で生じた小支谷がいくつかあり、SM1132 はこれを埋めた遺構で、鴻臚館跡第Ⅱ期布掘り塀はこれに切り込んで造られている。土層断面をみると旧表土とみられる黒色腐植土層を間層に挟むことから、一気に埋められたのではなく小規模な支谷の埋め立てが先行し、表土が形成されるほどの間を置いたのち再び埋め立てが行われたことを示している。

SM1132 出土遺物 Fig.30

須恵器、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナ 1 箱出土した。

1 は新羅陶器壺の肩部小片で、外面に印花文を施す。胎土は明灰色を呈する。2 は軒平瓦の小片で、鴻臚館式 (635 型式) であろう。

埋め立て遺構 SM1209 Fig.29

第 19 次調査で確認した事業跡で、風化頁岩岩盤上に盛土を行ったものである。平面確認のみ行い、掘り下げていない。(吉武)

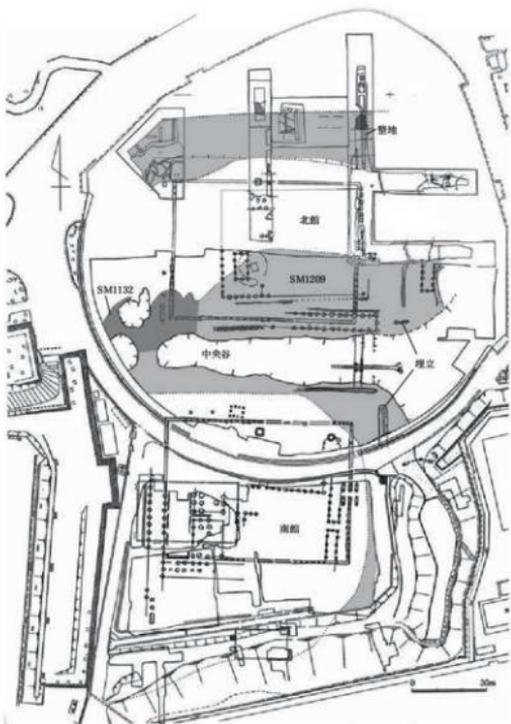


Fig.29 埋立(事業)遺構全体図 (1/2,000)

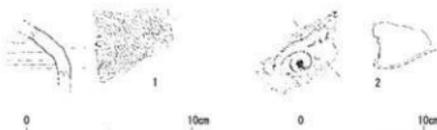


Fig.30 SM1132 出土遺物実測図 (1 は 1/3、2 は 1/4)

3. 北館（台地上）の建物関係遺構と出土遺物

(1) 鴻臚館築造以前の遺構と出土遺物

鴻臚館跡の発掘調査では、これまで古墳時代の須恵器、円筒埴輪片・鏡片などが出土している。とりわけ、円筒埴輪は、福岡平野では前方後円墳に伴うことが多く、また福岡城天守台の下に箱式石棺が露出していることが知られており、前方後円墳を含んだ群集墳がかつて存在したことは確実視されてきた。しかし、発掘調査で、古墳そのものが確認されたことはなかったのである。

平成14年度の第20次調査では、後述する第1期掘立柱建物SB14601の東側において、石室敷石の残存SO14512を検出。また柱穴周囲の遺構がない部分を選んで調査区を設定し掘削して精査したところ、地山に掘り込んだ周溝の一部SD14530を検出した。

これをうけ、SO14512の東側と南側においても周溝を検出すべく、02-4トレンチ・02-5トレンチを設定したが、古墳に由来する周溝や盛土層は認識できなかった（Fig.11）。Fig.34に02-5トレンチの土層実測図を示す。地山である風化頁岩層は、9度ほどの傾斜で南に向かって下降する。堆積土は、薄い層が地山傾斜に沿って堆積する10層以下と、厚みを持って緩い傾斜で堆積する8~9層、さらにその上の斜堆積である1~7層に大別できるが、遺物の包含はない。一方、第1期掘立柱建物SB14601の柱穴は、その検出レベルを勘案すれば、これらの堆積の上から掘り込まれたものであるこ

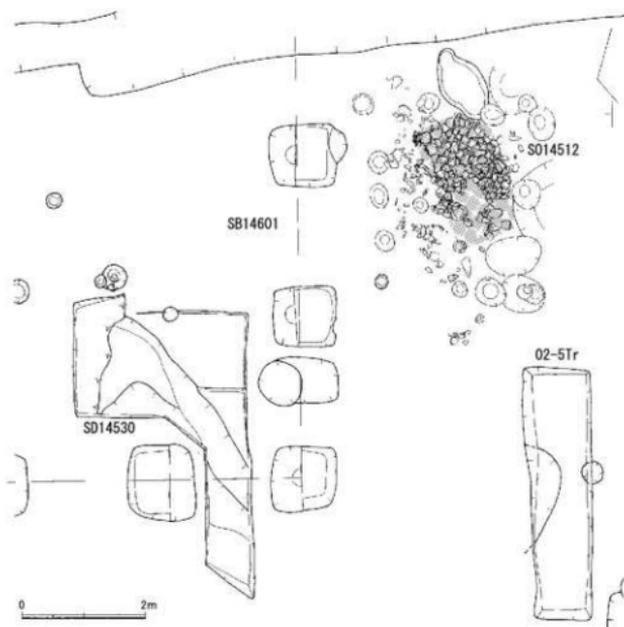


Fig.31 古墳 (SO14512・SD14530) 全体図 (1/80)

とは明らかである。また、02-5トレンチの底面近くから大型の掘り込みの一部を確認することができた(未掘)。周溝に続くものか確認できていないが、19層の直下に掘り込まれており、鴻臚館に先行する遺構面が19層に存在したことは明らかである。したがって、10層以下は丘陵の緩斜面に堆積した自然堆積層であり、おそらく古墳を造営した当時の地表面は22層の上面付近に当たるものと思われる。9層以上は、鴻臚館第1期の造成に伴う堆積層であろう。

古墳 (SO14512・SD14530)

Fig.32・33、PL.5

石室 SO14512 は、腰石まで失われており、規模は判然としない。明瞭に腰石抜き跡と判断できる遺構もないが、抜き跡と思われる窪み、ならびに敷石の分布状況から、幅 1.6～2.0m、奥行き 2.8～3.0m の内法が推測できる。ほぼ南北に築かれ、南に開口した横穴式石室と考えられる。

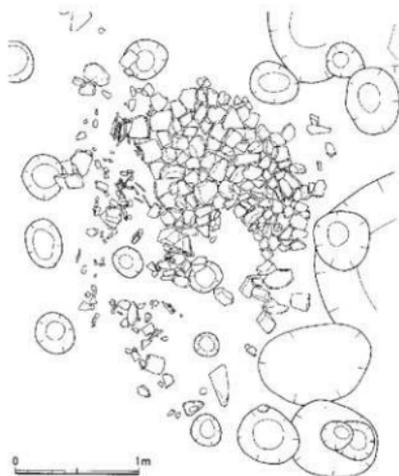


Fig.32 石室 (SO14512) 実測図 (1/40)

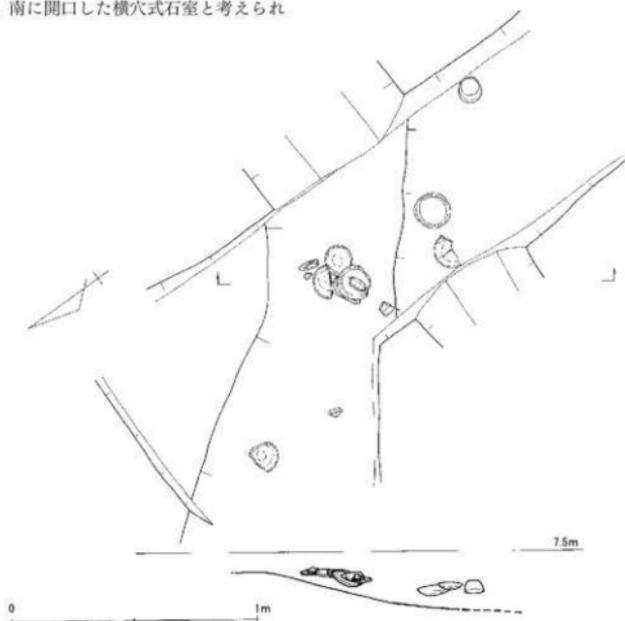


Fig.33 周溝 (SD14530) 実測図 (1/20)

敷石は、拳大の礫を敷き詰めたもので、二面程度作られているようだが、床面の完掘は行なわずに保存したので、確認はしていない。

石室部分からの土器類の出土はなかったが、敷石の随所からガラス小玉が出土した。また、奥壁側と左側壁側から鉄鍔が、義道側と右側壁中ほどから銅地に金箔を貼った耳環各一点が出土している。いずれも、出土分布から見て、かなり攪乱された状況がうかがわれる。

周溝 SD14530 は、鴻臚館時代の盛土整地層の下、地山面で検出した。浅い窪み状に残っていたもので、削平を受けた残存と思われる。旧地形は石室の北側で高く、南に向かって傾斜を強めて下降している。したがって、本来周溝は石室背面の丘陵側に馬蹄形に掘られたものであったが、鴻臚館造営に伴う丘陵の削平で、頂部側の周溝は失われ、斜面部分で一部分が残ったものと考えられる。周溝内からは、須恵器の蓋杯が、重ねて置かれた状態で出土した。蓋と身が合口で出土したものはない。

周溝から出土した須恵器を Fig.35 に図示する。

1 は、コップ型の鉢である。体部中ほどに二条の浅い沈線が廻る。外底部は回転ヘラ削り、体部・口縁部は横で調整する。2～5 は、杯蓋である。丸みが強く、天井部と口縁部との間の沈線は失われている。6～10 は、杯身である。蓋受けの返りがつくが、6～9 は、細く、高く立ち上がるのに対し、10 では厚く短くなっており、後出する要素が見られる。なお、5 の蓋と 10 の身には、三叉形のヘラ記号が見られ、セットであった可能性がある。11 は、甕の口縁部で、頸部に柳描波状文が見られる。

Fig.36 - 12～36 は、小玉である。24 は瑪瑙製で、橙色を呈する。他はガラス製で緑色系。37・38 は銅地に金箔をかぶせた耳環である。耳環はもう一点出土しているが、遺存状態が悪く、図示できなかった。

Fig.37 - 39～55 は鉄鍔である。すべて同形式で、柳葉型の刃部に長く伸びた頸部を持つ。全形を知りうる 39・40・43・44・49 から、全長はおおむね 16.0cm、刃部長 2.7cm、頸部長さ 7.3cm、棘状の区を設け、莖部は 6.0cm 前後に作る。遺存部位の多いものを図示したが、全体では刃部の破片数で 17 点、莖の破片数で 18 点を数え、少なくとも 18 点の鉄鍔が刷磨されていたものと推定できる。56 は両刃の鉄器破片であり、鉄剣であろう。



Fig.34 02-5 トレンチ土層断面図 (1/40)

須恵器の特徴から、6世紀末の古墳と考えられる。周溝の須恵器が初葬に伴うものとすれば、追葬はあったようなので、7世紀前半頃まで埋葬されたものと思われる。

なお、石室中央から周溝内側までは5mを測り、これを半径とすれば、径10mほどの円墳を復元することができる。(大庭)

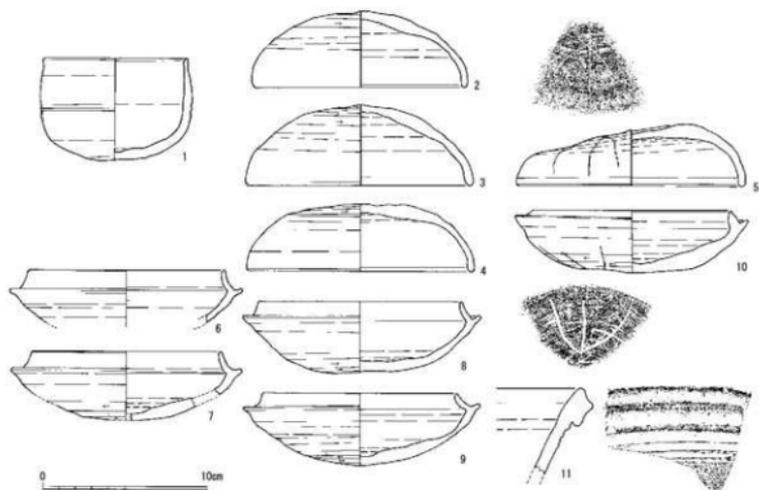


Fig.35 SO14512・SD14530 出土遺物実測図1 (1/3)

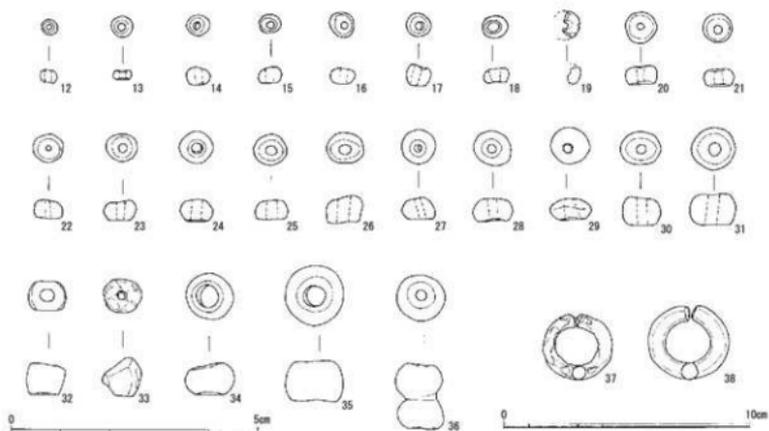


Fig.36 SO14512・SD14530 出土遺物実測図2 (1/1、37・38は1/2)

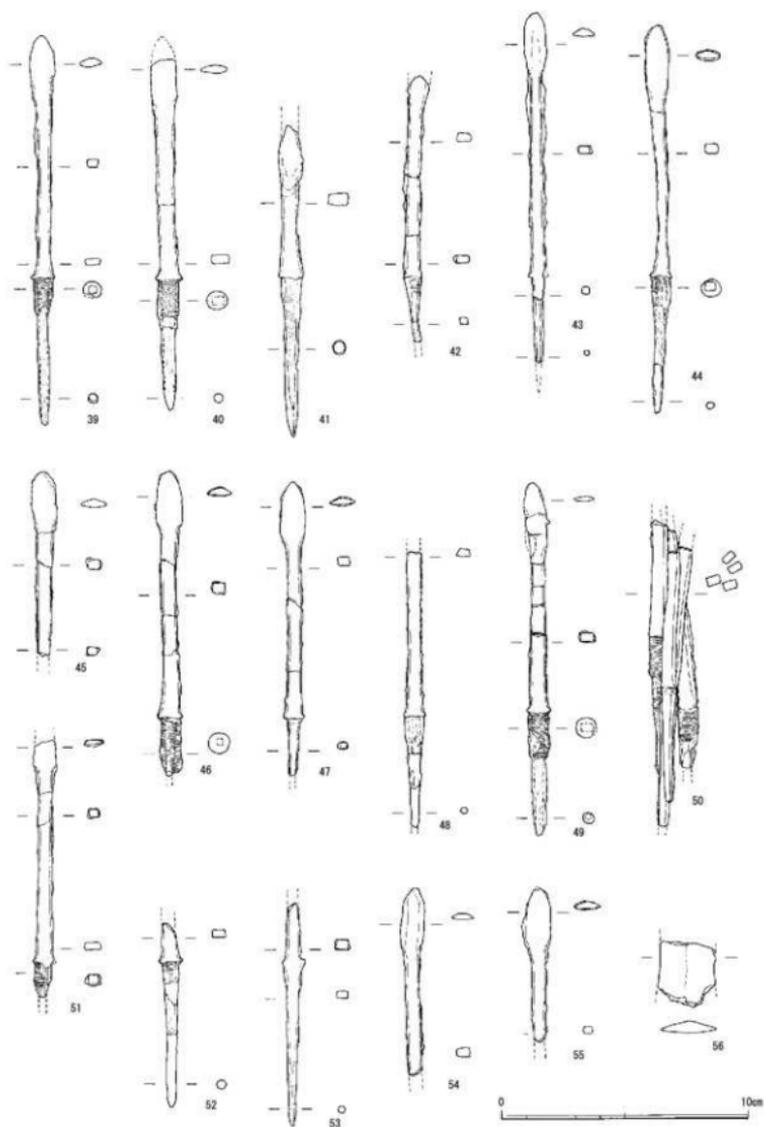


Fig.37 SO14512・SD14530 出土遺物実測図3 (1/2)

(2) 第Ⅰ期の遺構と出土遺物

北館第Ⅰ期の建物遺構は、掘立柱列を長方形に巡らせた区画(塀)と、区画内に配された掘立柱建物1棟からなる。区画東辺に柱間が開く部分があり門遺構の可能性がある。柱穴出土遺物は少ないが、柱列と並行して土留め石垣が築かれており、石垣内から7世紀半ばの須恵器が出土することから第Ⅰ期建物を7世紀後半造営と推定している。第Ⅰ期の柱穴は残りが悪く、次の第Ⅱ期柱穴の残りが比較的良いことから、第Ⅰ～Ⅱ期間に大規模な削平が行われ、土砂を周縁に押し出して敷地拡張を図ったものと考えられる。第Ⅰ期に先行する柱穴もあるが断片的であり、これらの先行遺構は削平により消失した可能性がある。以下、掘立柱列 SA14602・SA14603・SA19400、門とみられる遺構 SB23330、掘立柱建物 SB14601、石垣 SX1245・SX14527 の順に報告する。(吉武)

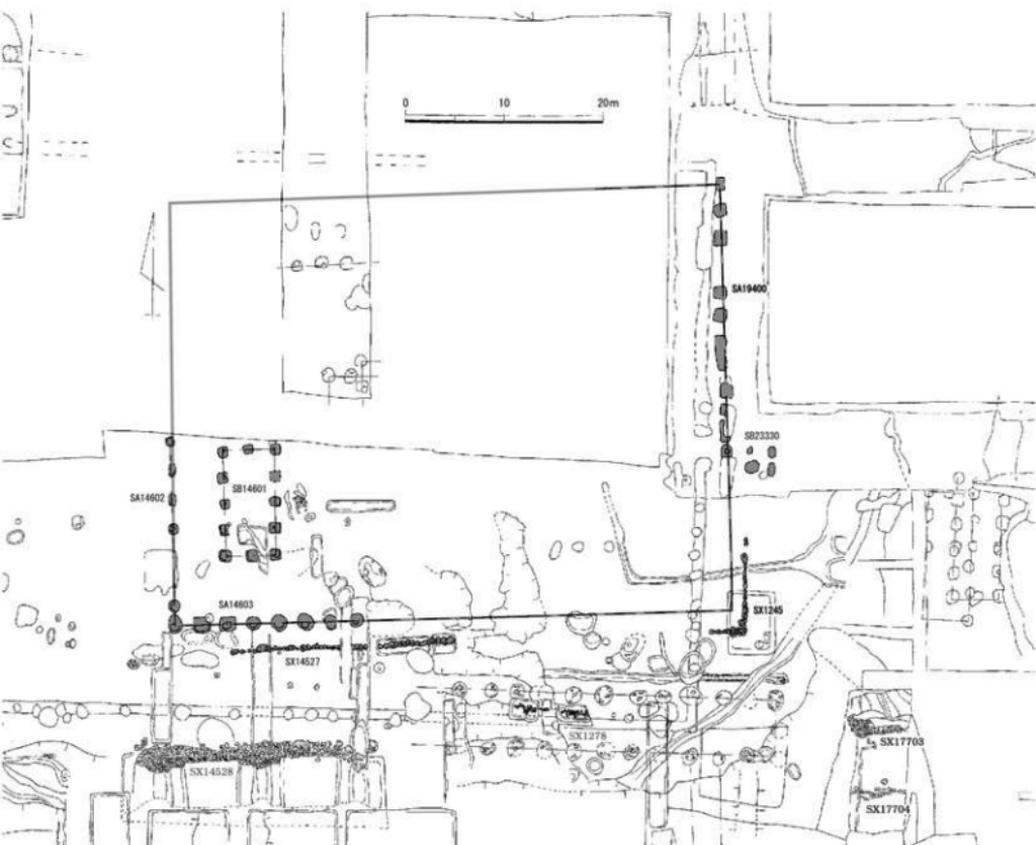


Fig.38 北館第Ⅰ期遺構配置図 (1/500)

掘立柱列 SA14602

Fig.39, PL.6

後述する掘立柱建物SB14601の西に5.3m離れて検出した掘立柱の南北列である。軸線の方はN-1°30'-E(座標北)にとる。

五間分を検出したが、さらに北に続くものと推測できる。南は、後述するSA14603に繋がるものと思われるが、柱穴の形状、柱間など相違点があるため、異なる遺構番号を付している。おそらく、掘立柱列の全体プランとしては一連の施設であろう。

柱穴はおおむね長方形の掘り方を持つが、規格性はない。全形を知りうるSP14170は、南北120cm×東西70cmの長方形、SP14064は、南北100cm×東西90cmのほぼ正方形を呈する。掘り方の深さは、最も北に位置するSP14027で17cm、南のSP064では50cmと、北から南に次第に深くなっているが、全体に遺存状態は悪く、大規模な削平を受けたことがかわれる。

柱痕跡から、径25~30cmの丸柱が想定できる。柱間は、芯々で280cmである。

柱穴から、土師器・須恵器の小片は出土したが、図示できるものはない。また、時期を推定できる遺物も出土していない。

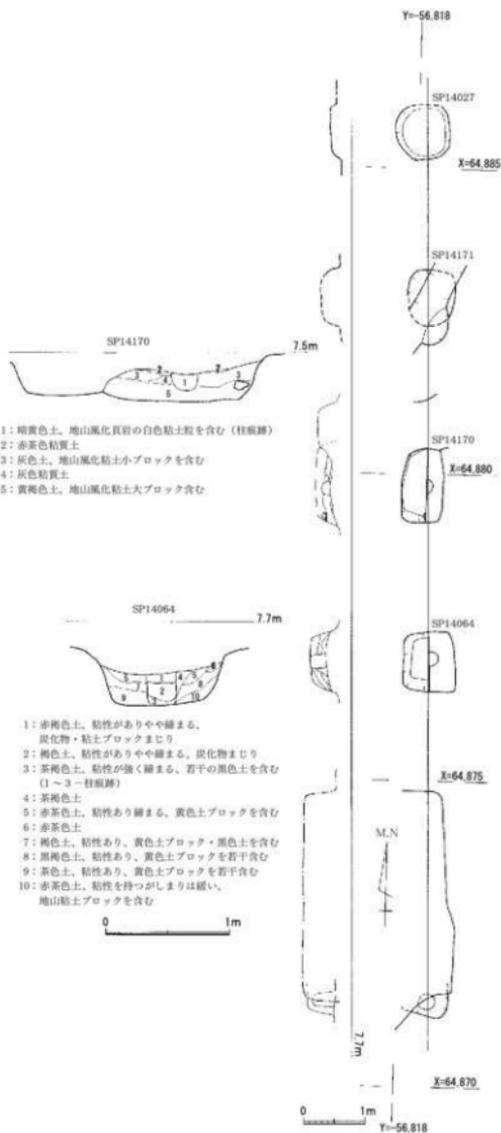


Fig.39 掘立柱列 SA14602 実測図 (平面図は 1/80、土層断面図は 1/40)

掘立柱列 SA14603 Fig.40～42

東西に並ぶ掘立柱列である。N-88°-E。

西端で直角に北に折れ、SA14602に繋がる。東には、さらに伸びることが予想されたが、15世紀の石積み土坑に切られ、第20次調査区内ではその延長は確認できなかった。後述する第1期石垣SX1245背面の土層断面に、柱穴が表れており、石垣との距離、柱穴の深さがSA14603と共通することから、SA14603が第1期石垣の東角まで続いており、北に折れて第26次調査検出のSA19400に接続するものと推定できる。

東西列の柱間は、芯々で260cmをはかるが、掘り方の形状と柱痕跡は、西側3本と東側5本とで異なる。前者は、長方形の掘り方に径30～35cmの柱を立てる。後者は、略円形の掘り方で、径25cmほどの柱を立てる。掘り方および柱の根入れは、後者で深い。第1期石垣の西端は、西から3本目の柱穴の前で止まっており、前者の柱穴の部分に、出入口のような機能を与えることも可能であるかもしれない。南北に並ぶSP14483とSP14482の柱間は、180cmと狭い。

柱穴の土層実測図をFig.42に示す。

SP14483・14485・14488・14525・14501・14507では、柱痕跡の基部に白色の粘土を敷いており、SP14483においては、柱の側面にまで粘土が巻かれている。

柱穴出土遺物の須恵器を、Fig.40に示す。1・3はSP14488、2はSP14507出土。その他、土師器・須恵器の小片が出土している。

7世紀後半に比定される。(大庭)

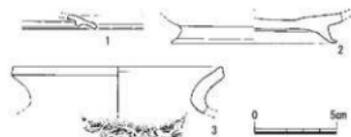


Fig.40 SA14603出土遺物実測図 (1/3)

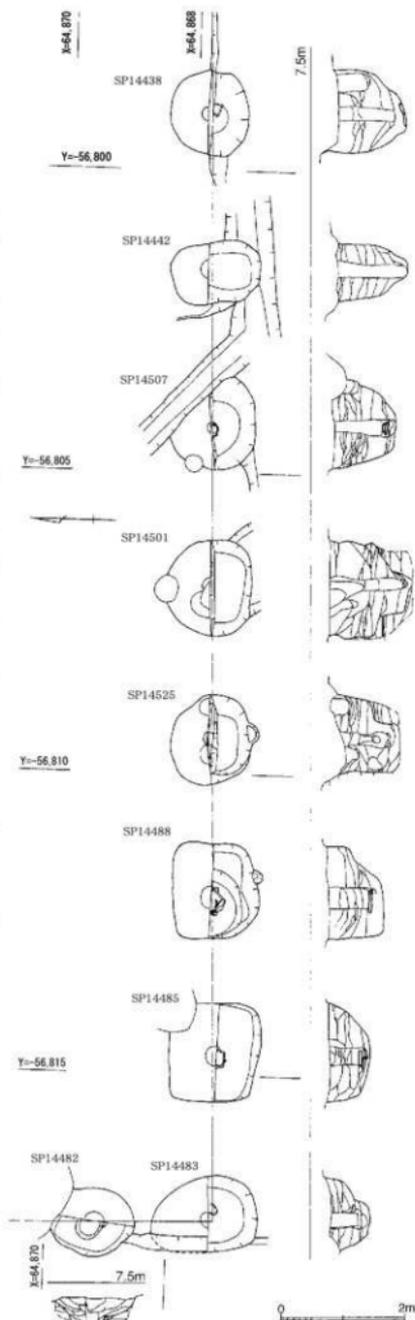


Fig.41 掘立柱列 SA14603 実測図 (1/80)

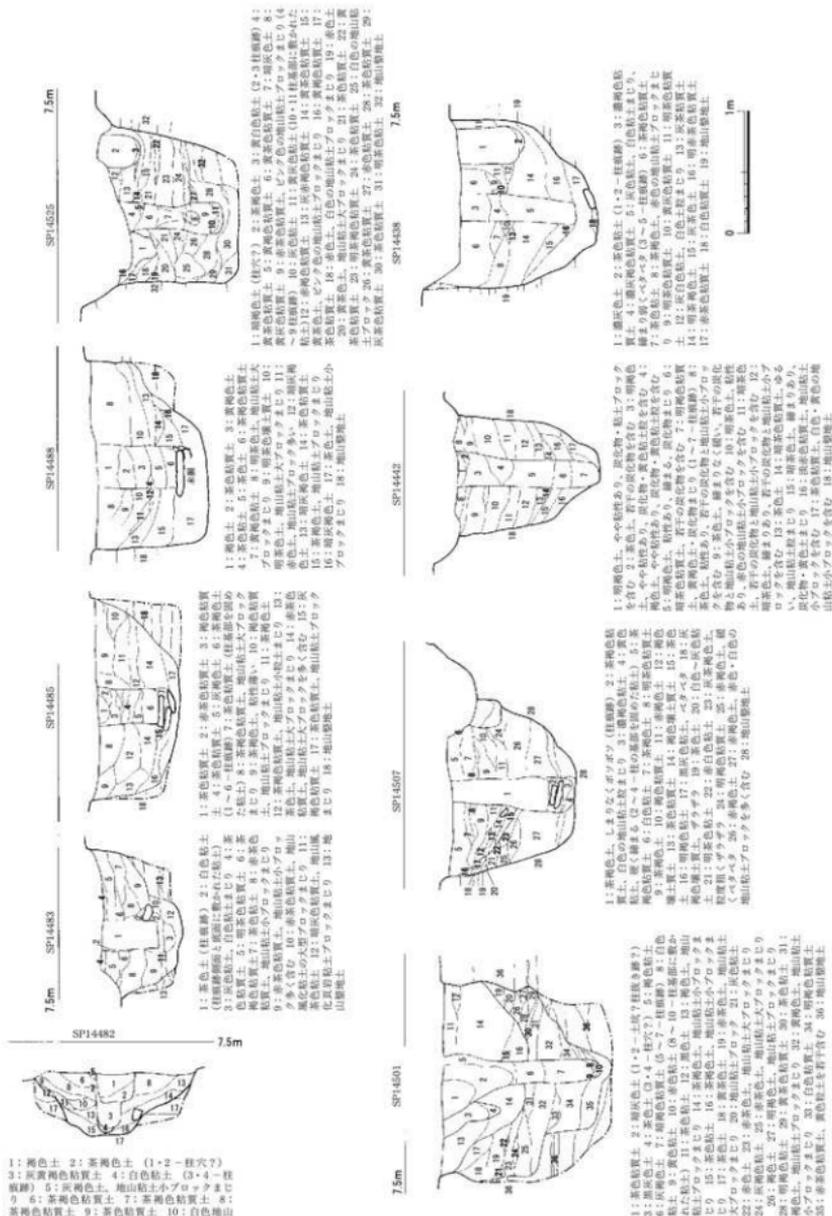


Fig.42 掘立柱柱 SA14603 土層断面図 (1/40)

掘立柱列 SA19400 Fig.43 ~ 45, PL.6

第26・29次調査で検出した南北方向に伸びる掘立柱列で、柵と考えられる。主軸方位は座標北から1°30'西偏する。第I期石垣SX1245の土層断面に確認した柱穴が前項のSA14603の延長上に位置しており、この柱穴からSA14603と直角に北に引いた線上にSA19400が並ぶ。北端の柱穴SP19410より北へは伸びないため西へ折れると推定されるが、西側は近世溝で深く破壊され確認できない。南北長43.3m。柱穴11本を確認したが失われた柱穴が2つ想定され、13本、12間分に相当しよう。北半の柱間は2.6mの等間で、2基を布掘り状に連結した柱穴SP19404・19403より南は柱間が変異しSP23314まで1.6m、約3.6m、1.6m、1.6m、1.6mとなる。柱列全体の中軸線はSP19401とSP19402の間を通るが、ここで折り返しても対称の柱位置とはならない。SP19404～SP23314の間に門が想定されるが、具体的な構造は明らかにし難い。柱穴は方形プランで径1.2～1.4m、深さは最大65cmで削平を受ける。柱穴は断ち割って土層確認を行った。SP23314は平面で柱痕跡が確認され、底面に根石がある。SP19904は断面に抜き取り痕を確認し、礫が詰められていた。柱の径は30cm前後か。出土遺物は皆無である。

掘立柱建物 SB23330 Fig.46, PL.6

柱列SA19400と直交する方向に配置された1間×1間の掘立柱建物で、北側柱列はSA19400の柱穴SP23314と東西に直列する。門に関連する遺構の可能性があるが、SA19400の中軸線から北へ折り返した位置には近世の池があり対称配置をとる可否か不明。柱穴は隅丸長方形で長径1.05～1.5m、深さ35～55cm。3つの柱穴に柱痕跡が認められ、SP23314は扁平な根石を置く。柱間は東西2m、南北1.8m前後。

この建物は柱列(柵)の外側に付設された構造物の可能性はあるが、具体的には明らかにし難い。

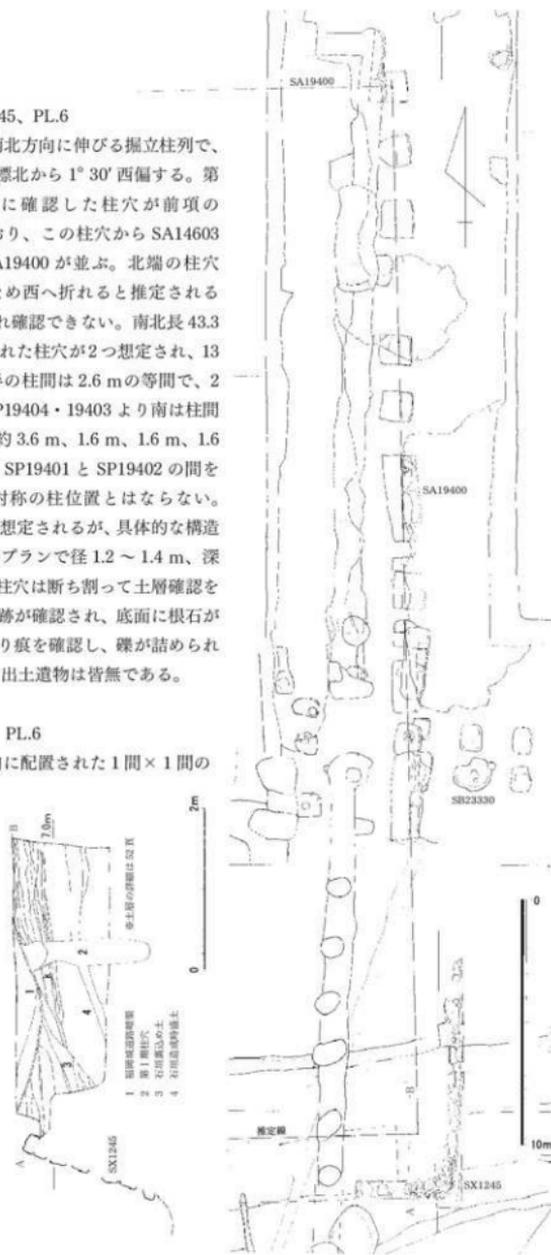


Fig.43 第I期柱列東辺実測図(1/200)・南東角土層断面図(1/60)

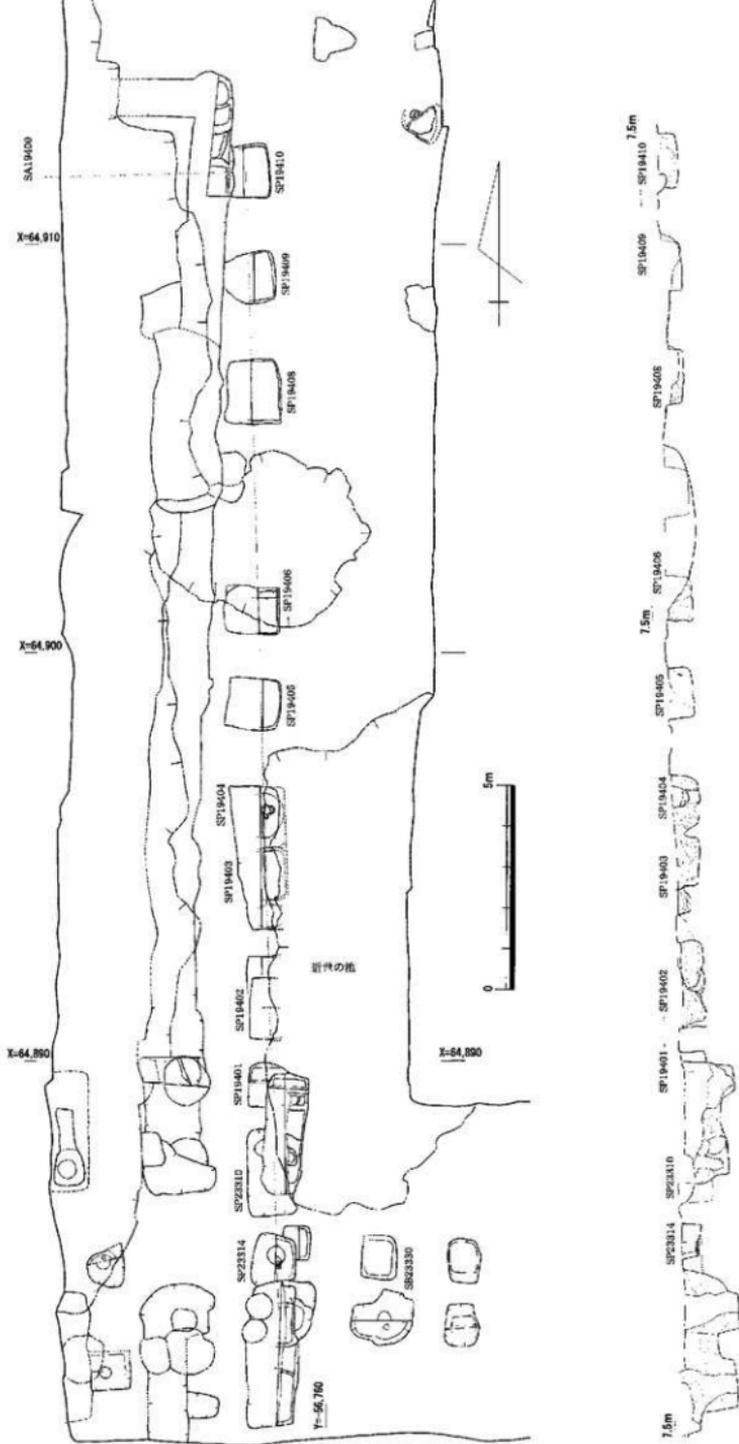


Fig.44 掘立柱列 SA19400 発掘図 (1/120)

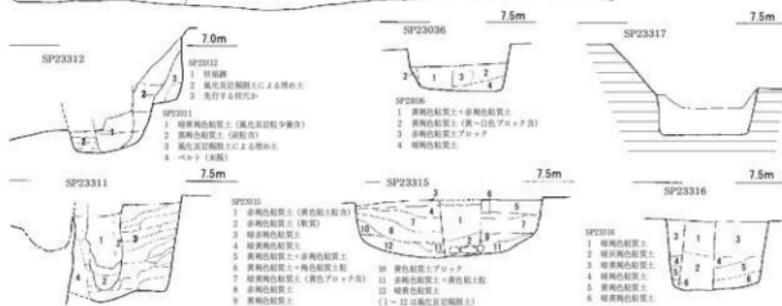
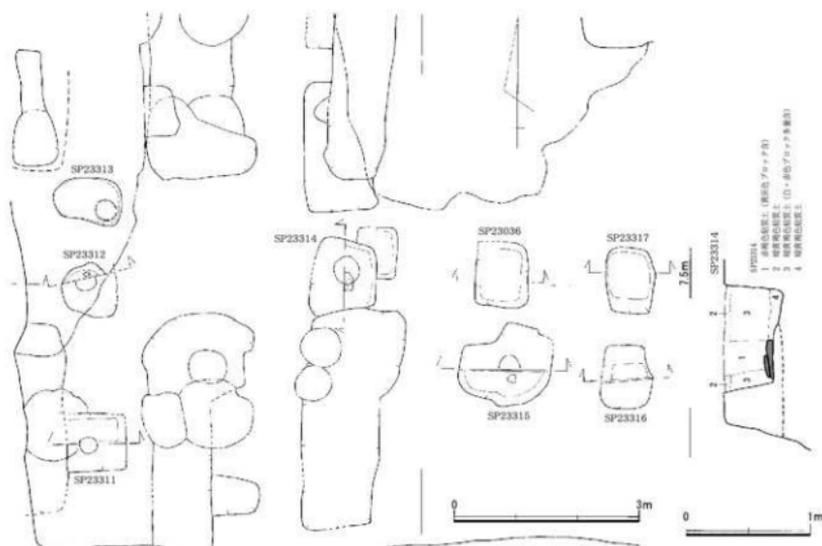


Fig.46 第1期推定門遺構 SB23330 実測図 (平面図は1/80、土層断面図は1/40)



Fig.47 柱穴出土遺物実測図 (1/3)

これとは別に第1期区画の内部にも柱穴 SP23311・SP23312・23313 が認められた。SA19400 とは 4 m 離れており別の建物の可能性が高いが、参考のため図示する。

柱穴出土遺物 Fig.47

1 は須恵器壺としたが脚か。SP23036 出土。2 は須恵器胴部片で擬格子叩き。SP23312。(古武)

掘立柱建物 (SB14601) Fig.48・49、PL.6

第20次調査区中程から北辺にかけて検出した、梁間二間、桁行四間の南北棟である。東辺の北から2本目の柱穴を、平和台野球場の排水暗渠のため失っている。柱間は、芯々で260cmをはかる。

柱穴は、一辺100cm前後のほぼ正方形をとる掘り方で、そのほぼ中央に径30～40cmの丸柱を立てる。Fig.49に土層実測図を示すが、柱の底には、白色の粘土を敷いた痕跡が認められる。

掘り方の深さは、北で浅く、南に下るにつれて深くなる。全体に削平を受けて平坦にならされていることを考え合わせれば、SB14601造営時の地表は北が高く、南に傾斜したもので、自然地形の起伏をとどめていた可能性が高い。したがって、床を張った建物であったと推定することができる。同時に後述する石垣を伴う第1期造営時の造成は、丘陵上の古墳を削平するほどの規模でなされたもので

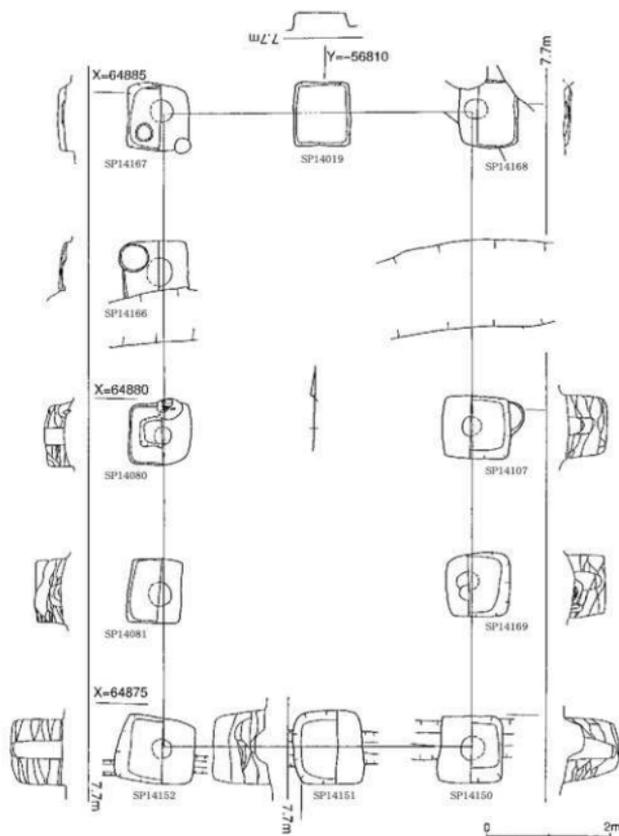


Fig.48 掘立柱建物 SB14601 実測図 (1/80)

ありながら、北館敷地内ですら平坦に整える意図を持たなかったことを示している。

また、柱痕跡を見ると、四隅の柱を除いて、必ずしも掘り方の底に達していない。同様の状況は、SA14602・14603の柱穴にも見られる。柱穴を柱間に合わせて掘削したのち、柱を立てる段階で、SB14601の場合は床高と柱材の長さに合わせて、SA14602・14603の場合は柵（塀）の高さと柱材の長さに合わせて、根入れの深さを調整した可能性を考慮することができよう。

柱穴から、須恵器・土師器の小片は出土しているが、図示に耐えるものはなく、時期を知る手懸かりとなる遺物も出土していない。

石垣 (SX1245) Fig.50 ~ 52, PL.7

第19次調査で、東辺と南辺の角SX1245が確認されたが、調査期間の制約から精査をするには至らなかった。第20次調査において、一旦埋め戻されていたSX1245付近に東西11.5～12.6m×南北18.3mの調査区を設け、発掘調査を行ったものである (P.86, Fig.89)。

精査を行うにあたって、SX1245が埋め殺しにされた土留め石積みである可能性も考えられたが、石列の上面がほぼ直角に曲がっていることから、単なる土留め石積みではなく、石垣であるという前提に立ち、その前面側を主に7.0m×6.7mにわたって掘り下げ、石垣の前面を露出させた。

また、掘り下げた部分の西壁と北壁と土層実測図を作成すると同時に、西壁に沿ってトレンチを設け、石垣背面の堆積状況を検討した。

SX1245の東辺は、7m分が確認されている。南辺との角が最も高く、急激に段を減らし、北に伸びる。隅角部分では7石を積んで、高さは160cmほどを計るが、隅角から一石程度北に折れたところでは4石、1.2mで2石と急激に高さを減じる。南辺の傾斜角度は、約70度である。

南辺は、3.6mを調査したが、西の延長部分は第20次調査のSX12527につながり、50mほど一直線に延びるものである。

隅角部分は、稜を作らず、弧を描いている。隅角の最上段を見ると、小振りな石を弧状に並べて置いており、角を丸く整える意識があったものと思われる。なお、小振りな石を、上面をそろえて並べていることから、隅角の最上段にあたるものと推測することができる。とすれば、隅角上面の標高は、7.3mをはかる。

石垣の石積みは、箱形を呈する礫岩の自然石を横において積み上げ、ところどころに玄武岩の板石を挟み込むように混ざっている。隅角部分では、小振りな石を多用することで直線的な面となることを避け、緩い弧を作り出している。小振りな礫については、その形状は選択していないようで、扁平な石から角張った石まで、立てたり寝かせたり、自在にちりこめている。ただし、短い小口面を石垣正面

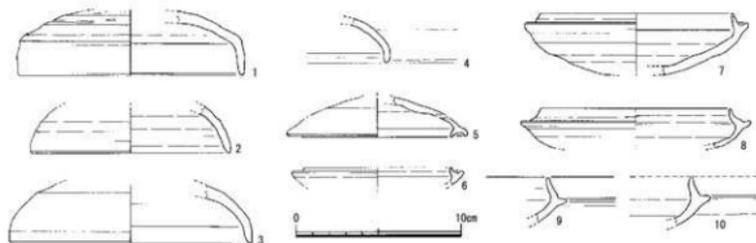


Fig.50 SX1245 出土遺物実測図 (1/3)

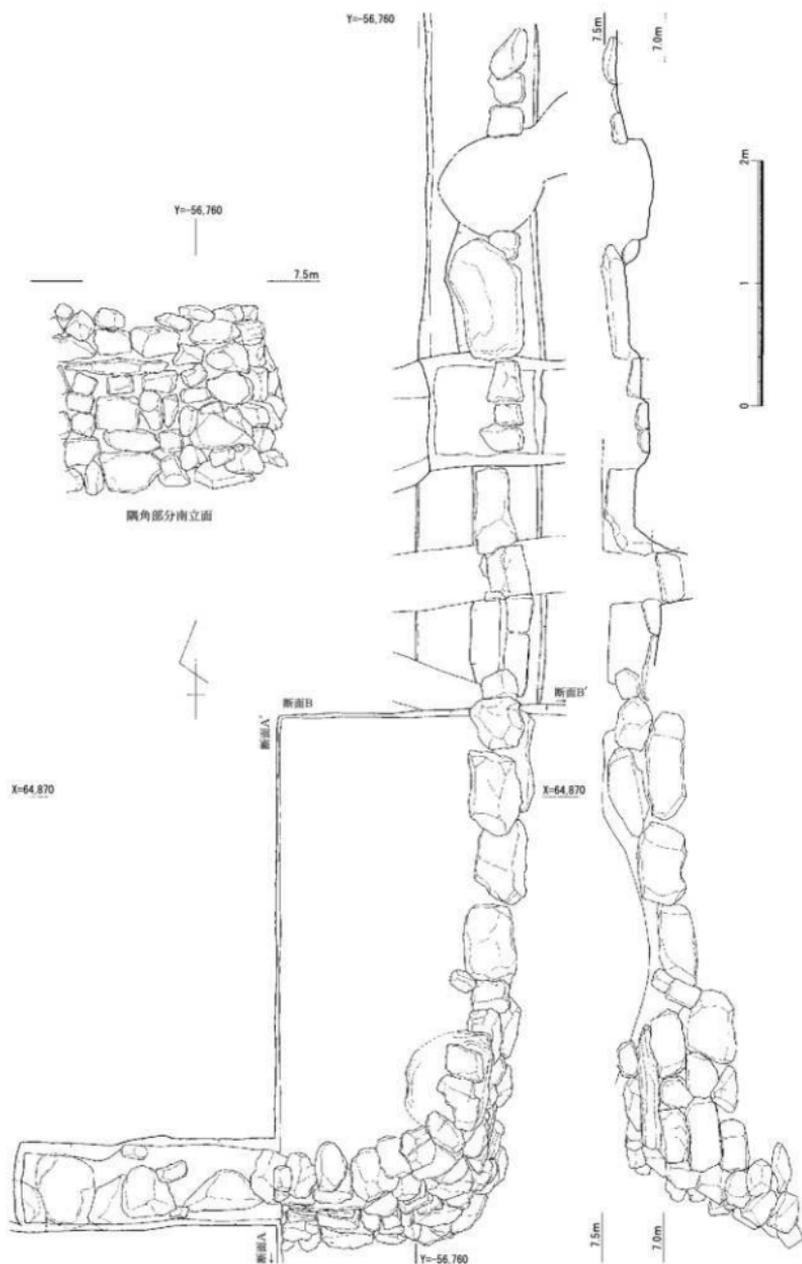


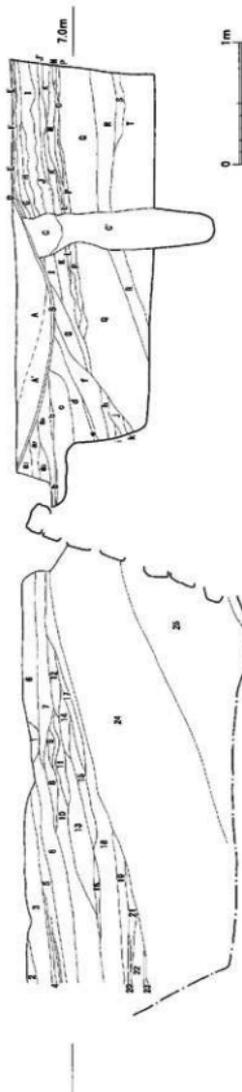
Fig.51 第I期石垣 SX1245 实测图 (1/40)

B 7.5m



1: 褐色砂土層、2: 赤色砂土層、3: 赤色粘土、4: 赤色粘土層、5: 赤色粘土層、6: 赤色粘土層、7: 赤色粘土層、8: 赤色粘土層、9: 赤色粘土層、10: 赤色粘土層、11: 赤色粘土層、12: 赤色粘土層、13: 赤色粘土層、14: 赤色粘土層

K 7.5m



1: 褐色砂土層、2: 赤色砂土層、3: 赤色粘土、4: 赤色粘土層、5: 赤色粘土層、6: 赤色粘土層、7: 赤色粘土層、8: 赤色粘土層、9: 赤色粘土層、10: 赤色粘土層、11: 赤色粘土層、12: 赤色粘土層、13: 赤色粘土層、14: 赤色粘土層、15: 赤色粘土層、16: 赤色粘土層、17: 赤色粘土層、18: 赤色粘土層、19: 赤色粘土層、20: 赤色粘土層、21: 赤色粘土層、22: 赤色粘土層、23: 赤色粘土層、24: 赤色粘土層、25: 赤色粘土層

Fig.52 第 I 期石垣 SX1245 土層断面図 (1/40)

に向け、奥長に積み上げることで、石と石をしっかりと噛ませている。

西壁土層断面に表れているように、控えの石積みや裏込めはまったく認められない。

石垣基部付近の土層断面を見ると、地山の岩盤層は現れておらず、盛土の斜面を斜めに切りこんで、石垣を築いている状態が見える。第Ⅰ期に先立つ盛土造成が先行してなされ、丘状の地形が出来上がったところで、北館の施設を設ける範囲を線取るように石垣を築いたものと推定できる。

石垣は、石を据えながらその背面に土を詰めて次第に高をあげていく方法で築かれており、裏側の盛土については、版築もなされていない。

石垣前面は、大量の土で一気に埋め立てられている。堆積は傾斜に沿った斜堆積で、石垣背面の比較的細かい単位の堆積とは全く異なっている。このことから、石垣前面は露出していて、その後埋め立てられたことが想定できる。

石垣築造以前の盛土であるk層からのみ、比較的まとまった量の須恵器が出土している。k層出土須恵器の内、図化に耐えたものを示す。

Fig.89-1~5は杯蓋、6~10は杯身である。5は、宝珠状の握みがつく蓋で、口縁のすぐ内側には、身を受ける返りが付く。口径は、11.0cmと小さい。k層出土遺物の内、最も後出する要素を示すもので、7世紀中頃に位置付けられよう。

このことから第Ⅰ期石垣に関わる盛土整地は、7世紀後半の早い時期に為されたものと考えられる。

石垣 (SX14527) Fig.53, PL.7

第20次調査で検出した石垣で、SX1245の南辺につながる。主軸方位 N-88°-E。

上部の石積みが後世の削平で飛ばされている可能性はあるが、現状では、第19次調査で検出したSX1245の隅角から、SX14527の東四分の一あたりまでは、ほとんど高さは変わらず160cmほどで、そこから西に向かって次第に段数を減らし、西端付近では、一段の石を据えるだけとなる。石の積み方は、SX1245と共通する。

前述した柵列SX14603とは、約3mの間隔で平行しており、同一プランで造営されたことがわかる。(大庭)

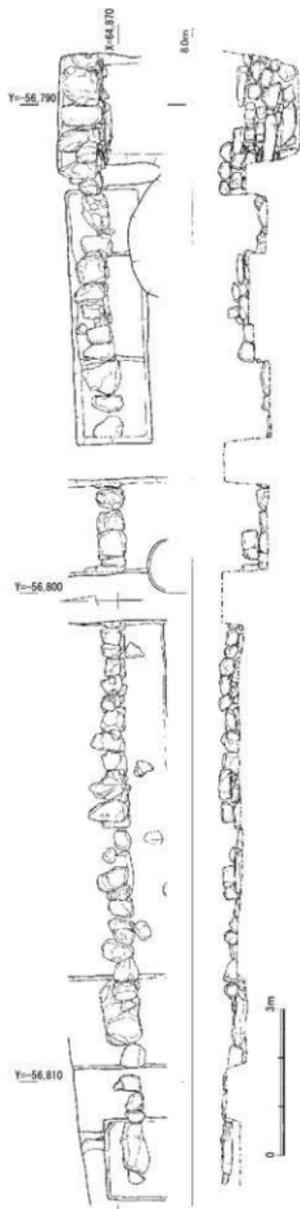


Fig.53 第Ⅰ期石垣 SX14527 実測図 (1/100)

(3) 第Ⅰ～Ⅱ期間の遺構と出土遺物

石積み SX1278 Fig.54

第Ⅱ期布掘り SA1237 南列の北に接して東西に伸びる石積み遺構である。東西長約 8 m を確認。東側では 3 段の積み石があるが、西側は礫が散漫な状態となり西端で収束する。東側の延長は未確認。石材は礫岩・玄武岩・花崗岩の自然礫である。石積み SX1245 を埋めた造成土の斜面に設置された土留めと考えられる。この SX1278 を埋めた造成土を切り込んで第Ⅱ期布掘り塀 SA1237 が造られている。

SX1278 出土遺物 Fig.55

須恵器、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナ 2 箱出土した。1・2 は前面埋土、3・4 は後背埋土出土である。1 は新羅陶器蓋、2 は須恵器蓋、3 は須恵器高台付環、4 は須恵器壺である。(池崎・吉武)

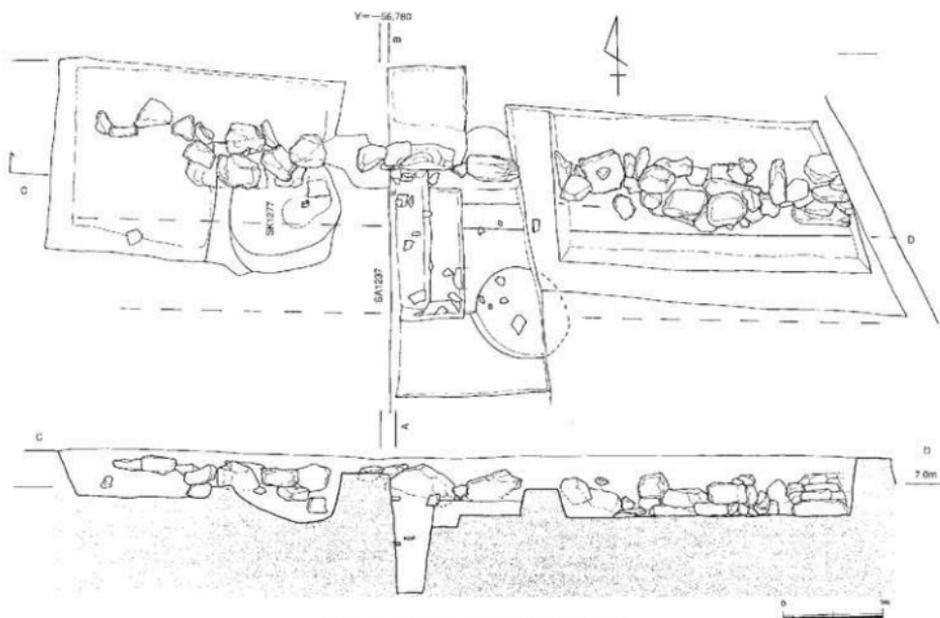


Fig.54 石積み列 SX1278 実測図 (1/50)

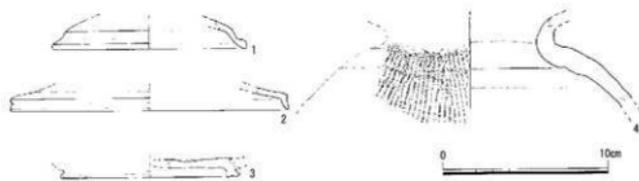


Fig.55 SX1278 出土遺物実測図 (1/3)

石垣 (SX14528) Fig.56～58, PL.8

第20次調査区の南辺近くで検出した石垣遺構である。東西に23m分を検出した。自然の谷地形を埋め立て、幅20mの堀状に整えた北壁に築かれた石垣である(『鴻臚館跡18 - 谷(堀)部分の調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1022集 参照)。

東は、第23次調査検出のSX17703につながる。また、西についてもさらに伸びることは明らかだが、20mほどで谷(堀)が行き止まりになるため、そこまでの間で収まるものと推測される。したがって、東西方向に約100mにわたって築かれた石垣である。

石垣の高さは4.2mを測り、下部の1.5mは80度前後でほぼ直に、上部は55度前後で勾配を持って積まれている。第1期石垣同様、短い小口面を前面に向け、奥長く石を置いて積んだもので、裏込め石や版築はなく、盛土しつつ石を積み上げたものと思われる(付図2)。第1期石垣SX1245の勾配は70度程度で、SX14528下半部分の勾配とほぼ一致しており、SX14528においては、高さが4m以上と高いために一連で積み上げることができず、屈折させ上半部で勾配を緩めたものと考えられる。逆に言えば、急勾配で石垣をつくるには、1.5メートル強の高さが限度であったと推測できる。

SX14528の立面図を、Fig.56に示す。石積みは、下半部分で比較的大きな石を用い、また玄武岩の板石を多用している。これに対し、上半部分では比較的小さめの礫を積んでいる。全体に横目地が通っており、横方向に一段ずつ積み上げた様子がうかがわれる。

石垣の基部は、岩盤と言うよりも谷の自然堆積土層のようで、青灰色の粘質土層の上に乗っている。

石垣に直交して設けた02-1～3トレンチの土層観察によれば(付図2)、北から南に緩く傾斜した盛土整地層は、そのまま石垣背面に取り付いており、盛土を行いながら石垣を積み上げていったことがわかる。また、その裏裏込めの礫は一切用いられていない。

現在でも、背後の盛土整地上に降った雨水は、盛土中を流れ、石垣の隙間からにじみ出る状況がみられた。そのためか、SX14528の東端付近では、石垣が崩れ、補修をくわえている(Fig.56・付図2、02-3トレンチ土層実測図)。この補修は、石垣の下部をやや前面に出して、45度ほどに勾配を緩くして積みなおしたもので、上部は石垣を作らず、盛土のまま斜めに立ち上げたものである。48層、49層、50層、53層などによる整地斜面は、布掘り掘立柱列SA14526の掘方の縁ぎりぎりに接する位置まで立ち上がっており、鴻臚館第II期造営以前に崩落し、補修が行われたことを示している。

なお、同様な崩落と補修は、平成16年度に実施した第21次調査において、調査した中央谷を横断するトレンチにおいても確認できた。このトレンチは、Y座標=-56.768で設定したもので、SX14528の末調査部分に直交して横断しているが、深さ250cmに及ぶ調査にもかかわらず、石垣遺構は検出できなかった。しかし、土層観察から、SX14528の延長ライン上で、30度の勾配を持つ傾斜面を確認しており、SX14528東端部分と同様に石垣の崩落と補修がなされた部分と推定した(『鴻臚館跡18 - 谷(堀)部分の調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1022集)。

石垣の廃絶にあたっては、上部から土を落しこんで埋めこんでいるが、02-1トレンチの観察からは、石垣の廃絶後は、35度程度の傾斜面を維持して整地していた様子がうかがわれる。整地傾斜面の時期は不明である。

その後、02-1トレンチであれば6～12層、02-3トレンチでは6～44層が、6～9層・10～15層・16～23層・24～37層・38～44層の単位で堆積している。傾斜角は維持されており、幅を狭める、すなわち北館敷地を南側に拡張する意図でなされた埋め立てであろう。

石垣を廃した際の堆積層である02-1トレンチ23層の出土遺物をFig.57に図示する。

1～10は須恵器である。1～3は、坏蓋で、端部を折り曲げる。4～6は、高台坏である。体部

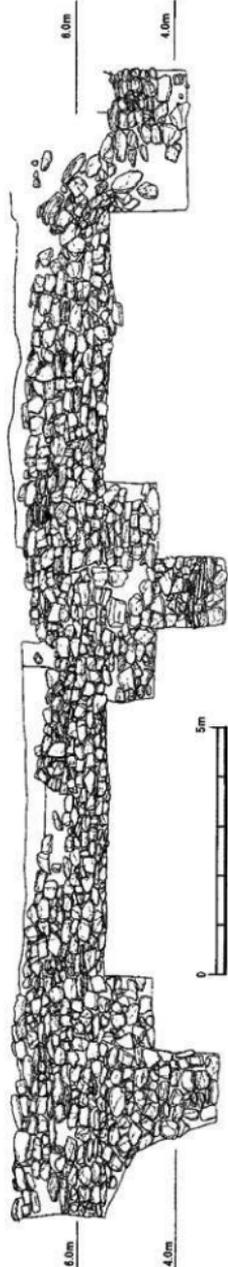
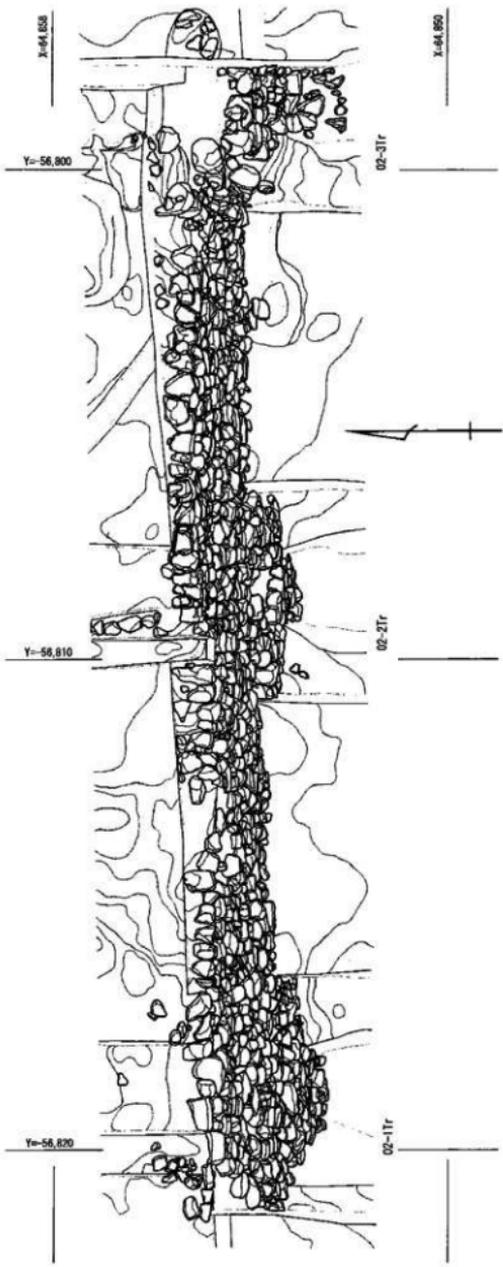


Fig.56 石垣 SX14528 発掘図 (1/100)

は緩く外反する。高台は、底部と体部の境から若干内側に入った位置に張り付けられる。器高は、高い。7は、壺である。肩部の外面上には、平行叩き目が残る。8～10は、甕である。頸部～口縁部は横手で調整、9の肩部内面には平行当て具痕、外面上には平行叩き目が見られる。

11・12は新羅陶器である。11は蓋で、天井部に印花の縦長連続馬蹄形文が並ぶ。口縁部内面には返りがつく。外面は、降灰により自然釉がかかる。胎土はやや肌理が粗い。宮川分類の2b式に該当するもので、7世紀後半の新しい時期に位置付けられる(宮川禎一1993「新羅印花文陶器変遷の画期」『古文化談叢』第30集(中))。12は、盤口の壺である。頸部の伸びは低く、二重口縁に作る。内外面は横手で調整で、頸部には、絞り痕跡が認められる。

Fig.58には、SX14528 前面の埋土から出土した瓦を示す。12は、鴻臚館式軒丸瓦である。焼成が甘く、磨滅している。13・14は、鴻臚館式軒平瓦である。13は、瓦当部分のみの破片であるが、14では平部分が残っており、凹面は布目、凸面は縄目叩きである。頸部分は横撫でされる。15～17は、平瓦である。凹面は布目の後に工具で撫でている。16において顕著で、布目は撫で消され、部分的に認められる。また、16の凹面においては、横断面に顕著に表れているように短冊状の単位が認められ、桶巻き作りであったことが窺われる。凸面は、縄目叩きである。16では下端付近を撫で調整しているため、縄目叩きは半ば消されている。小口は、へらで削って面取りする。また、凹面では、側辺に沿ってへら削りし、面取りされている。

この他、土師器・瓦類が出土しているが、小片のため、図示に絶えなかった。

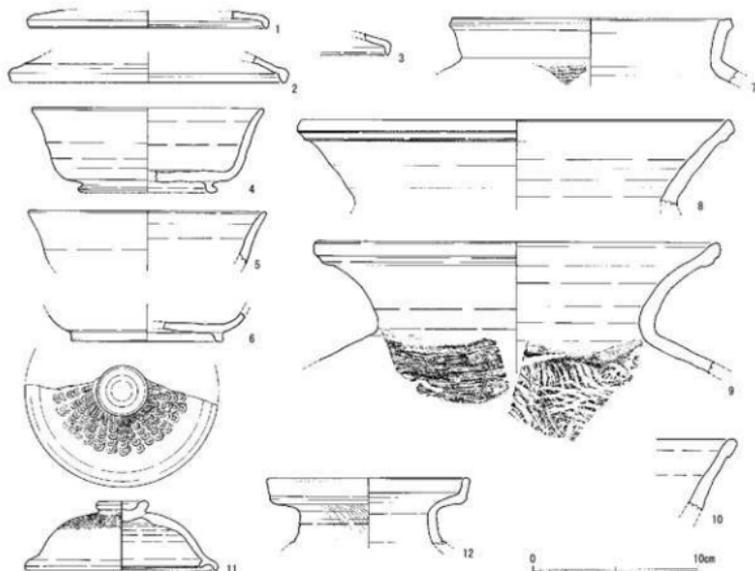


Fig.57 SX14528 出土遺物実測図1 (1/3)

石垣 (SX17703) Fig.59 ~ 67, PL.8

第23次調査(0502)のグリッド5で検出した石垣遺構で、SX14528の東側延長部分に当たる。

SX17703の上位においては、暗灰色砂質土による傾斜面を検出した(Fig.59、Fig.62 - 19層)。33度の勾配を持つ直線的な斜面で、19層は斜面全体に貼られた人為的な表土層とみられる。石垣を廃絶し埋め殺した後の段階で造成された、堀の斜面であろう。

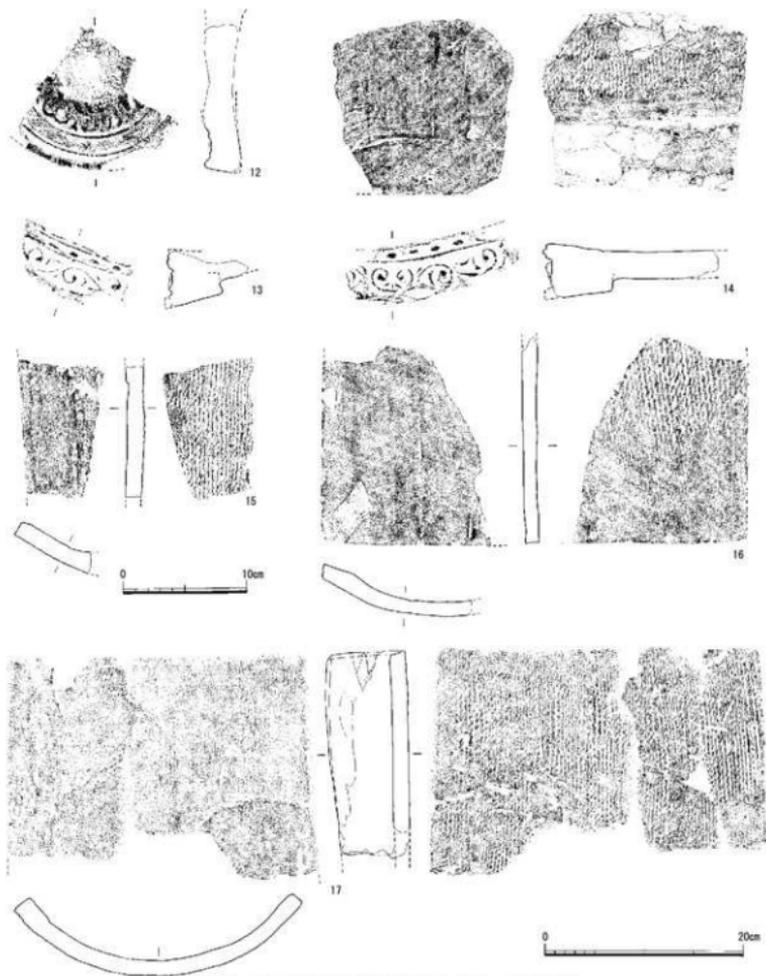


Fig.58 SX14528 出土遺物実測図2 (1/4, 17は1/5)

SX17703は、グリッド5を横断して東西に延びるが、西壁で最も遺存状態がよく、東半分は、16世紀の大型溝状遺構によって掘り取られている。西壁付近で、石垣の高さ約4m、下から1.4m付近で傾斜角を緩め、「く」字型に屈折する。屈曲から下は74度、上は55度の勾配となる。

礫岩を主に、ところどころに玄武岩の板石を横置きして積み上げている。さらに詳細に見ると、西壁から1m付近で石積みに変化している。すなわち、西側は玄武岩の板石を横方向に多用しつつ、密に石を積んでいるのに対し、東側では板石をほとんど用いず、石積みの隙間が大きい。また、西側と東側では基底部の高さにも明瞭な違いがある。一見して、東側の石積みが西側に付け足された観があるが、西側の石積みに小口の処理はみられず、時間的なずれは考えにくい。同時に積み上げていく中にも、施工の単位があったことを示していると考えておく。

Fig.62にグリッド5西壁における土層実測図を示す。SX17703の北側は、細かい単位で水平に堆積した粘質土層群であり、SX17703に先立つ盛土整地層である。堰板状の縦の土層が見られるが、その両側で堆積土は連続しており、堰板とは考えられない。盛土整地層はSX17703の背面に直に接しており、裏込め等は全くなされず、盛土しながら石を積んだことがわかる。

石垣前面の堆積層は、背面とは異なった斜堆積である。標高2.5m付近以下(138~142層)においては、グライ化した粘質土が堆積しており、水つき状態であったことが想定できる。75~109・111~117・121

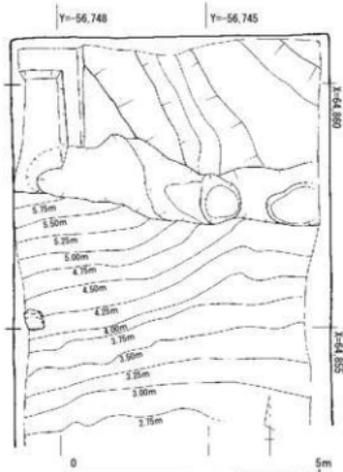


Fig.59 石垣 SX17703 上部整地傾斜面実測図 (1/100)



Fig.60 石垣 SX17703・17704 全体図 (1/100)

～128層は、細かい堆積土層であるが斜堆積の集合で、自然堆積層と思われる。51～63層は、炭化物を多く含む暗褐色土層群である。19層は、暗灰色砂質土による斜面の造成土である（前述）。42～45層は、斜面に沿った堆積であり、一気に埋め立てた土壌で、19層の斜面造成に伴う埋め立てであろう。3層は、同一傾斜の斜堆積土層群であり、19層以後の谷＝堀の埋め立てを示す。2層は、堀全体を大きく覆う暗褐色土層であり、中世に形成された包含層である。1層は、福岡城三の丸造成に由来する埋め立て土層である。

出土遺物を、出土層位別に Fig.63～67 に示す。1～6 は上部、おおむね3層から出土した。1 は、土師器の皿で、底部はヘラ切りする。2・3 は白磁碗である。4～6 は、格子目叩きの瓦である。

7～11 は、SX17703 背面の整地層である 143～225 層から出土した。7 は、最上部から出土した

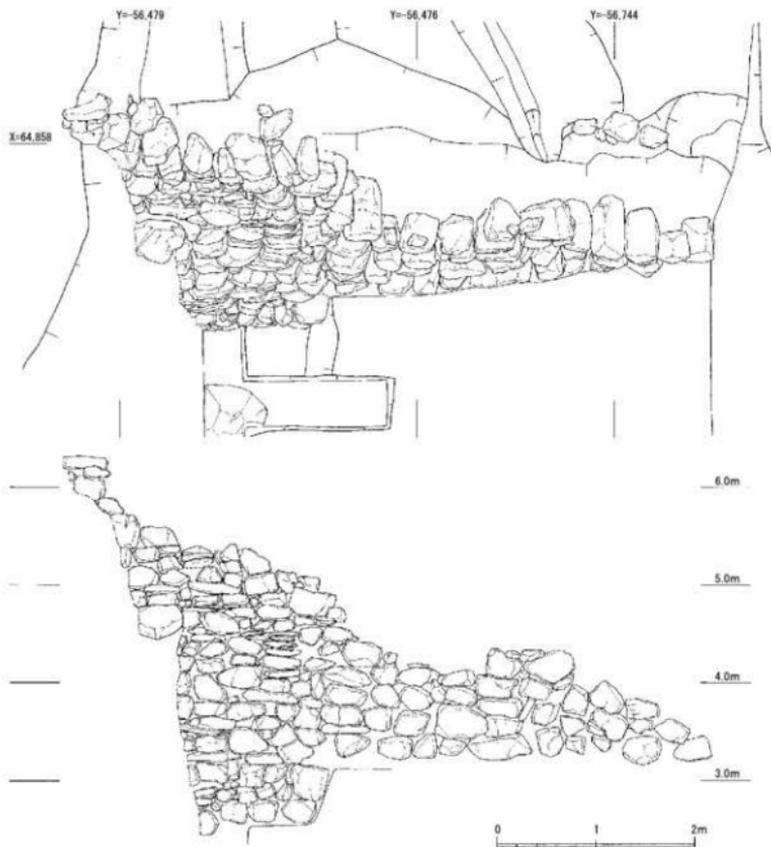


Fig.61 石垣 SX17703 実測図 (1/50)

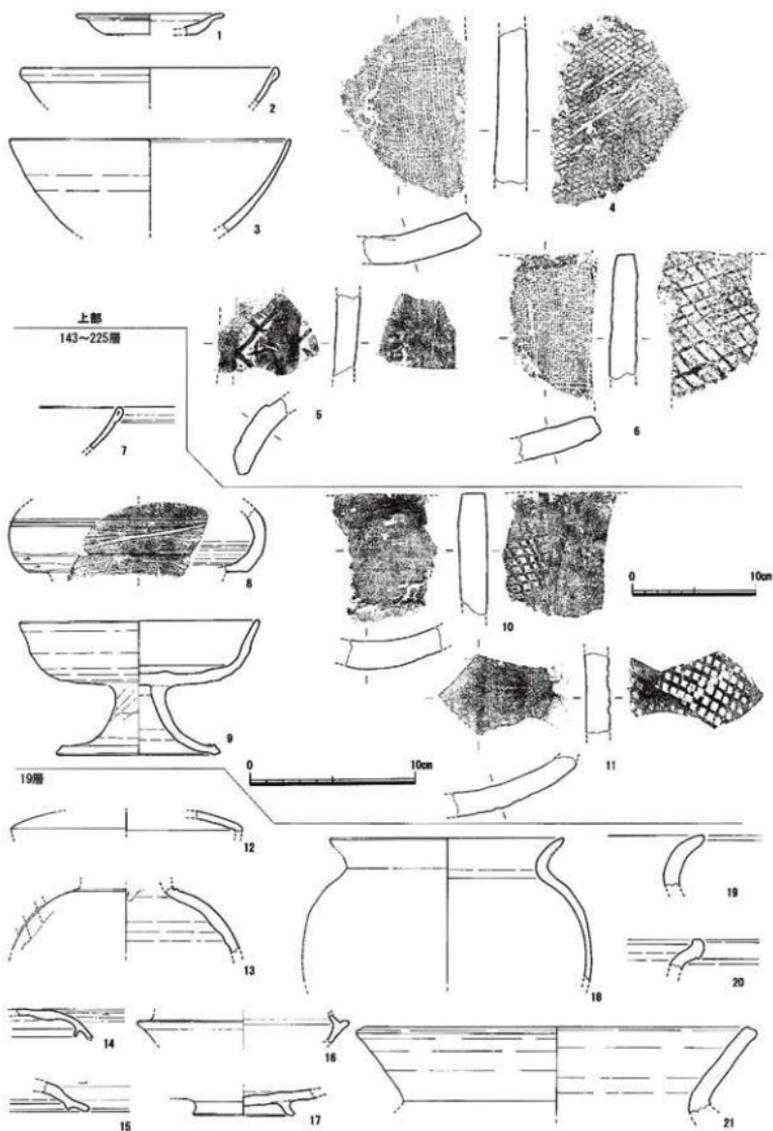


Fig.63 SX17703 出土遺物実測図1 (1/3、4~6・10・11は1/4)

白磁碗である。151層から上位は、SX17703を覆う堆積土であり、9世紀以降に下る可能性を示す。8は新羅陶器の台付壺、9は須恵器の高坏、10・11は格子目印きの平瓦片である。

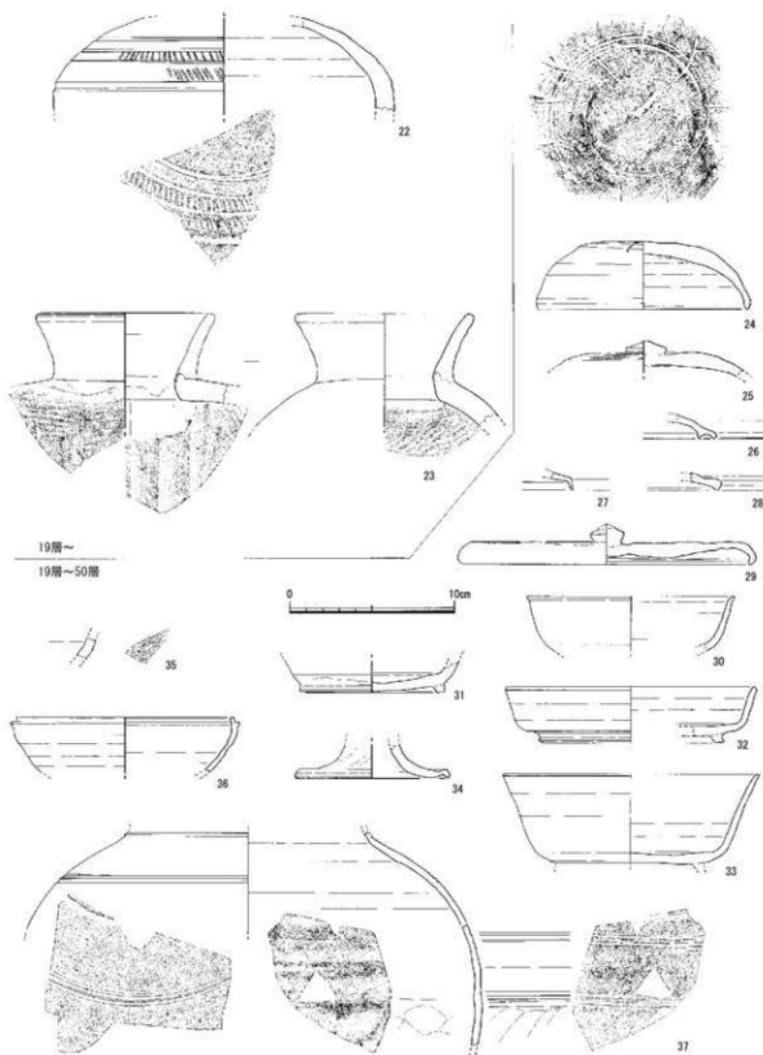


Fig.64 SX17703 出土遺物実測図 2 (1/3)

12～19は19層、22・23は19層直下から出土した。12・14～17・20～23は須恵器、18・19は土師器、13は陶器である。13は水注の肩部で、注口を欠く。外面は施釉するが、二次的に火を受けて荒れ、釉は白化して黄灰色を呈する。粗製の越州窯系陶器である。22は、長頸壺であるが、頸部以上を欠く。23は横瓶である。越州窯系陶器の出土は、19層が9世紀代に下る可能性を示す。

24～48は、19層から50層の間の堆積土から出土した。24～34・38～42は、須恵器である。42は、器形不明だが、竈の可能性も考えられる。35～37は、新羅陶器である。43～48は、瓦である。43は、二重格子の叩き目(3Ba2-1型式)で、「賀茂」銘が入るものと推測される。47は、大宰府分類049型式の軒丸瓦である。46は、無文の瓦磚である。焼成は甘く、黒灰色を呈する。

49～56は、50層の出土遺物である。49は、新羅陶器の鉢である。36に類似するが別個体。50～53・55・56は須恵器、54は土師器である。55の内面には、ところどころに黒く漆が付着している。57～75は、50～60層出土遺物である。57～62・70～75は須恵器、63～69は土師器であ

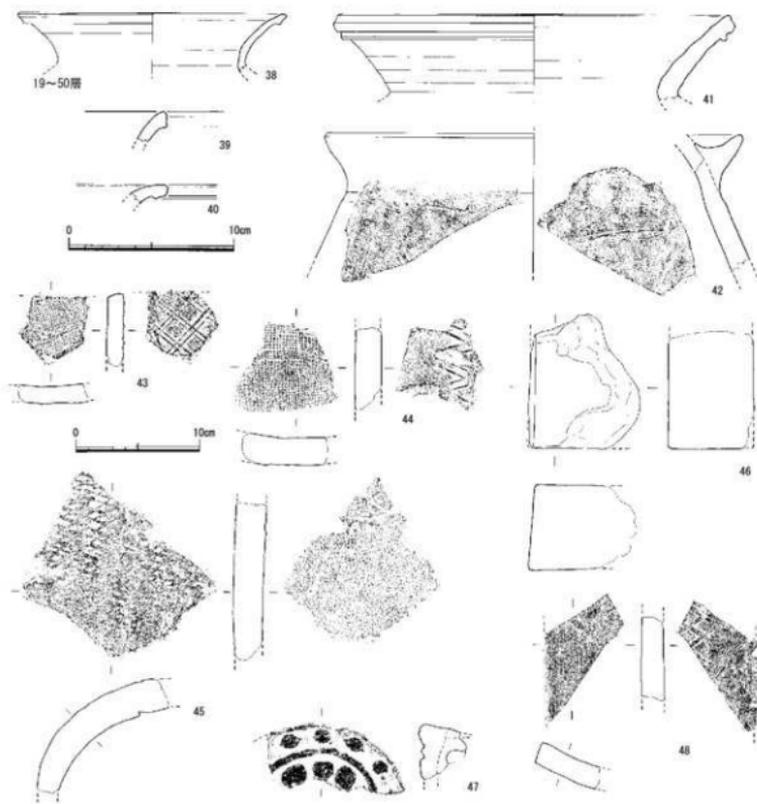


Fig.65 SX17703 出土遺物実測図3 (1/3、43～48は1/4)

る。67は甌の口縁、68・69は胴部についた角状の把手部分である。70は、横瓶の肩から頸部にかけての破片である。体部外面は格子叩きの後カキ目、内面は同心円の当て具痕が重なる。74の頸部内面には、へらによる沈線が認められる。縦棒が一本残るだけなので、へら記号か文字かの判別はつかない。75は器形不明。凹面は板撫で様の調整痕をとどめ、端部から凹面にかけては、へら削りする。

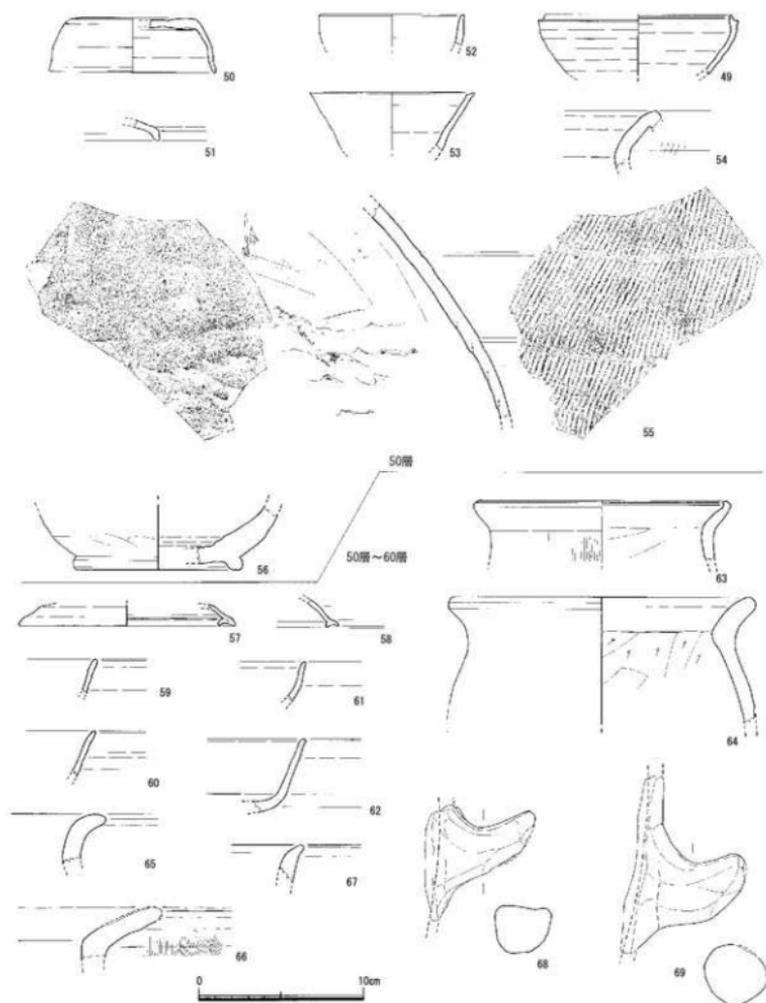


Fig.66 SX17703 出土遺物実測図4 (1/3)

凸面は、叩き目を撫で消す。形状としては丸瓦端部の可能性もあるが、器面調整から即断は避けたい。

76 は 53～56 層、77 は 58 層出土の須恵器である。76 の坏蓋は、前段階の型式である。

78～82 は 96・97 層出土で、76～81 は須恵器、82 は平瓦片である。82 は複線格子叩き 3Ba1 型式であり、96・97 層の堆積が 9 世紀代以降に下る可能性を示している。

83 は 138 層、84・85 は 141・142 層出土遺物である。83・84 は須恵器の高台坏、85 は土師器の甕である。

SX17703 の時期に関しては、SX14527 とあわせて、「5. 小結」で整理・検討する。(大庭)

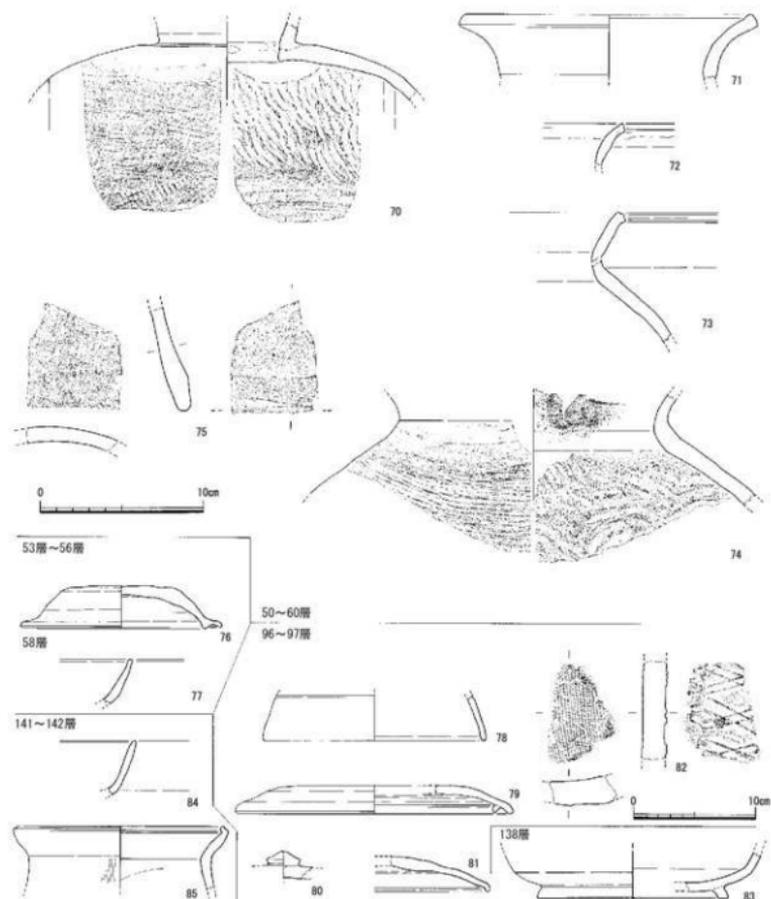


Fig.67 SX17703 出土遺物実測図 5 (1/3, 82 は 1/4)

石列 (SX17704) Fig.68・69, PL.8

SX17703の前面から、5.5mほどの距離をおいて、石列 SX17704 を検出した (Fig.60・68)。

グリッド5を東西に横断しており、さらに両側に伸びることは確実であるが、SX14527の調査では、石垣前面から3m程度までの調査したにとどまるため、同様の石列が存在したか否かは不明である。

石列は、整然と一列に検出したものではなく、中ほどで一部の石が上下に重なりながら2～3列を呈する。石積みがずれた可能性もあるが、石列の断面を見ると中央谷側に傾いて据えられており、石垣状に高く積み上げた遺構とは考えにくい。Fig.68が示すように、位置関係からは、SX17703全面を覆う斜堆積土の裾付近に当たり、その土留めを担った石列である可能性を考えたい。

出土遺物を Fig.69 に示す。 遺物の取り上げに際して、SX17704 北側で木質が薄くたまった層が検出されたため、木質層とその上下に分けて取り上げた。報告するに当たっては、Fig.62の土層番号にしたがって示す。1～10は、33～38・118・128・138層南側からの出土遺物である。1は、越州窯系青磁の合子蓋である。毛彫りの花卉文が見えるが、釉が不透明で全体の施文は明らかではない。2・3は土師器、4～10は須恵器である。2は大型の鉢で、外面は板状工具で撫で調整、内面はおそらく皮を用いた丁寧な撫で調整で滑らかに整える。11～14は141層出土だが、119・120層の包含遺物が混入しているものと思われる。11は新疆陶器の壺、12～14は須恵器である。15～26は142層出土である。15～19は須恵器、20～25は土師器、26は砥石である。18の頸部内面には、板状工具痕が並ぶ。20・21は都城系土師器の皿である。胎土は在地産土師器と変わらないので、模倣土器と考えられる。27～29は分層せずに取り上げた須恵器である。28の内面には、べったりと漆が附着しており、漆の貯蔵容器として用いられたものと考えられる。(大庭)

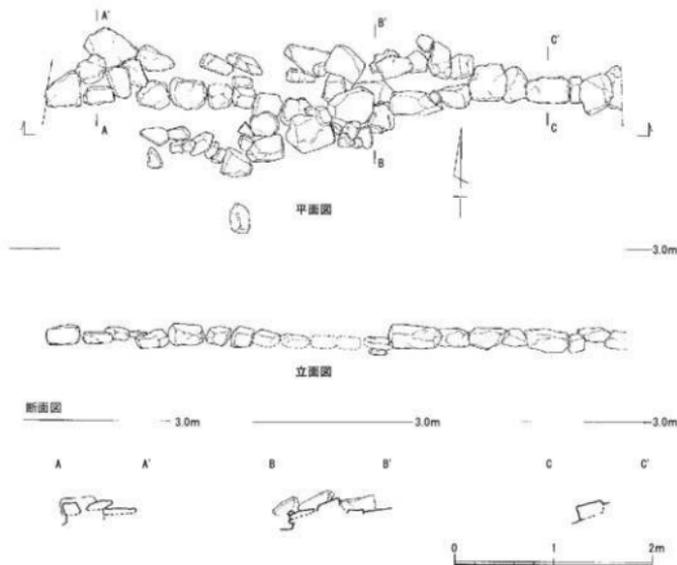


Fig.68 石列 SX17704 実測図 (1/50)

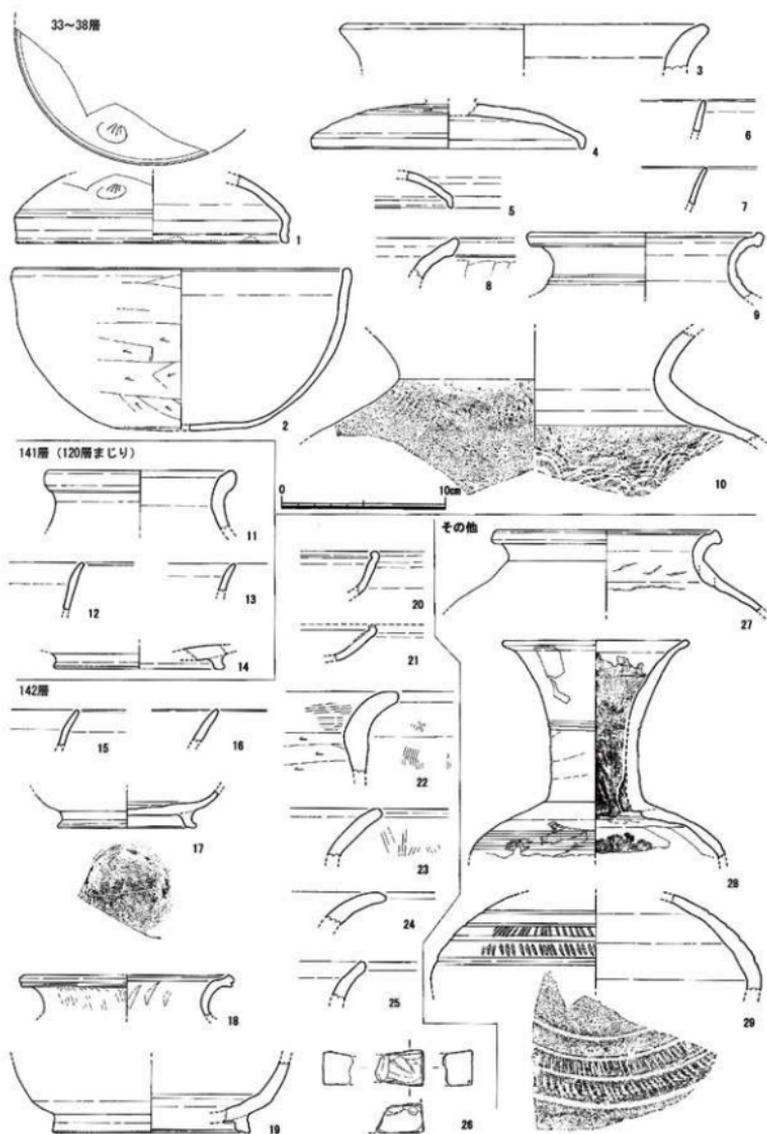


Fig.69 SX17704 出土遺物実測図 (1/3)

(4) 第Ⅱ期の遺構と出土遺物 Fig.70

第Ⅱ期建物は、中央谷を挟んで南館と北館に同規模・同方向の布掘り塀を配置し、塀の東辺に門、西側区画外に便所を設ける。中央谷は造成されて形を整えられ、谷頭には池が造られ、東側の谷開口部には土橋が架けられる。北館第Ⅱ期の遺構には布掘り塀、東門 SB1238 (SB23300)、便所 SK1124・SK1125・SK25043 がある。これらは主軸方位が等しく、出土遺物からも同時期の遺構と推定される。南館と異なり北西の区画外にも便所 1 を確認したが、南館でも北西角周辺は未調査であり、東に面して左右対称に配置された可能性もある。

北館の布掘り塀について Fig.70

南館と相似形をなす布掘り掘り方の掘立柱列で、塀とみられる遺構である。全体形は東西に長い長方形区画をなし、東辺の中央に東門 SB1238 が取り付く。心々距離で西辺長 55.7 m、東辺長 56.1 m、南辺長 73.7 m、北辺長 73.7 m を測り、東側に僅かに開くが正しく長方形となる。主軸方位は座標北より約 $1^{\circ} 30'$ 東偏し、真北からは $1^{\circ} 10'$ 東偏する。掘り方は幅 1.0 m 前後の溝状をなし、最も残りの良い部分で遺構検出面から底面まで 1.5 m を測る。底面レベルは東辺が約 50 cm 低く、当時の地表面も東へ傾斜していたものと推定される。柱抜き取り痕は平均 2.3 ~ 2.4 m の間隔で確認され、西辺では西(外)へ、南辺では南(外)へ、東辺では西(内)へ、北辺では南(内)へそれぞれ柱を倒して抜き取っている。なお、南館と北館の布掘り塀の規模や位置関係の詳細な比較については「鴻臚館跡 19」に掲載している。

布掘り塀は、遺構番号を各調査区で付けており、調査順に SA1104 (南西角)・SA1237 (南東角)・SA14526 (南辺中央)・SA15002 (北東角)・SA18601 (北辺中央)・SA25055 (北西角)とした。これらの布掘り塀については、遺構の保存を前提とするため必要最小限の範囲で掘り下げを行い、柱抜き穴の断ち割りや要所における深さの確認等を行っている。

布掘り塀に切られる整地層から 8 世紀前半～中頃の須恵器が出土し、布掘り柱抜き穴から白磁 (8 世紀半ば以降) が出土するなど、南館より遅れて建替えられた可能性がある。(吉武)

布掘り塀 SA1104 Fig.71・72、PL.9

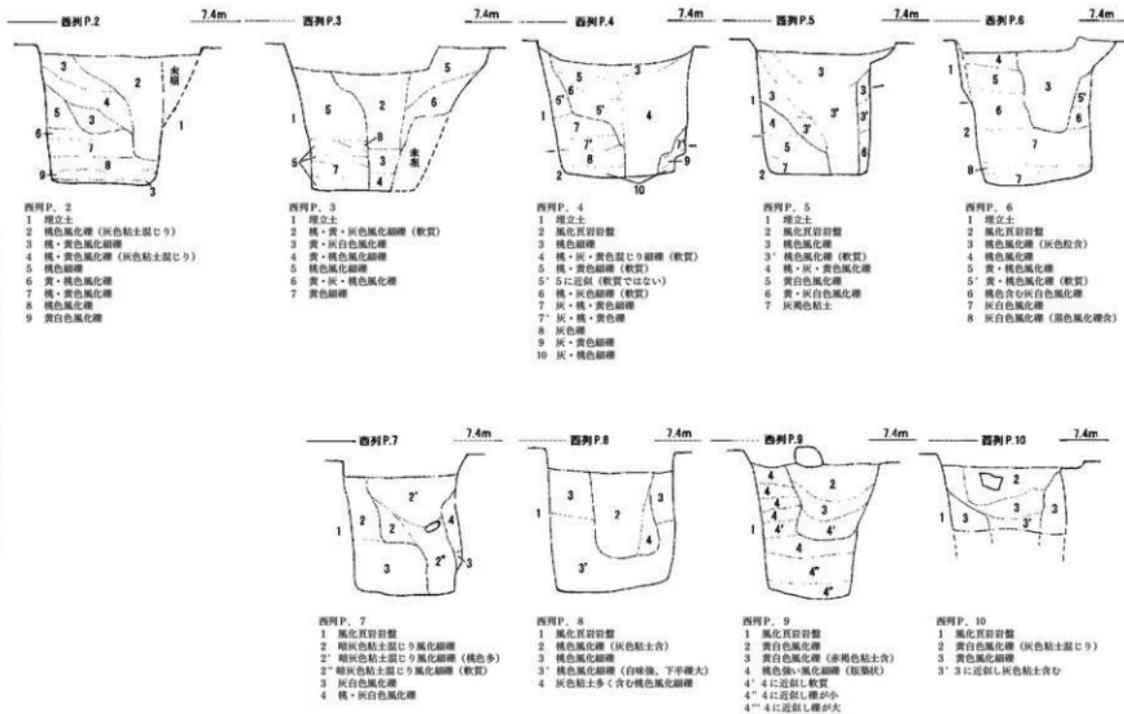
第 18 次調査区の東半部に検出した北館第Ⅱ期布掘り塀の南西角に相当する遺構で、L 字形の配置をとる。西側の南北列を「西列」、南側の東西列を「南列」と呼ぶ。西列と南列の布掘りは直角の位置にあるが連続せず、南列の西端に 1 間分の空間を空けている。南館・北館の布掘り塀において、このように掘方が切れる部分は他所には認められず、便所遺構が隣接することを勘案すると通用的な施設があったことを示すものと考えられる。西列は長さ約 24 m、南列は長さ 14 m を確認した。掘方の上部は平和台野球場建設による削平を受けているものの、深さ 1.2 m 前後、幅 1 m が残る。柱は全て抜き取られており、柱痕跡は残っていない。西列で 11 個、南列で 5 個の柱抜き取り痕が確認でき、抜き取り方向は、西列が西側へ、南列が南へ傾いており、全て塀の外側へ倒して抜いている。柱間は平均値で 2.3 m である。遺構検出面の標高は 7.2 m、掘方底面は 6.2 m である。西列北側は風化頁岩岩盤に掘り込まれているが、西列南側と南列は盛土整地 SM1132 の上面から掘り込まれている。

SA1104 西列の主軸は、南館第Ⅱ期布掘り塀の西列の延長線上に重なり、方位も同一で座標北から $1^{\circ} 30'$ 東に偏し、柱間も同一である。布掘り塀掘方の底面は平坦で、底面に更に柱穴を掘るような造作は認められない。



Fig.70 北館第Ⅱ期遺構配置圖 (1/500)

Fig. 72 布羅夕埤 SA1104 土層断面圖 (1/40)



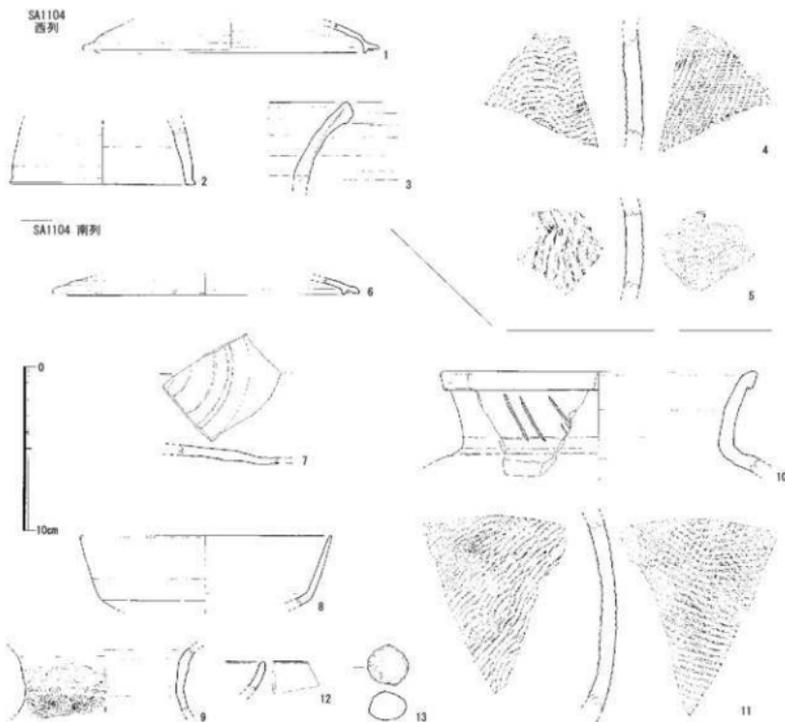


Fig.73 SA1104 出土遺物実測図 (1/3)

SA1104 出土遺物 Fig.73

布掘りの掘方からは土師器、須恵器、瓦が少量出土した。柱抜き痕からは須恵器、朝鮮半島産陶器、中国産白磁、瓦がコンテナ2箱出土した。3・10～12は柱抜き痕、他は掘方の出土遺物である。

1～5は西列、6～11は南列から出土した。1は印花文が認められないが、胎土があずき色を呈し新羅陶器の蓋であろう。2～5は須恵器である。2は蓋か。3は壺の口縁部小片。4は甕の胴部片で平行叩きを施す。5も甕の胴部片で擬格子叩きを施す。6は須恵器坏蓋でかえりが付く。焼け歪みがある。7も須恵器蓋。8は新羅陶器の坏身破片で、器表面は灰色だが破面はあずき色に発色する。9は新羅陶器壺の頸部破片で、外面に印花文を施す。明灰色を呈し、やや軟質である。10は須恵器甕の口縁部片で、頸部にヘラによる斜線を刻む。器表面は赤褐色を呈すが、破面は灰色である。11は須恵器甕の胴部片で、外面に擬格子叩きが残る。12は中国産の定窯系白磁碗の口縁部で2cm四方の細片である。博多分類の白磁Ⅰ類で、胎は厚みを持ち、口縁端部は丸くおさめる。胎土は白色で精良、全体に乳白色の釉を均質にかける。13は球状の砂岩で鉄分が染みる。自然のものかもしれない。

掘方出土遺物は7世紀後半から8世紀初頭に位置付けられ、柱抜き痕出土遺物では白磁碗12が最も新しく8世紀半ば以降に位置付けられる。(池崎・吉武)

布掘り堀 SA1237 Fig.74、PL.9

第19次調査で確認した。北館第Ⅱ期布掘り堀の南東角に相当し、南北方向の列(東列)と東西方向の列(南列)がL字形の配置をなす。南東角から南列は北館第Ⅲ期礎石建物と重複しており、保存のため掘り下げていない。東列北側は風化頁岩岩盤に、東列南側と南列は埋め立て整地土SM1209に掘り込む。平面プランの確認と若干の掘り下げ、1か所で土層の断ち割りを行った。掘方上面の幅は1.0m強で、南列で断ち割った深さは1.3m強。柱抜き痕は東列で7本、南列では土層確認トレンチで2本を確認した。柱の抜き取り方向は、東列が西へ、南列では南へ倒して抜き取る。柱間は平均値で2.4m。

SA1237 出土遺物 Fig.75

布掘り堀掘り方からは須恵器、柱抜き痕からは須恵器、朝鮮半島産陶器、瓦がいずれも少量出土した。Fig.75の2・6は掘り方、他は柱抜き痕出土。1～6は須恵器である。1は蓋で図示したか壺類の口縁部であろう。凸帯が巡る。柱抜き痕EP4出土。2は坏身で蓋受けのかえりがある。3も坏身で柱抜き痕P10出土。4は高台付坏で高台は外方へ張り出す。柱抜き痕P6出土。5は壺で磨滅のため叩き不鮮明である。6も壺で胴部外面に縦のヘラ記号がある。7は新羅陶器壺の底部片で、使用により外底が磨滅する。他に、縄目叩きと平行叩き2B類の瓦片が出土している。(池崎・吉武)

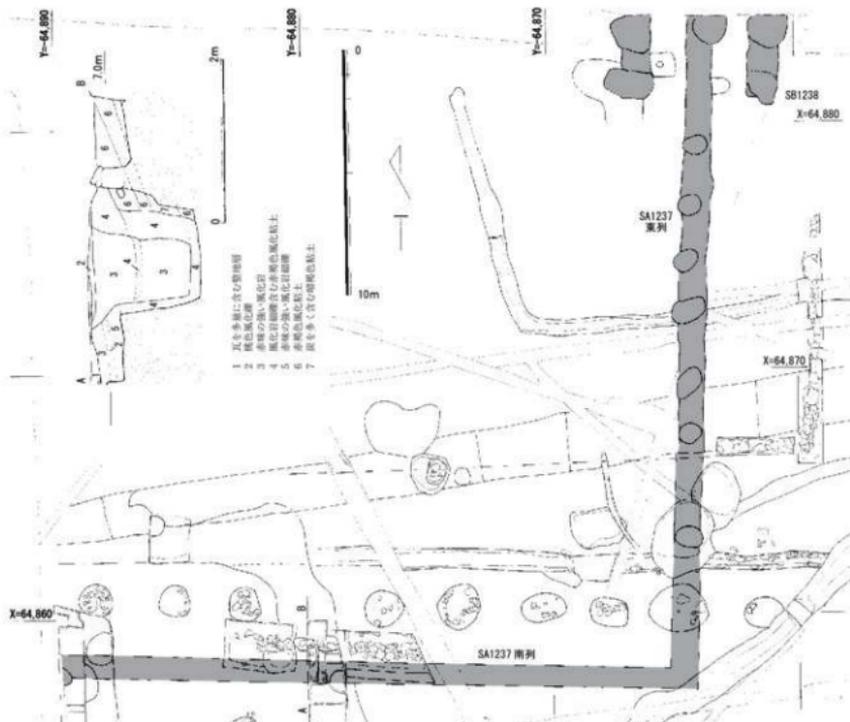


Fig.74 布掘り堀 SA1237 実測図 (平面図は 1/200、土層断面図は 1/60)

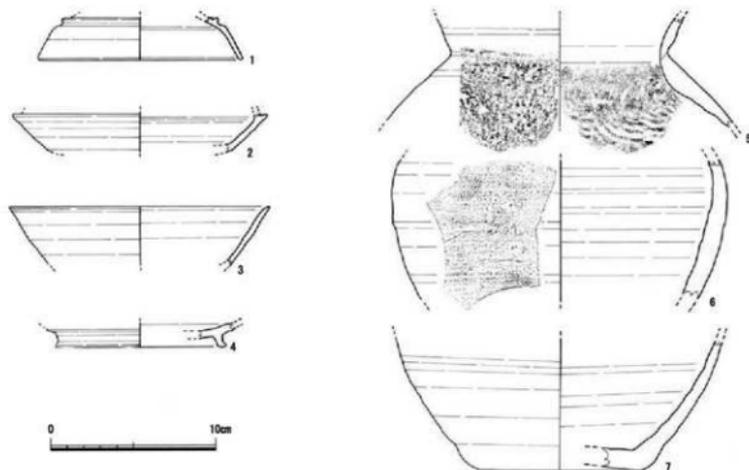


Fig.75 SA1237 出土遺物実測図 (1/3)

SA14526 Fig.76・77

布掘りを持つ掘立柱列である。第20次調査区を東西に横断し、西側は第18次調査区のSA1104、東側は第19次調査のSA1237につながる。主軸をN-91°30'-Eにとる。

布掘りの掘方は、検出面上で幅1m前後、深さ1.1～1.5mをはかる。芯々間2.4m前後の間隔で、柱抜き跡が並ぶが、Fig. 77に図示したA・B・Cの三ヶ所では抜き跡を確認できなかった。また、西端の柱抜き跡であるSP14516の断ち割り調査では、抜き跡の中心からずれて丸く柱痕跡が検出されたため、断面実測は図中のa-bラインでずらして断面を切りなおした。そのため、柱痕跡の立ち上がりの高さは確認できていない。SP14518では抜き跡と思われた土層は浅く、掘方内の9層以下から柱痕跡が見つかった。土層観察に間違いがなければ、掘方内をきれいに9層まで掘り下げて柱を引き抜くか切断するかし、掘方を埋めなおしたことになる。SP14520・14521・14522では、柱を抜くと言うよりも、掘り込んだところで柱を切断したと思われる状況が見られた。

また、SP14518を除いて、柱痕跡が掘方底面に達していない状況が見られた。掘方の底面の標高も、SP14516で6.05m、SP14518で5.65m、SP14520で5.93m、SP14521で5.8m、SP14522で5.88mとおおむね5.9m前後ではあるがばらつきが大きい。柱の根入れの深さは、布掘りの深さとは無関係に、桁の高さと柱材の長さに応じて決められたものと考えられる。

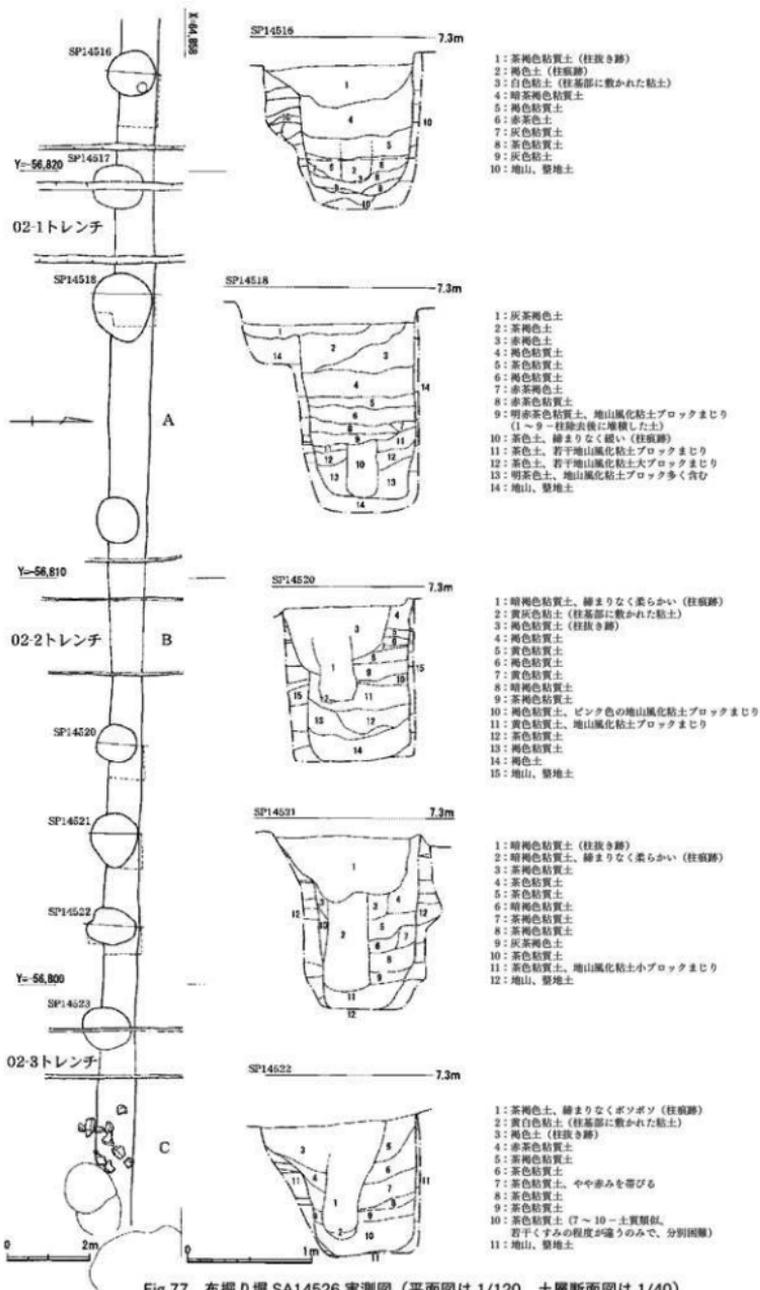
掘方、柱抜き跡を含めて遺物の出土は少なく、土師器・須恵器・瓦の小片が出土したにとどまる。

Fig.76は、須恵器高台坏である。体部と底部の境からやや内側にいった部位に、低い高台を貼り付ける。

第21次調査において、中央谷を横断するトレンチを調査した際、SA1237の掘方やSA1237以前の盛土層から比較的多くの須恵器片を得ている。布掘り堀の年代的な位置付けについては、その成果を踏まえ、「5、小結」で検討する。(大庭)



Fig.76 SA14526 出土遺物実測図 (1/3)



布掘り堀 SA15002

Fig.78、PL.6

鴻臚館跡の国史跡指定にあたり、北館北側の遺構の残存状況と広がりを確認するため第V期調査区の一部を先行して第21次調査の際に調査し、第II期布掘り堀の北東角SA15002を確認した。このSA15002についてはその後、第25・26次調査で再調査を行ったが、混乱を避けるため遺構番号については当初のものをそのまま継続して使用している。

SA15002は北館第II期布掘り堀の東辺北半～北東角に相当する遺構である。南端は後述の東門SB1238に取り付き、さらに南の布掘り堀SA1237へと連続する。北端は直角に西へ折れていき、後述の布掘り堀SA18601へと連続するものと考えられる。この遺構の西側に平行して近世の深い区画溝が重複して掘られており、遺構の西半分は大きく削平されて残りが悪い。北半の一部には古代のものとみられる土坑が重複して切り込む。また、北端では第I期掘立柱列SA19400の柱穴と重なっており、これを切っている。

SA15002の長さは東門棟桁筋の北側柱穴となる掘り方部分までを含めて南北27.3mを測る。布掘り掘り方の幅は残りの良いところで1.0m強であり、北館の他の布掘り堀と同じである。攪乱を除去

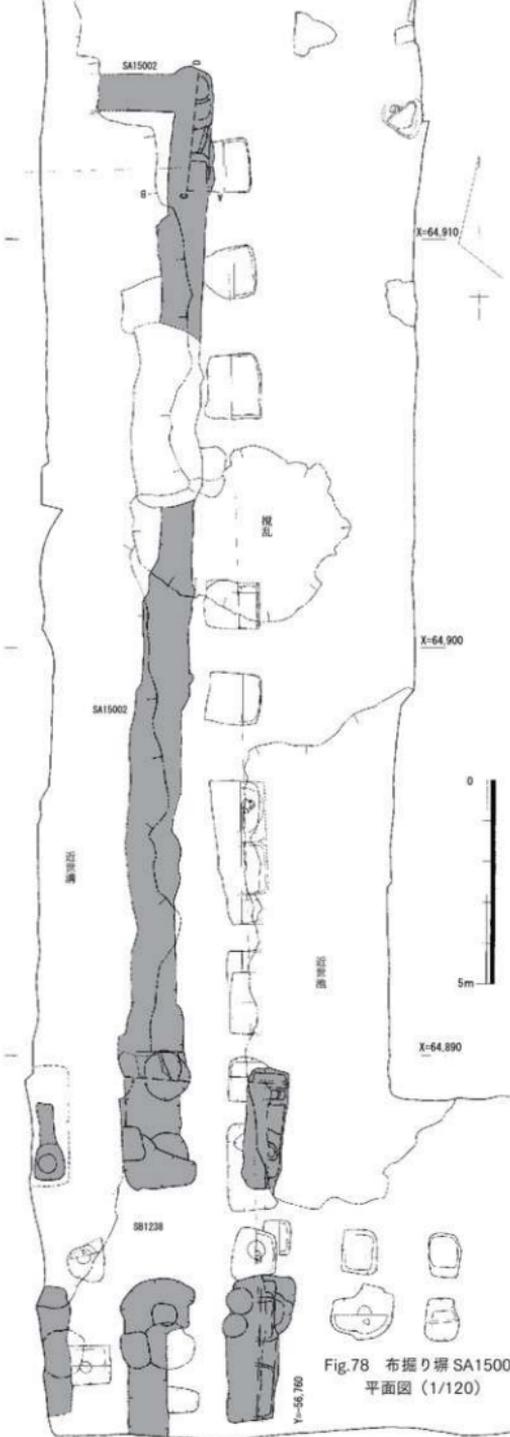
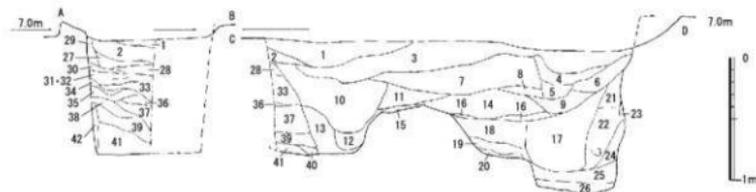


Fig.78 布掘り堀SA15002
平面図 (1/120)



基本土質

- A: 淡黄褐色粘質土 (A~Cは風化頁岩層割土)
 B: 灰白色粘質土
 C: 明黄色粘質土
 D: 黒褐色粘質土

各層

- 1 A主体、B少量含む
- 2 Cの砂状、Bブロック含む
- 3 AとBの混土にCブロック層かを含む
- 4 3に近似し、Cがやや多い
- 5 4に近似し、Cが更に多い
- 6 3に砂赤粘土ブロック含む
- 7 B主体、AとCを少量含む
- 8 Cブロック主体、Bブロック、A少量、D大ブロック含む
- 9 A主体、Bブロック多く含む
- 10 A主体、Bブロック、C少量含む
- 11 A主体、B大ブロック含む
- 12 A主体、Bブロック多量、Cブロック少量含む
- 13 AとBのブロック平ば、C大ブロック含む
- 14 A主体、Bブロック多量、C・Dブロック少量含む
- 15 C砂状
- 16 Cブロック主体、A・D含む
- 17 A主体、B・C・Dブロック少量含む
- 18 A主体、B・C・Dブロック少量含む
- 19 A主体、B大・C・Dブロック少量含む
- 20 Bブロック+Dブロック
- 21 A主体、Bブロック含む
- 22 A主体、Bブロック含む (21に近似)
- 23 Dブロック主体、Cブロック少量含む
- 24 A・B・D混在 (断面で読み取れない)
- 25 C砂状、B粒少量含む
- 26 汚れたC、B粒少量含む
- 27 Bブロック主体、Aブロック含む
- 28 Aブロック主体、Bブロック少量含む
- 29 A主体、B小ブロック+粒、Dブロック層かを含む
- 30 ほぼA、B粒層かを含む
- 31 A+Bブロック、Cブロック少量含む
- 32 A主体、B少量含む
- 33 A主体、Bブロック少量含む
- 34 A+Bブロック、Cブロック少量含む
- 35 A主体、Bブロック含む、Cブロック少量含む
- 36 A主体、Bブロック少量含む
- 37 A主体、Bブロックやや多い
- 38 A主体、Bブロック含む、Cブロック少量含む
- 39 A・Bブロック主体、Cブロック多く含む
- 40 Bブロック主体+Cブロック
- 41 A+Cブロック
- 42 (空層)

Fig.79 SA15002 土層断面図 (1/40)

したのち数度にわたって掘り方内の平面確認を繰り返したが、東門柱穴を除いて明確な柱抜き取り痕や柱痕跡を検出することはできなかった。北東角では断ち割り調査を行った、遺構の深さと土層の確認を行った。掘り方は最も浅いところで深さ70cmで、底面に柱を据えるための隅丸方形プランの柱穴を掘っている。柱穴の深さは遺構検出面から1.5mを測る。柱穴は二つを確認し、柱間は2.3m前後である。縦割り土層断面に柱抜き取り痕を確認したが、抜き取り痕は柱穴底面には達せず、やや浮いた状態である。上層は再掘削(抜き取り時のものか)による埋土に覆われており、このために平面での柱抜き取り痕の確認を困難にしている。他の布掘り場遺構でみられるような、柱を塀の内または外へ倒しての抜き取りではなく、塀と平行する方向に倒して抜き取った可能性も考慮すべきかもしれない。地山は風化頁岩由来の粘質土層で、掘り方埋土にはその掘削土が用いられているが、顕著に固められたような状況ではなかった。

SA15002 出土遺物 Fig.80

掘り方から須恵器、瓦が少量出土した。

1は須恵器蓋である。口縁端部が下方へ折れ、外面に浅い窪みが巡る。横ナデ調整で、天井部は回転へら削り、内面には一部ナデ調整を加える。器形に歪みがある。胎土は精良で石英等の砂粒を僅かに含む。焼成は良好堅緻で、灰青色を呈する。東門に近い部分の掘り方最上層から出土した。(吉武)



Fig.80 SA15002 出土遺物実測図 (1/3)

布掘り堀 SA18601 Fig.81

第24次調査(トレンチ2下層)で確認した。調査概要の項で述べたとおり、トレンチ2では近世遺構の保存のため、下層の古代遺構の調査範囲が限定されたものとなり、サブトレンチを3箇所に設けて調査を行った。SA18601はサブトレンチ1で検出し、この西側延長部分をサブトレンチ2でも確認した。サブトレンチ1から2まで、長さ6.1mを測る。ほぼ東西方向に伸びており、主軸方位は僅かに東偏する。北館第Ⅱ期布掘り堀の北辺に相当し、当初の想定通りの位置に確認された。

サブトレンチ1では、布掘り堀の掘り方 SA18601 と柱抜き取り痕 SP18602、及び布掘りに切られる柱穴 SP18603 を検出した。SA18601 は他の布掘りに比べて遺構の残りが悪く、中世以降にかなり削平を受けているとみられる。掘り方の幅は80cmを測る。断ち割り調査を行ったが、最も残りの良い部分で深さ80cm強である。北館南辺や南館では深さが1.5mを越えるものがあることから、1/2ほどが削られたものと推定される。布掘り掘り方の埋土は風化頁岩を掘削したほぐし土で、異なる土質の土が層状に堆積するが、顕著に充填したような状況ではない。柱抜き取り痕 SP18602 は、掘り方の南側へ傾斜して確認されることから、堀の内側に柱を倒して抜き取ったものと考えられる。抜き取り痕には多量の瓦が投げ込まれていた。また、布掘り掘り方からも少量の瓦が出土した。

サブトレンチ2では、布掘り掘り方を確認した。平面確認のみに留め、掘り下げは行っていない。掘り方の幅は85cmを測る。柱抜き取り痕の想定位置には該当する遺構は認められない。

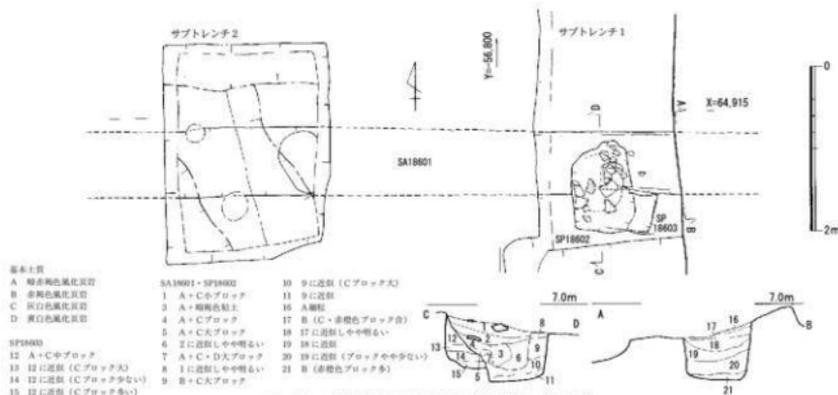
SA18601・SP18602 出土遺物 Fig.82

布掘り掘り方 SA18601 は瓦片が少量出土し、叩き目が確認できる瓦は全て縄目である。1 は平瓦片で、凸面に縄目叩きを施す。凹面にはコビキ痕と布目が残る。

柱抜き取り痕 SA18602 は瓦片がコンテナ1箱出土し、叩き目が確認できるものは全て縄目である。2 は軒平瓦の小片で、鴻臚館式(635型式)であろう。3 は平瓦片で、凸面に縄目叩きを施す。凹面にはコビキ痕と布目が残る。

柱穴 SP18603 Fig.81

第Ⅱ期布掘り堀に伴う柱穴ではないが、図の関係からこの項で説明しておく。布掘り掘り方に切られており、これに先行する遺構である。調査範囲が狭く、組みになる柱穴は不明。掘り方は方形プラ



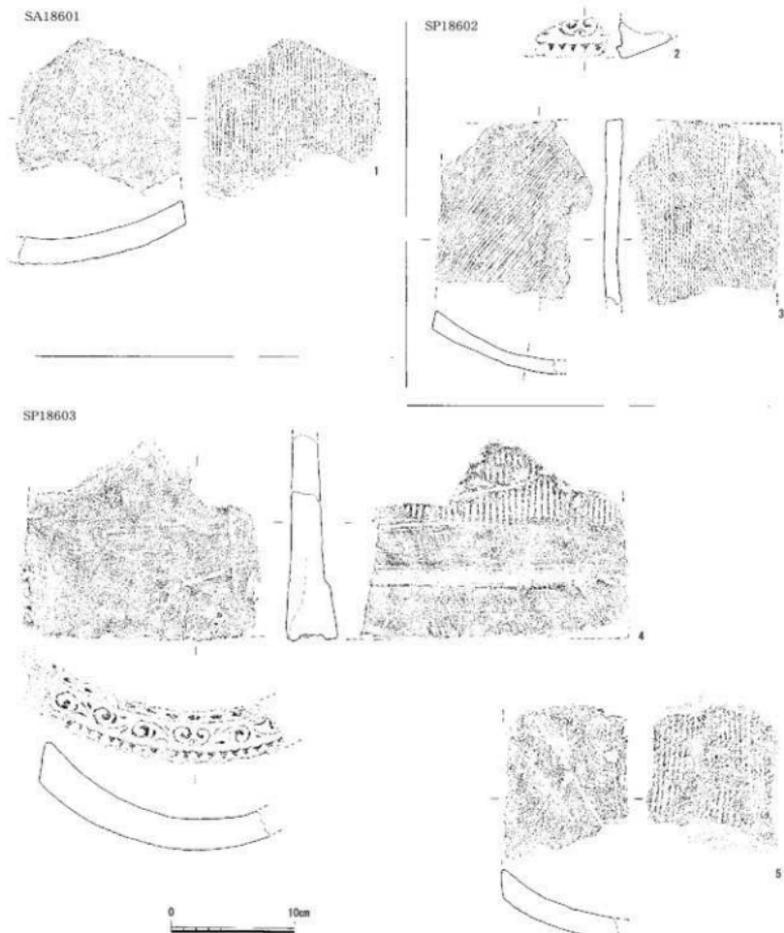


Fig.82 SA18601・SP18602・SP18603 出土遺物実測図 (1/4)

ンで、壁は直で深さ 70cm。覆土は風化頁岩掘削土が水平堆積するが、柱痕跡は確認できなかった。

SP18603 出土遺物 Fig.82

瓦がコンテナ 2 箱出土した。4 は鴻臚館式 (635 型式) の軒平瓦で、平瓦凸面に平行叩き (2B 類) の後、頸部周辺を工具ナデ調整する。凹面は布目が残り、瓦当周辺にヘラ削りを加える。側面ヘラ削り。5 は平瓦片で、凸面に縄目叩き、凹面に布目痕がある。側面はヘラ削り調整か。(吉武)

布振り塀 SA25055 Fig.83, PL.9

第31次調査(トレンチ1)で確認した。トレンチの南側は近現代の遺構などにより、近世の整地層は削平されており、それらを掘り下げると、基盤の風化頁岩に掘り込まれた遺構を検出した。この部分は北館第Ⅱ期布振り塀の北西隅に相当し、当初の想定通りの位置でコーナーが確認できた。

布振り塀は幅約1.1mで、やや東偏する。南北長約7m、東西長約4mを検出した。布掘りの上面では柱穴4基(SP01～04)を検出した。平面形は楕円形を呈し、長さ0.8～1.1mを測る。柱の芯心の間隔はSP01～02は2.3m、SP02～03は2.4m、SP03～04は2.4mを測る。このうち、東端のSP01とコーナー部のSP02の立ち割りをを行った。

SP01については基盤の風化頁岩と整地層の境界にあることから、整地層の状況の確認を含めて、北側に断ち割りトレンチを延長した。SP01は布掘りの北側に寄りた位置にあり、布掘りの底まで掘り込まれ、基盤層に達している。深さ約1.2mを測る。抜き取りの痕跡も確認できた。掘り方の北側では基盤が北側に約45°の傾斜で落ち込んでいき、その傾斜に沿って整地が行われていることを確認した。遺物がほとんどなく、整地の時期は決めがたいが、この布振り塀に先行するものであり、Ⅱ期の造営に伴って行われた可能性が高い。布振り塀の西側約10mの位置でも、西側に落ち込んでいく基盤面とそれに沿った整地層を確認した。つまり、Ⅱ期以前の当該地点の地形は北側と西側に傾斜していくコーナー状を呈していたことが分かる。Ⅱ期の造営に際して、敷地を広げる造成がおこなわれたものと考えられる。SP02は布掘りのコーナー外側に位置し、布掘りの底まで掘りこまれ、基盤層に達している。深さ約0.9mを測る。抜き取りの痕跡も確認できた。上面は近現代の遺構により削平を受けている。(菅波)

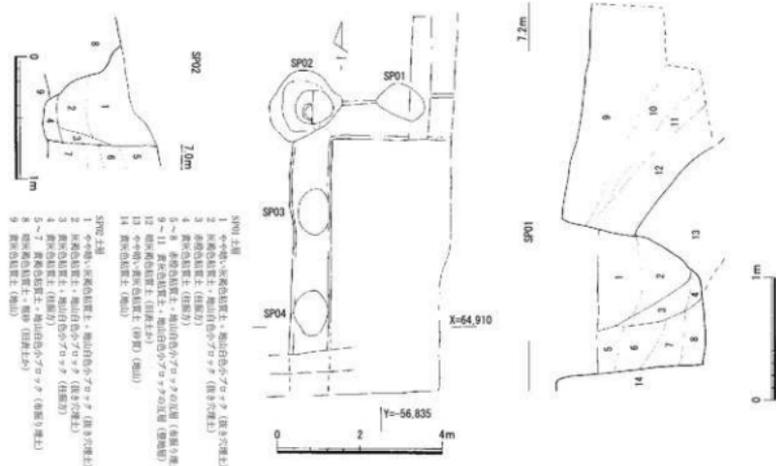


Fig.83 布振り塀 SA25055 実測図 (平面図は 1/120、土層図は 1/40)

東門 SB1238 Fig.84・85、PL.6・10

第19次調査で南半部分を検出し、第29次調査で全体の再調査を行った。第29次調査ではSB23300の遺構番号をふったが、混乱を避けるため本書ではSB1238で統一する。北館布掘り塀東辺の中央に位置する、布掘り塀に接続する掘立柱式の建物である。柱穴は風化頁岩が粘土化した粘質土に掘り込まれており、近世や近代の削平や破壊（図に一点鎖線で示したものを）を受けているが、とりわけ北東部の近世池、及び北西部の近世溝による破壊が深部に及んでおり、北西部では柱穴掘り方 SP23306の底部の一部が残るのみである。

桁行3間、梁行2間の八脚門で、布掘り塀 SA1237 が南に、同 SA15002 が北に取り付く。基壇、階段、雨落ち溝は残存しない。柱抜き取り痕の位置から、梁間2.65 m、中央間3.5 m、脇間2.0 mの柱間が計測される。門の規模としては梁行5.3 m、桁行7.5 mとなる。

近世・近代遺構の除去を行った後、平面プランの確認を行い、一部で断ち割りを行って柱穴底面や土層の確認等を行った。断ち割りは東側柱筋（SP23303・SP23305）、及び北側柱筋（SP23305・SP23302・SP23306）に対して実施した。側柱の柱掘り方は脇間の2本の柱を一組とし、最も残りの良いSP23303で幅1.3 m、長さ3.6 m、深さ1 mの隅丸長方形プランを呈し、掘り方底面には深さ50 cmの柱穴を2基掘り下げている。棟桁筋の柱掘り方は門に取り付く塀の柱掘り方と一体に掘り、幅1.0 m前後、深さ1 mで、その底面に柱穴を個別に浅く掘っている。柱穴には抜き取り痕が残り、柱は全て東側（塀の外側）へ倒して抜き取られている。柱径は柱抜き取り穴に残る痕跡から40 cm前後と推定される。また、土層の観察から、柱穴を掘り直して版築状に突き固めた痕跡があり、建物の建替えが行われたものと考えられる。

建物桁行方向は、座標北から東へ $1^{\circ}30'$ 偏しており、布掘り塀と同一である。

SB1238 出土遺物 Fig.86

掘り方や柱抜き取り痕から土師器、須恵器、瓦が少量出土した。

1は須恵器環身である。蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。外底は回転ヘラ削りを加え、ヘラ記号を入れる。第20次調査では削平消滅した後期古墳1基を確認しており、鴻臚館造営前には古墳群が存在したとみられ、これに伴う遺物であろう。SP23303から出土した。2は須恵器甕の胴部小片で、外面に擬格子叩き、内面に当て具痕が残る。SP23301出土。3は平瓦の小片で、凸面に縄目叩きを施し、凹面は布目痕をナゲ調整する。側面はヘラ調整する。SP23301から出土した。4も平瓦片で、凸面は縄目叩きで、凹面は磨滅する。側面ヘラ調整。SP23302出土。

南館東門との比較 Fig.87

南館第Ⅱ期東門 SB300 の報告は「鴻臚館跡19」に掲載した。SB300は南館布掘り塀の東辺中央に取り付く門遺構である。SB1238と同じく桁行3間、梁行2間の八脚門で、布掘り塀 SA301が南に、同 SA302が北に取り付く。柱間は、梁間2.66 m、中央間3.55 m、脇間2.07 mを測る。側柱掘り方は脇間の2本を一組として掘り、掘り方底面に個別に柱穴を掘り下げる。掘り方は幅1.2 m、長さ3.6～3.8 m、深さ0.8 m以上の隅丸長方形プランをなす。

北館東門 SB1238 をこの南館東門 SB300 と比較すると、3間×2間の八脚門であることや柱掘り方の状況、主軸方位等は全く同一であるが、法量において僅かな差異が認められる。東門全体で見ると、梁行長はほぼ同じであるが、柱穴掘り方の南北全長が約8.6 mで南館の9.53 mに比べて小さく、建物桁行長も20 cmほど小さい門であったとみられる。また、柱穴底面のレベルは南館の6.65～6.9 mに対し、北館は5.8～6.2 mで北館が80 cm前後低い位置にある。（吉武）

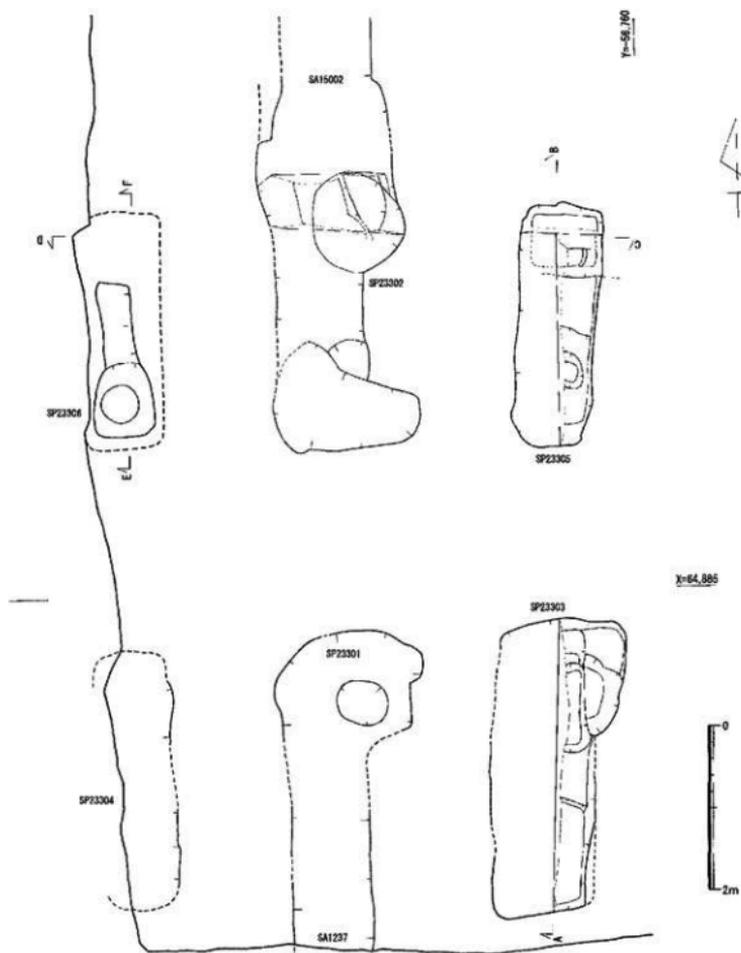


Fig.84 東門 SB1238 平面圖 (1/60)

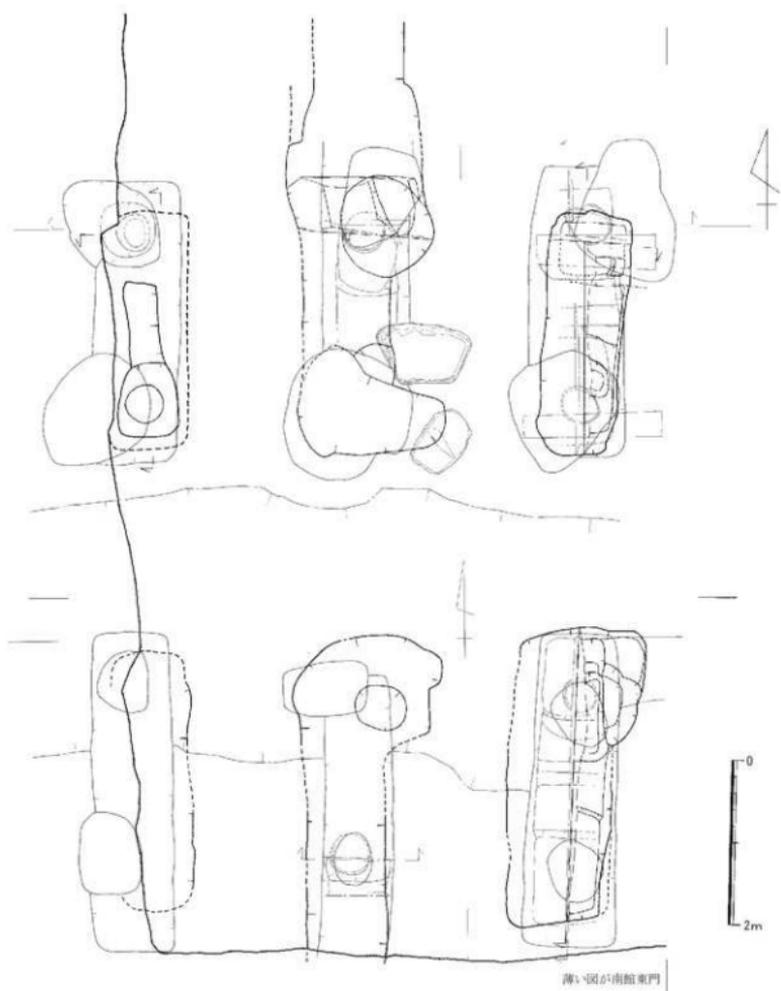


Fig.87 南館と北館の第二期東門の比較図 (1/60)

便所遺構の調査（第21次調査03-4調査区） Fig.88～90, PL.11

第18次調査（0008）で、便所遺構の可能性を想定しながら時間の制約から調査を行わず、保留していた2基の土坑SK1124・SK1125について、第21次調査（0309）において精査を実施した。SK1124とSK1125では、北館第Ⅱ期布掘り塀SA1104の南西角のすぐ西側で、これと3.5mの間隔を置いて南北に並んでいる。

第21次調査では、当該遺構を含み、第Ⅱ期布掘り塀の一部が確認できる位置に調査区を設定し、遺構と布掘り掘立柱列との関係が検証できる形での調査を実施した。調査区の面積は、115㎡である。

遺構検出面は、鴻臚館時代の盛土整地面で、調査区を斜めに横切って、地山の粘質土が広がる。便所遺構は盛土整地の中に掘り込まれており、壁面が崩落する危険が想定されたため、両便所遺構を縦断する軸線を設け、それから東側に幅2mの部分の深さ1m強まで掘り下げ、二段掘りで調査を実施した。掘り下げ部分の東壁面の土層実測図を、Fig.90に示す。

実測図の左下隅に、緩く弧を描いて南に傾斜する風化頁岩の地山面がのぞいているほかは、すべて盛土整地による堆積層である。最下部の斜堆積である58～64層は、地山を掘削したことに由来する風化頁岩の粘土ブロックを全く含まないことから、地山上の自然堆積である。57層以上は、地山粘土ブロックを含み鴻臚館の造成による盛土整地層と考えられる。盛土整地の単位は、大きく53～57層、39～52層、1～38層に分かれる。それぞれの土層群に時期差、段階差が想定できるかは、遺物がほとんど含まれていないために確定できないが、標高から推定して、53～57層が第Ⅰ期の造成、52層以上が第Ⅱ期以前の造成にかかるものと考えられることができる。1～38層と39～52層との境界が、53層とその上層との境界ほど明瞭でないことも、前者が盛土整地の作業単位に分かれ目とみれば首肯できる。

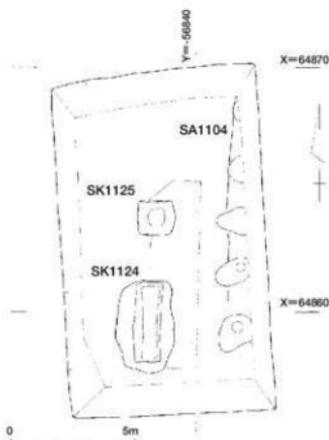


Fig.88 0309追加調査区遺構配置図 (1/200)

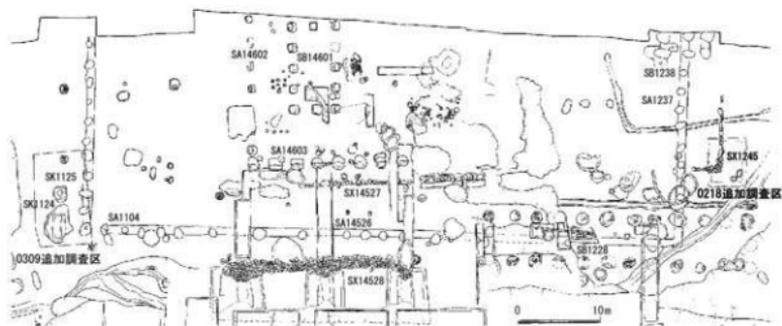
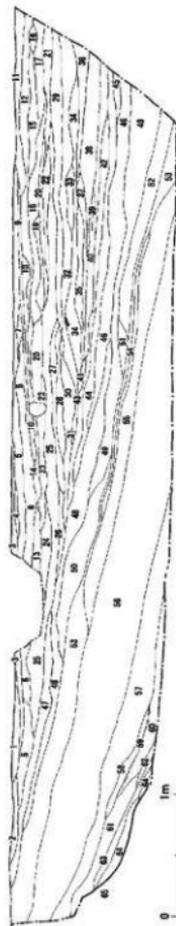


Fig.89 0218・0309追加調査区位置図 (1/600)



- 1: 赤茶色粘質土 2: 赤色粘質土 3: 黄色粘質土 4: 黄白色粘土 5: 茶褐色粘質土、程度やや大きく砂っぽい 6: 赤茶色粘質土 7: 赤茶色粘質土 8: 茶褐色粘質土、地山風化頁岩小ブロック多く含む 9: 黄灰色粘質土 10: 茶色粘土 11: 黄灰色粘質土 12: 赤色土、地山風化頁岩ブロック多く含む 13: 褐色粘質土 14: 赤色土、地山風化頁岩ブロック多く含む 15: 褐色粘質土 16: 地山風化頁岩ブロック 17: 赤茶色粘土 18: 暗灰色粘質土、粘性強い 19: 赤茶色粘土 20: 暗灰色粘質土 21: 暗灰色粘質土、夾雑土多い 22: 赤茶色粘土 23: 赤色粘質土 24: 褐色粘質土、地山風化頁岩ブロック多く含む 25: 赤茶色粘質土 26: 赤茶色粘質土 27: 褐色粘質土 28: 赤茶色粘質土 29: 赤茶色粘質土 30: 褐色粘質土 31: 赤茶色粘質土 32: 赤色粘質土、地山風化頁岩ブロックまじり 33: 暗灰色粘土 34: 褐色土 35: 赤褐色粘質土 36: 茶色粘質土 37: 赤茶色粘質土 38: 明茶色粘質土 39: 灰色粘土 40: 赤茶色粘質土 41: 灰赤色粘質土、地山風化頁岩小ブロック多く含む 42: 赤色粘質土、地山風化頁岩ブロックまじり 43: 黄褐色粘質土 44: 褐色粘質土 45: 茶褐色粘質土 46: 茶褐色粘質土、地山風化頁岩小ブロック多く含む 47: 茶色粘質土、地山風化頁岩ブロックまじり 48: 灰褐色粘質土、粘性あり 49: 灰褐色粘質土、地山風化頁岩小ブロックまじり 50: 暗灰色粘質土、粘性あり、程度強い、地山風化頁岩小粘土まじり 51: 淡茶色粘土、粘性あり 52: 淡茶色粘土、粘性あり 53: 明茶色粘質土、地山風化頁岩小粘土まじり 54: 黄灰色粘土 55: 黄灰色土、粘性あり、程度強い、地山風化頁岩小粘土まじり 56: 黄灰色粘質土、粘性あり、程度強い、地山風化頁岩小粘土まじり 57: 黄灰色粘質土、粘性あり、程度強い、地山風化頁岩小粘土まじり 58: 灰褐色粘質土、粘性あり、程度強い、地山風化頁岩小粘土まじり 59: 灰褐色粘質土 60: 黄褐色粘質土、粘性あり、程度強い、地山風化頁岩小粘土まじり 61: 黄褐色粘質土 62: 灰色粘土 63: 明茶色粘質土 64: 灰色粘土、粘まりなくベタベタ 65: 地山、頁岩の風化した塊

Fig.90 0309 追加調査区土層断面図 (1/40)

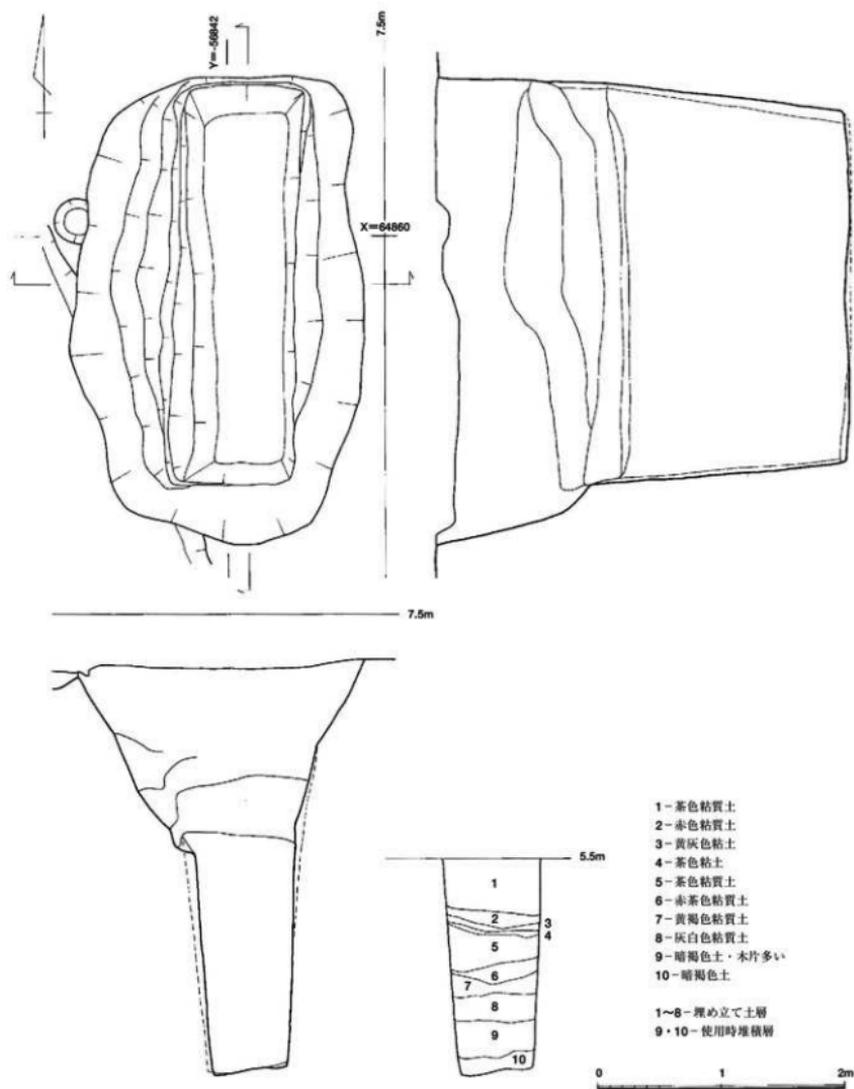


Fig.91 便所遺構 SK1124 突測図 (1/40)

便所遺構 (SK1124) Fig.91～97, PL.11

長辺 380cm、短辺 240cm の隅丸長方形を呈する土坑で、遺構検出面からの深さは 340cm をはかる。

土坑の上半分は、早い段階で崩落し、漏斗状を呈している。本来の形状は、標高 5.5m 以下の 1.8m 分について良好に遺存している。それによると、四方の壁は、まったく直線的な壁面をなしており、下に行き次第に若干狭くなりつつも、ほぼ直立した箱形を呈する。床面はほぼ平坦で、長辺 2.8～2.9 m、短辺 0.6m をはかる。復元的に遺構検出面の標高まで四壁を立ち上げると、長辺 330cm、短辺 110 cm の縦長い長方形プランに復元することができる。

土坑の長軸は、南北方向を示し、布掘り塀 SA1104 に正しく平行する。次に報告する便所遺構の SK1125 とは、1.9m の間隔を置いて正確に並んでいる。

標高 5.5m 以下について土層実測図を作成した。1層よりも上位の埋土には、周囲の壁が崩落した土壌と、人為的に埋めた土壌とが混在している。1層から 8層は、人為的に埋めた土壌である。9・10層は土壌の締まりもなく、排泄によって堆積した層であろう。9・10層には、壁面からの崩落土は全く含まれず、壁の崩れが便所遺構廃棄の契機になったものではないことを示している。9・10層からは籾木が出土しているが、9層に集中している。

また、9層の土壌を用い、寄生虫卵分析、花粉分析、種実分析を行った。詳細は、189～198頁を参照願いたい。鞭虫卵と異形吸虫卵を主とするやや高密度の寄生虫卵が検出され、食用であるイネ属型を含むイネ科植物、ミズアオイ属、ネギ属、ソバ属、アブラナ科、セリ亜科、ウコギ科、サンショウ属、マメ科、薬用と考えられるアカザ科-ヒユ科の花粉およびヤマモモ、ブドウ属、シマサルナシ、ナスの種実が検出された。このことから9層は糞便を多く含む堆積とみなされている。食生活としては、イネおよび雑穀類とソバの穀類、ミズアオイ属・ネギ属・アブラナ科・セリ類・ナス・マメ科の野菜類、ウドやタラなどのウコギ科やサンショウの木の花芽や葉類、ヤマモモ・ブドウ属・シマサルナシの果樹類、沿岸の青魚・アユ・コイ科の魚類の食用が想定でき、アカザ科-ヒユ科は寄生虫症の薬用で用いられた可能性があるという結果が出ている。

なお、SK1124 が埋没した後のくぼみは、廃棄土坑として利用されているが、これについては別の機会に報告する。

出土遺物を出土層位順に Fig.92～97 に示す。1～9 は、埋土上部=1層の上層から出土した。1～4 は、須惠器である。1～3 は環蓋である。1 は完形品で、内面には「十」の墨書が見られる。4 は、小型の甕である。5～9 は、瓦である。5 は、軒平瓦の瓦当片である。焼成不良で、また小片のため、形式は判然としない。しかし、側面に縦に珠文帯が入ることから、老司式や鴻臚館式でないことは明らかである。6 は、縄目叩きの平瓦である。凹面には、粘土ブロックから切り取った際の糸によるコビキ痕跡が認められる。7～9 は、丸瓦である。凹面は布目、凸面は縄目叩きである。9 は接合してほぼ完形となるもので、凸面には粘土帯の単位が認められる。側面は、内側からヘラで切り込みを入れて、折り取る。

10 は、6層出土の土師器の環蓋である。調整技法等は須惠器と共通する。

11 は、6～8層出土である。須惠器の高台環で、やや丸みを帯びた体部と底部の境界付近に低平な高台を貼り付ける。

12～16 は埋土中位(5～8層)出土の瓦である。12～15 は平瓦、16 は丸瓦で、いずれも凹面は布目、凸面は縄目叩きで、12・13・15・16の凹面には糸によるコビキ痕跡が見られる。

17・18・20・23・24 は、9層出土遺物である。17・18 は、須惠器の環蓋で、低いボタン状の摘みを貼り付ける。20 は、須惠器の高台環である。直線的に立ち上がる体部を持ち、体部と底部の境界

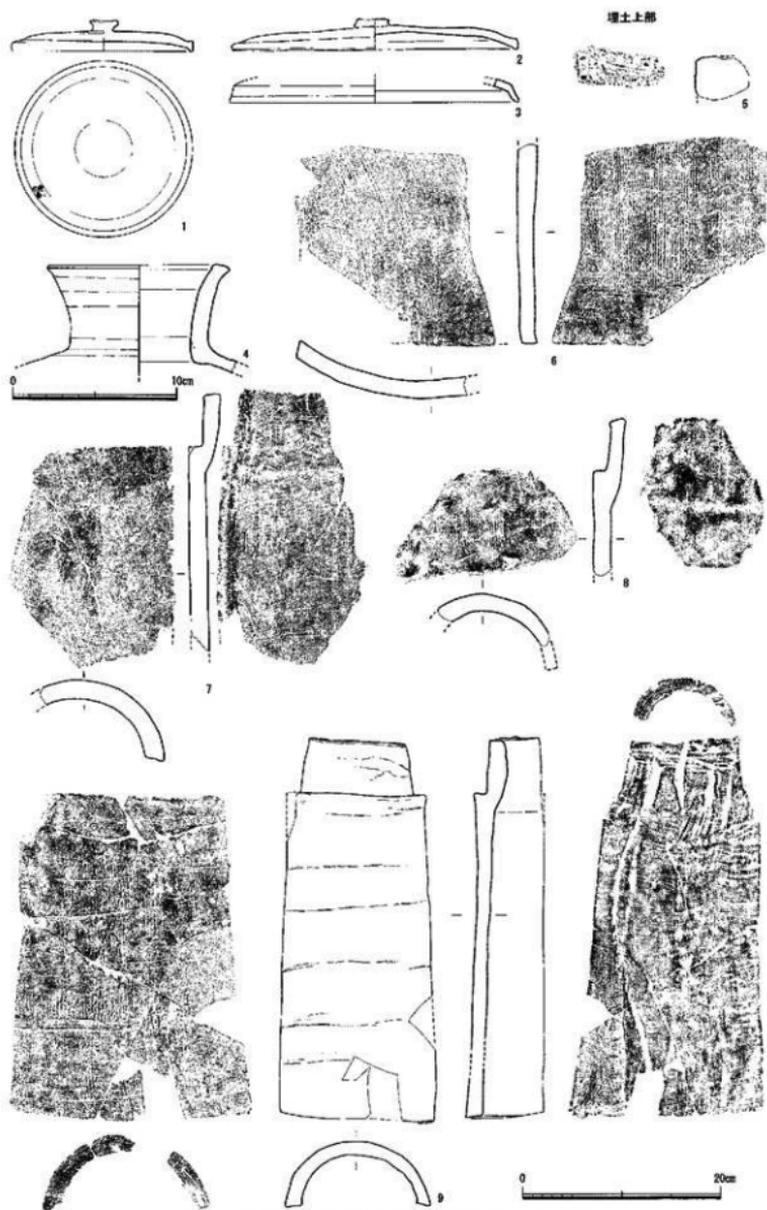


Fig.92 SK1124 出土遺物実測図1 (1/3、5~9は1/5)

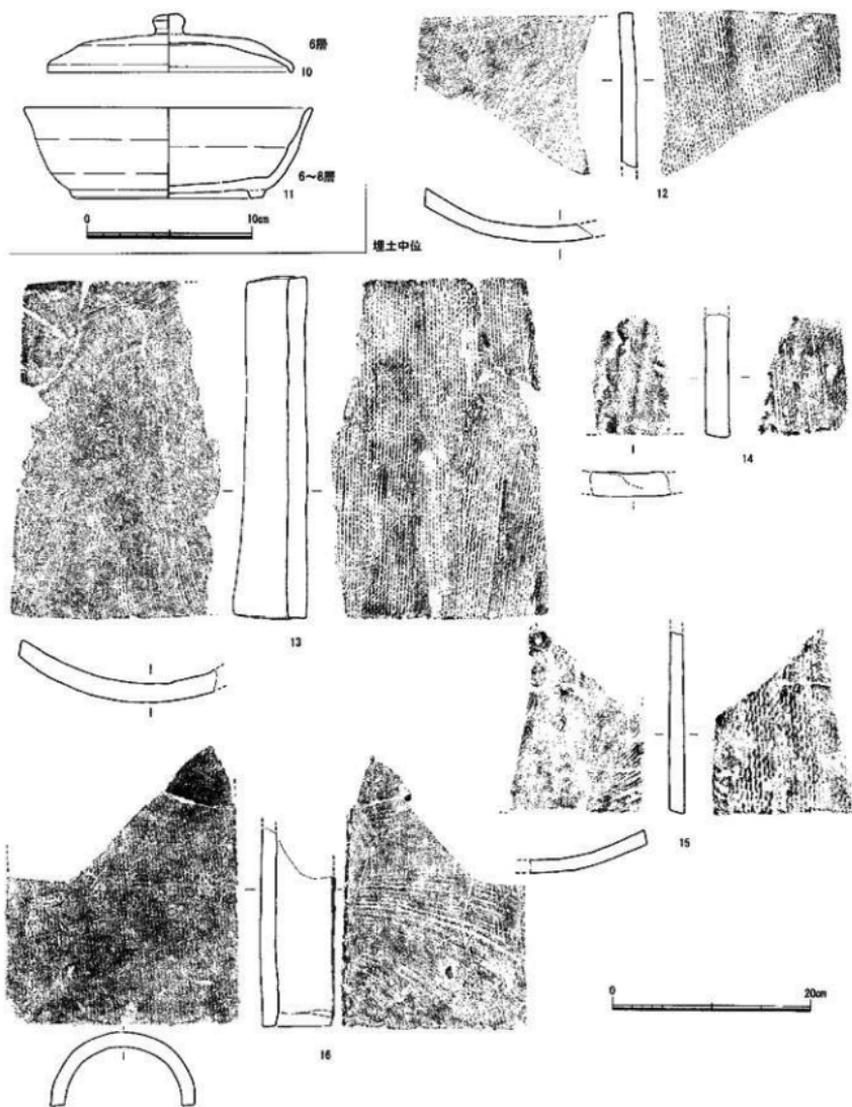


Fig.93 SK1124 出土遺物実測図 2 (1/3、12 ~ 16 は 1/5)

付近に低平な高台を貼り付ける。**23**は土師器の高坏である。皿状の坏部の内外面は密にへら磨きされる。脚部は横撫で調整である。脚部と皿部は直接接合できない。**24**は、鴻臚館式軒丸瓦である。瓦当の下半分を欠く以外は完存する。筒部の凸面は縦方向に撫で調整し、叩き目は撫で消されている。筒部凹面は布目で、瓦当に近い部分は撫で調整、瓦当背面は粗く指撫でする。側面はへら削り、玉縁部端面は撫で調整で若干の丸みを持っている。

19・21・22・25は、10層出土遺物である。**19**は須惠器の坏蓋であるが、天井部の中央付近を欠くため、掴みの形状は不明。**21・22**は、土師器である。**21**は、高台付き皿である。体部は内湾して立ち上がった後小さく外反し、口縁端部は小さく内側に折り返す。内面には、横撫でして平滑に整えたのち、意匠的な暗文を施す。体部外面の上半は、横撫で後に横方向のへら磨き、下半は回転へら削りで形を整えたのち、へら磨きする。外底部は、回転へら削りで平らに整えているが、中央付近で指頭痕が残る。都城系土器であるが、胎土・焼成は他の土師器と共通しており、在地で模倣されたものであると考えられる。**22**は、高台杯である。内外面は、横撫で調整をしたのち、横方向に間を開けたへら磨きを施す。**25**は、平瓦である。凹面は、布目の上に板撫でを加える。凸面は平行叩きで、2B型式に分類される。

26～28は、8～9層から出土した。**26・27**は平瓦で、凸面は縄目叩き、凹面は布目である。**26**の凹面には、全面に糸によるコビキ痕が見られる。側面は、へらで削られている。また、狭端面には、へら削りと葉の庄痕が見られる。**28**は、丸瓦である。凹面は布目、凸面は、縄目叩きを撫で消す。側面は、凹面側から切り込みを入れて、折り取る。

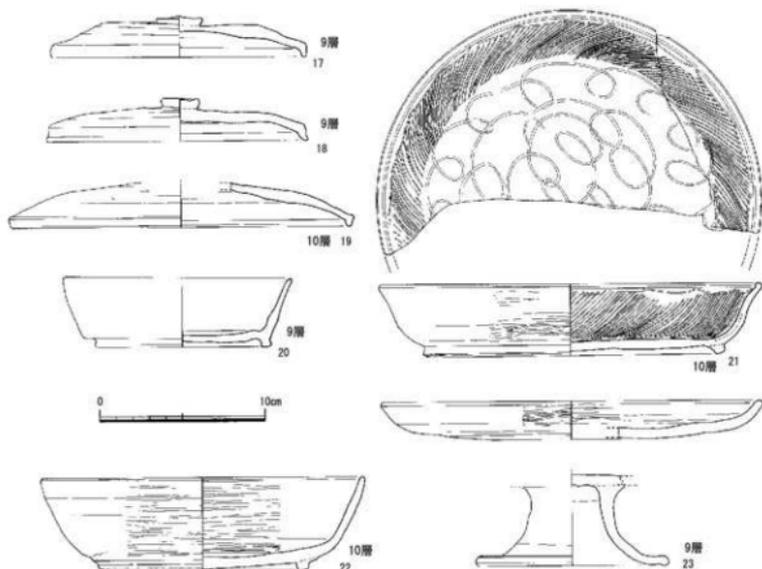


Fig.94 SK1124 出土遺物実測図3 (1/3)

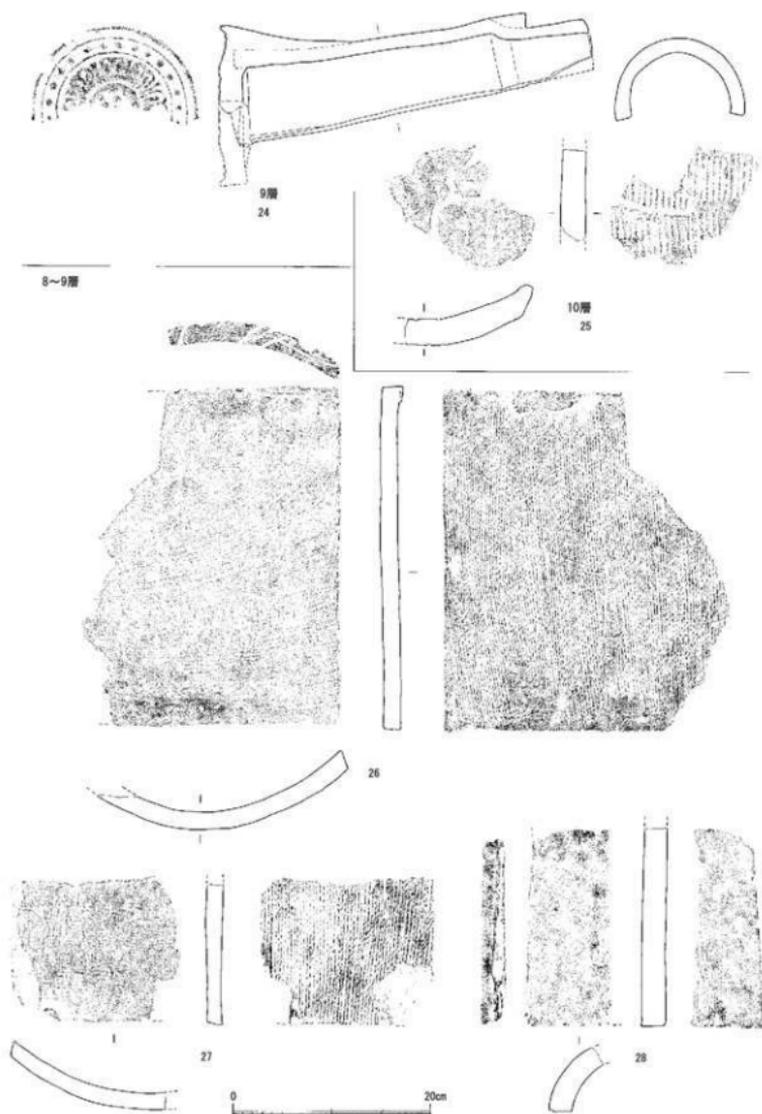


Fig.95 SK1124 出土遺物実測図 4 (1/5)

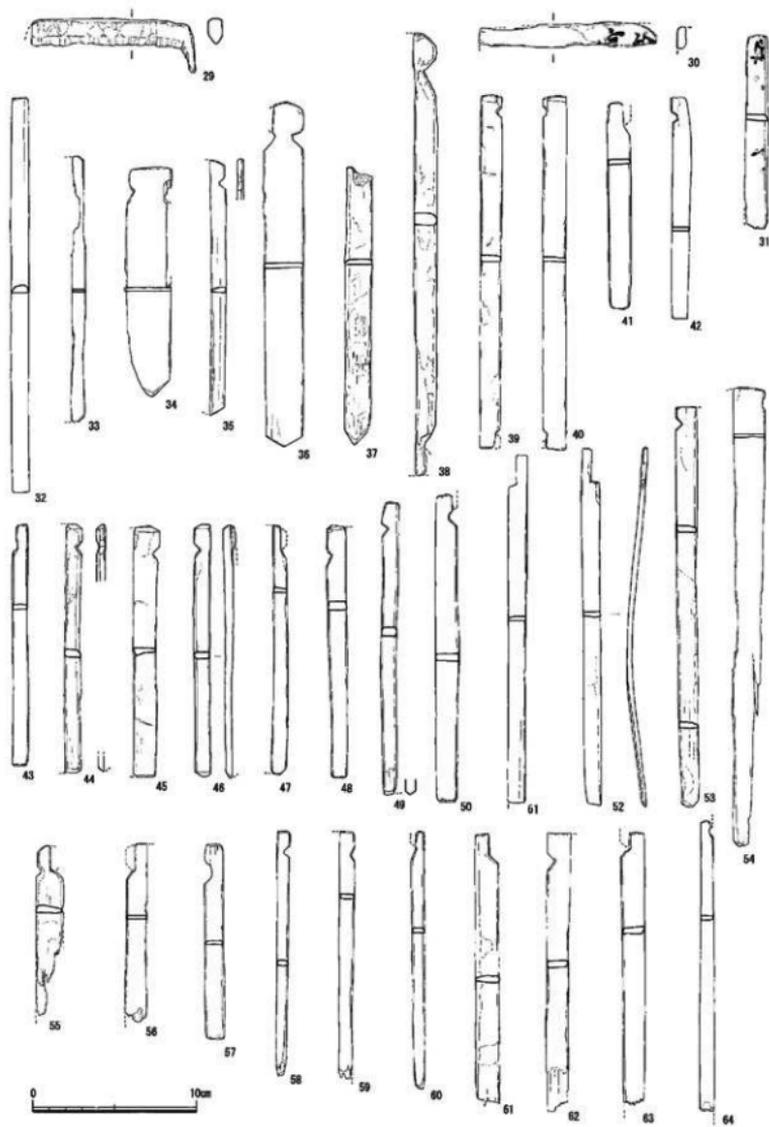


Fig.96 SK1124 出土遺物実測図 5 (1/3)

Fig.96・97 に、木製品を示す。29・65～67・69～71・73・75・78・80 は9層、他は10層から出土した。29 は、櫛である。歯はすべて欠損している。遺存状態は悪いが、黒漆を塗ったものと思われる。歯の基部からみて、解き櫛と考えられる。

30～67 は、籌木である。30 は、木簡である。奈文研の木簡分類では081 型式。板状の板目材の断片で、少なくとも二行の文字が書かれている。遺存した字画と、第6次調査SK57 出土木簡から類

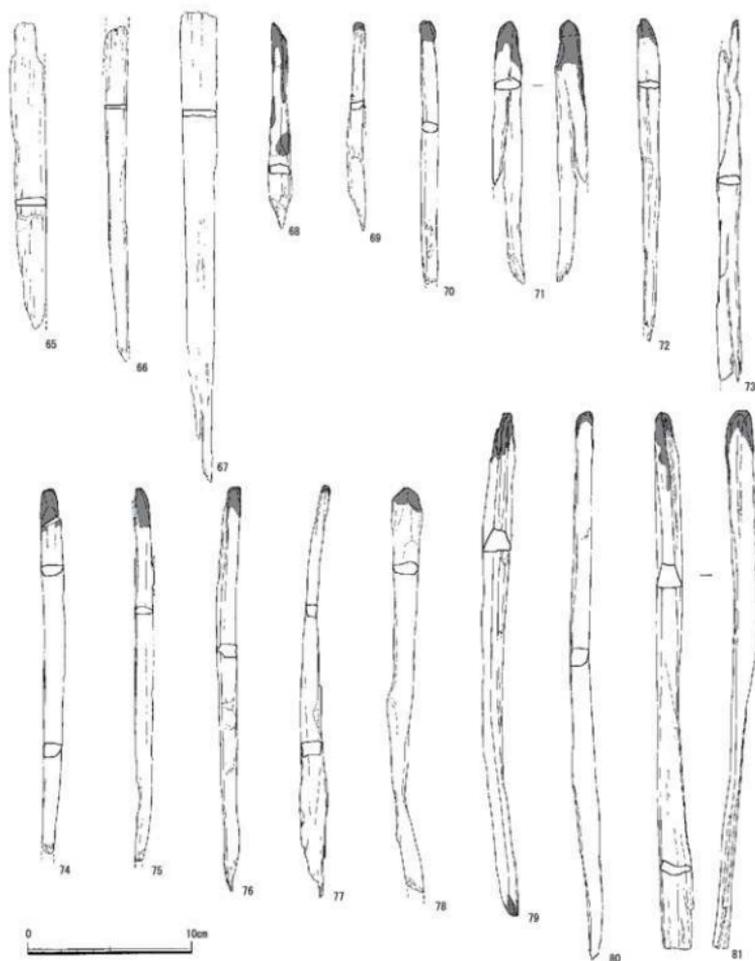
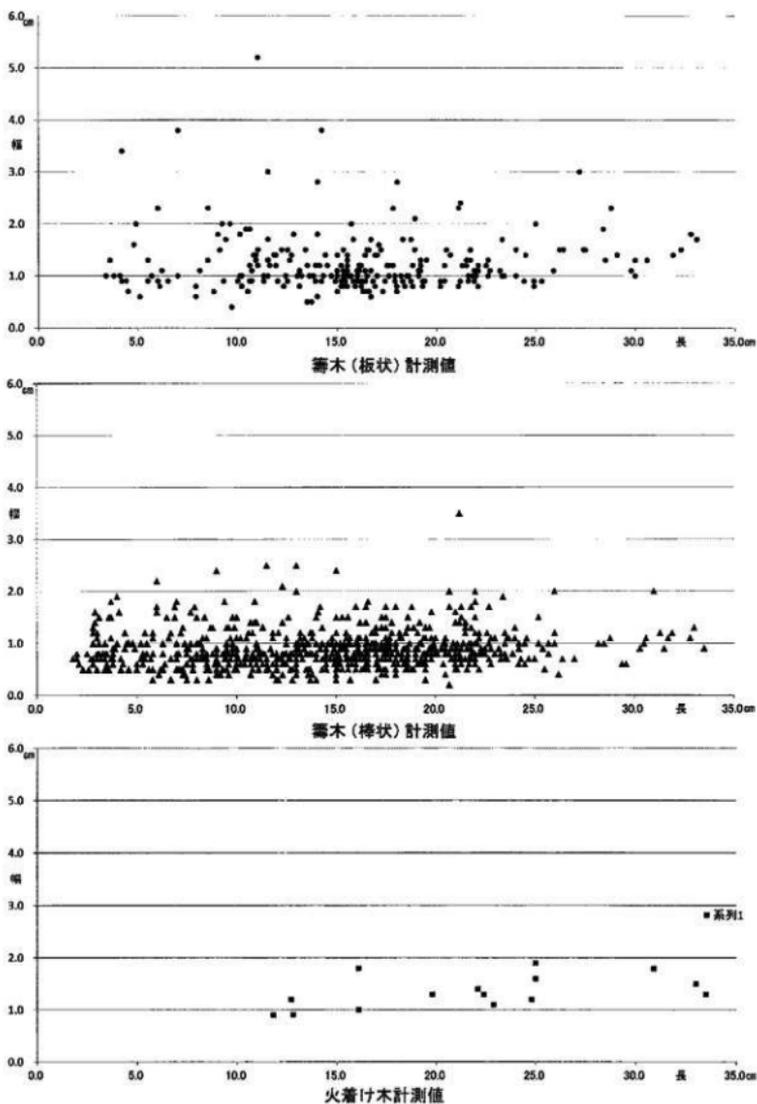


Fig.97 SK1124 出土遺物実測図 6 (1/3)



グラフ 1 SK1124 出土燻木計測グラフ

推して一行目は竹冠、二行目は豊前前国京都郡の「京」と思われる。竹冠を筑前国の筑とすれば、この木簡には少なくとも筑前国内と豊国京都郡の二ヶ所の地名が併記されていたことになる。31にも墨痕が見られ、木簡の可能性が高いが、判読はできなかった。081 型式。32 は、軸状の木製品で、蒲鉾型の断面を持つ。両端は直裁される。33 は、折敷底板の断片であろう。34～65 は、荷札である。赤外線をかけたが、墨書は確認できなかった。34～36 は、一端は両側から切れ込みを入れ、他の一端は剣先型に削ってとがらせる。033 型式。38～40 は、両端の左右から切れ込みを入れるもので、031 型式。41～54 は、一端は両側から切れ込みを入れ、他の一端は直線的に切断する。032 型式である。55～64 は、一端は両側から切れ込みを入れるが、他の一端は折損しており、形状をうかがうことはできない。039 型式に分類される。66・67 は、板状の部材を割ったもので、遺存する形状からは荷札等とは判断できない。68～81 は棒状を呈し、一端が焼け焦げる。火を灯火器に移す際に用いた火付け木であろう。

SK1124 から出土した籌木の計測グラフを96頁に示す(グラフ1)。籌木としては、板状のもの(木簡・荷札を割ったものを含む)254点、棒状の材を割いたもの787点が出土している。また、火付け木と考えられるものは、15点が出土した。

板状の籌木は、長さ3.4～45.7cmまでであるが、11～23cmの範囲に収まるものが多い。幅は、0.6～1.6cmの範囲に集中する。

棒状の籌木では、長さ1.8～33.5cmまでみられるが、板状のものに比べて分布が広くばらつくが、おおむね7.0～23.0cmの範囲に集中するようである。幅は、0.5～1.1cmに集中する。

火付け木に関しては、出土点数が少ないこともあってか、特に傾向は認められない。

SK1124の年代としては、8世紀後半を当てるのが妥当であろう。(大庭)

便所遺構 (SK1125) Fig.98～103, PL.11

一辺120cmの正方形を呈し、遺構検出面からの深さは350cmをはかる。最上部が三方向に広がるが、後世の掘削によるものと思われる。

SK1124の報告で述べたように、SK1124の北側に1.9mの間隔をあけて並び、布掘り堀 SA1104とは平行して設けられている。

SK1124同様、壁面の上部に崩落は認められるが、東側の一部にとどまり、全体として遺存状態は良好である。壁面はややすばまり気味で、床面は一辺60cm程度の隅丸方形を呈する。

標高6.2m以下について、土層実測図を作成した。1～4層は、SK1125を廃して、埋め戻した際の堆積土である。5層が排泄物の層にあたり、籌木等の木製品が集中して出土している。

出土遺物を Fig.99～103 に示す。1・2 は、埋土上部=1層の上層から出土した。1 は、鴻臚館式軒丸瓦の破片である。2 は平瓦片で、凹面には布目に薄くコビキ痕、凸面は縄目叩き痕が見られる。

3～14 は、4層から出土した。3～9 は、須恵器の坏蓋である。10～13 は、須恵器の高台坏である。直線的な体部を持ち、高台は体部と底部の境からやや内側につく。10の外底部には、墨書文字が残る。判読は困難であるが、関東学院大学田中史生氏からは「伴」の可能性があるとのお指摘を頂いた。また、内底部には墨が付着している。14 は、土師器の皿である。底部は回転ヘラ削り、体部は器壁が剥離し調整不明であるが、おそらく横位のへら磨きであろう。

15～17 は、埋土中位から出土した平瓦で、2～4層出土遺物に該当する。15・16 は、凹面は布目に糸によるコビキ痕、凸面は縄目叩きである。側面はヘラで直裁する。17 は、凹面は布目、凸面は平行叩き痕で、2B 型式に分類される。

18～32は、5層の出土遺物である。18は棒状の木製品で、両端を欠く。中ほどが両端に比べ一段細く削られている。黒漆をかけており、筭と思われる。19～32は瓦である。19は道具瓦である。実測図の左側に続く部分を欠く以外、他の面はすべて遺存しているが、全形は不明。20・21は、鴻臚館式軒丸瓦である。22も軒丸瓦の小片であるが、遺存する鋸歯文からみて、おそらく老司式の瓦当であると推測される。23は熨斗瓦で、両側面と下端の小口が遺存している。凹面は布目で、板状工具で撫で調整を粗く加える。凸面は、縄目叩きである。側面と端面はヘラ削り、側面に沿った凹面の縁部分をヘラで削って面取りする。幅は11, 2cmをはかる。24～31は、平瓦である。24～29は縄

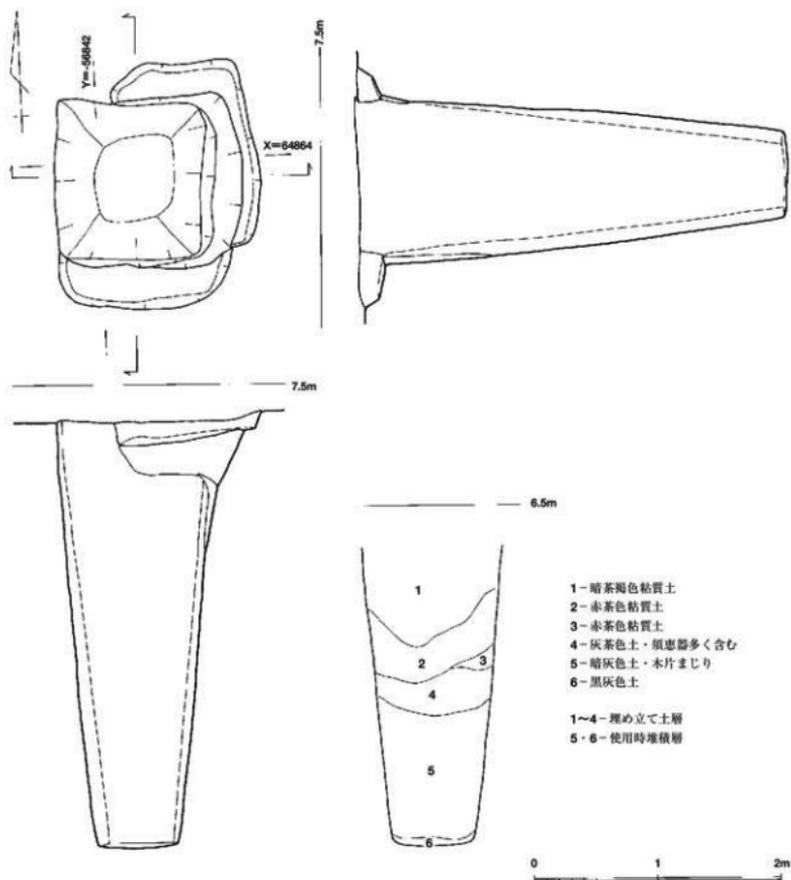


Fig.98 便所遺構 SK1125 実測図 (1/40)

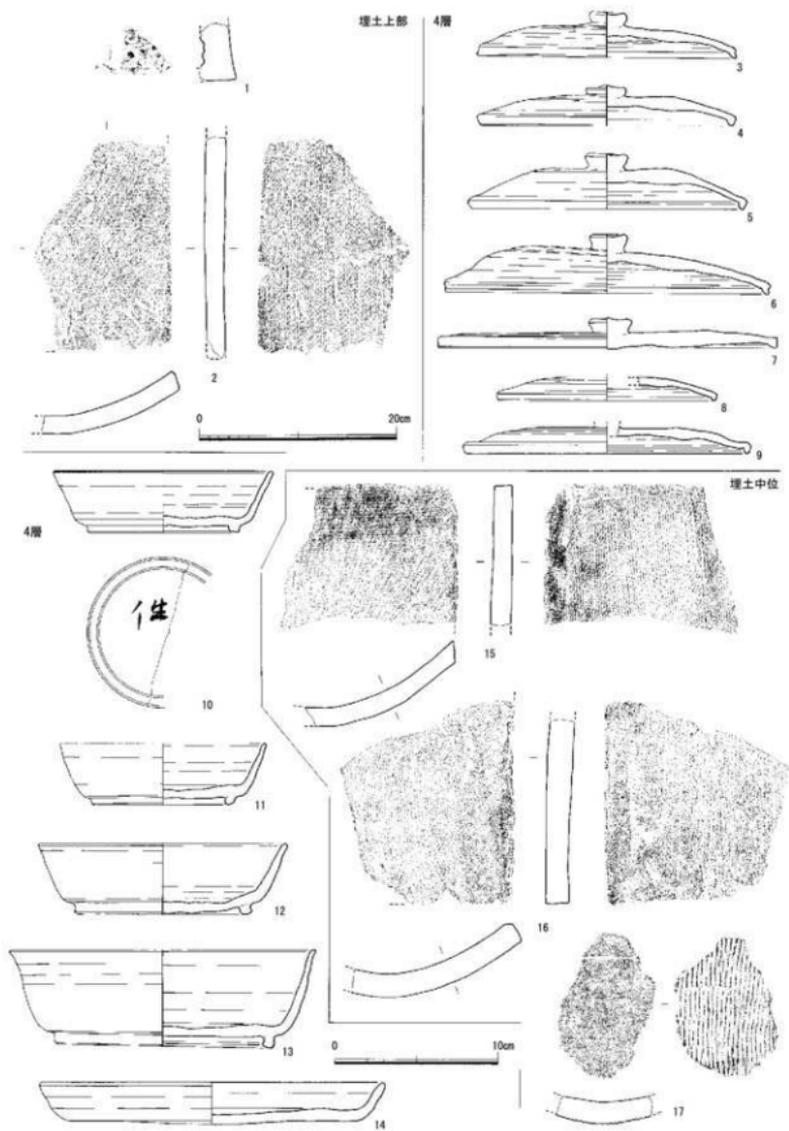


Fig.99 SK1125 出土遺物実測図1 (1/3、1・2・15～17は1/5)

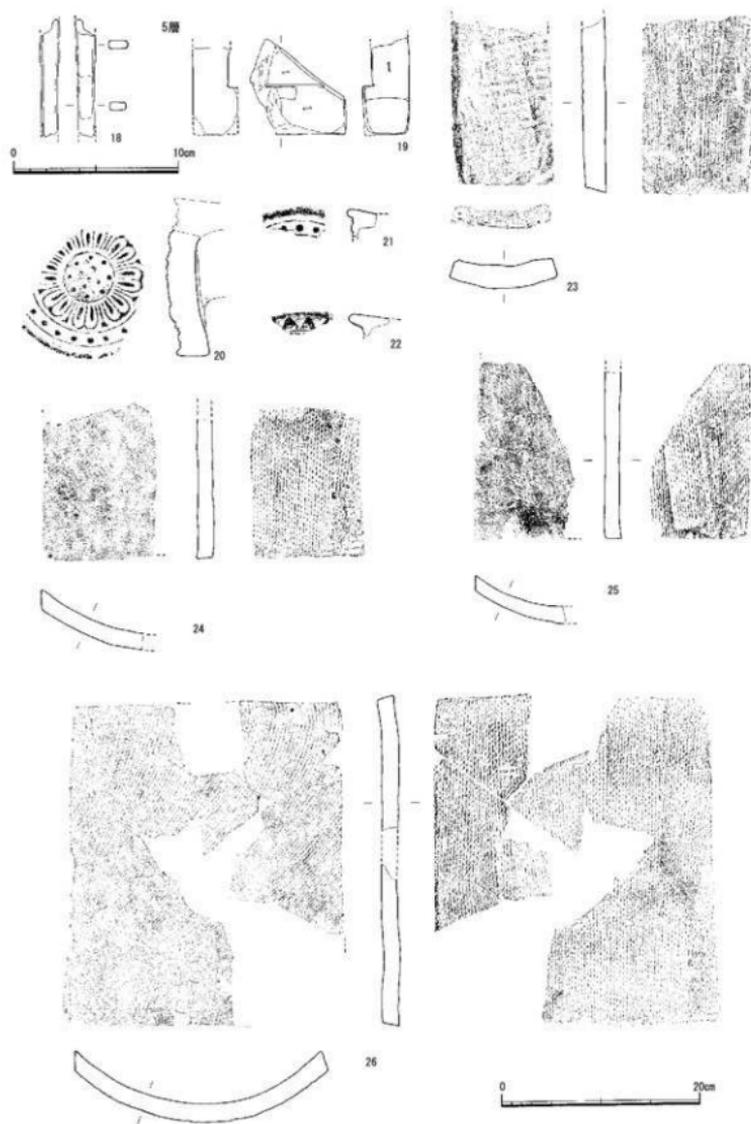


Fig.100 SK1125 出土遺物実測図2 (18は1/3、他は1/5)

5冊

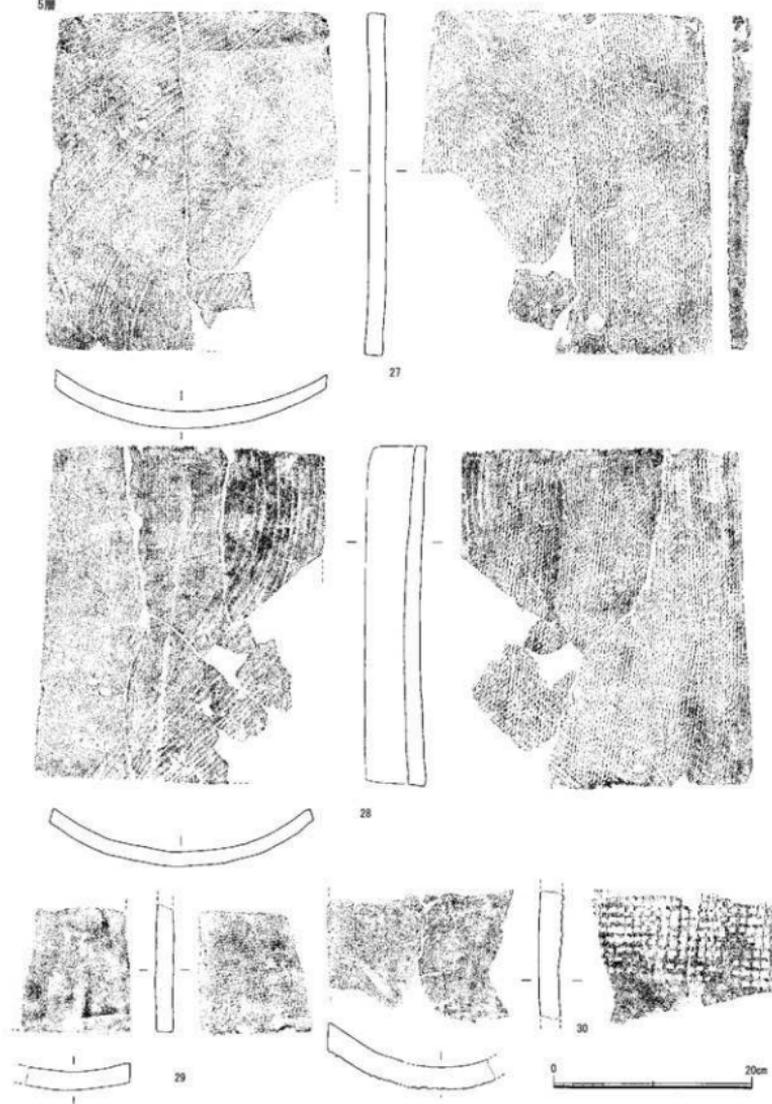


Fig.101 SK1125 出土遺物実測図3 (1/5)

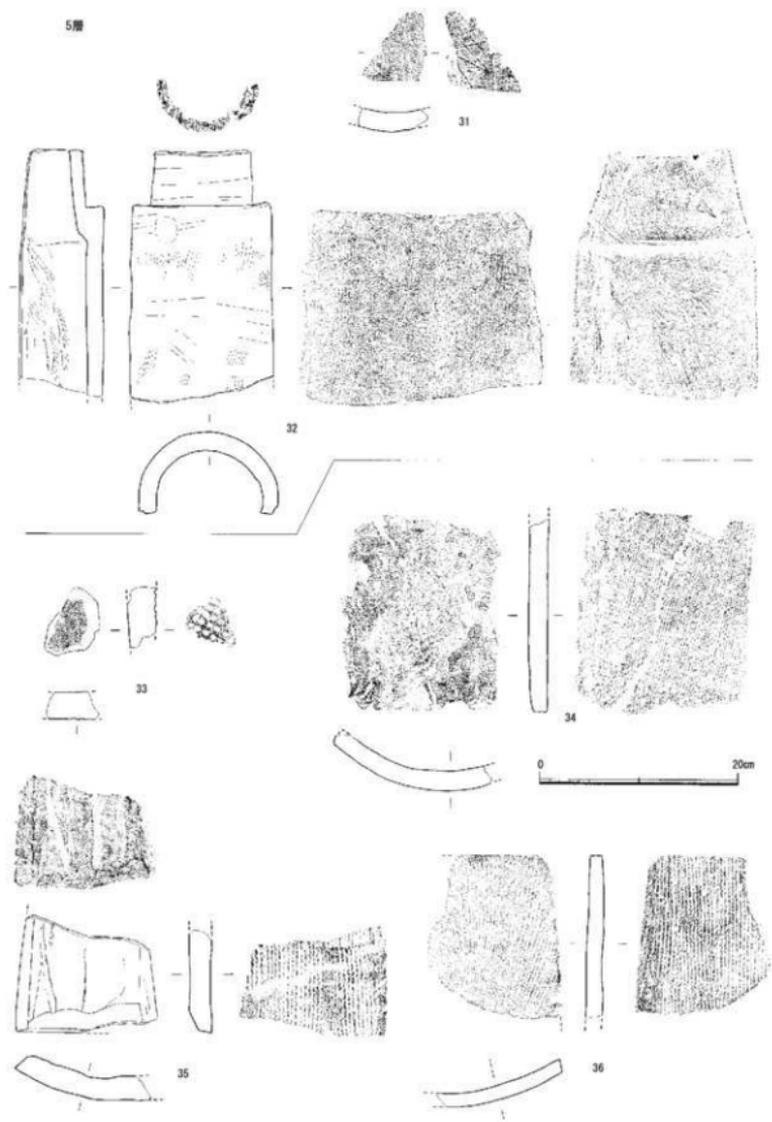


Fig.102 SK1125 出土遺物実測圖 4 (1/5)

目叩きで、24・25・29の凹面は布目、26～28では糸によるコビキ痕跡が見られる。側面、端面はヘラで削って平坦に整える。コビキ痕跡は凹面において顕著であるが、凸面でも縄目叩きに隠れて部分的にみられる。凹面と凸面のコビキ痕は、表裏の関係で対応している。これらは、長さ35cm、狭端長27cm、広端長30cm（推定）とそろっており、一枚の粘土ブロックから切り取られたものであろう。その場合、26・28と27では、コビキ痕が逆方向であり、二方向から作業がなされたと思われる。30は、格子叩き3Aa老型式である。老司式平瓦に特徴的な方形斜格子で、鴻臚館跡出土瓦の中にあつては、希少なタイプである。凹面は布目で、側面はヘラで平坦に削る。31は、不揃いで不整な斜格子叩きを持つもので、6B型式である。凹面は布目である。32は、丸瓦である。筒部凹面は布目で、コビキ痕が見られる。凸面は、縄目叩き痕の上から板状工具で撫で調整し、叩き痕を撫で消している。玉縁部凸面は横方向の撫で調整で、段部はほぼ直角に屈折する。筒部凸面の段部際は横に撫で調整するが、一部に布目が見られる。

33～37は、分層せずに取り上げた瓦である。33は老司式（3Aa老）の平瓦片である。34～37は、縄目叩きの平瓦である。34の凹面は、摩滅しており調整不明。35の凹面は布目であるが、3.5cmほどの幅の段差が縦に通っており、桶巻き作りであることがわかる。側面と端面は、ヘラで面取りする。36・37の凹面には、糸によるコビキ痕が明瞭に刻まれている。37の凹面の、狭端面近く（実測図の下方）には紐痕が横に走っている。

このほか、5層からは、**霽木**が88点出土した。板状の霽木は15点で長さ5.0～16.5cm、棒状の霽木は73点で長さ2.7～42.2cm。SK1124では板状と棒状霽木の比率は1対3であったが、SK1125では1対5と棒状霽木の比率が高い。

SK1125は、SK1124同様に8世紀後半に位置付けられるものと考えるが、5層出土の格子6B型式の瓦片からは、9世紀に下る可能性が考えられる。叩き痕6B型式の年代比定が必ずしも確定的ではないので、今後の課題としたい。（大庭）

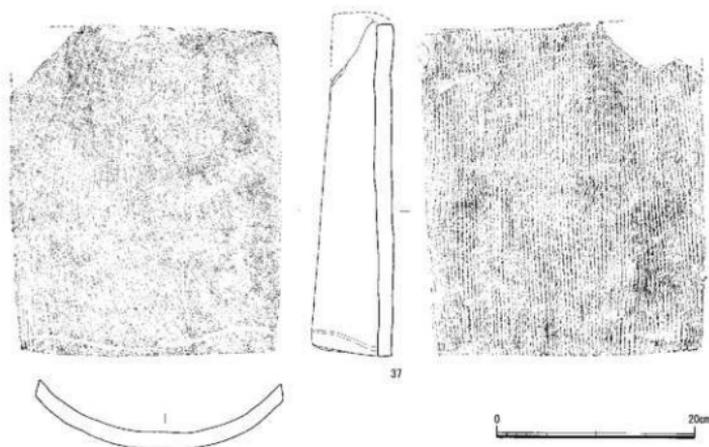


Fig.103 SK1125 出土遺物実測図5 (1/5)

便所遺構 SK25043 Fig.104

第31次調査(トレンチ1)で確認した。調査区南側に位置し、第II期の布掘り堀の北西コーナーの外側に位置する。平面形は方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれる。規模約1.3×1.3m、深さ約3.6mを測る。底面は平坦となる。これまでの調査から便所遺構の可能性が高いと考え、掘り下げに際して、大きく9層に分けて遺物の取り上げを行った。上面から0.5mまでの1、2層はレンズ状の堆積で炭化物層が間層で見られる。3～6層は斜め方向の堆積で、基盤の風化頁岩を主とした層である。7、8層は水平堆積で、基盤の風化頁岩を主とした層で、暗灰色粘質土が間層で見られる。9層は床面直上の堆積で暗灰色粘質土である。壁際には崩落したと考えられる基盤の風化頁岩が見られる。土層の堆積状況から3～8層は人為的な埋め戻しのものであり、1、2層は埋没後の掘り込みの堆積と考えられる。遺物は各層から出土し、須恵器、土師器、越州窯青磁、瓦類がある。ただ、最下層からは便所遺構の判断の材料となる藁木や排泄物に含まれる種など出土しておらず、土壌分析の結果も寄生虫卵などは検出できなかった。遺構の形状や位置関係から便所遺構との類似性が高いものであるが、便所としての使用の痕跡は確認できなかった。

SK25043 出土遺物 Fig.105～110

1～3は1層、4～10は2層から出土した土師器である。1～3は高台付きの環である。4は蓋の柄み、5は平底の環である。6～10は高台付きの環である。11は4層から出土した須恵器蓋で、天井部は欠損している。12、13は5層から出土した土師器環である。14、15は4層から出土した越州窯系青磁壺と白磁碗である。16～19は7層から出土した。16は須恵器環、17は甕、18、19は土師器の移動式の甕か。20～23は8層から出土した須恵器で、24は取手付きの土師器鉢である。25～28は9層から出土した須恵器で、27は皿で、底部に縣□□の墨書がある。29は籬の羽口で片側は溶解している。孔の径は約2.5cmを測る。30～45は瓦類で、7、8層を中心に出土した。軒丸瓦は223a型式の鴻臚館式である。35は丸瓦で、凸面は縄目叩きで、長さ36cmを測る。36～40は平瓦で、40以外は縄目叩きで、40は平行叩きである。41は面戸瓦で2層から出土した。42、43は3、4層から出土した鬼瓦で、42は額部分、43は目から口にかけての部分である。40、41は磚で、2層と7層で出土した。

遺構の掘削の時期は特定できないが、最下層の出土遺物から8世紀後半の時期が想定され、その後、9世紀代には人為的に埋められたと考えられる。(菅波)

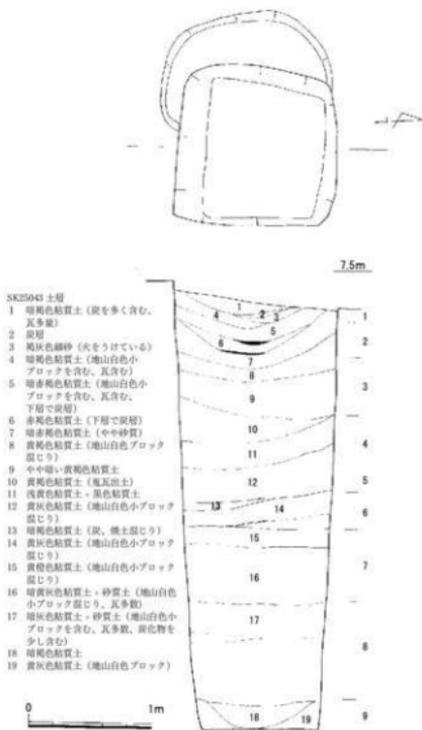


Fig.104 便所遺構 SK25043 実測図 (1/40)

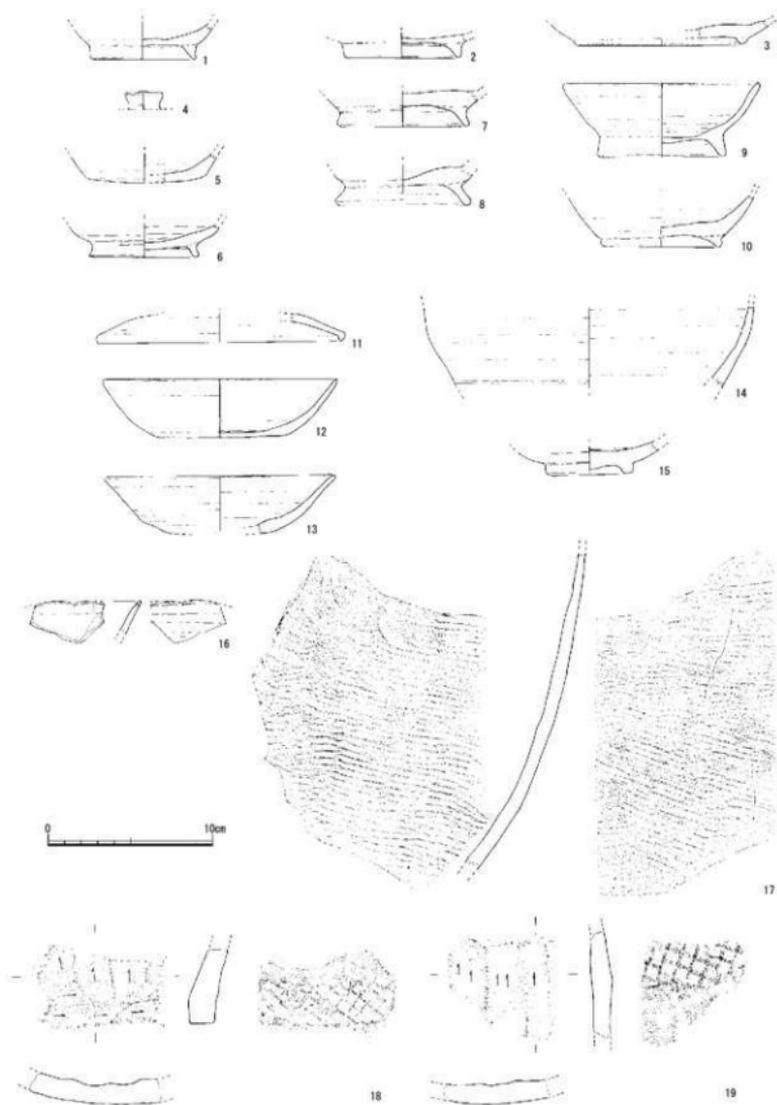


Fig.105 SK25043 出土遺物実測図1 (1/3)

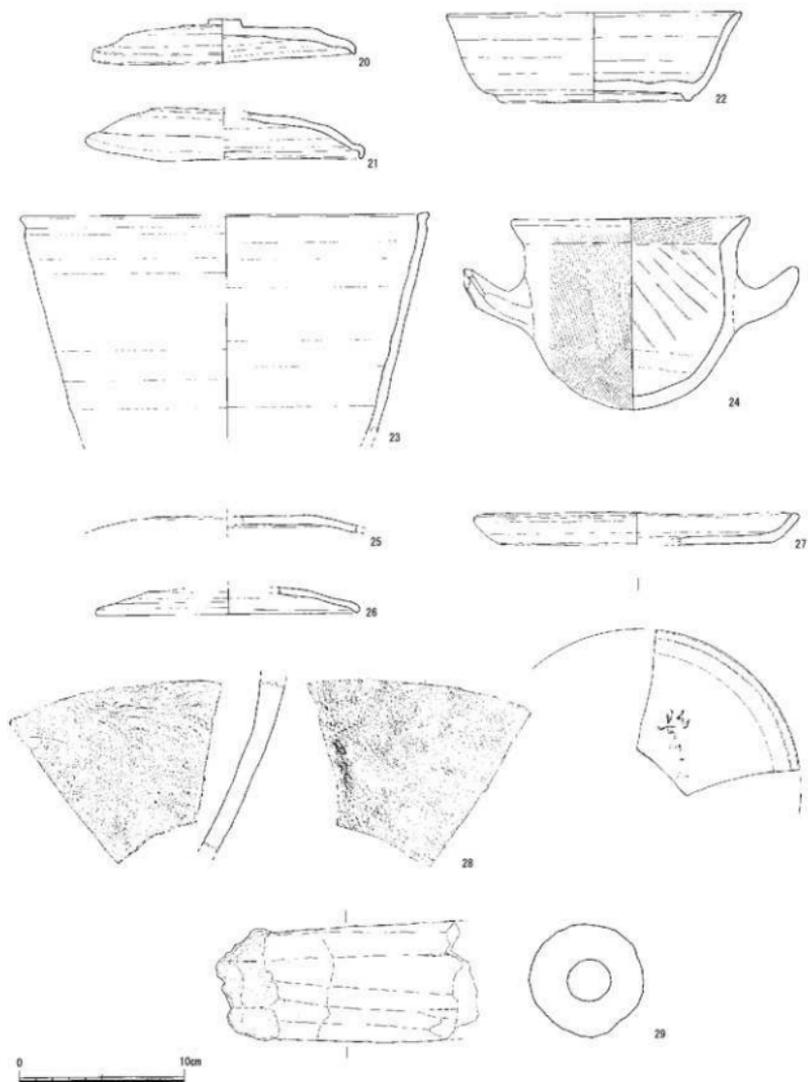


Fig.106 SK25043 出土遺物実測図 2 (1/3)

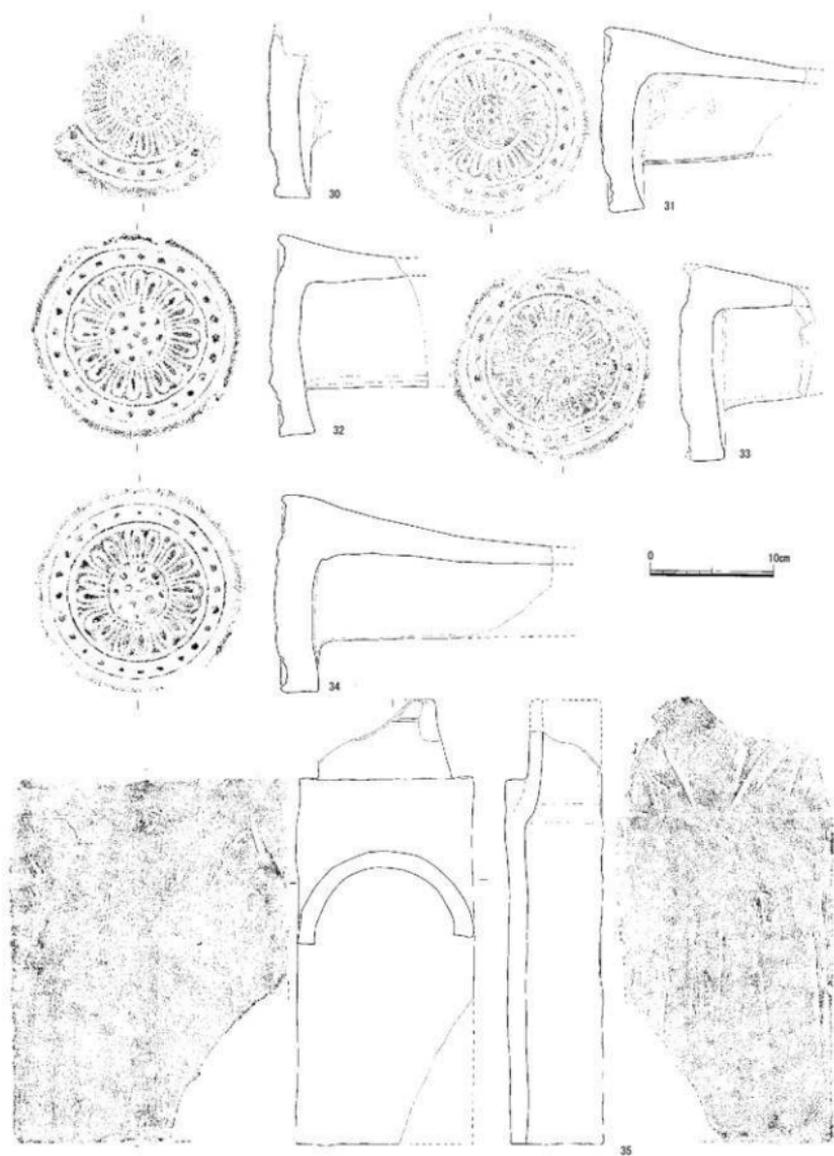


Fig.107 SK25043 出土遺物実測図 3 (1/4)

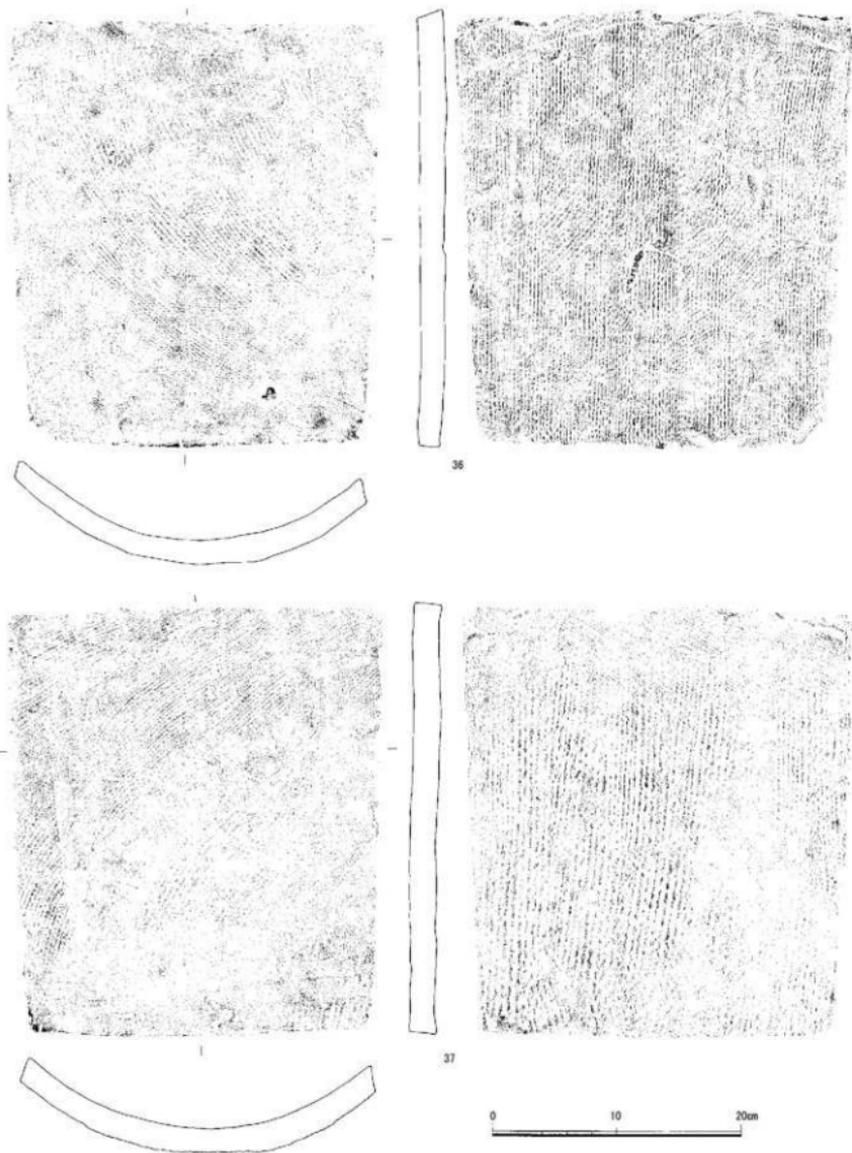


Fig.108 SK25043 出土遺物実測図 4 (1/4)

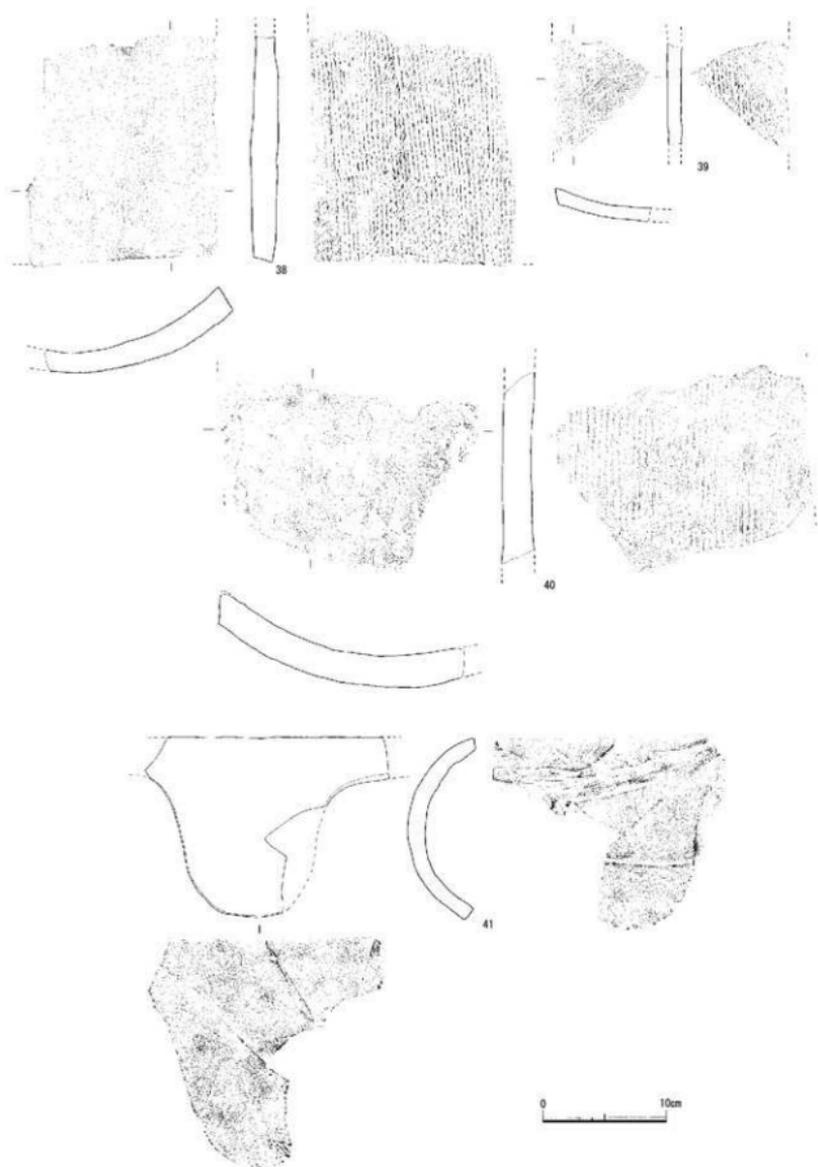


Fig.109 SK25043 出土遺物実測図 5 (1/4)

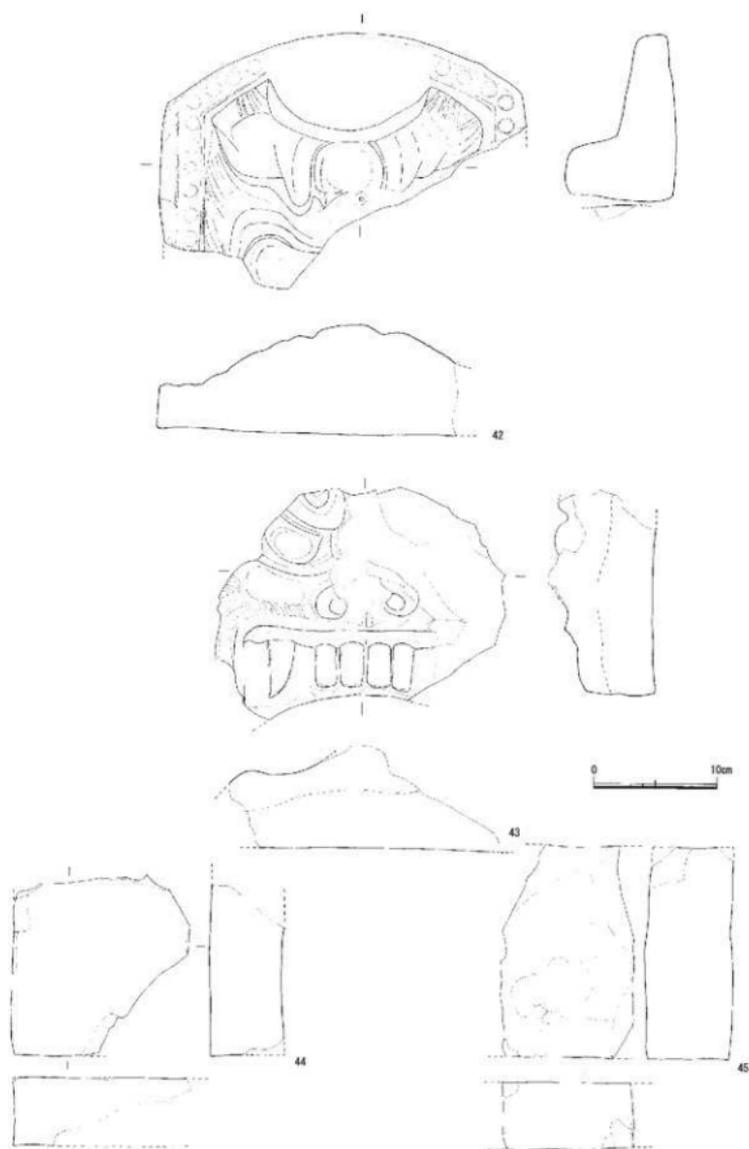


Fig.110 SK25043 出土遺物実測図 6 (1/4)

(5) 第Ⅲ期の遺構と出土遺物 Fig.111

明確に北館第Ⅲ期に位置付けられる遺構としては、礎石建物 SB1228 とこれに伴う雨落溝 SD1216 のみである。ただし、礎石建物と関連する可能性がある遺構、すなわち単独で確認された礎石、礎石据付穴を北館敷地内で散発的に検出しており、これらは次項の「その他の建物関係遺構」でまとめて報告する。この他、北館の北斜面では、トレンチ1～3において元位置を動いた礎石や斜面に落ち込んだ礎石が出土している (137・152 頁参照)。(吉武)

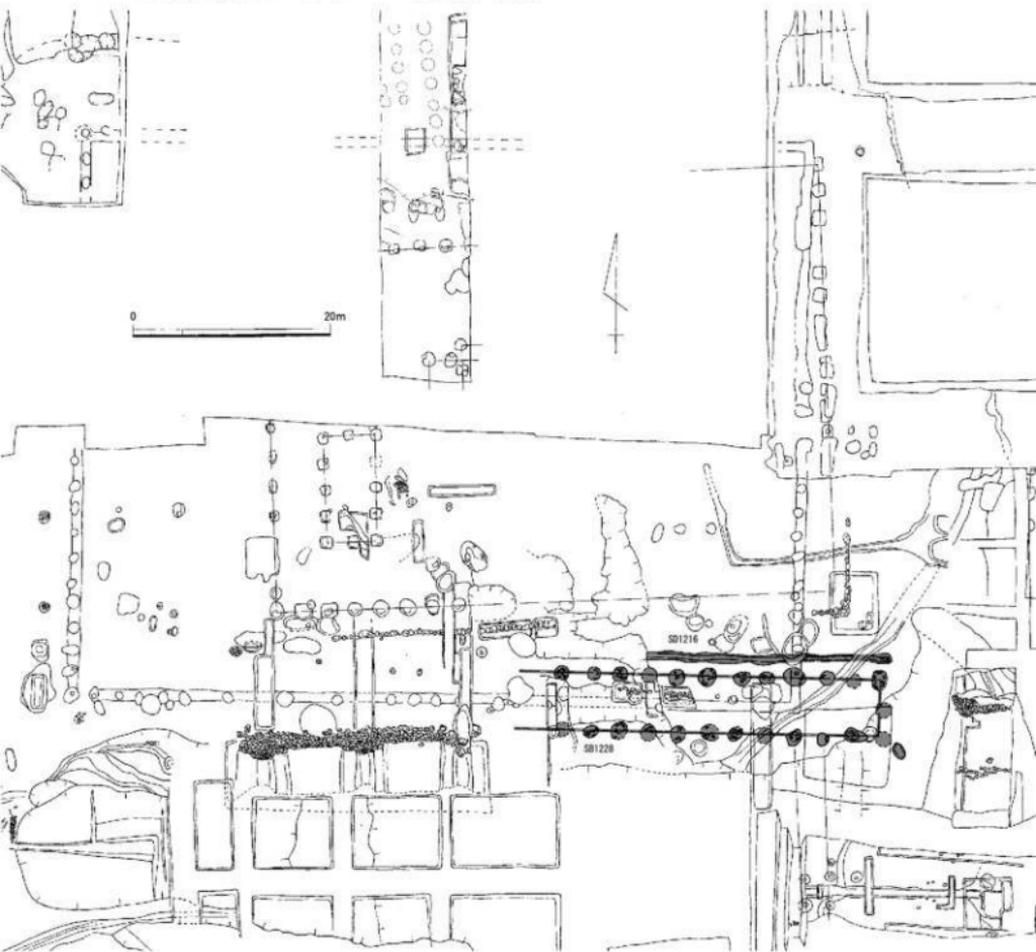


Fig.111 北館第Ⅲ期遺構配置図 (1/500)

礎石建物 SB1228 Fig.112 ~ 114・付図3、PL.12

第19次調査で確認した、中央谷に面して建てられた東西に長い礎石建物である。雨落ち溝は建物の北側のみ確認され、南側には確認できない。建物の南東隅では台地が落ちており、鴻臚館廃絶後に地形が浸食を受けたとみられ、礎石の一部がずり落ちている。柱間が3m(10尺)等間の桁行11間以上の建物で、さらに西に伸びている。西側の第20次調査ではSB1228の南側礎石列延長線上において、礎石据付穴とみられる遺構SP14535を確認しており、ここまで東西42m(14間)となる。建物の東側は地形が落ちることや雨落ち溝が切れることから、ここで取束するものとみられる。梁行は2間で、柱間は3m(10尺)である。建物中央を中世溝が東西に通り返っており、東柱が飛ばされた可能性もある。主軸方位は座標北から88°30'西偏にとり、第Ⅱ期布掘り堀の主軸方位に等しい。布掘り堀SA1237南列がSB1228の中央を通り、東列はSB1228の東端から3間めの柱位置を通ることから、布掘り堀SA1237の軸線をそのまま踏襲し、これを南北に1間ずつ、東へ3間分広げた建物がSB1228であるといえる。建物基壇は削平され、礎石の大部分は失われているが、礎石据付穴の多くが残っている。据付穴は径1.3~2.4mの不整な円~楕円形プランを呈し、深いもので40cmほどが残るが、大半は10cm前後と浅い。穴内に花崗岩、玄武岩等の根固め石が残るが、一部は中世溝に破壊されている。礎石は2個が現存しており、南東隅のSP02は1.8m×1.15mの大きな玄武岩円礫を用いたものだが元位置になく、地形浸食により南東斜面にずり落ちている。その西隣のSP01は、2.3m×1.3mの更に大振りの玄武岩扁平礫を用いており、ほぼ元位置にあるが、戦前の軍隊による破壊で打ち欠かれており、ずれて上面が南へ傾いている。

SB1228は、南館で検出した礎石建物SB31と棟方向が直交するが、主軸方位や規格、礎石据付穴の形状等において共通する礎石建物である。

SB1228 出土遺物 Fig.115 ~ 117・119

礎石据付穴からは須恵器、中国産陶磁器(白磁・越州窯系青磁)、朝鮮半島産陶器、瓦が、整地層からは土師器、須恵器、緑釉陶器、中国産陶磁器(陶器・白磁・越州窯系青磁)、朝鮮半島産陶器、瓦があわせてコンテナ72箱出土した。

1~13は礎石抜き穴出土遺物である。1は新羅陶器蓋か。肩部外面に沈線2条と綾杉文を巡らせる。横ナデ調整で焼成不良。上面に降灰する。NP7出土。2は須恵器高台付坏の底部片で、高台は外底端寄りに付く。NP5出土。3~5は中国産白磁である。3は荊窯系白磁碗で、やや黄味のある白色精良胎土に透明釉をかける。全釉で高台内側に砂目が付く。NP3出土。4は碗又は鉢。全釉で畳付の釉は掻き取る。高台内に砂目が付着する。NP0出土。5は水注又は壺の底部片で、白色精良磁胎に僅かに黄味のある透明釉をかけた優品。全釉で外底露胎。外底縁は施釉後面取りする。NP0出土。6~10は越州窯系青磁である。6~8は碗で、いずれも全釉で畳付の釉は掻き取り目跡が付く。6は内底にも目跡がある。NP1出土。7は高台外側に圈沈線を巡らす。NP3出土。8もNP3出土。9は内面に花文を持つ碗で、貼り付け高台で全釉、高台内側に目跡が付く。NP3出土。10は香炉。外面に回転ヘラ削りを加え施釉、内面は露胎である。NP5出土。11は軒丸瓦の瓦当小片で、170A型式。NP3出土。12は丸瓦小片、13は平瓦片で、ともに凸面には3Bd類の敲打痕があり、凹面には粗い布目が付く。12はNP4、13はNP2出土である。以上の出土遺物には、礎石が取り除かれた際に抜き痕に入り込んだものが含まれている可能性があると考えられる。

14~38は整地層出土遺物である。建物基壇に切り込む遺構に伴う可能性があり、建物の時期を示すものではない。14~17は土師器坏で、いずれも外底ヘラ切りで、赤味のある暗褐色を呈する。15は復元口径11.7cm。18~20は土師器の高台付坏で、外底ヘラ切り。高台を貼り付けて横ナデ調

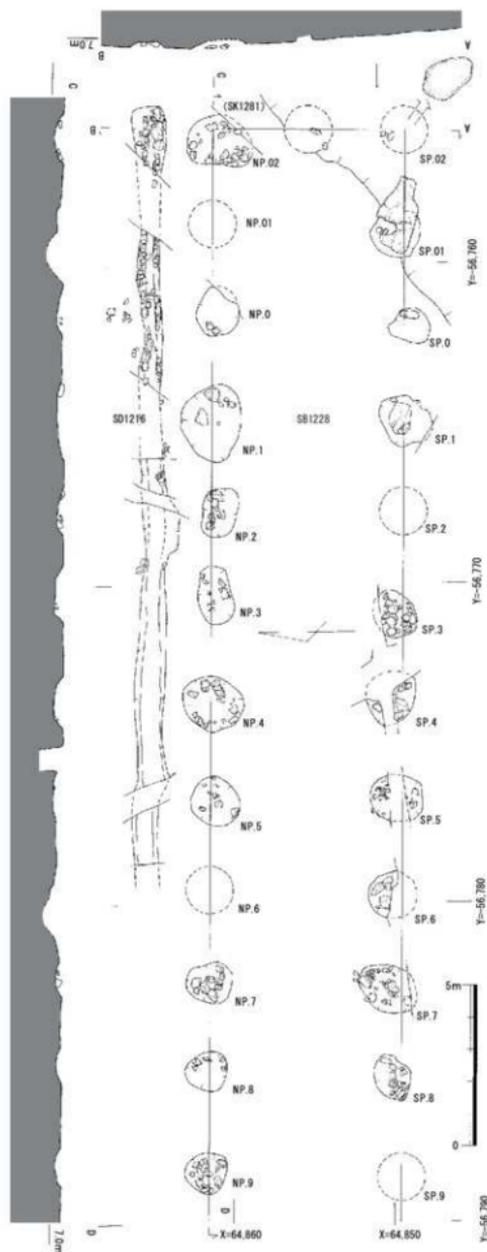


Fig.112 礎石建物 SB1228・雨落溝 SD1216 実測図 (1/150)

整する。暗橙褐色～灰白色。21～23は須恵器である。21は坏蓋で天井部をヘラ削りし宝珠形鈕が付く。22も坏蓋で、口縁端部は断面三角形をなす。23は高台付坏で、底部ヘラ切り。内外底にナデ調整を加える。焼きが甘く灰白色を呈する。24は緑釉陶器の皿か。小片のため口径と傾きは不確定である。胎土は灰味のある白色で、明黄緑色の釉を施すがほとんど剥げ落ちる。25は緑褐釉を施した中国産陶器鉢で、口縁端部を折り返して肥厚させる。内面は薄く施釉し一部が露胎となる。26～28は中国産白磁である。26は邢窯系白磁碗である。蛇の目高台で高台は露胎、高台内側に砂目が付く。27は高台付白磁碗である。高台脇以下は露胎。類例の少ない器形であるが、生地、釉薬とも精良で、北方系白磁であろう。28は白磁XI類皿である。29～31は越州窯系青磁である。29は平高台の碗で、体部外面下半露胎。内外底に目跡がある。外底にヘラ記号様の線刻がある。30は碗で、釉下に白化粧を施し体部外面下半は露胎。内外底に目跡が付く。蛇の目高台状に作る。31は合子蓋で、外面に凹線を巡らせる。全釉。32は高麗無釉陶器甕で、体部外面に細かい格子叩き、内面に指押え痕があり、ともにナデ消している。使用により外底縁が磨滅する。33は軒丸瓦片で鴻臚館式(223型式)。34～36は軒平瓦で鴻臚館式(635型式)。34は平瓦凸面の縄目をナデ消しており、35は縄目叩きが明瞭に残る。37は砂岩製の砥石片である。38は石球で自然遺物の可能性がある。

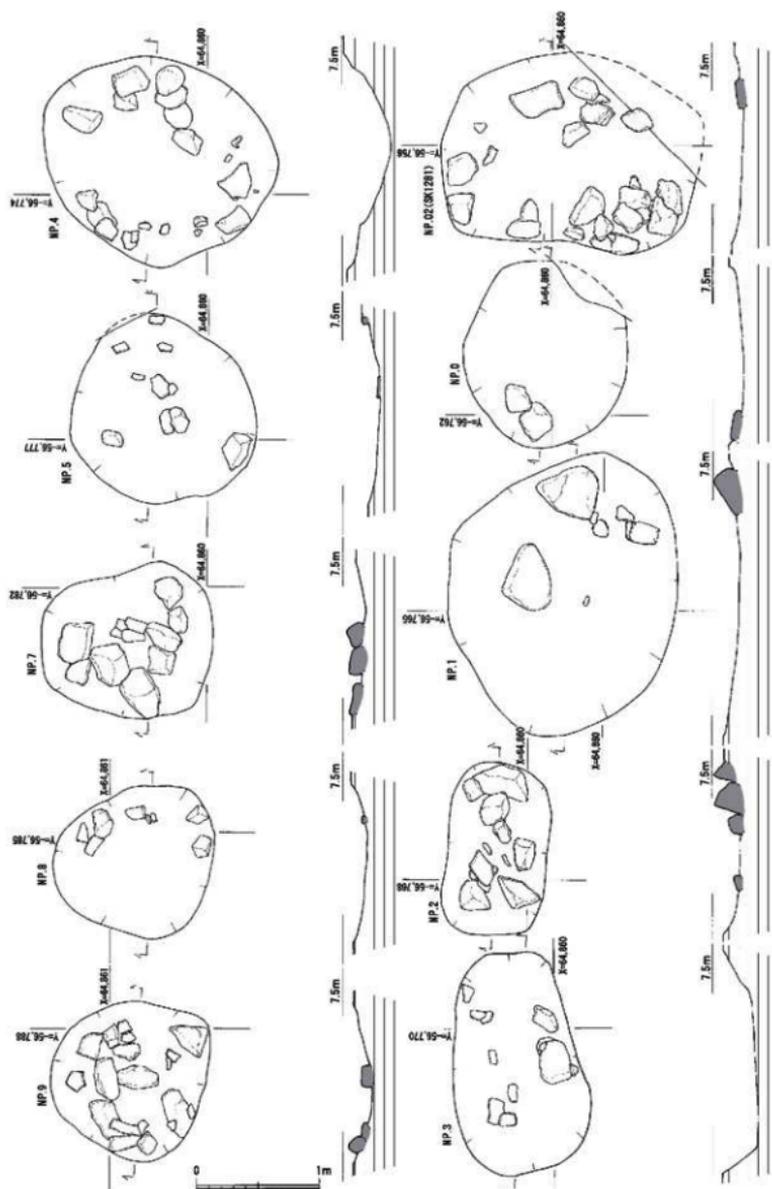


Fig.113 SB1228 礎石及び礎石据付穴実測図1 (1/40)

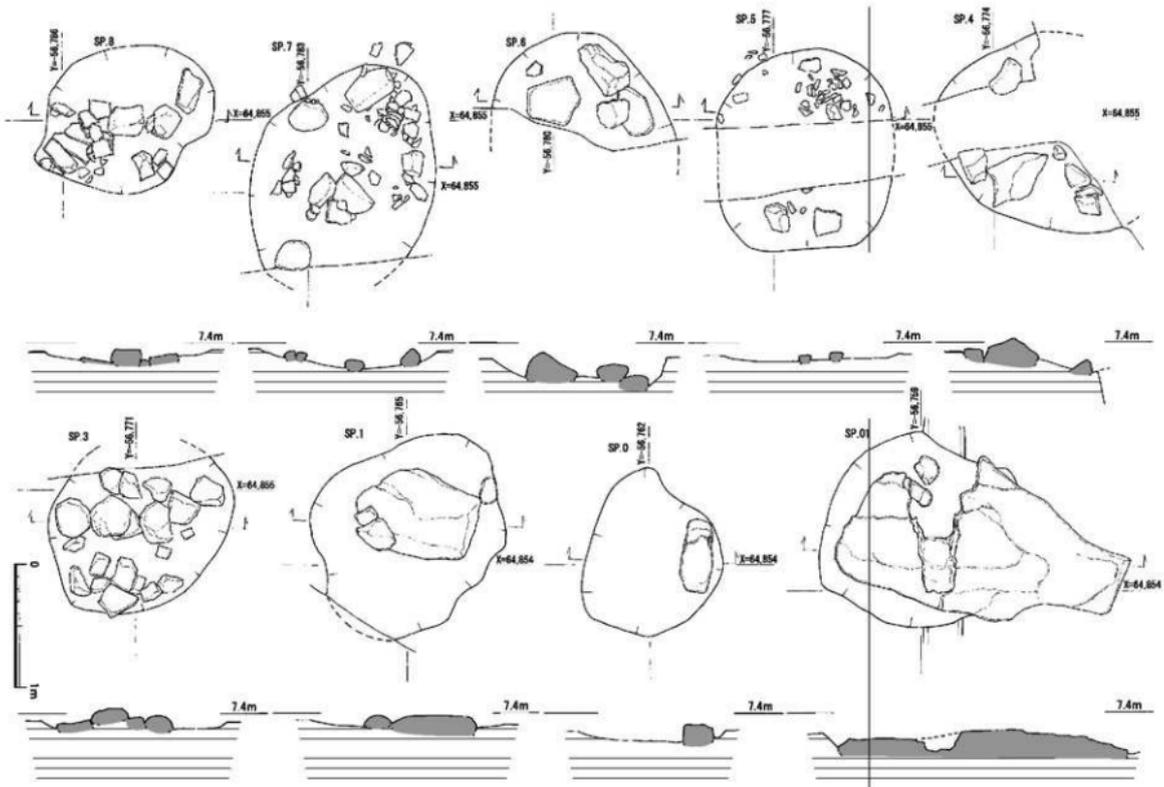


Fig.114 SB1228 礎石及び礎石据付穴実測図 2 (1/40)

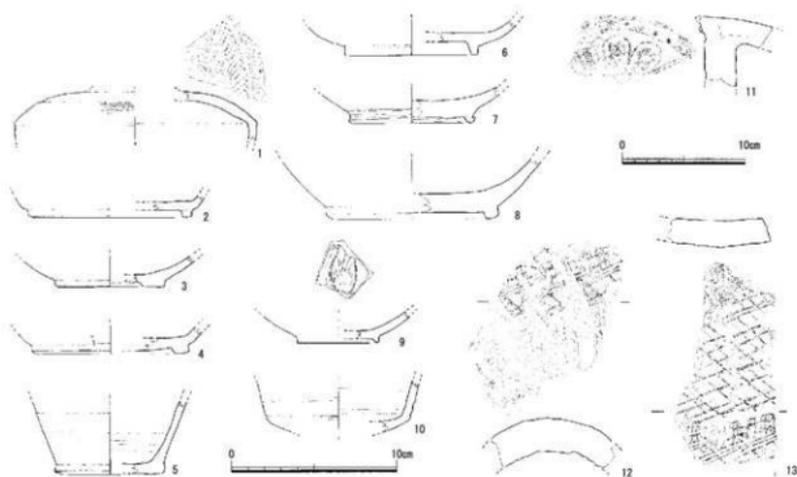


Fig.115 SB1228 礎石据付穴出土遺物実測図 (11～13は1/4、他は1/3)

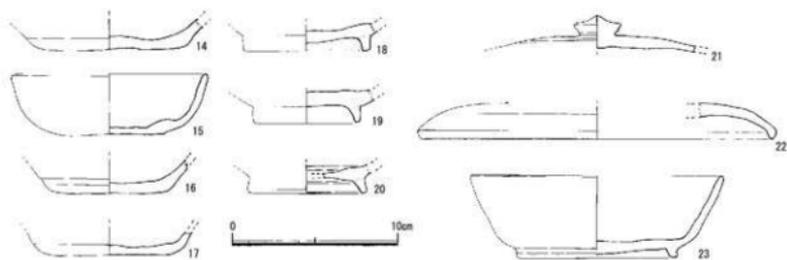


Fig.116 SB1228 整地層出土遺物実測図1 (1/3)

雨落ち溝 SD1216 Fig.112、付図3、PL.12

礎石建物 SB1228 の北に平行して直線的に伸びる雨落ち溝である。西端は中世溝 SD1268 により大きく削られて消失しており、長さ 23.7m を確認したが更に西へ伸びて行くものと考えられる。東端は収束する。溝幅 0.5～1.0cm で、深さ 20cm。溝と SB1228 柱筋の間は 1.2m である。溝の東半部を中心に小ぶりの礫岩を主とする緑石が残っているが、西半部の礫はほとんど失われている。

SD1216 出土遺物 Fig.118・119

土師器、須恵器、中国産陶磁器（白磁・越州窯系青磁・陶器）、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナ 16 箱出土した。

39・40 は土師器坏で、ともに底部へラ切り難し。40 は復元口径 14.0cm。39 は黒褐色、40 は暗橙色。41・42 は須恵器蓋で、口縁端部が下方に短く折れる。43 は須恵器壺の肩部片で、外面に沈線 1 条と櫛描波状文 2 条を施す。外面灰被り。44 は須恵器甕の胴部片で、外面平行叩き、内面の当て具

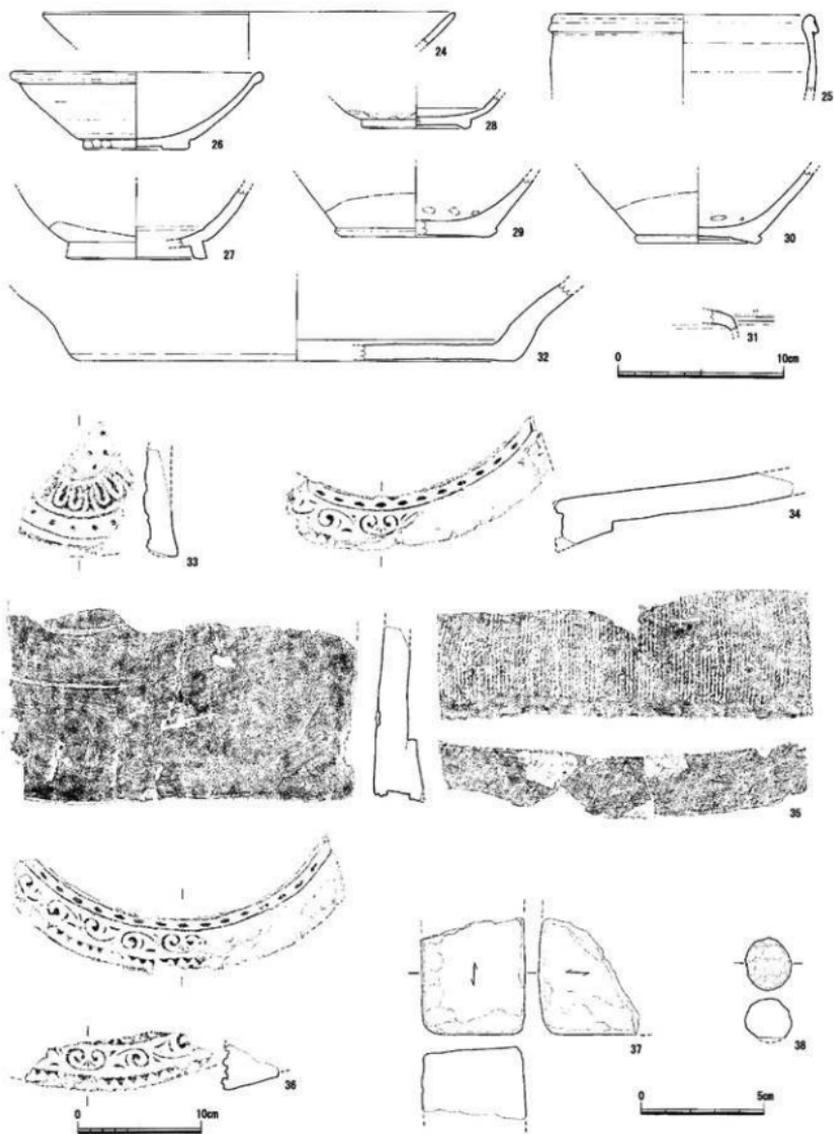


Fig.117 SB1228 整地層出土遺物実測図2 (33~36は1/4、37・38は1/2、他は1/3)

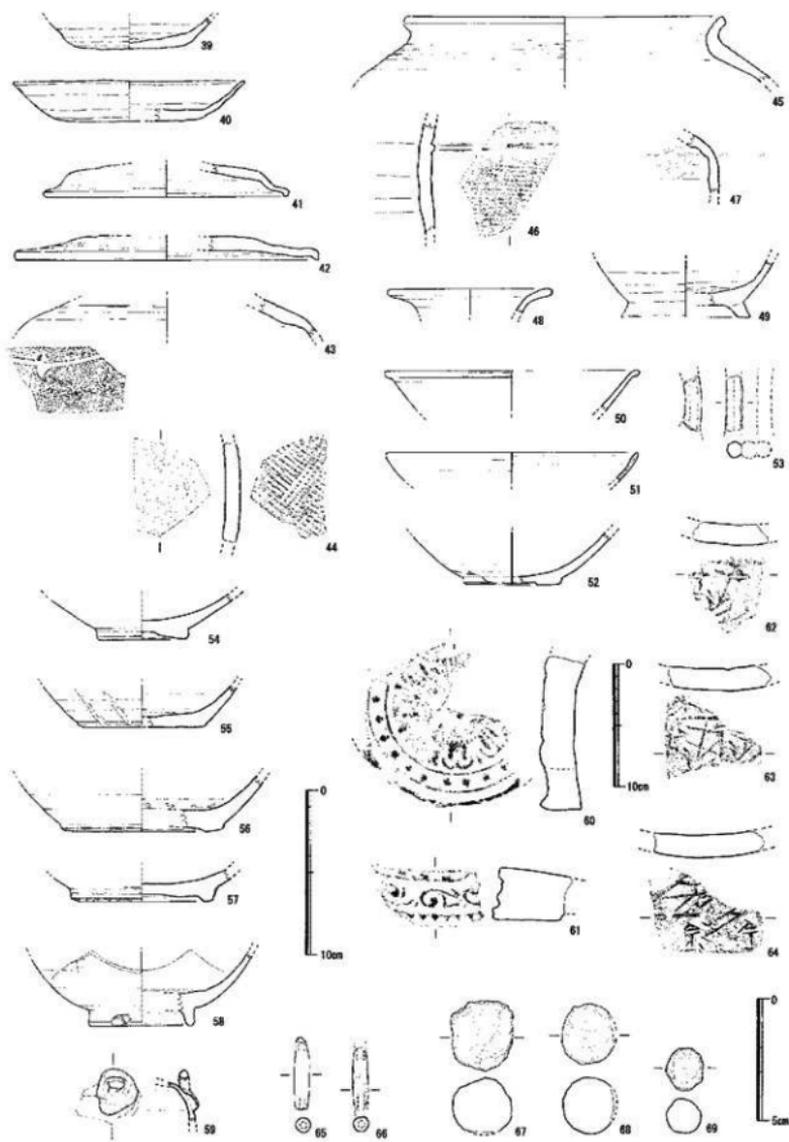


Fig.118 SD1216 出土遺物実測図 (60～64は1/4、67～69は1/2、他は1/3)

(6) その他の建物関係遺構（礎石据付穴・掘立柱建物・柱穴）と出土遺物 Fig.120

鴻臚館北館においては、第Ⅰ期・第Ⅱ期の柵・塀と見られる掘立柱列や布掘りを確認しているものの、内部施設の建物等についての状況は不明であり、第Ⅲ期礎石建物についても一部分しか残存しないためその全容は不明である。一方、各調査区において、建物群にまとめることができなかった古代の柱穴や柱列等の遺構を散発的に確認しており、第Ⅲ期礎石建物に伴うのではないかと考えられる礎石据付穴や礎石なども見受けられる。また、第Ⅰ～Ⅲ期に明確に位置付けることができなかった掘立柱建物もあり、鴻臚館建物の復元を行う場合にはあわせて重要となる。ここでは、これらをまとめて調査順に報告する。（吉武）

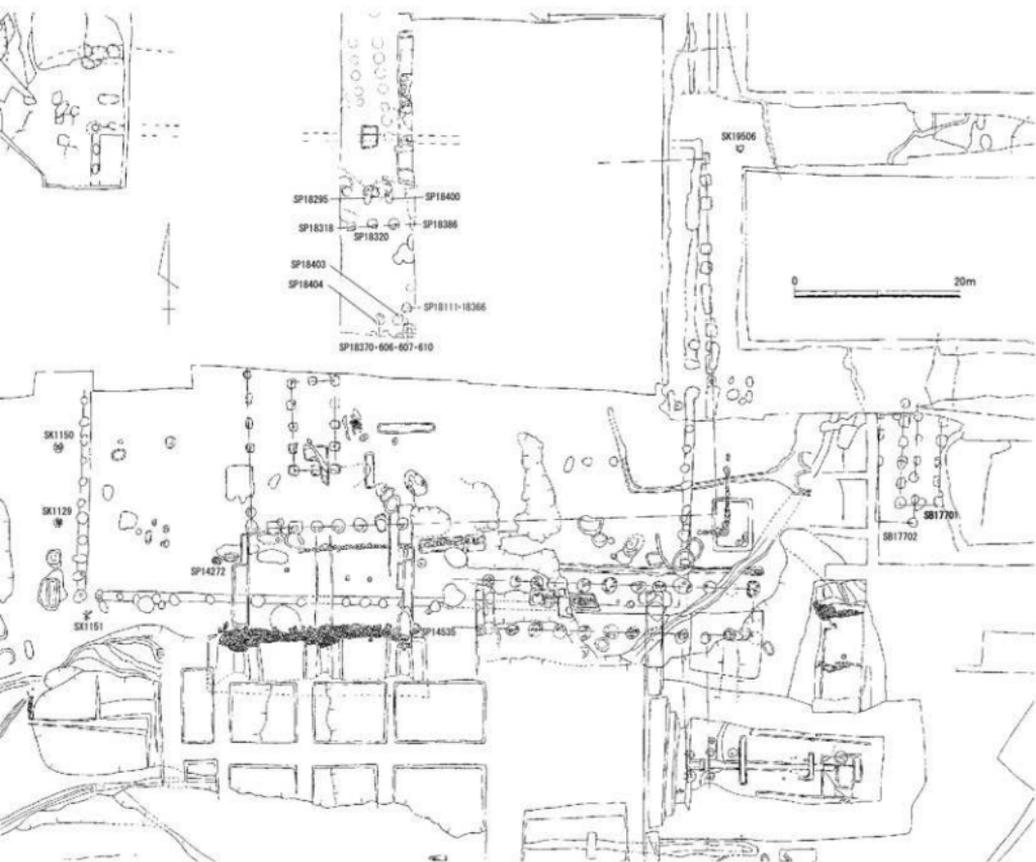


Fig.120 その他の建物関係遺構の配置図 (1/600)

土坑 SK1129 Fig.121

第18次調査区の中央部に検出した。第Ⅱ期布掘り塀 SA1104 西列から西へ2m離れて位置する。風化頁岩岩盤に掘り込まれた遺構で、平面円形プランをなし、東西にやや長く径0.9～1.0mを測る。断面逆台形を呈する深さ20cmの浅い窪みで、内部には径15cm前後の礫が5個置かれており、礫のレベルが揃っている。類似遺構からみて礎石据付穴である可能性が強い。この遺構の北側9mの位置には同様の遺構 SK1150 があり、二つの遺構の中心をつないだ線は SA1104 西列に平行する。第Ⅱ期布掘り塀の外側にあること、第Ⅱ期と第Ⅲ期の主軸線は同一であることから、わずか2基の遺構であるが北館第Ⅲ期礎石建物の礎石据付穴である可能性が高い。

出土遺物はない。(池崎・吉武)

土坑 SK1150 Fig.121

第18次調査で検出した。SK1129の北側に9m離れて位置しており、SK1129と類似する遺構である。平面形は隅丸方形で、南北に若干長く、径1.0～1.05mを測る。断面逆台形を呈し、遺構面から底面まで5cm強が残る。底面には径10～20cmの礫が14個置かれており、礫の上面は比較的レベルが揃っている。礎石を置いた据付穴と考えられ、平和台野球場建設等の際に礎石が抜き去られたものと考えられる。SK1129とSK1150は、南館礎石建物 SB31 を北側へ延長した場合には建物の中央位置にくることから、仮に北館第Ⅲ期礎石建物が南館と相似形配置であったとすると、東柱に相当する礎石据付穴の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

不明遺構 SX1151 Fig.121

第18次調査区の南東部に検出した。第Ⅱ期布掘り塀の南西角 SA1104 から南へ2m弱離れて位置する。遺構検出面上に角礫が9個と瓦片が集まった状態で検出された。掘方が削平により失われたと仮定すれば、SK1129・SK1150と同様に礎石据付穴である可能性も考えられる。瓦が集まっている部分を礎石抜き取り痕と考えることもできるが、礫は北側へ散らされたような状況であり、攪乱を受けているものと考えられる。

瓦は遺構とともに埋め戻して保存しており、この遺構に伴う出土遺物はない。時期の決め手がないため、礎石据付穴である可能性の提示に留めておきたい。(吉武)

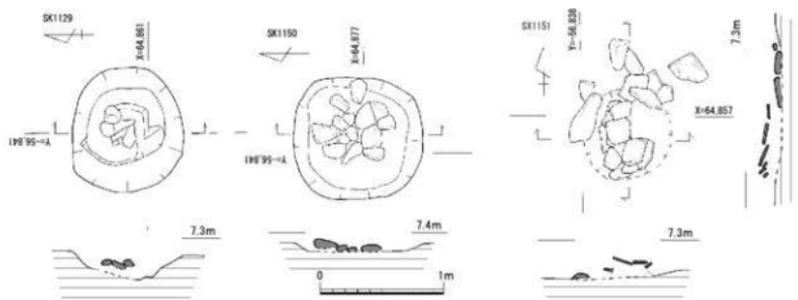


Fig.121 その他の建物関係遺構 SK1129・1150・SX1151 実測図 (1/40)

SP14272 Fig.11・122

第20次調査区の西辺近くで検出した柱穴である。直径90～100cmの略円形の掘り方に礫を詰められたもので、礎石の根固めと推定される。礫の間に瓦の小片が混じるが、時期は判別できない。

周辺に関連付けられる柱穴遺構はなく、建物遺構としてまとめることはできない。

SP14535 Fig.11・122

第20次調査の南東端近くで検出した。SB1228の南側礎石列に該当する位置にあたり、第三期礎石建物の礎石抜き跡の可能性が高い。

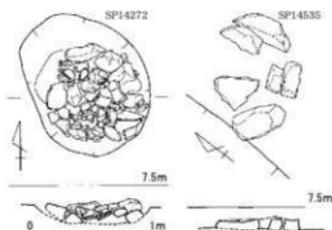


Fig.122 SP14272・SP14535実測図(1/40)

SB17701 Fig.123～125・128、PL.10

第23次調査グリッド4で検出した掘立柱建物跡である。

梁間二間、桁行五間以上で、柱間寸法は240cmをはかる。第29次調査のSP23320とSP23321が西の桁行に並ぶ可能性がある。一連の建物遺構とすれば、桁行は六間とな

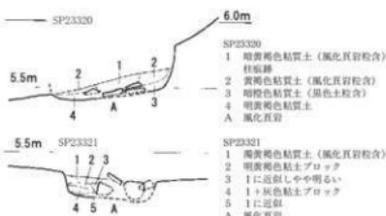


Fig.123 SB17701柱穴土層断面図(1/40)

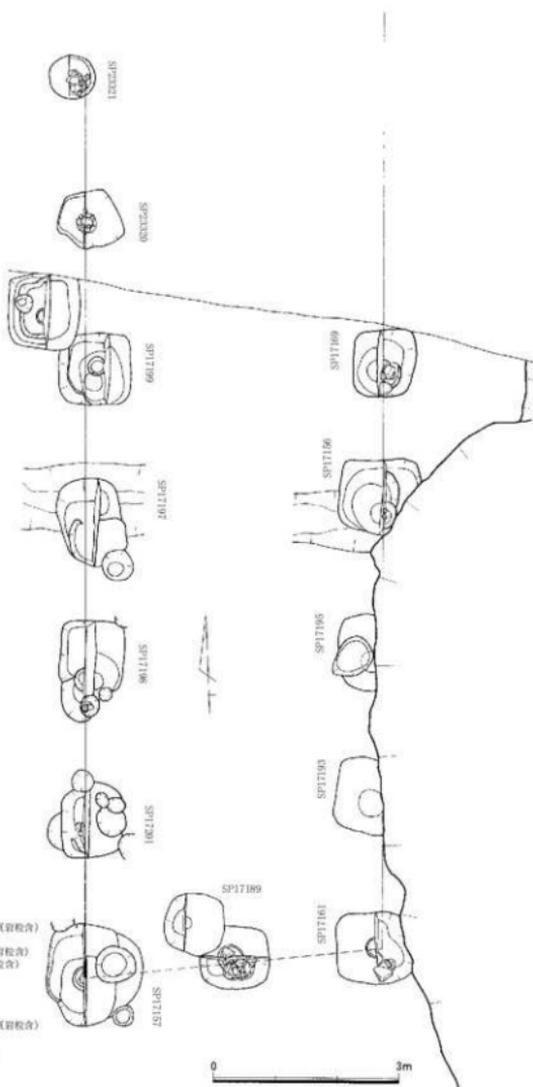


Fig.124 掘立柱建物SB17701平面図(1/80)

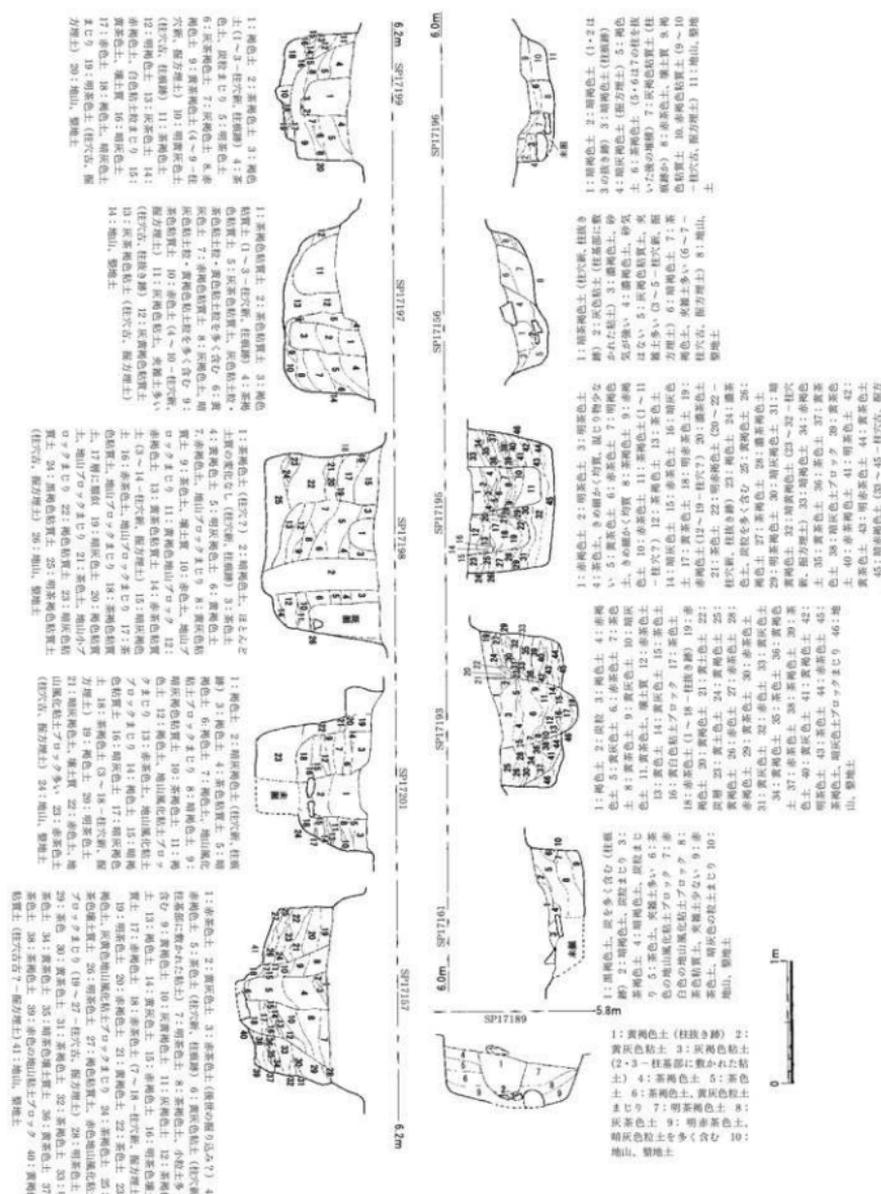


Fig.125 SB17701 土層断面図 (1/40)

る。この場合、第 23 次調査区と比べて柱筋が大きく西に触れることとなり、建物が歪んでしまうため、可能性を指摘するにとどめる。

東側の柱列は、南から 4 基が、中世以降の段切り造成で大きく削り取られている。SB17701 の東側は、段落ちとなっているため、底の有無は確認できない。また、後述する SB17702 の柱穴に切られており、これに先行することは明らかである。

各柱穴の土層断面を Fig.125 に示す。西側桁行の柱列は、柱掘方が重複しており、掘り直しが行われたことは明らかである。一方、東側および梁間の柱穴には、SP17156・SP17196 を除いて重複はない。柱痕跡には、掘方の底まで通っていないものが多い。掘方を掘削した後、柱材の長さに応じて根入れの深さを決めたものであろう。SP17199・SP17157・SP17189・SP17156 の柱痕跡の基部には、白色～灰白色の粘土が敷かれている。また、SP17201・SP17157・SP17189・SP17156・SP17196 の柱の下には、根固めの石が敷かれていた。

出土遺物を Fig.128 - 1・2 に示す。1 は SP17161、2 は SP17157 から出土した須恵器である。1 は、蓋として実測したが、高坏の坏部である可能性も考えられる。

いずれの遺物も、鴻臚館より古く、SB17701 の年代を示すものではない。(大庭)

SB17702 Fig.126 ~ 128, PL.10

第 23 次調査グリッド 4 で検出した掘立柱建物跡である。

梁間二間、桁行五間で、柱間寸法は 240cm をはかる。南側の梁間は中柱を欠くが、当該位置に不整形のくぼみがあり、柱穴の遺存部分の可能性がある。

西側の桁行の柱穴列は、北から二本まで検出し、三本目は掘方の一部を確認したものと考えられる。さらに南の延長は、調査区の外壁に入っているため、さらなる確認は行わなかった。

柱穴の土層実測図を、Fig.127 に図示する。柱の根入れは比較的深く、掘方の底面まで達するものが多いが、SP17187・SP17203 では底面に達していない。また、SP17187・SP17181・SP17202 の柱痕跡の基部には、白色～灰白色の粘土が敷かれている。柱痕跡からみて、柱材の直径は 20cm 程度であろう。

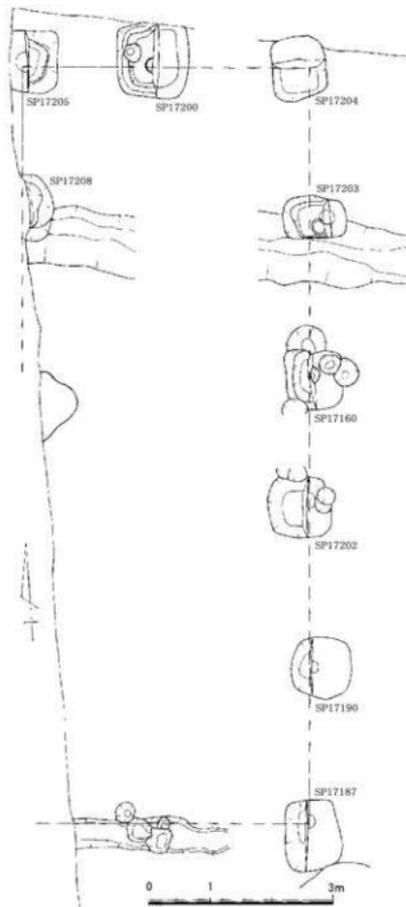


Fig.126 掘立柱建物 SB17702 平面図 (1/80)

出土遺物を Fig.128 - 3 ~ 10 に示す。3 は、須恵器の壺である。SP17160 出土。4 ~ 10 は、瓦である。4・5 は、縄目叩きの平瓦である。4 の凹面には、板撫で痕が認められる。SP17191 出土。5 の凹面は撫で調整、SP17200 出土。6 は、格子叩き 3Aa1 - 1 型式の平瓦である。凹面は板撫です。SP17191 出土。7 は、格子叩き 3Ac1 型式。SP17205 出土。8 は、複線格子の 3Ba1 型式である。SP17207 出土。9・10 は丸瓦である。SP17200 出土。9 は格子叩き 3Ab3 型式、10 は格子叩き 3Ac1 - 1 型式で、凹面はともに布目である。

出土遺物からは、SB17701 と SB17702 の年代を確定するには及ばず、9 ~ 10 世紀の幅で考えておきたい。(大庭)

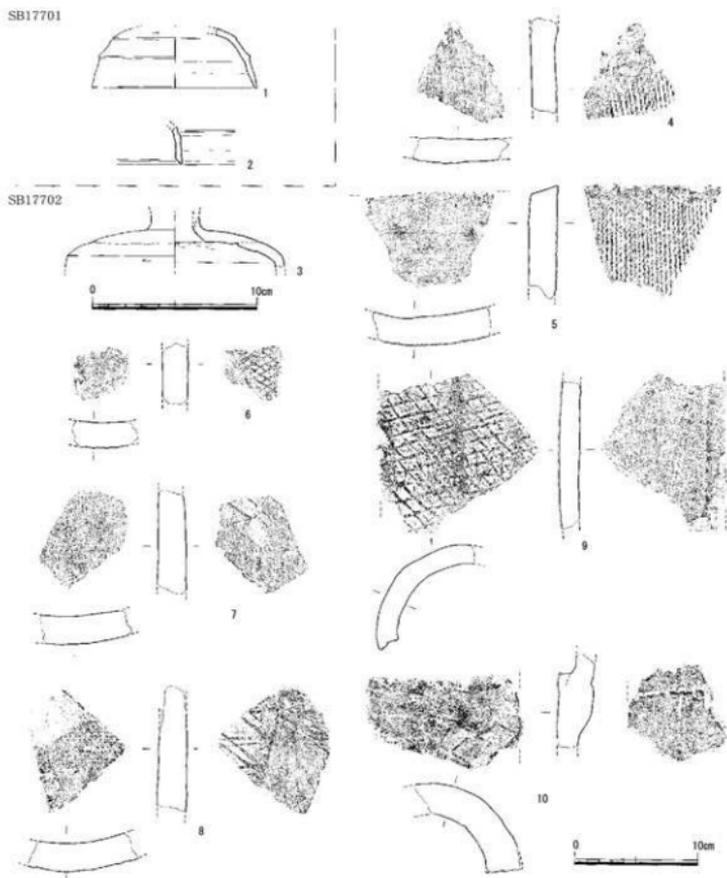


Fig.128 SB17701・SB17702 柱穴出土遺物実測図 (1/3、4 ~ 10 は 1/4)

建物遺構 SP18111・18366 Fig.129

第24次調査トレンチ2の南半の台地上に位置する。調査区の南東隅に柱穴が二つ南北に並んでおり、東及び南の調査区外へ展開する建物の北西角に当たる可能性がある。主軸方位はほぼ座標北を指す。風化頁岩岩盤に掘り込んでおり、後世遺構による削平が著しい。南側のSP18111は方形プランの掘り方で、径1.1m。深さ15cmで、南側では浅くなってプランが不明瞭となる。SP18366は不正な隅丸方形プランで、東西1.2m、南北1.1m。断面逆台形で、深さ15cm。底面に接して礫がある。

SP18111は磨滅した瓦小片が少量出土したが、図示できない。SP18366は遺物が出土していない。

建物遺構 SP18295・18400 Fig.129

第24次調査トレンチ2の南半の台地上で検出した。ともに土坑(次年度報告予定)の調査後に、その下層で検出した柱穴状の遺構である。東西に二つ並ぶが周囲にはこれと組みになるような柱穴は存在しない。SP18295は西側に位置し、土坑SK18290に切られる。南北に長い楕円形プランで、長径2.3m、短径1.0mを測る。SK18290と重複する部分を断ち割り調査し、深さ1.0mであることを確認した。東側のSP18400は土坑SK18286に切られる楕円形プランの柱穴で、長径1.3m、短径1.0mである。中央で断ち割ったが80cm下げたところで北寄りに柱痕跡を認めた。柱痕跡は径40cmの円形で深さ1.3m。

SP18295・18400 出土遺物 Fig.131

SP18295からは瓦片が少量出土した。1は平瓦片である。縄目叩きを施す。

SP18400からは須恵器、瓦が少量出土した。2は平瓦片で縄目叩きを施す。

建物遺構 SP18318・18320・18386 Fig.129

第24次調査トレンチ2の南半台地上に確認した。柱穴が東西方向に三つ並ぶ柱列で、東側は土坑に切られており、西側は調査区外に進出しよう。SP18318は西端の柱穴で隅丸方形プランをなし、東西1.0m、南北0.9m。近世ビットが二つ切り込む。断面逆台形で深さ25cm。柱穴南東寄りに柱痕跡がある。中央のSP18320は隅丸長方形プランで、東西1.2m、南北1.1m。断面逆台形で深さ30cm。柱穴の南東側に突出する部分があり当初は別の小柱穴と捉えたが底面や深さが柱穴本体と共通するため柱痕跡と判断した。柱痕跡には瓦が詰まっており、抜き取った後に瓦を投げ入れたか。SP18386は東端の柱穴で、中央を攪乱溝が走る。円形に近い隅丸方形プランで径1.3m。断面逆台形で深さ60cm。柱穴の南東に偏して柱痕跡がある。以上3つの柱痕跡を結んだ主軸方位は、座標北から87°東偏する。

SP18318・18320・18386 出土遺物 Fig.131

SP18318・SP18320は遺物が出土しなかった。SP18386は瓦が少量出土した。

図示した遺物はSP18386出土の平瓦片で、3は縄目叩き、4は5B類、5は3Aa1-2類、6は3Ab-5類の格子叩きを施す。

建物遺構 SP18370・18606・18607・18610 Fig.130

トレンチ2の南端の壁際で一部を検出した。調査区壁に沿って4つの柱穴が並ぶようにみえる。いずれも調査区壁にかかっており、個々の柱穴規模は不明である。柱列全体の主軸方位は不明確だが、第I～III期の建物主軸とは合致していない。

SP18370・18606・18607・18610 出土遺物 Fig.131

SP18370・SP18606・SP18607はともに瓦小片が少量出土した。SP18610は遺物が出土しなかった。

7・8は平瓦片で縄目叩きを施す。7はSP18606出土、8はSP18607から出土した。

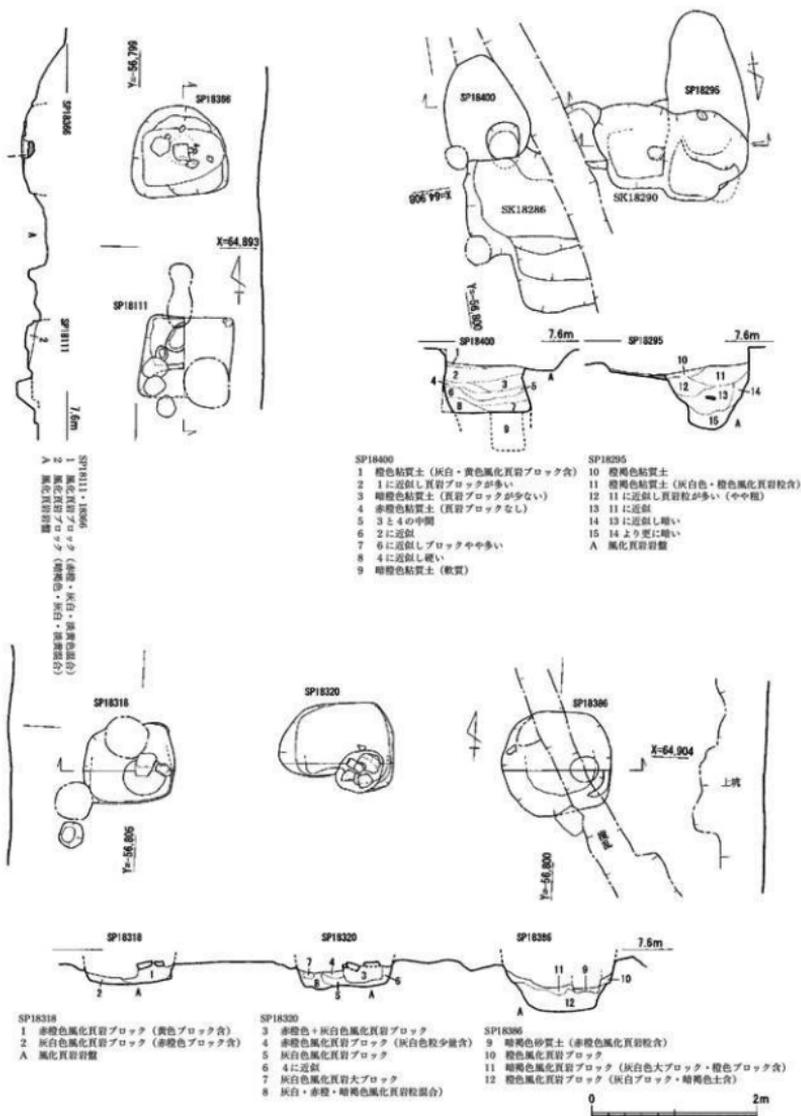


Fig.129 建物関係遺構 SP18111・18366、SP18295・18400、SP18318・18320・18386 実測図 (1/60)

建物遺構 SP18403・18404 Fig.130

トレンチ 2 の南東部に検出した。形状や深さが類似する二つの柱穴が東西に並ぶ。東及び南の調査区へ伸びて行く建物を想定したが、調査区壁まで距離があり、独立した 2 本の柱で構成される構造物を想定すべきかもしれない。柱穴はともに隅丸方形プランで、径 1.2 ~ 1.4 m、深さ 1.2 m。周辺の柱穴に比べてかなり深く、北へオーバーハングしており、南へ傾けて柱を据えていた可能性がある。

SP18403・18404 出土遺物 Fig.131

SP18403 からは須恵器、瓦が、SP18404 からは土師器、奈良時代須恵器、瓦が少量出土した。

9・10 は平瓦片で縄目叩きを施す。9 は SP18403、10 は SP18404 出土。奈良時代の遺構であろう。

礎石 SX19506 Fig.130

トレンチ 3 の中央東壁際に確認した礎石と考えられる遺構である。礎石はやや動いているが原位置に近い。45cm × 80cm で鴻館跡の礎石としては小型の部類に入る。掘り方は不正隅丸方形プランで径 0.9 m 弱。断面皿状で深さ 15cm。礎石下に根固め石 3 個がみえる。礎石先端は遺構検出面とほぼ同じレベルにある。北館第Ⅲ期礎石建物 SB1228 の東端から直角に北へ線を引くと、この礎石の約 3 m (10 尺) 東側を通る。掘り方から遺物は出土しなかった。(吉武)

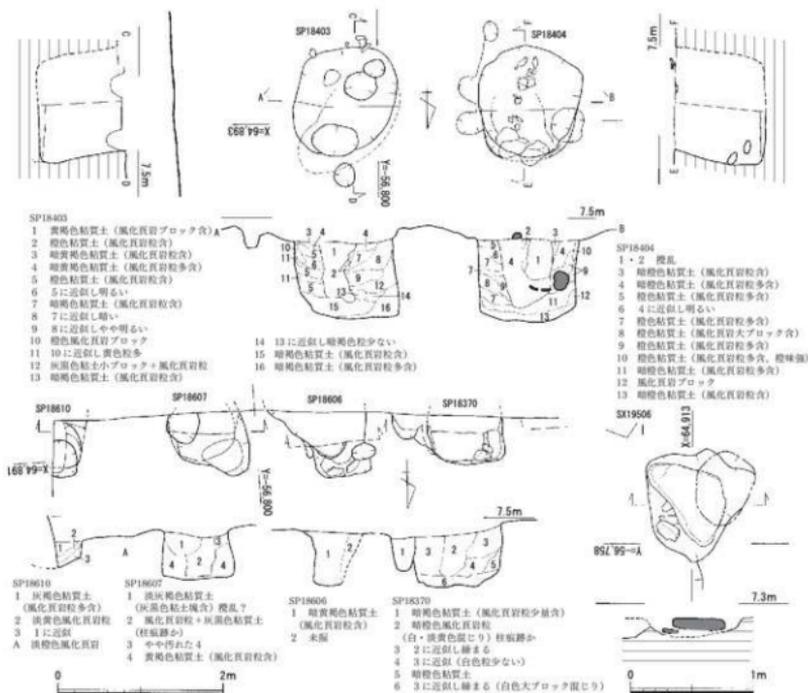


Fig.130 建物関係遺構 SP18403・18404、SP18370・18606・18607・18610(1/60)、SX19506(1/40) 実測図

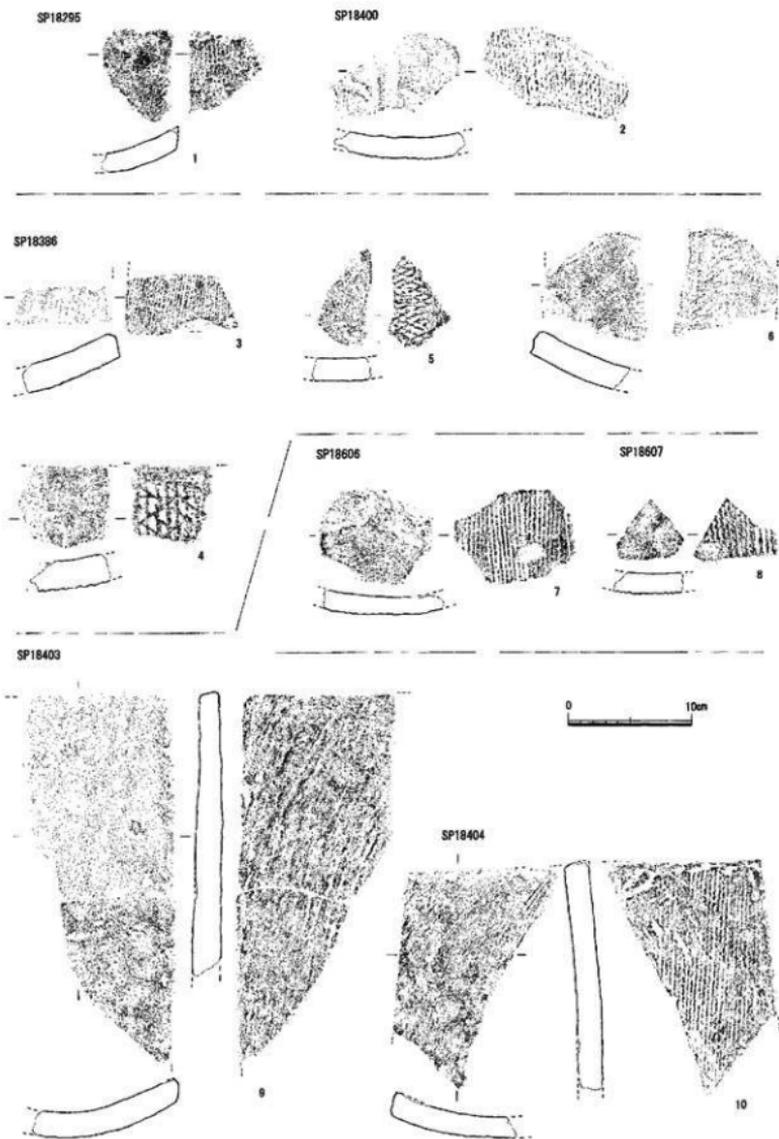


Fig.131 SP18295·18400、SP18386、SP18606·18607、SP18403·18404 出土遺物実測図 (1/4)

4. 北館の北側～東側の斜面と低地

第V期調査は旧平和台野球場北半を対象とし、鴻臚北館の地形、東門入口の造作、海岸へと至る景観等の解明を目的として実施した。文化庁指導等により遺構保存を優先するために第IV期調査までのような全体の表土を剥ぐ面的調査方法とはらず、幅10mの大型トレンチを設定して必要に応じてトレンチの拡張や追加を行う方法を用いた。当初に設定したトレンチは4本で、西から順に1～4とし、その後の調査で2ヶ所を追加し、最終的にトレンチ6まで調査を実施している。以上の調査により鴻臚館の北側が斜面となっており約3m落ち、海岸へ至る砂丘へと続くこと、東側は門の前面に広場状の平坦地があって雑壇状に落ち、緩やかに東へ傾斜すること等が明らかとなった。残念ながら中世段階で集落等の利用を受けたことによる破壊が著しく、斜面や斜面下の遺構の状況が今ひとつ明確ではないが、鴻臚館が比高差3m以上の高台に建つ立体的な構造であったことや、斜面下の砂丘上にも構造物を展開させていたことが明らかとなった。また、斜面や砂丘面、東側低地面には、福岡城築城時に分厚く盛土がなされ、その上面に城郭関連の遺構があるため、下層鴻臚館関係遺構の調査に先立ちこれらの調査を併せて行い、必要に応じて遺構保存に配慮した。以下、西側の調査区から時計回りにトレンチ1、2、6、3、4、5、及び第IV期調査区で東斜面の調査を行った第23次調査グリッド4の順に報告する。(吉武)

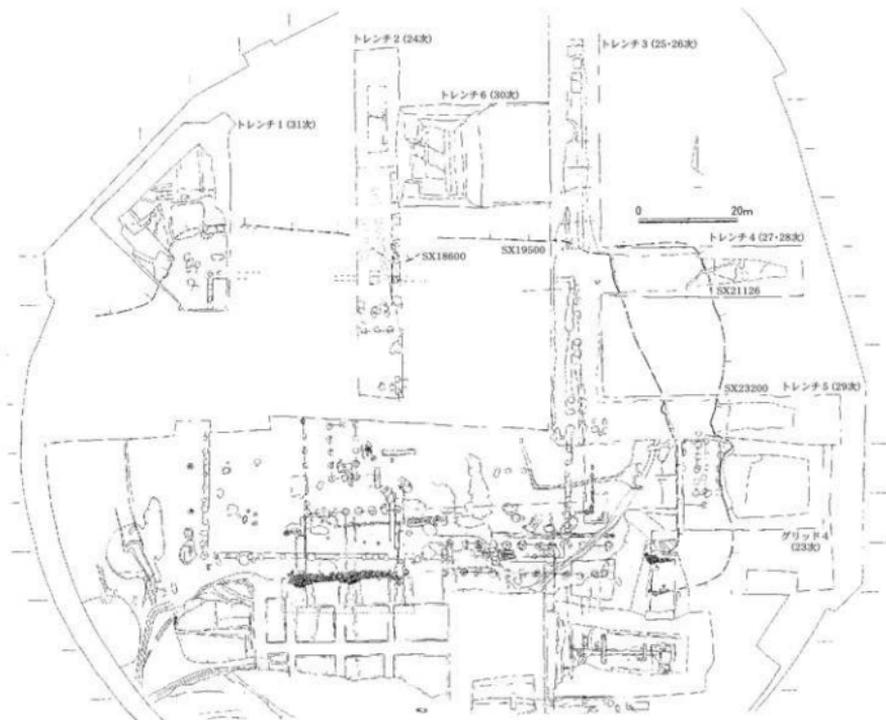


Fig.132 北館北側～東側の斜面・低地部の遺構配置図 (1/1,000)

(1) トレンチ1 Fig.133

トレンチ1は北館の北東隅にあたり、今回の調査では北側の斜面や斜面下の状況、西側のつなりの状況を確認することを目的とした。北側の斜面については、中世後半期の造成で埋められており、斜面に沿って約50～100cmの厚さがある。造成土の中には多量の瓦を含んでいる。斜面下は厚さ約30cm前後の造成土を確認したが、北側にいくにつれて薄くなる。これらを除去すると、鴻臚館の終末期の平坦な整地面が検出できた。北側斜面に関しては Fig.133 に示すように概ね鴻臚館の終末期の旧地形が遺存していることが分かった。斜面の落ち際と斜面下との比高差は約3.2～3.5mを測る。西側については Fig.133 のような矩形となる。但し、斜面の傾斜は北側ほどきついものではない。調査区の南端から約7m北に基盤の風化頁岩と整地層の境界を確認した。Ⅱ期の布掘り堀はこの境界部分に掘り込まれていることから、布掘り堀の造営に先だって、整地が行われたと考えられる。今回確認した旧地形の矩形のコーナーと中央の堀の西側の立ち上がり、南館の西側の造成ラインはほぼ一直線上に並ぶことから、このラインが設計の基準線の一部を示すものと推測される。(菅波)

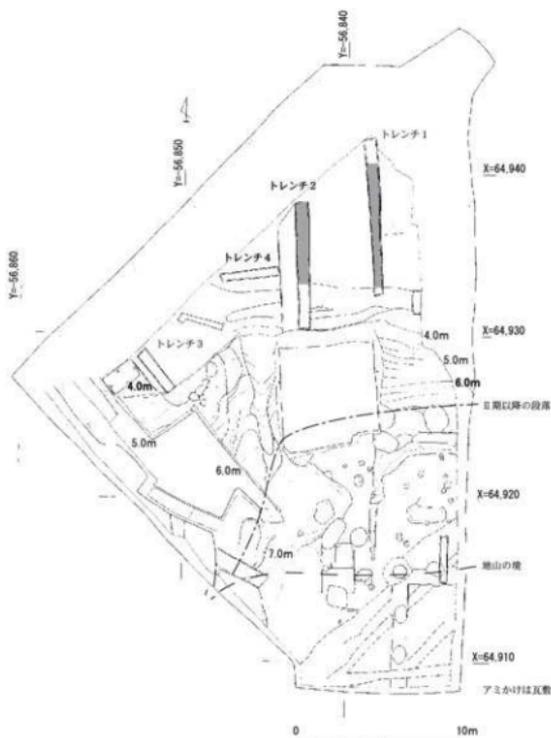


Fig.133 トレンチ1遺構配置図 (1/300)

斜面下については、築地塀などの外郭施設や整地の状況を確認するため、平坦な整地面に4本のトレンチを設定した (Fig.134)。

トレンチ1

東端の南北トレンチで、斜面の下端から北側約9.5mを測る。中央付近には格子目叩きの瓦を含む掘り込みが見られる。上面の標高約3.5mから約40cm下の深さまでは黄橙色～黄灰色粘質土の整地層となる。整地層の下面では縄目叩きの瓦を主体とした瓦敷層を検出した。瓦は10cm四方程の大きさで、隙間なく敷きつめた状態であった。瓦敷層の上面の標高約3.25mを測る。瓦の表面はあまり風化しておらず、瓦が露出した状態ではなかったと考えられる。瓦敷きの下面は赤褐色細砂層となり、斜面下に堆積した砂丘の上面と考えられる。整地層を概ね上層、下層の2層に分けられ、Fig.135-2は上層から出土した軒丸瓦である。3は下層で瓦敷の中から出土した鴻臚館式の軒平瓦である。

トレンチ2

中央の南北トレンチで、斜面の下端から北側約8mを測る。斜面の下端付近では中世後半の遺物を含む溝の掘り込みが見られる。トレンチ2においてもトレンチ1同様上面に標高約3.85mから約70cm下まで黄橙色～黄灰色粘質土の整地層を確認した。整地層の下面では瓦敷層を検出した。瓦敷層の上面の標高約3.15mを測る。トレンチ1に比べると密度が低く、西側につれて傾斜している。瓦敷層の下層は赤褐色細砂となる。トレンチ南側のサブトレンチでは瓦敷層の境とその下層の状況をした。瓦敷層が途絶えた南側は斜面に向かって緩やかに立ち上がる。その下層は地山白色ブロックを含む赤褐色粘質土の整地層となり、北側と比べると粗いものである。さらに下層は古墳時代前期の遺物を含む暗褐色細砂で、鴻臚館築造以前に形成された砂丘上面の包含層と考えられる。この層を約20cm掘り下げると、遺物を含まない黄灰色細砂層となる。上面の標高約3mを測る。この層はおそらく基盤の風化頁岩の斜面下まで延びるものと考えられる。遺物は整地層の上層で1の鴻臚館式軒丸瓦、4の軒平瓦 (666A型式) が出土した。下層からは6の土師器の移動式甕が出土した。7～9は暗褐色細砂から出土した土師器で、7は甕、8は蛸壺で口縁付近に穿孔がある。9は碗である。

トレンチ3

中央の東西トレンチで、トレンチ2に直行して西側約3.5mを測る。瓦敷層の広がりを確認するため設定した。トレンチ3においても標高約3.7mから約50cm下まで黄橙色～黄灰色粘質土の整地層を確認した。但し、整地層の下層では瓦はほとんど出土せず、赤褐色細砂となり、瓦敷層はここまでは広がらないことが分かった。

トレンチ4

西端の南北トレンチで、斜面の下端から北側約3.0mを測る。この場所では1～3までに見られた黄橙色～黄灰色粘質土の整地層ではなく、標高約4mから約100cm下までトレンチ2に見られた地山白色ブロックを含む赤褐色粘質土の粗い整地層となる。この層の下層は暗褐色細砂となる。

4本のトレンチの状況から斜面下には砂丘層の上面に瓦敷を施した整地層があることが分かった。この整地は何時期かに分けて行われ、鴻臚館の終末期段階では約70cmのかさ上げが行われたと考えられる。但し、西側には瓦敷層が見られず、その境が先に示した旧地形の矩形のコーナーに一致することから、瓦敷も一連の規格的な造成に関わるものと考えられる。造成の時期であるが、鴻臚館式軒平瓦の存在や縄目叩きを主体とする瓦の状況からII期以降のものと考えられる。瓦敷層の役割については砂丘の上面に敷きつめられ、上面は整地でおおわれていたことから、整地面の補強のための下部構造と考えられる。瓦敷層が南側で途絶えるのはその先は上面を3m以上の盛り土を行ったため、そのような補強は必要なかったと推測される。

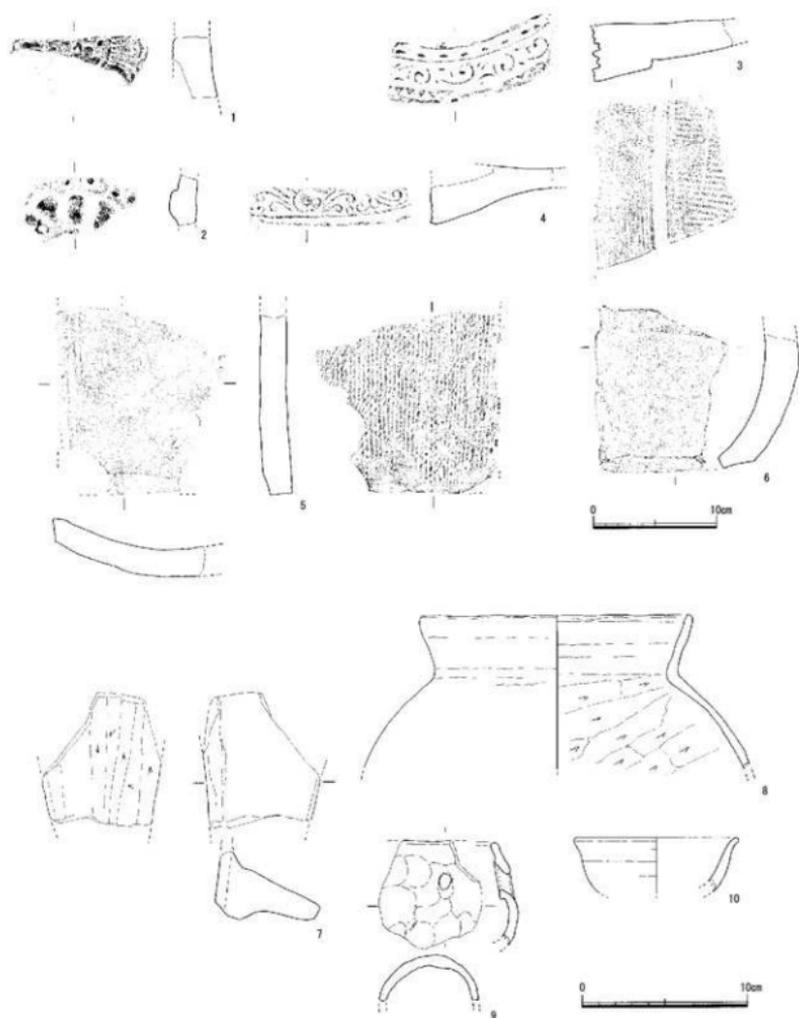


Fig.135 崖下出土遺物実測図 (1/4、1/3)

それではこの補強が何のために必要だったかというのが問題となるが、整地層の上面に築地塀などの構造物を敷設するための地行ということも想定される。しかし、トレンチ1ではそのような痕跡は確認できなかった。(菅波)

(2) トレンチ2 Fig.136

第V期調査区に設定した西から2番目のトレンチで、幅は10m、南北は対象地いっばいに設定し70mを測る。トレンチ南側の1/4強は風化頁岩岩盤が露出する台地であり、北側は斜面(SX18600)となって落ち、低地(砂丘)へと連なる。落ち際は築城前に最大1mの削平を受けている。調査概要の項で述べたとおり、調査区中央部に福岡城三の丸武家屋敷建物の柱穴(礎石据付穴)が並んで検出されたために保存を図り、築城盛土を除去しての下層鴻臚館関係遺構の調査は限定的なものとなった。調査は、調査区東壁沿いに設けたサブトレンチ1、調査区中央に布掘り堀の確認のために設けたサブトレンチ2、及び北端部に広めに設けたサブトレンチ3によって実施した。サブトレンチ1では布掘り堀SA18601を検出し(79頁参照)、この3m北寄りで斜面SX18600を確認した。サブトレンチ3では築城盛土を除去した地表下5m弱に砂丘層を確認し、砂丘の上層に瓦が堆積する状況SX18500を検出した。

斜面 SX18600 Fig.137・138、PL.15

サブトレンチ1で検出した鴻臚館北面の斜面である。幅2mのサブトレンチ内において、地表下4.5mまで掘り下げたが、それ以上の掘削は危険と判断し作業を中断した。

中世陶磁器を含む築城盛土を除去すると、炭化物を多く含む暗褐色土があらわれ、旧表土(①)とみられる。この下層には間層を挟んで炭化物を含まない黒褐色土があり、これも旧表土(②)と考えられる。この2枚の旧表土に挟まれた状態で鴻臚館建物の礎石とみられる礫が6個出土した。2枚の旧表土層の下層は斜面に自然堆積した土層で遺物がほとんど出土せず、これを除去すると風化頁岩岩盤が削られた斜面があらわれる。斜面の傾斜角度は48°で、人為的に削られた状況を示す。2層の旧表土層のうち上層の表土①から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行った結果、AD650～670の年代値が出ているが、客観的にみて表土①は鴻臚館廃絶後の中世のある時期に、表土②は鴻臚館時代のある時期に生成された土層と考えられよう。

鴻臚館の北斜面の落ち際はトレンチ1とトレンチ

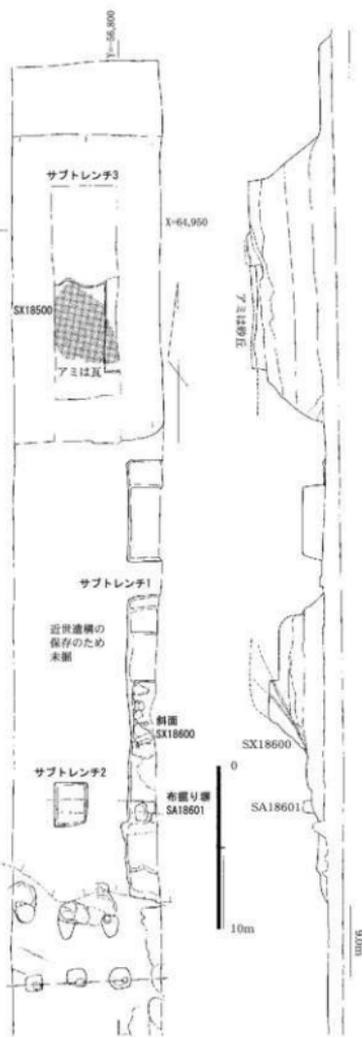


Fig.136 トレンチ2北半部下層遺構配置図 (1/300)

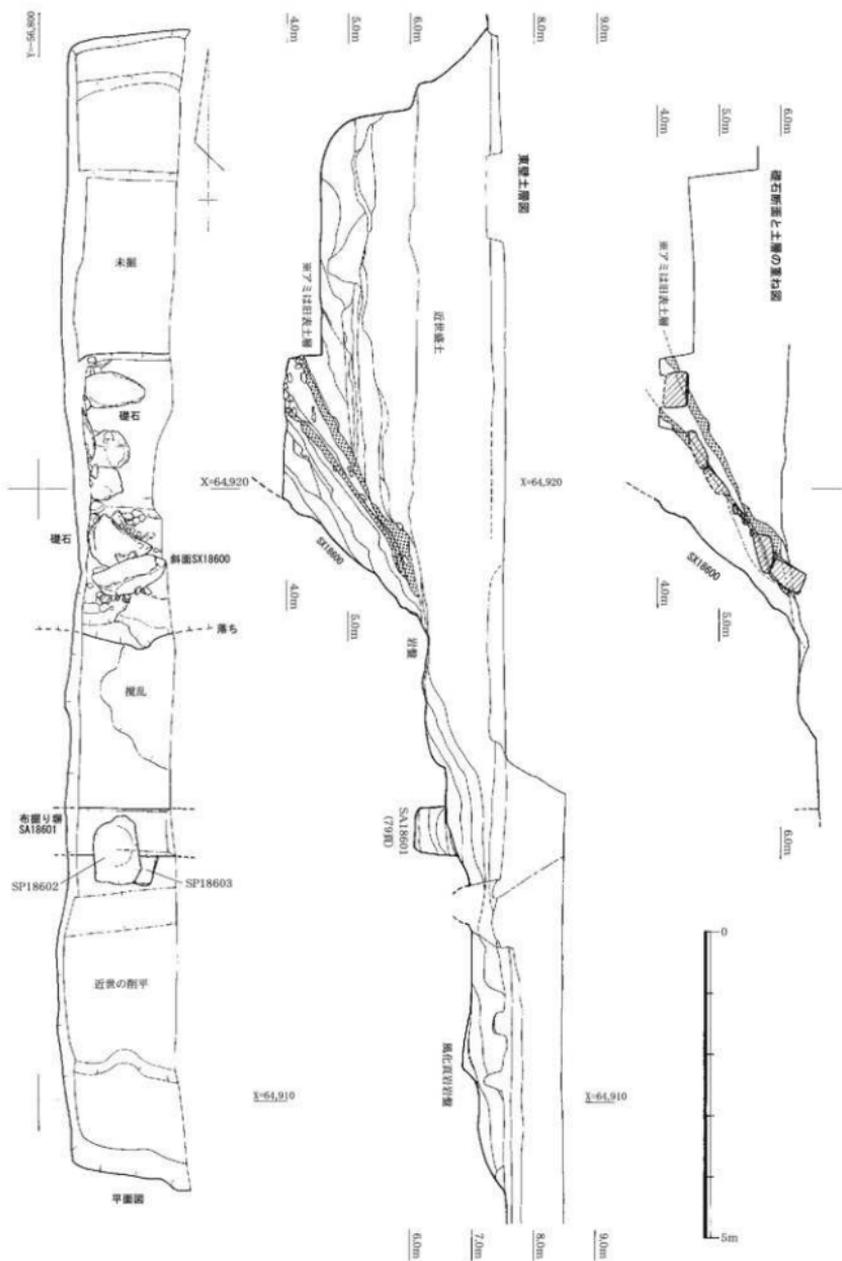


Fig.137 斜面SX18600実測図(1/80)

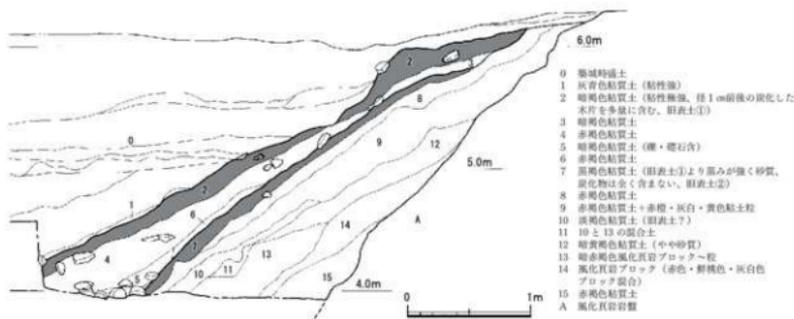


Fig.138 斜面 SX18600 土層断面図 (1/40)

3でも確認しており、これを直線で結んだ場合 SX18600 の6mほど北を通ることになる (Fig.132)。調査範囲が幅2mと狭いため憶測に過ぎないが、鴻臚館北面が中央部分のみ内湾するような状況であったか、あるいは古代のうちに地滑りで崩落したことによってそのような地形になったという可能性が考えられようか。

SX18600 出土遺物 Fig.139

斜面の堆積土から土師器、須恵器が少量出土した。

1は須恵器高台付坏である。体部は丸みを持ち、高台は押しつぶしたように外へ広がりが円盤状となる。口径12cm。金属器模倣の須恵器か。2は須恵器甕の口縁部小片である。口縁端部を肥厚させ断面方形に作る。ともに旧表土①と②の間層から出土した。

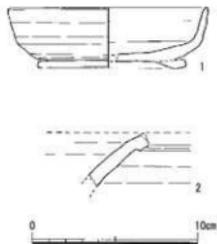


Fig.139 SX18600 出土遺物実測図 (1/3)

瓦の散布 SX18500 Fig.140, PL.15

サブトレンチ3で検出した。風成砂上に瓦が堆積した遺構である。平面図にアミで示した範囲に瓦が広がっており、薄いアミで示した範囲はやや疎らに分布する。北側は福岡城築城時に浸食を受け、東西の調査区壁に一部かかるが、大きく広がっていくものではなく、局所的に瓦が集中する遺構であると考えられる。瓦は土層図の17層に集中しているが、敷き詰めたような状況ではなく、磨滅した細片が多い。17層の下の18・19層は風化頁岩由来の粘土層や風化頁岩粒のブロックで、19層は整地層の可能性があり、その下の21層の褐色砂層まで瓦片を含む。23層は風成砂層で、上層に風成砂特有の網状のダクト層が含まれ、遺物は含まない。

風成砂に古代遺物包含層が直接乗っている状態であり、砂丘が古代に削平され、このような包含層が形成されたものと考えられる。斜面 SX18600 とは24m離れており、斜面南側の台地上の建物に直接由来する瓦とは考えられない。出土遺物には5世紀代から11世紀頃までのものが含まれており、古代の遺構であれば鴻臚館の終末期のものと考えられるが、隣接するトレンチ6の所見からすると中世の造作の可能性も考えられよう。

SX18500 出土遺物 Fig.141 ~ 145, Tab.8

土師器、須恵器、越州窯系青磁、瓦片がコンテナ54箱出土した。瓦の多くは磨滅しており、小片が大半を占める。

1は須恵器坏蓋である。短いかえりが付く。2は須恵器高坏である。外面に凹線と沈線を巡らせ、間に櫛描列点文を充填する。3は須恵器甕の胴部片である。外面に格子叩き、内面に平行線文の当て具痕が残る。4～6は越州窯系青磁である。4は碗の口縁部片で全軸。5は鉢の高台か。6は碗の底部で、全軸。内底と高台畳付に細い目跡が残る。7は瓦玉である。

8～13は軒丸瓦である。8は049型式で、北館に多くみられる鴻臚館終末期の瓦である。9は132型式。10は170A型式。11は鴻臚館式(223型式)、12は143型式、13は208Bb型式である。14は軒平瓦で666A型式。

15～45は格子叩きを施す丸瓦および平瓦である。鴻臚館出土瓦叩打痕分類の順に掲載している(分類基準については「鴻臚館跡21」14～41頁参照)。15は丸瓦で3Aa1-2類、16は平瓦で3Aa2-2類、17は3Aa2-2類の平瓦で、敲打痕文字瓦「今行」。18は丸瓦3Aa2-2類で全面に軸がかかる瑠璃瓦である。19・20は平瓦で3Ab-1類。21は平瓦で3Ac1-3類。22は丸瓦で3Ab-6b類。23・24はともに丸瓦で3Ac2-2類。25は平瓦で3Ac2-2類。26・27は丸瓦、28は平瓦でいずれも3Ac2-4類。29～33は平瓦で3Ba2-1「賀茂(903D)」銘。34・35は平瓦で3Ba2-2類。36は平瓦で4A類。37・38は平瓦で4Ba類。39・40は丸瓦、41～43は平瓦でともに4Bb類。44は平瓦で4Bb類に類似するが、やや異なる。4Bb'類としたが、3Ac1類あるいは6F類に含まれるかもしれない。45は平瓦で6F類である。ちなみに3Ac2-2類や4Ba類の叩きの瓦は南館では1点も出土せず、4類瓦の出土もまれである。

出土遺物は鴻臚館の終末期までのものを含む。(吉武)

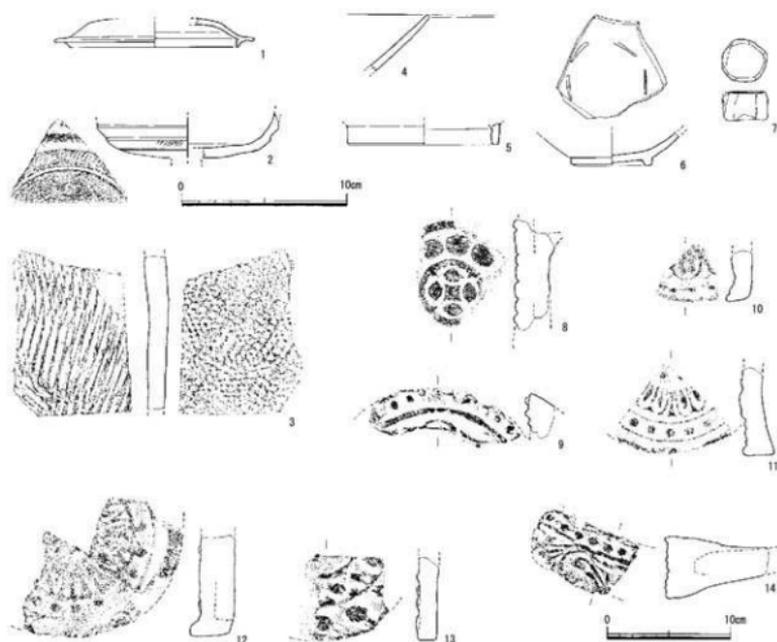


Fig.141 SX18500 出土遺物実測図1 (8～14は1/4、他は1/3)

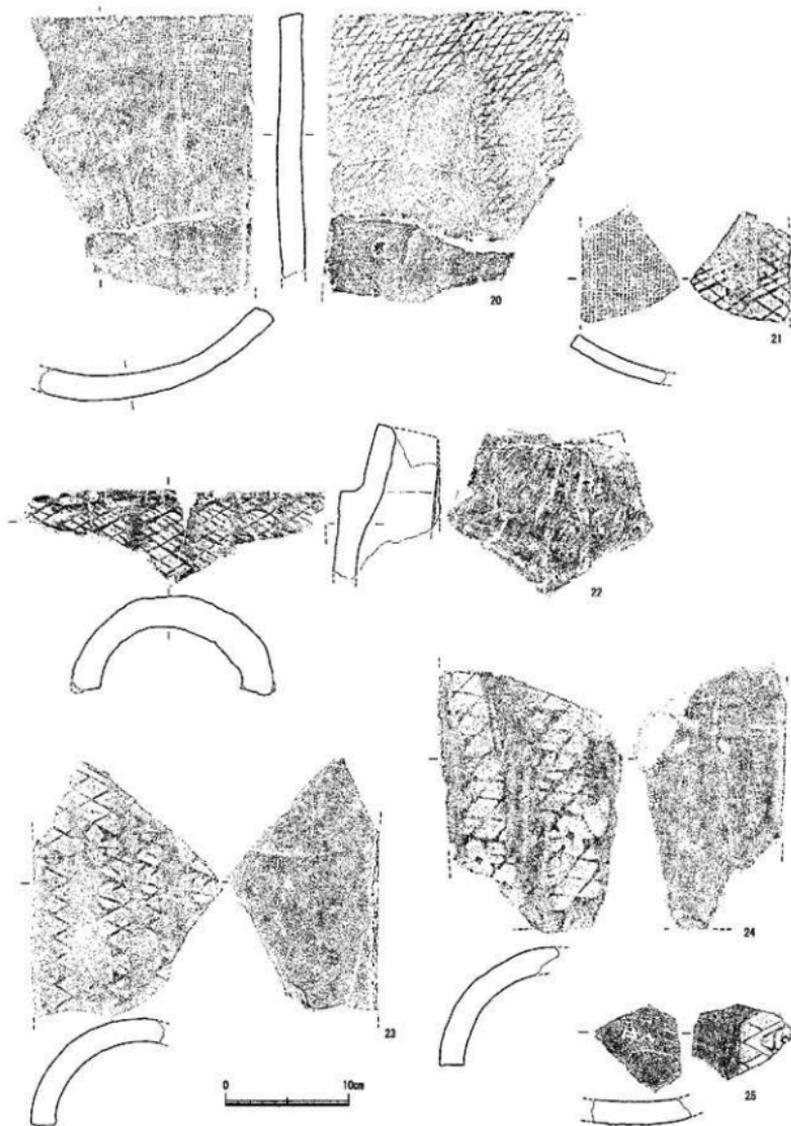


Fig.143 SX18500 出土遺物実測図3 (1/4)

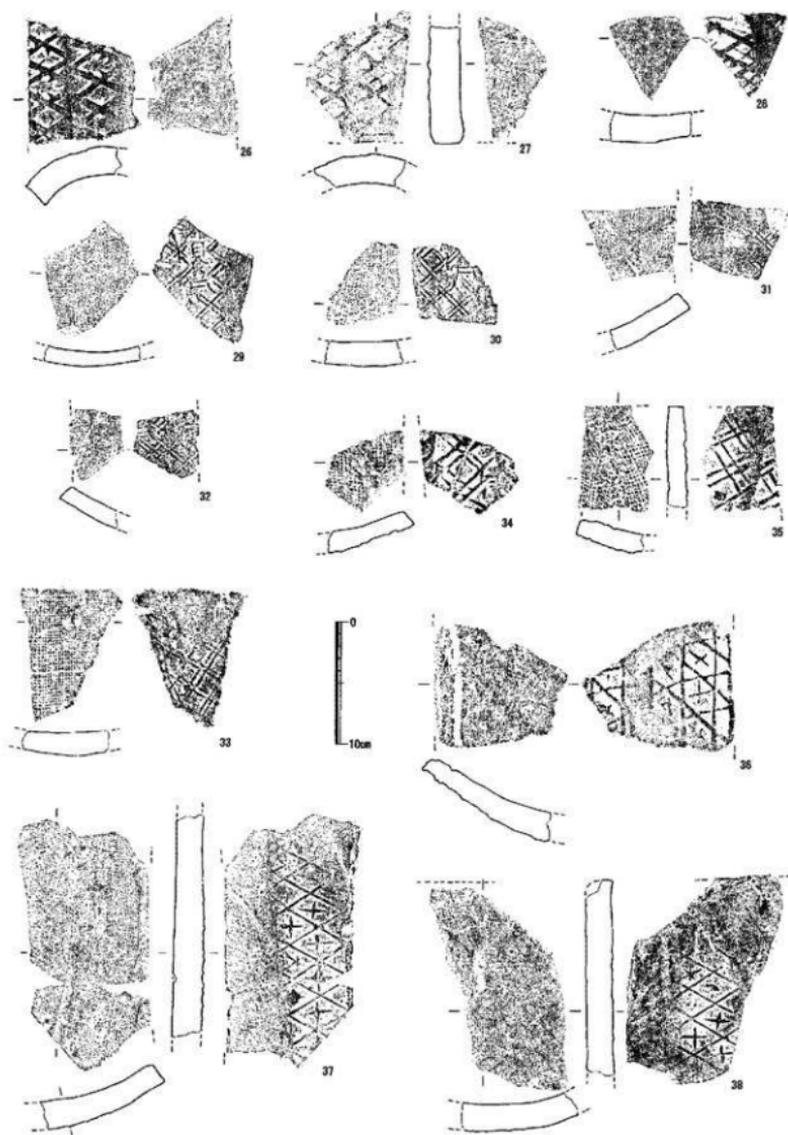


Fig.144 SX18500 出土遺物実測図4 (1/4)

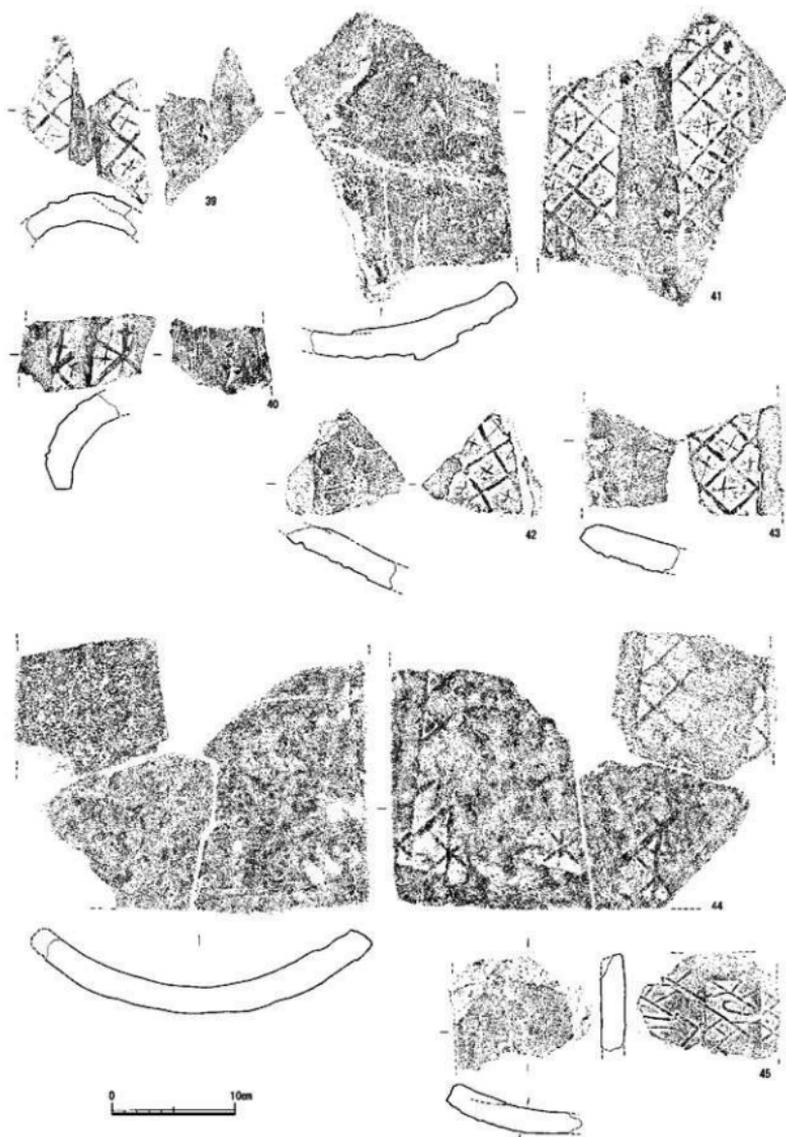


Fig.145 SX18500 出土遺物実測図 5 (1/4)

(3) トレンチ6 Fig.146

トレンチ6は北館の中央にあたる。上層で福岡藩の大身屋敷の遺構が検出されたため、それらの遺構を避けて下層のトレンチを設定した。このトレンチではトレンチ1やトレンチ3で確認した斜面下の状況を補足するために、斜面下の整地の状況、築地塀などの建造物の確認することを目的とした。

トレンチ1

東側の南北トレンチである。中央付近には中世後半の溝の掘り込みが見られる。鴻臚館所用瓦を多量に含む。8層以下が古代の整地層と考えられる。整地層には各時期の瓦を含んでおり、複数期の整地が行われたことが分かる。整地層の厚さは約40～50cmを測る。その下面では瓦敷層を検出した。瓦は縄目叩きを主体としている。瓦は10cm四方の大きさと、隙間なく敷きつめた状態であった。瓦敷層の上面の標高約3.6mを測る。瓦の表面はあまり風化しておらず、瓦が露出した状態ではなかったと考えられる。瓦敷きは中世の溝により掘り込まれており、北側の広がり是不明確であるが、溝の掘り方の中で収まるものと考えられる。瓦敷きの下面は黄褐色細砂層となる。

トレンチ2

西側の南北トレンチである。中央付近には中世後半の溝の掘り込みが見られる。鴻臚館所用瓦を多量に含む。8層以下が古代の整地層と考えられる。整地層には各時期の瓦を含んでおり、複数期の整地が行われたことが分かる。整地層の厚さは約40～50cmを測る。その下面では瓦敷層を検出した。瓦は縄目叩きを主体としている。瓦は10cm四方の大きさと、隙間なく敷きつめた状態であった。瓦敷層の上面の標高約3.6mを測る。瓦の表面はあまり風化しておらず、瓦が露出した状態ではなかったと考えられる。瓦敷きは中世の溝により掘り込まれており、北側の広がり是不明確であるが、溝の掘り方の中で収まるものと考えられる。瓦敷きの下面は黄褐色細砂層となる。(管波)

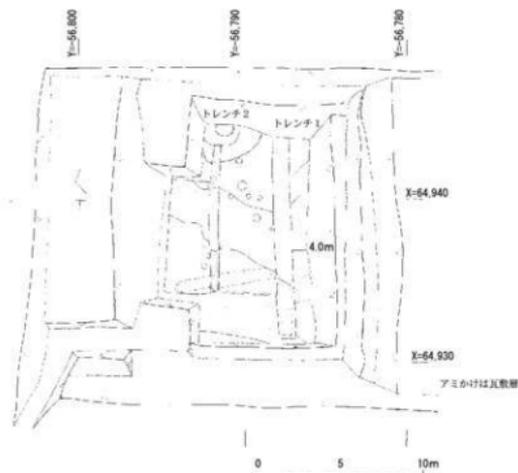


Fig.146 トレンチ6遺構配置図 (1/300)

- トレンチ 1 土層
- | | | |
|-------------------------------|------------------------------|--------------------------------|
| 1 赤褐色粘質土 (中世整地) | 13 赤褐色粘質土 (小ブロッケ状、整地層) | 9 赤褐色粘質土 (地山白色小ブロッケ混じり、整地層) |
| 2 混土瓦層 (中世整地) | 14 暗黄灰色細砂 (包含層もしくは砂丘上面の腐食土層) | 10 赤褐色粘質土 (整地層) |
| 3 暗黄褐色粘質土 (瓦を含む、中世整地層) | 15 黄褐色細砂 (縦状、砂丘層) | 11 混土瓦層 (整地層) |
| 4 混土瓦層 (中世整地) | 16 黄灰色細砂 (砂丘層) | 12 やや暗い黄灰色粘質土 (整地層) |
| 5 混土瓦層 (中世埋理土) | | 13 赤褐色粘質土 (整地層) |
| 6 暗黄灰色粘質土 (中世埋理土) | | 14 暗黄灰色粘質土 (整地層) |
| 7 黄灰色粘質土 (中世埋理土) | | 15 暗黄灰色細砂 |
| 8 赤褐色粘質土 (地山白色小ブロッケ混じり、整地層) | トレンチ 2 土層 | 16 黄灰色粘質土 (やや砂質、整地層) |
| 9 黄灰色粘質土 (地山白色小ブロッケ混じり、整地層) | 1 黄灰色粘質土 (中世包含層) | 17 黄灰色粘質土 (やや砂質、整地層) |
| 10 混土瓦層 (整地層) | 2 黄灰色砂質土 (中世埋理土) | 18 黄灰色砂質土 (赤褐色粘質土小ブロッケ混じり、整地層) |
| 11 やや暗い黄灰色粘質土 (瓦を少し含む、砂質、整地層) | 3 混土瓦層 (中世埋理土) | 19 黄褐色細砂 (包含層もしくは砂丘上面の腐食土層) |
| 12 黄灰色粘質土 (砂を含む、整地層) | 4 やや暗い赤褐色粘質土 (中世埋理土) | |
| | 5 混土瓦層 (中世埋理土) | |
| | 6 暗褐色粘質土 (中世埋理土か) | |
| | 7 暗黄灰色粘質土 (中世埋理土か) | |
| | 8 混土瓦層 (中世埋理土) | |

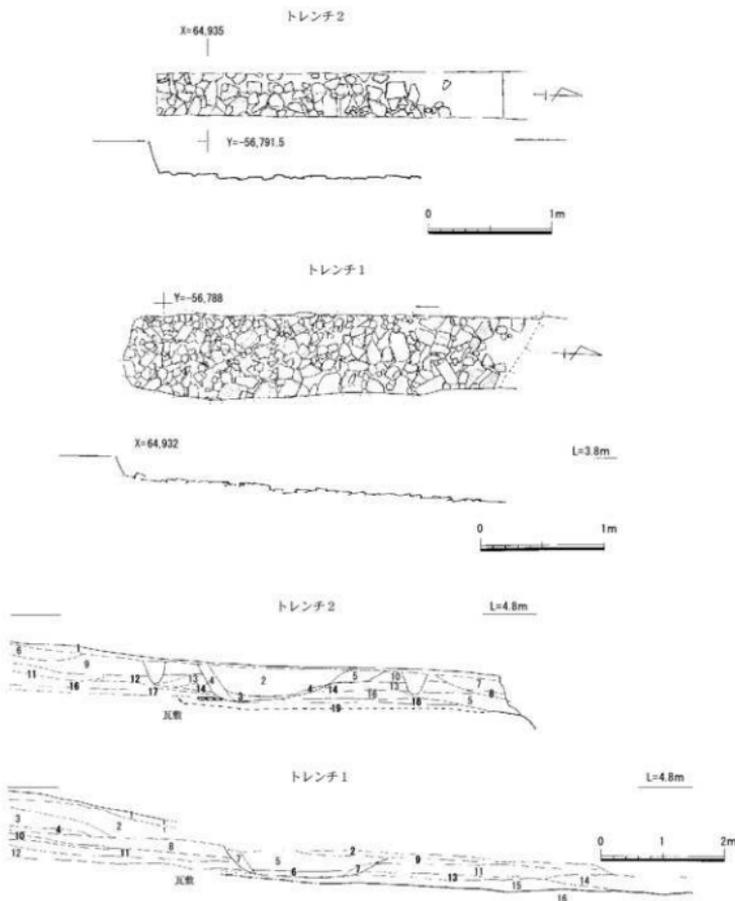


Fig.147 整地層下層瓦敷き遺構及び崖下トレンチ土層実測図 (1/40、1/80)

出土遺物 (Fig.148 ~ 150)

トレンチ 6 からは中世の整地層から多量の鴻臚館所用瓦が出土している。ここで掲載した遺物は主に中世の整地層と古代の整地層の上層から出土したものである。

1 ~ 14 は 1 トレンチから出土した軒丸瓦である。1 は 065 型式で、瓦当面はほぼ完形である。2 ~ 6 は 132 型式である。丸瓦部分は欠損している。7 は 170A 型式で、瓦当面はほぼ完形である。8、9 は 208Ba 型式である。12 ~ 13 は鴻臚館式である。15 ~ 19 は軒平瓦である。15 は瓦当の半分であるが、515C 型式か。16、17 は 515D 型式か。18 は 666A 型式。19 は型式不明。20、21 は文字瓦で、二重の格子叩きに賀茂銘を施す。22、23 は鬼瓦と考えられる。24 は磚か。25 ~ 31 は須恵器である。25 は坏身で、受け部は短く内傾する。口径 13.0cm を測る。古墳時代後期のものである。26 は高台付きの坏身で、低い高台が付く。底部径 9.4cm を測る。27 は坏蓋で、平坦な天井部に扁平の摘みがつく。28 ~ 31 は甕で、外面に擬格子叩きを施す。32 は鎬連弁の龍泉窯系青磁碗である。33 は口禿の白磁碗である。34 は陶器鉢である。36 は褐釉陶器の四耳壺である。37 は土錘で、長さ 5.6cm を測る。38、39 は釘で、断面方形を呈する。40 は小札と考えられる鉄製品である。

トレンチ 6 で検出した古代の整地層や縄目叩きの瓦を使用した瓦敷はトレンチ 1 と同様のものと考えられる。瓦敷層の上面のレベルはこの位置では約 3.6m となることから西側にかけて下がっていることが分かる。瓦敷は斜面の下端から北側に約 10m の範囲で行われたと考えられるが、上層の整地層は中世の溝状遺構などにより削平をうけており、上面に何らかの構築物が存在した痕跡は確認できなかった。(菅波)

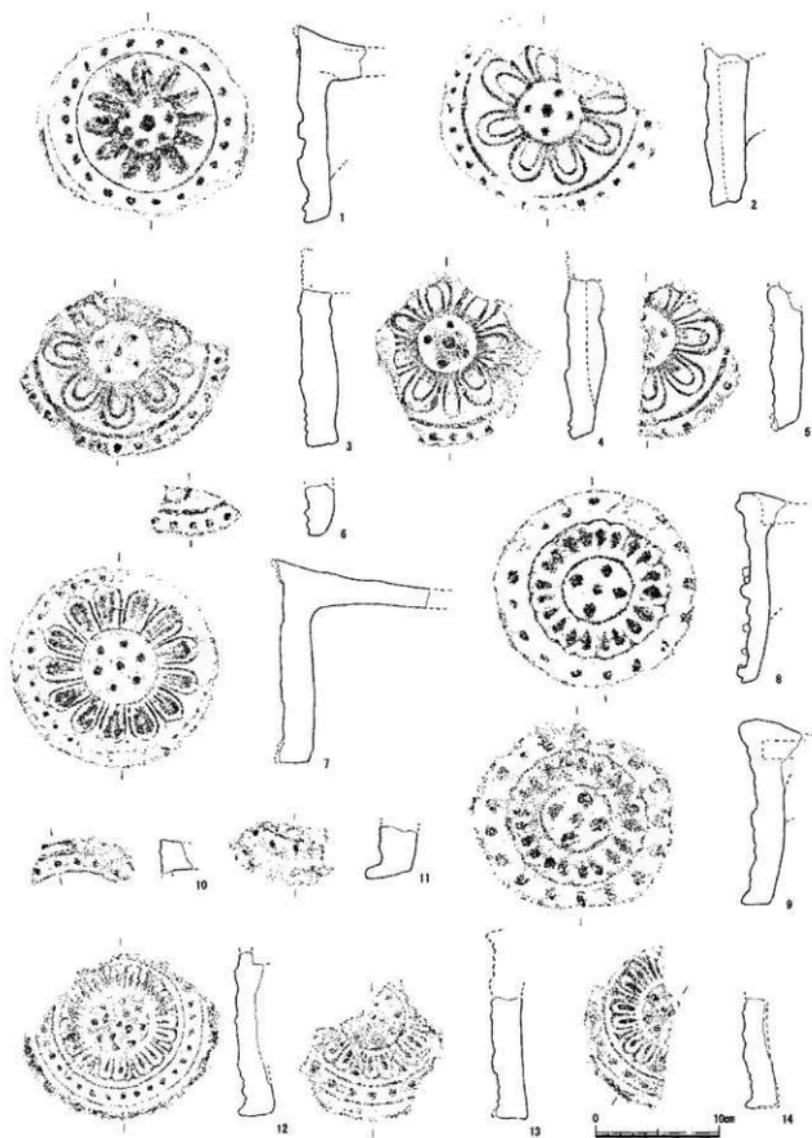


Fig.148 崖下出土遺物突刺圖1 (1/4)

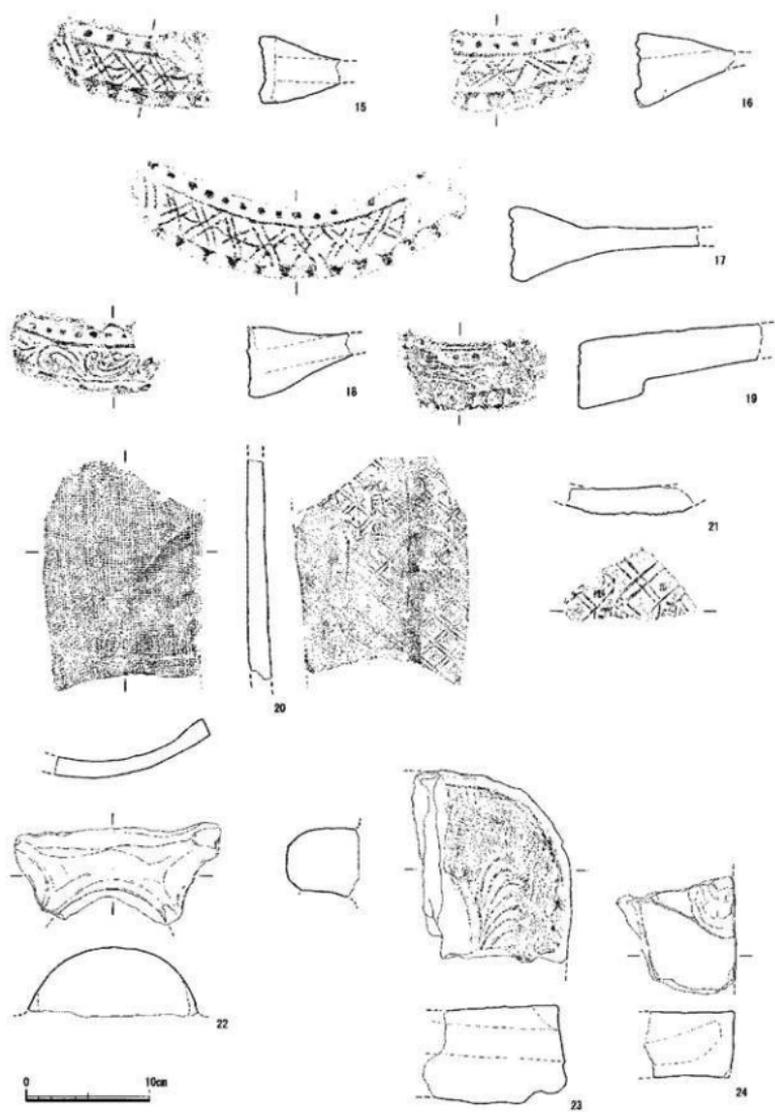


Fig.149 崖下出土遺物実測図2 (1/4)

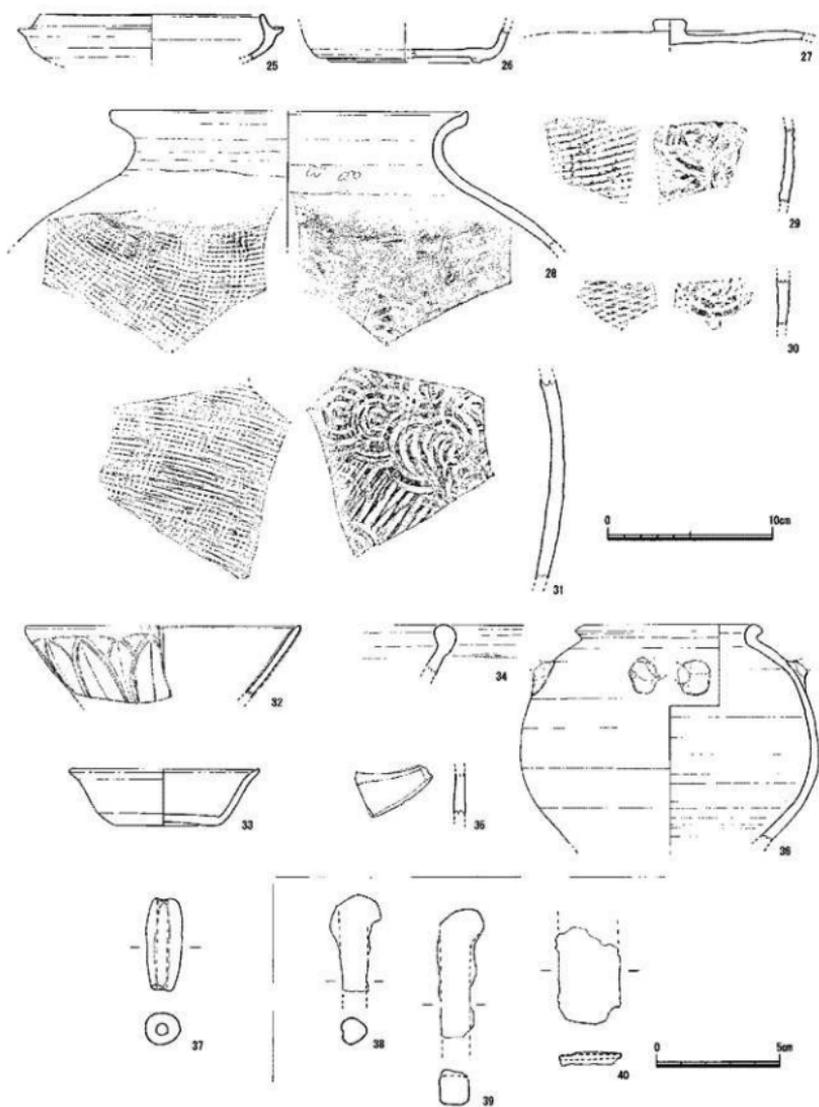


Fig.150 崖下出土遺物実測図3 (1/3、1/2)

(4) トレンチ3 Fig.151

第II期布掘り塀の東辺を中心に、北側へ敷地いっぱいに伸ばした調査区で、トレンチ2と同様、トレンチの中ほどで岩盤が切れて斜面となって落ちている(21～22頁参照)。

斜面から北側砂丘にかけて古代～中世遺構の平面確認を行ったのち、南北を縦断する形で幅1mのサブトレンチを設け、土層の確認等を行った。サブトレンチは南から1、3～6とし、斜面西壁際でも幅50cmの断ち割りを行いサブトレンチ2とした。

斜面 SX19500 Fig.152～154, PL.18・19

布掘り塀角から北に5.5m離れて落ちる斜面で、トレンチ2と比べて布掘りと落ち際の間隔が広い。斜面の比高差は約3mである。近世盛土を除去した後、サブトレンチを入れて土層堆積状況の確認を行った。斜面下は築城前に削平を受けて土坑等が掘られており、地山砂層に近世盛土が直接乗っている状況である。

斜面の地山は風化頁岩岩盤ではなく粘質土(後述する下山氏の教示による)で、本来の丘陵縁辺に近いものと考えられる。落ち際には平和台野球場による攪乱坑と、斜面に堆積した旧表土層を切り込んで造られたテラス状の中世遺構がある。斜面落ち際は東半では南へ鈍角に折れ、東に向かって丘陵幅がやや狭くなる状況が伺えた。

サブトレンチ1では遺棄された礎石が斜面の旧表土層である黒色土に埋没した状況で出土した。トレンチ2でも斜面の旧表土層中から礎石6個が出土しており、北側斜面の広い範囲に礎石が多数落とし込まれている可能性がある。また、斜面裾には須恵器甕を礎で叩き割ったような遺構R1があり(Fig.154)、何らかの祭祀行為の痕跡と考えられる。

サブトレンチ2では、下層に黒色腐植土層が認められ「有機質がかなり多く腐植土より濃厚である。何かを投げ入れた(糞便など)可能性もある。(下山氏)」と指摘を受けた。



Fig.151 トレンチ3北半部下層遺構配置図(1/300)

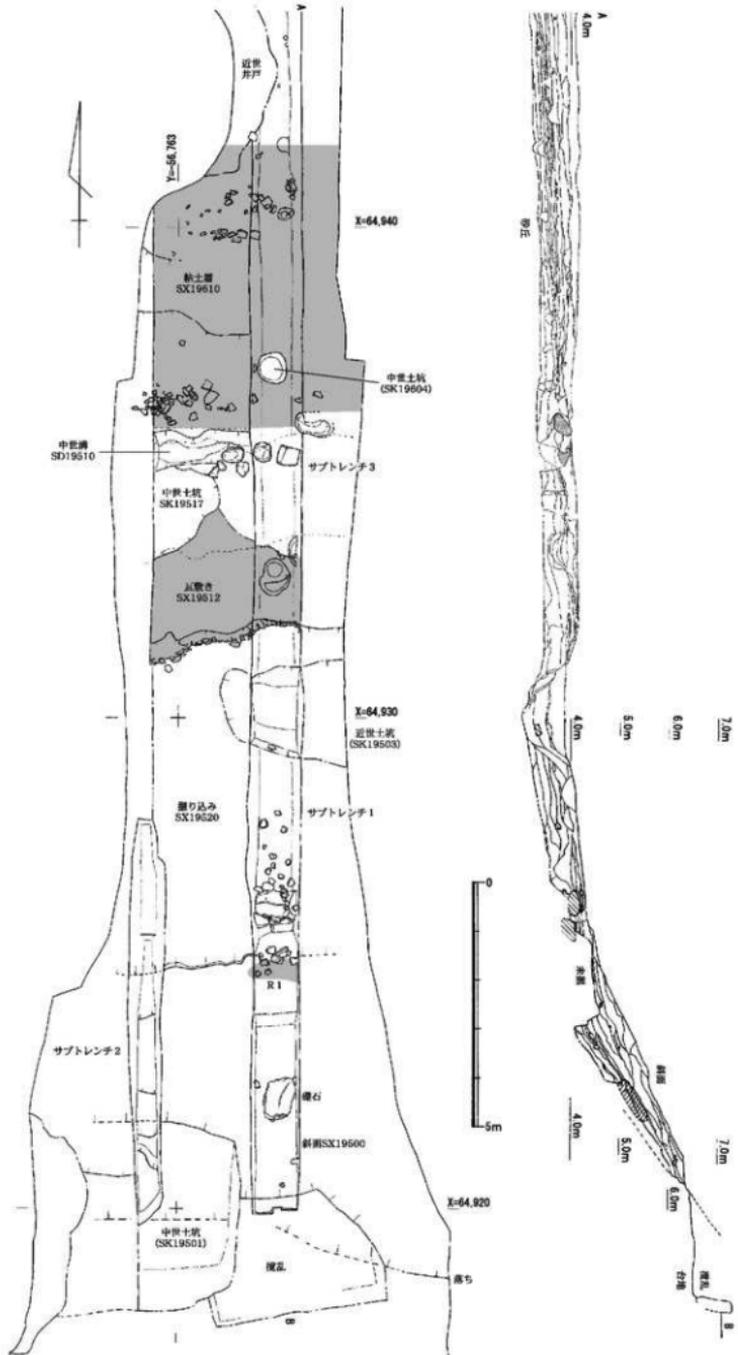


Fig.152 トレンチ3 斜面～低地部の遺構配置図 (1/100)

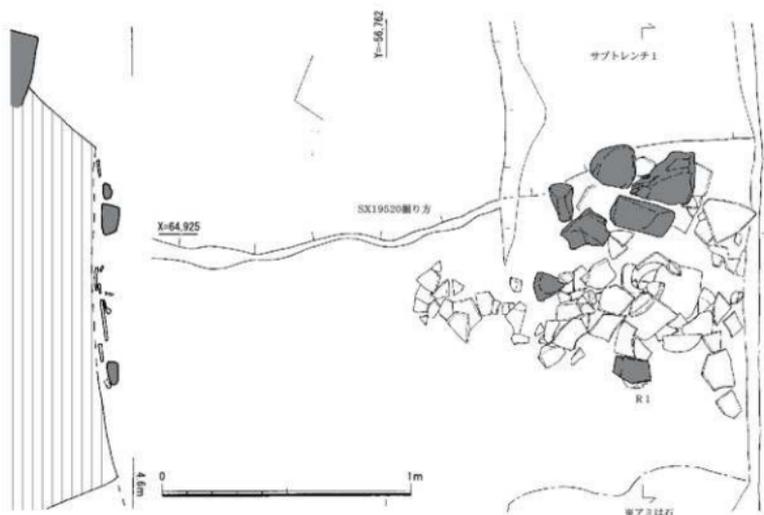


Fig.154 斜面 SX19500 B層遺物 (R1) 出土状況 (1/20)

SX19500 出土遺物 Fig.155～160

弥生土器、古式土師器、古代土師器、須恵器、中国産陶磁器（白磁・越州窯系青磁）、朝鮮半島産陶器、土製品、瓦がコンテナ 51 箱出土し、層位で分けた。Fig.155-1～20 は土層図に示す A 層出土、Fig.156・157-21～50 は同じく B 層出土で、割られた須恵器甕 R1 (50) は B 層に属する。

1 は土師器の甕で小片のため法量は不確実。調整不明。2～13 は須恵器で、2～4 は环蓋、5 は环身、6・7 は高台付环。8～11 は甕で口縁横ナデ調整、外面は平行叩きで、10 はカキ目を加える。12 は高环、13 は甕である。14 は邢窯系白磁で蛇の目高台。15 は白磁碗で、削り出し高台で外底露胎。16～20 は管状土鍾。以上は A 層で 15 白磁から鴻臚館跡第 V 期 (10 世紀後半～11 世紀前半) まで下ろう。

21 は弥生時代中期甕の口縁部小片で、磨滅し調整不明。22・23 は土師器甕の把手。24～41 は須恵器である。24～30 は环蓋で 25～30 はかえりが付く。31・32 は环身、33～35 は高台付环である。36 は盤で歪みが著しい。37・38 は甕の口縁部片で、37 の外面には点状に平行叩き目が残る。39～41 は甕で、39 は肩部に沈線 2 条を巡らせ、40 は外底にへう記号がある。42・43 は新羅陶器の甕で外面に沈線と印花文を施す。44 は越州窯系青磁碗で、内底に目跡があり甕付の軸は掻き取る。45～48 は管状土鍾、49 はフイゴの羽口。50 は須恵器甕で、斜面裾から割られた状態で出土した遺物 R1 である。口縁は横ナデ調整で、胴部外面に縦格子叩き、内面上半に同心円文、下半に平行文の当て具痕が残る。以上は B 層出土で 9 世紀代を下限とし、A 層より古い傾向がみられる。

51・52 は鴻臚館築造以前の旧表土層とみられる地層から出土した土器である。51 は複合口縁甕の口縁部小片で、口縁屈曲部外面に板小口による刻みを施す。52 は古式土師器高环の脚部である。

53～68 は瓦である。層の区別なく、叩打痕により分類して報告する。53 は玉緑式の丸瓦で、叩き目は 3Aa2-1c 類に分類される。54～68 は全て叩打痕文字瓦で「今行」様の文字が認められる。全て左字で文字の細部や叩き文様の差異により 3 分類され、仮に 54～58 を A 類、59～61 を B 類、62～68 を C 類としておく。大宰府分類の叩打痕文字瓦 913 型式文字銘「今行 (左字)」は C 類が該

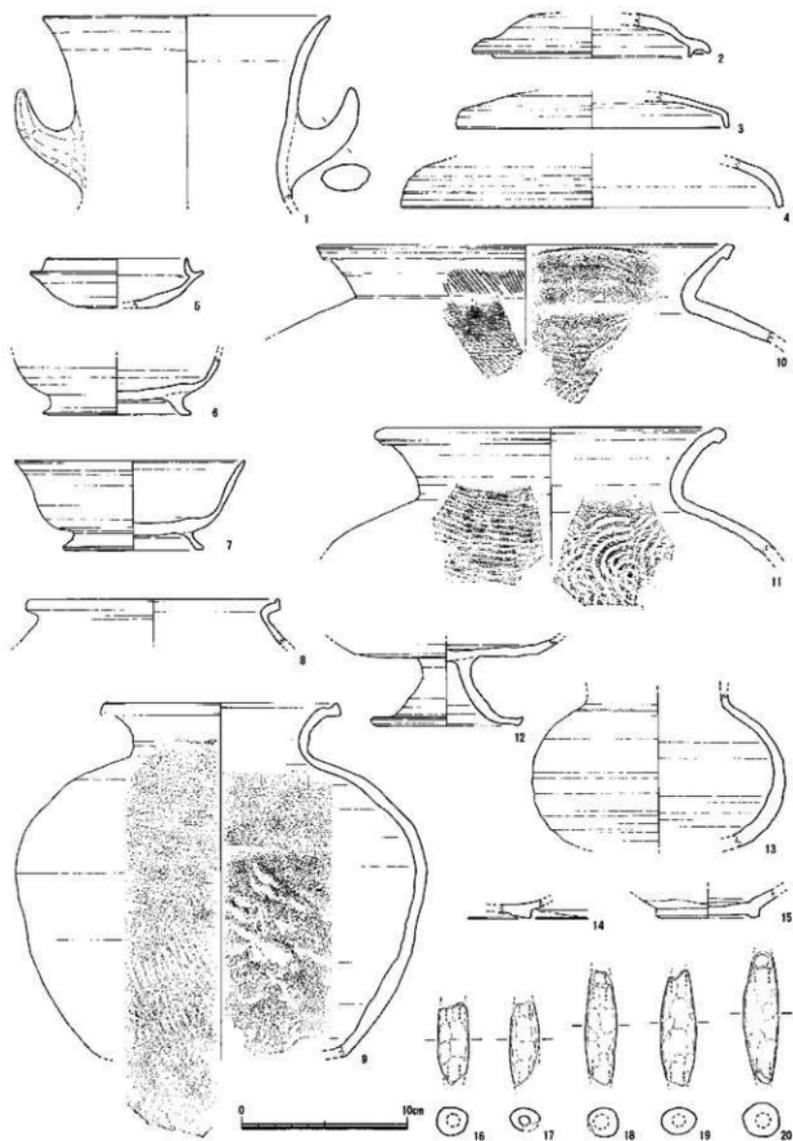


Fig.155 SX19500 A層出土土器実測図 (1/3)

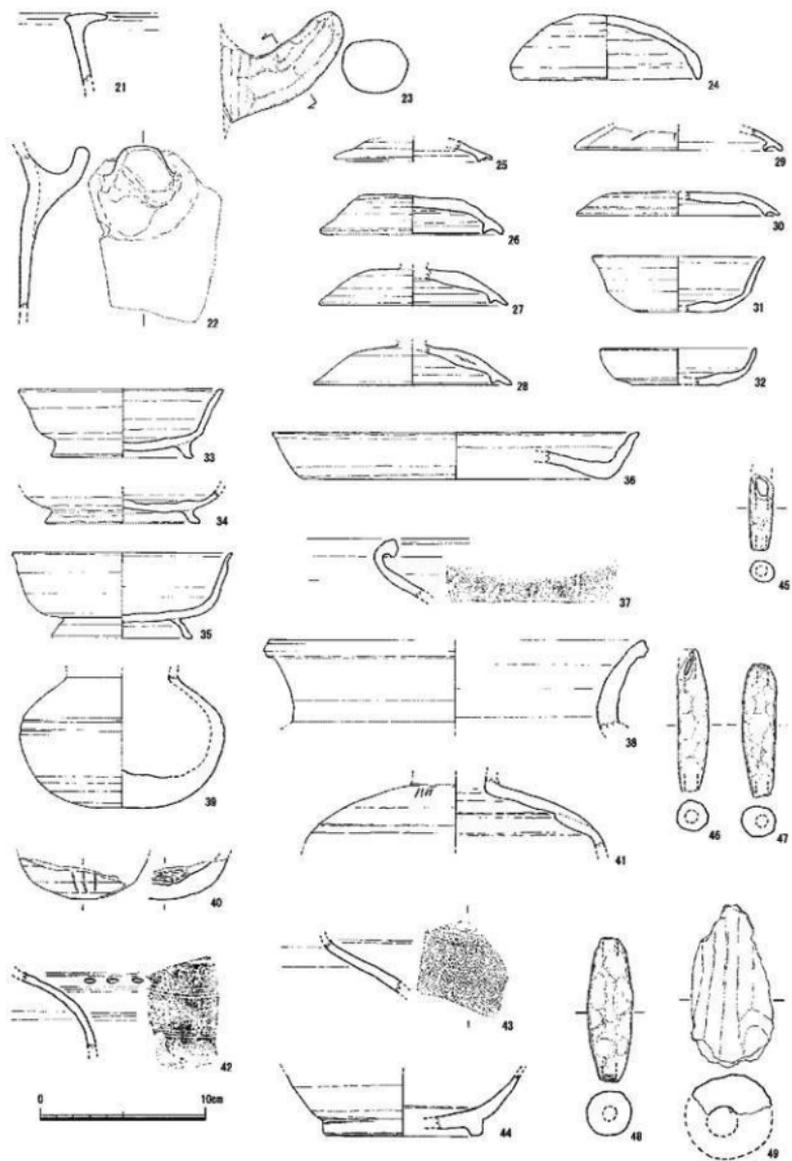


Fig.156 SX19500 B層出土土器実測圖 (1/3)

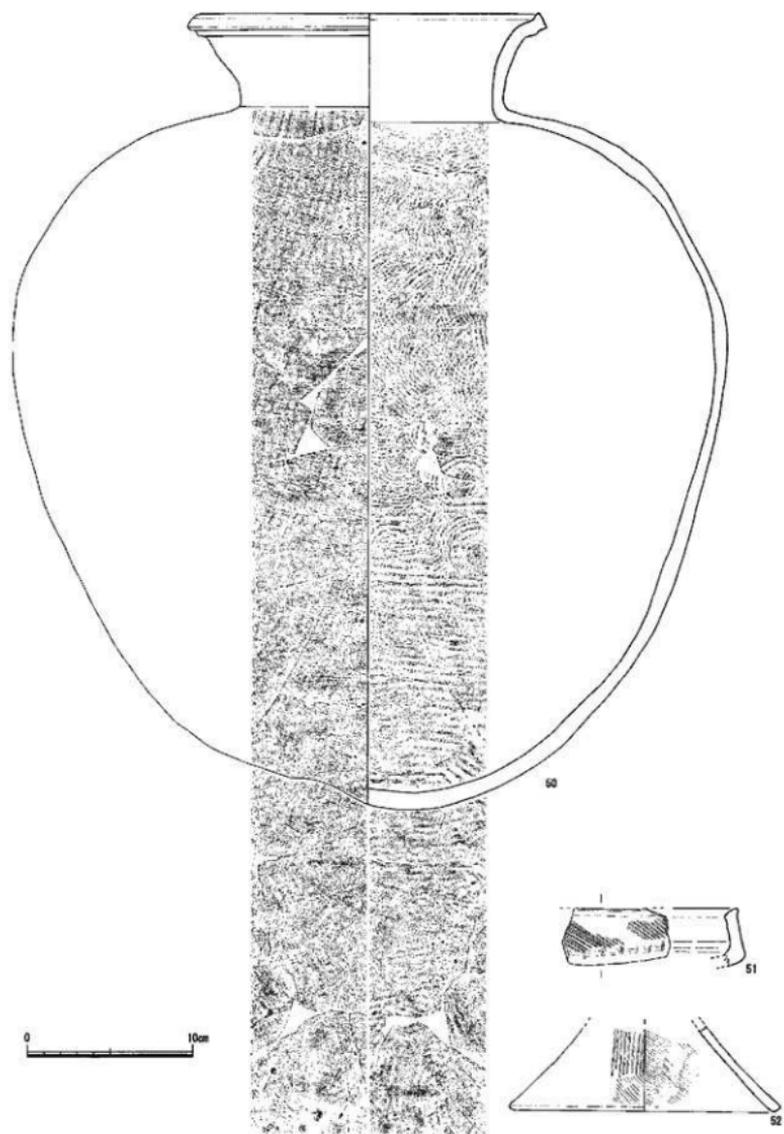


Fig.157 SX19500 B層 (R1) 及び旧表土層出土土器実測図 (1/3)

当する。A 類と B・C 類は文字の形態に差異が著しく、A・B 類と C 類は叩き板に対する文字の天地が逆となる（A と B は板の持ち手側に文字の頭、C は逆）。60～63 は丸瓦、54～59 及び 64～68 は平瓦である。以上の瓦のうち 61・68 は B 層、他は A 層から出土した。

SX19500 出土遺物は古墳時代後期から 11 世紀頃までを含み、上層（A 層）にやや新しい傾向がある。

掘り込み SX19520 Fig.152・153

サブトレンチ 4～6 の砂丘部分には築城盛土の直下に中世末の旧表土層が残るが、サブトレンチ 1 の斜面裾からサブトレンチ 3 にかけての 15 m ほどの範囲にはこの旧表土層が存在せず、築城直前に削平を受けたものと考えられる。この削平を受けた部分において大型の掘り込み SX19520 を確認した。SX19520 は南北長 6.5 m を測り、東西は調査区外に伸びて行く。北側には古代瓦を敷き詰めた遺構 SX19512 があり、SX19520 はこの瓦敷きを断ち割って掘り込んでいる。南側は斜面裾から掘り込んでおり、掘り込みの壁には鉄分が最大厚 10cm の帯状に固く沈着している（地下水位の上下動による浸透により堆積したものとの指摘を磯氏・下山氏より受けた）。深さは 70cm で、斜面裾に近い部分では礫がまがまって出土した。サブトレンチによる土層観察と出土遺物から古代の掘り込みと考えられる。

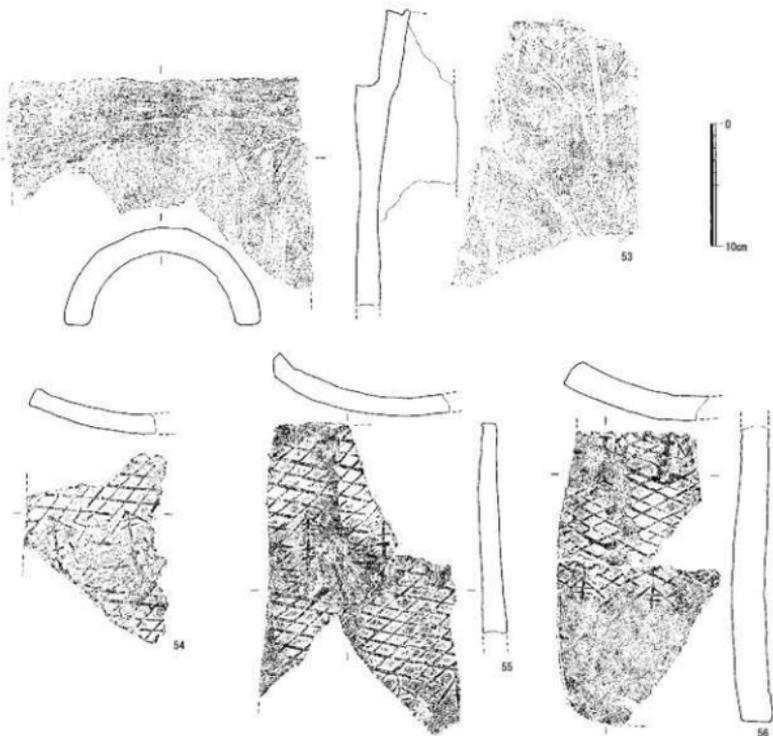


Fig.158 SX19500 出土瓦実測図 1 (1/4)

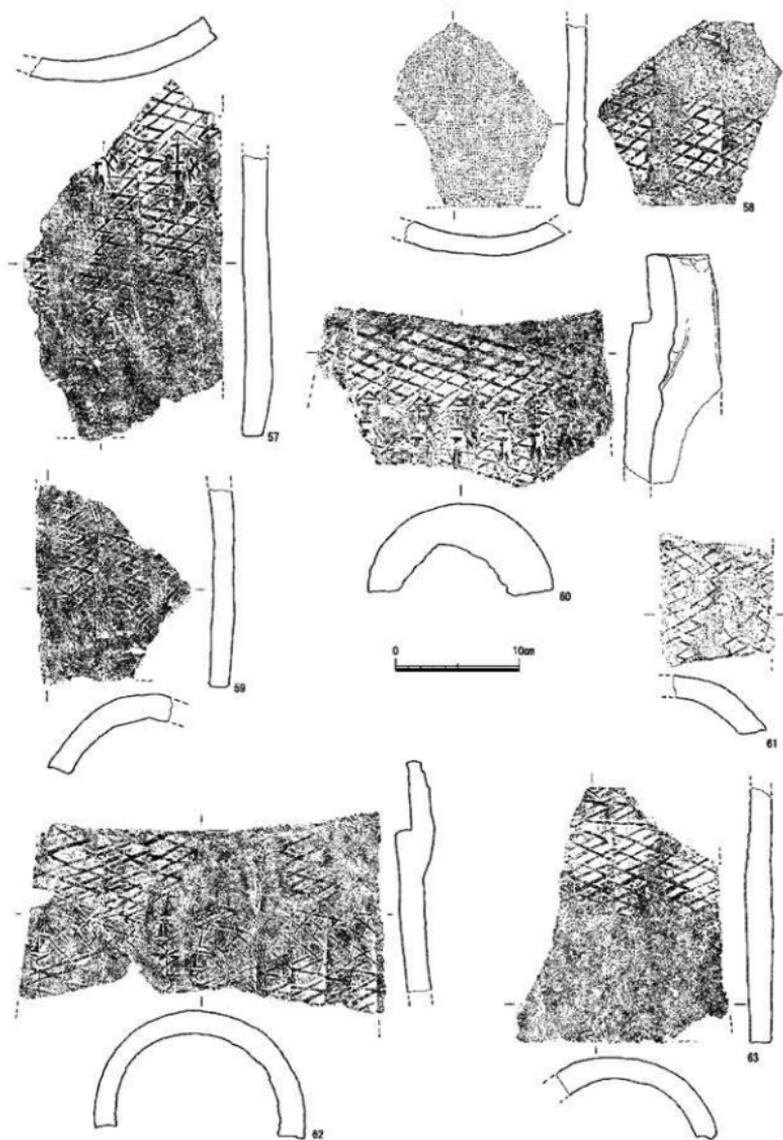


Fig.159 SX19500 出土瓦类图2 (1/4)

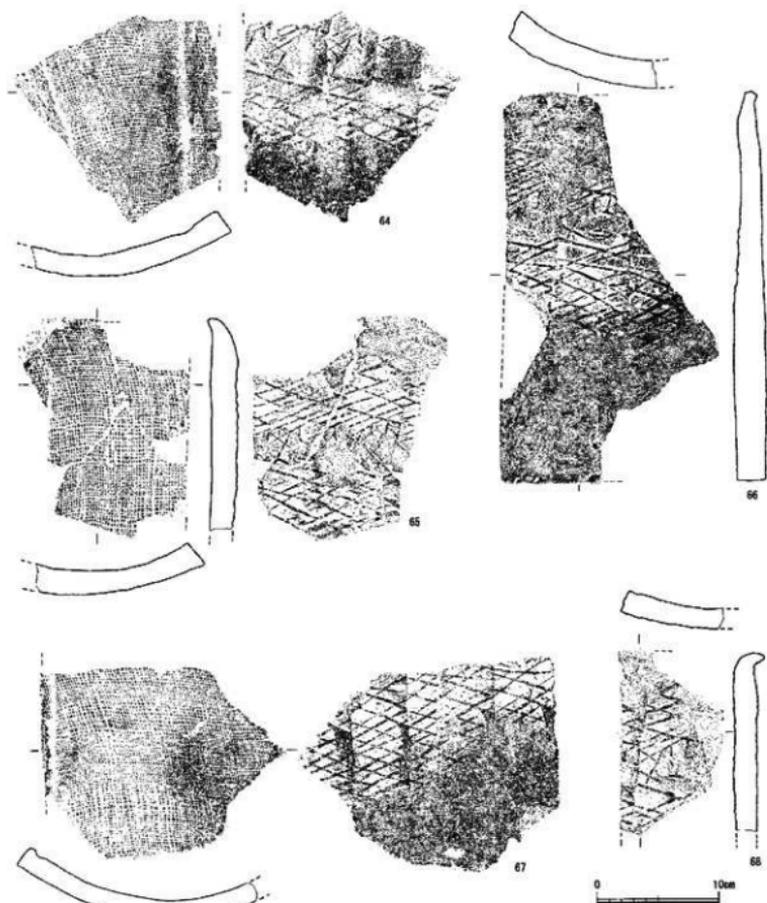


Fig.160 SX19500 出土瓦実測図3 (1/4)

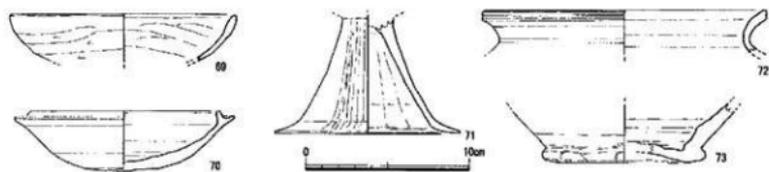


Fig.161 SX19520 出土遺物実測図 (1/3)

SX19520 出土遺物 Fig.161

土師器、須恵器、中国産陶器が少量出土した。69 は土師器丸底坏でへら調整する。70 は須恵器坏身。71 は土師器高坏脚で、外面刷毛目のちナデ調整、内面へら削り。72 は須恵器甕の口縁部。73 は中国産陶器壺の底部片で、無軸で外底に目跡が付く。

瓦敷き遺構 SX19512 Fig.162、PL.18・19

瓦を割って平坦に敷き詰めた遺構である。東西は調査区外に伸びていくが、南側は前述のとおり SX19520 に、北側は築城前の削平や中世土坑 SK19517 によって切られており、本来の遺構の範囲は不明確である。土層図に示したとおり、SX19512 (8層) の上層には灰青色粘土 (4層) が堆積し、この層の上にも瓦を多量に含む層があるが、これには中世遺物が含まれることから中世に瓦敷きを破壊した際に盛り上げた土層とみられる。SX19512 (8層) は南に向かって緩く登るように敷かれており、本来は斜面下まで続いていた可能性がある。下層には橙色粘質土 (9層) による薄い整地層が認められ、瓦を敷き詰める前に整地を行ったものと考えられる。使用している瓦は縄目叩きに限られ、上面の瓦が細かく割れていることや面が揃っていることから通路として使用された可能性が強い。斜面下は雨天後にはしばらく地下水がしみ出すような軟弱地盤であることから、通行が容易になるように整地を行って瓦で覆いをかけたものと考えられる。

SX19512 出土遺物 Fig.163・164

須恵器、瓦がコンテナ 34 箱出土した。調査時に全ての瓦が縄目叩きであることを確認しながら取り上げたが、格子目叩きの瓦小片や白磁碗等が含まれ、中世遺物の除去が不十分であった可能性がある。

74 は須恵器坏蓋である。75 は須恵器坏身で、SX19512 下層の整地層から出土した。76～78 は軒丸瓦で鴻臚館式 (223 型式)。79～81 は軒平瓦で鴻臚館式 (635 型式)。82・83 は玉縁式の丸瓦で縄目叩きを施し、磨り消しを加える。84～88 は平瓦で、叩打痕は全て縄目である。89・90 は素文磚の破片である。図示した瓦は大きめの破片を選んでおり、他は大半が小片である。

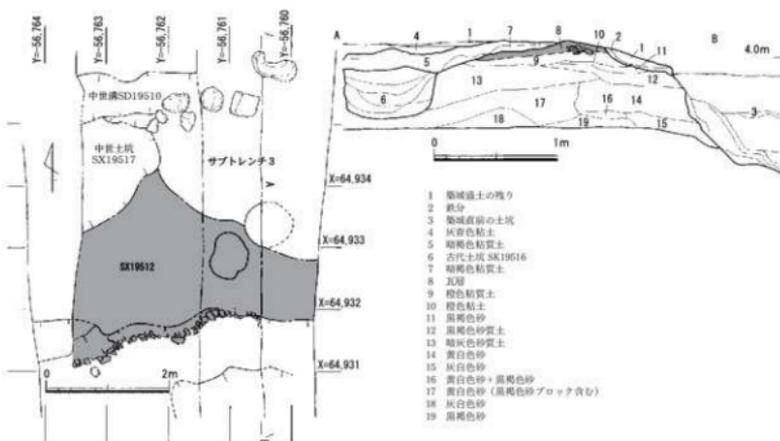


Fig.162 瓦敷き遺構 SX19512 実測図 (平面図は 1/80、土層図は 1/40)

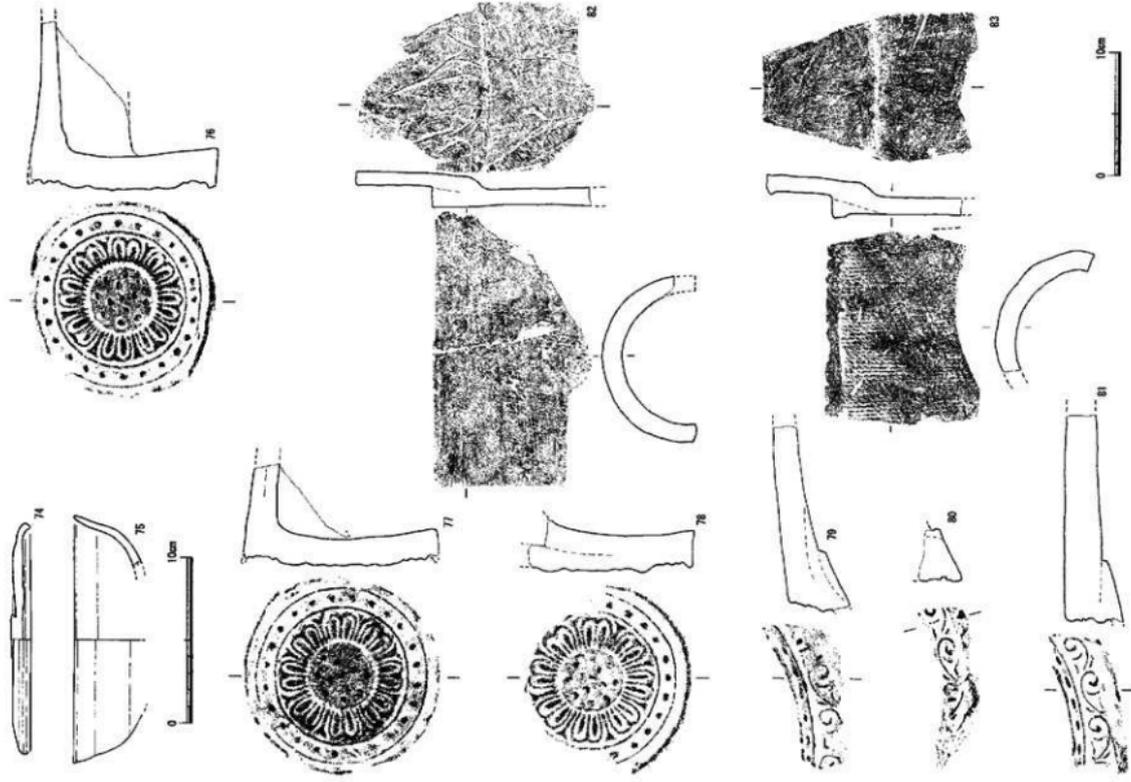
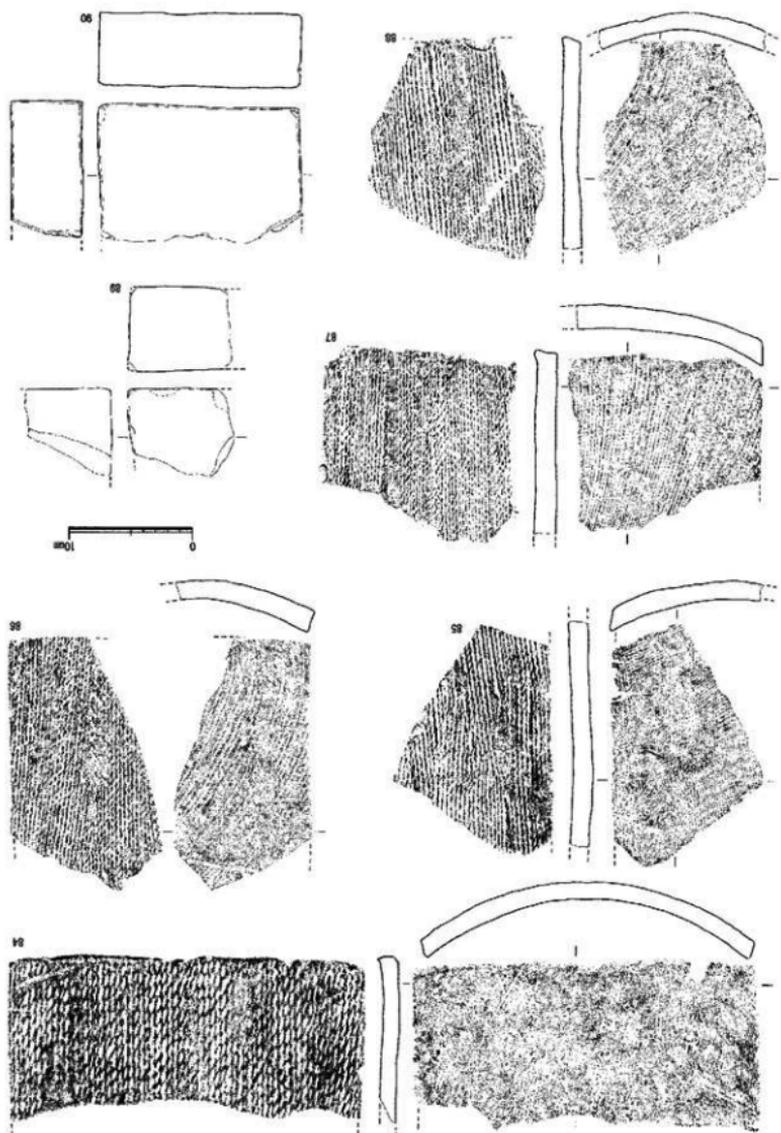


Fig.163 SX19512 出土遺物美照圖1 (74・75は1/3、他は1/4)

Fig. 164 SX19512出土遺物素描圖 2 (1/4)



推定築地塀遺構 SX19610 Fig.165・166、
巻頭図版4、PL.19

SX19512の北隣に検出した。整地層(下層)の上に粘土層(上層)を積み上げた遺構で、鴻臚館の外郭施設である築地塀の可能性がある。南側は中世溝SD19510に破壊され、溝内には大振りの礫が散乱するが、この礫は本米SX19610の縁石であった可能性がある。北側は近世井戸の掘方に一部破壊される。東西は調査区外へと伸びている。

下層の整地層は南北長9.5mを測り、斜面下とは11m離れる。細砂質土と橙色粘質土を交互に5cm前後の厚さで積み重ねた事業跡で、版築に特有の突き固めによる窪み痕は認められないが、ガチガチに固められている。この範囲にのみ分布しており、トレンチ3の低地部分の他の土層にはこのような整地層は認められない。

上層の粘土層は南北長6.0mで、斜面下とは11m離れる。粘土層は、下位の明黄褐色粘土(Fig.166の濃いアミ)と、上位のやや汚れた黄褐色粘土(同じく薄いアミ)の二枚の層が認められる。下位の粘土層は南北幅2.5mで、南端には上位の粘土層との間に落ち込みがあり、瓦がままとって出土した。瓦は大きめの破片が多いが軒瓦は含まない。北端でも瓦が出土したが、まとまった印象はなく、また南端のような明瞭な落ち込みは認められず緩やかに北へ傾斜していく。上位の粘土層は南北幅6mで、更に分層できる可能性があるが明瞭でない。南北両端は中央部に比べると砂粒を多く含み、汚染が強く締まりがない印象を受ける。南端は上記の落ち込みの上部を覆っているが中世に削平されており、さらに南へ延びていた可能性がある。

以上は、整地層が地下事業、下位の粘土層が塀の基底部、上位の粘土層が塀の積み土または積み土が崩壊堆積したものであると解釈できよう。ごく一部を確認したに過ぎないが、東西方向に伸びていく築地塀であると推

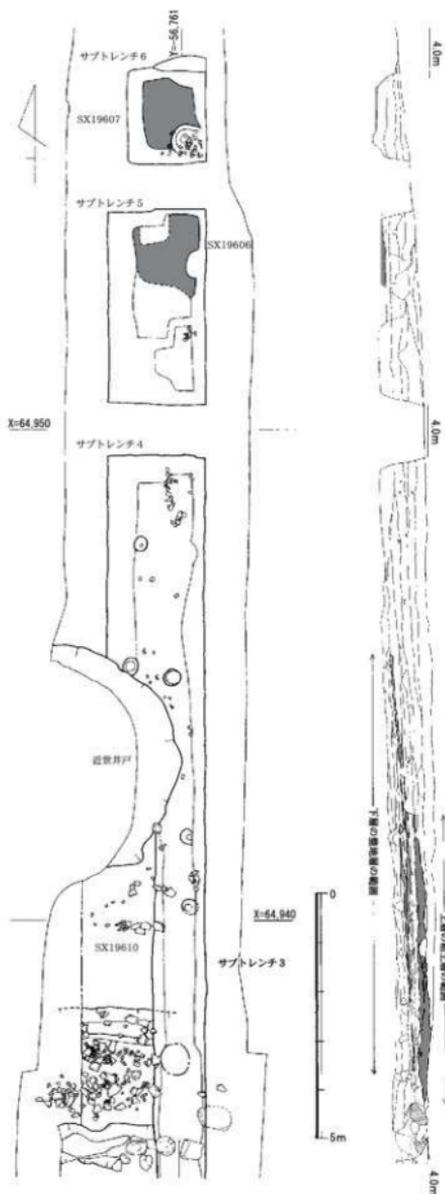


Fig.165 トレンチ3低地部の遺構配置図(1/100)



Fig.166 推定築地塀遺構 SX19610 実測図 (1/40)

定でき、北側砂丘上に鴻臚館の外郭施設が存在した可能性を示すものと考えられる。

SX19610 出土遺物 Fig.167

中国産陶磁器（越州窯系青磁）、瓦がコンテナ6箱出土した。図示した遺物は上層の粘土層に伴う。

91は越州窯系青磁の輪花大碗である。92は玉縁式の丸瓦で、凸面に斜格子叩き3Ab-1類を施す。93は丸瓦で3Aa1-2類。94は平瓦で3Aa2-2類。95は平瓦で縄目叩き。

瓦の散布 SX19606・19607 Fig.165

SX19610から北に11m離れた北端のサブトレンチ5及び6において、風成砂上に瓦が面的に広がる状況SX19606・SX19607を確認した。連続する同一の遺構と考えられ、瓦をまとめて投棄したか、あるいは敷いて一時的に道としたのであろう。南側整地層SX19610との間では風成砂より上の層から遺物が散漫に出土するのみで、風成砂中からは遺物はほとんど出土していない。

SX19606・19607 出土遺物 Fig.168～170

土師器、須恵器、瓦がコンテナ10箱出土した。瓦は小片が大半だが接合できるものも多く、その

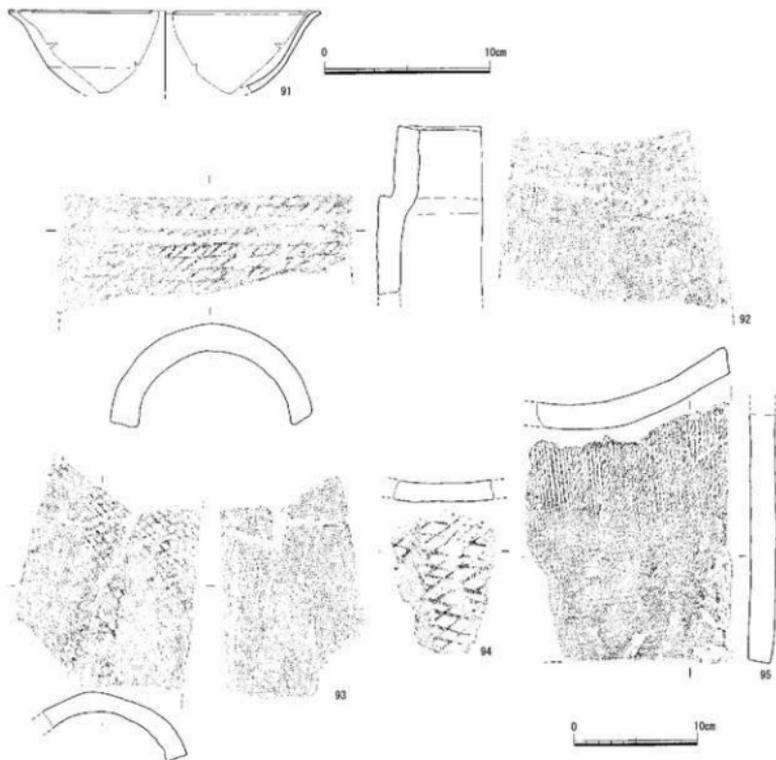


Fig.167 SX19610 出土遺物実測図 (91は1/3、他は1/4)

場で割った可能性がある。96・97はSX19606出土、98～106はSX19607出土である。

96は鴻臚館式(635型式)の軒平瓦で、太めの平行叩き(2A類)を施す。97は平瓦で縄目叩き。

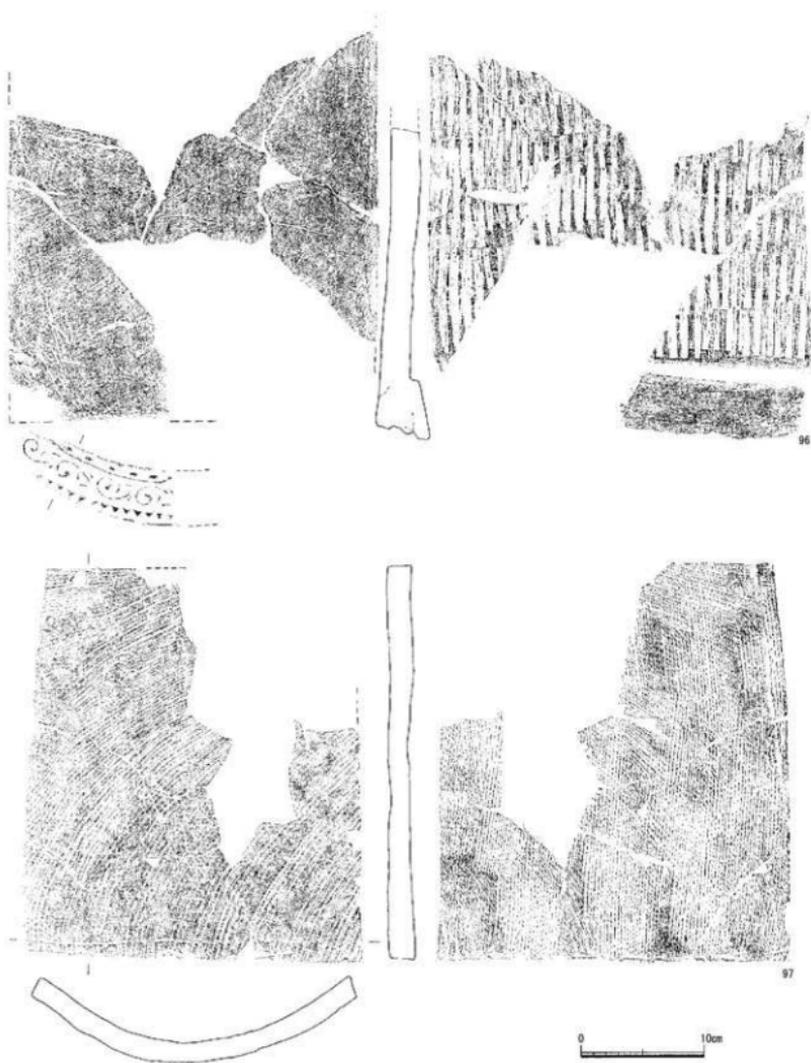


Fig.168 SX19606 出土遺物実測図 (1/4)

98 は土師器丸底坏。99 は須恵器坏蓋。100 は須恵器壺の胴部片で内面へら削り。101 は平瓦で叩打痕は1C類。102 は平瓦で同じく3Ba2-2類。103 は面戸瓦で縄目叩き。104 は素文磚の小片である。105・106 は平瓦で縄目叩き。105 は特に多数の小片が接合した。

トレンチ3の砂層については、平成21年12月17日(木)に西南学院大学 磯望氏、九州大学大学院 下山正一氏に地質学的検討をして頂き、以下のような所見を頂いた。

- ① 砂浜ではなく離水している砂丘である。砂丘の後背地にあたることは間違いない。
- ② サブトレンチ4の地山砂層は、上層はチリメンじわの目が細かく縄文時代頃の新砂丘と思われ、下層はチリメンじわの目が大きく低海面期の古砂丘の可能性が高いが、通常上面に堆積しているはずの粘土層が飛んでいるので確実ではない。(吉武)

Tab.9 トレンチ3下層出土瓦敲打痕分類表(出土している種類のみ表示)

遺構名	種別	1		2		3A a						3Ab			3Ac		3B		5			6		焼文・平明	文字瓦	瓦数		
		A	C	B	1	2	1	2	1	2	3	4	1	a	A	B	C	A	C	1	2	3						
		平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦	平瓦				平瓦	平瓦
SX19500	A層	○	○																							寺行	52	
	B層	○	○																							寺行		
SX19606	回廊土層	○	○																								3	
SX19607		○	○																								寛茂	6
SM19610	上層粘土層厚か込み	○	○																								6	
	上層粘土層	○	○																								6	
	下層粘土層	○	○																								6	

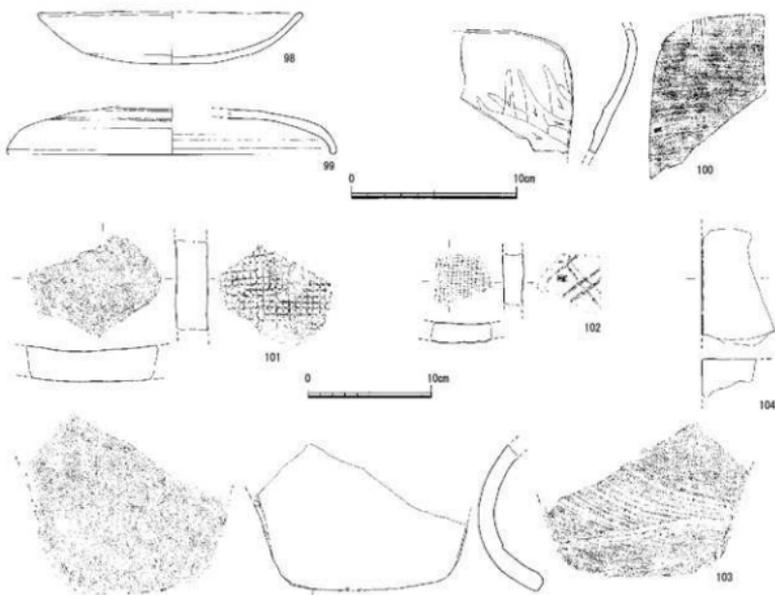
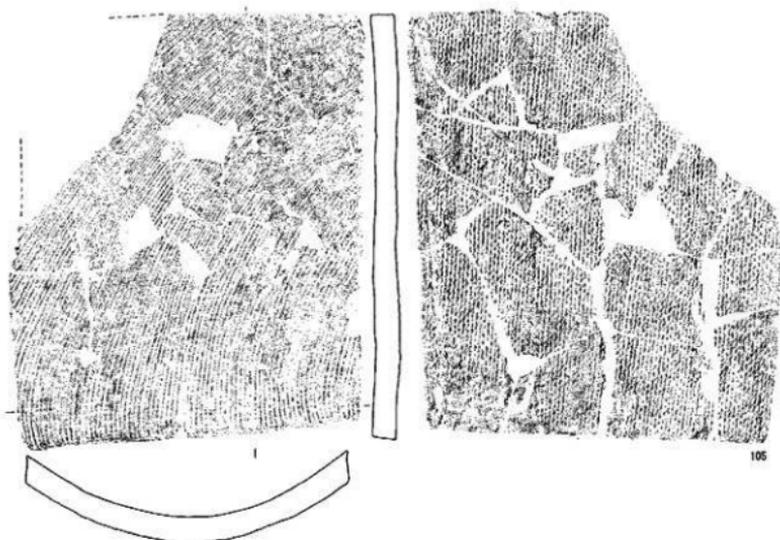
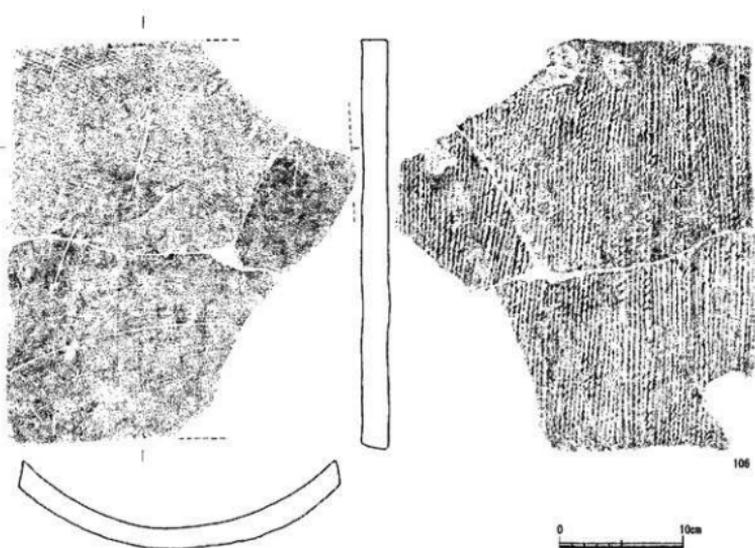


Fig.169 SX19607 出土遺物実測図1 (98~100は1/3、他は1/4)



105



106

Fig.170 SX19607 出土遺物実測図2 (1/4)

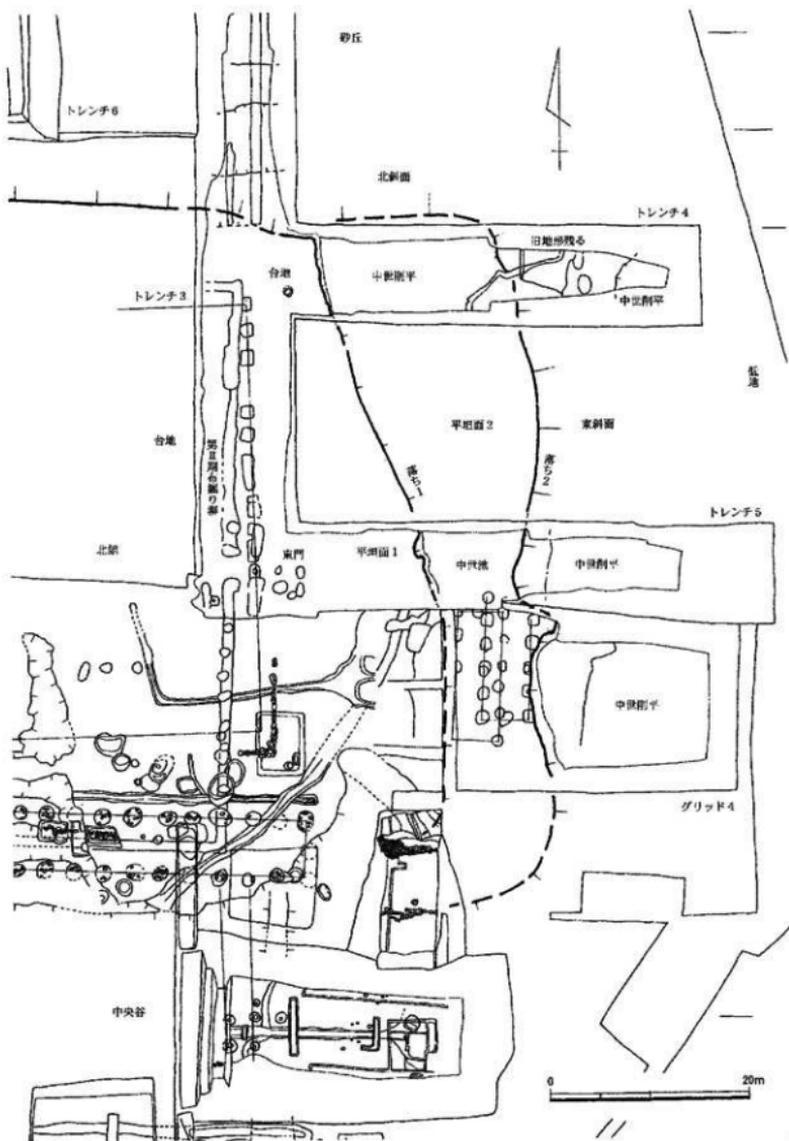


Fig.171 北館東面の調査区と地形推定線 (1/500)

(5) トレンチ4

鴻臚館東面の状況について Fig.171・172

鴻臚館の東斜面は第23次調査グリッド4、第27・28次調査トレンチ4、第29次調査トレンチ5で確認した。3地点とも中世の地形変化が著しいが、いずれの調査でも遺構面が西から東へ向かって大きく段状に下降することを確認した。調査壁の土層堆積などから推定して、鴻臚館東門から東へ20 m前後の位置に段差(落ち1)があり、僅かに東へ下がる平坦面となり、さらに10 m前後をおいて斜面(落ち2)となって緩く下っていたと推定される。トレンチ4では斜面下が標高4 m弱まで降下して岩盤が露呈するが、ここは中世に削平を受けており、古代面はこれより上位に想定される。以上から鴻臚館東面の地形を復元すると、東門前面に奥行20 mの広場状の平坦面1(標高7 m強)があり、この東は1 mほど落ちて次の平坦面2(標高6 m前後)となり、10 mほど東で緩やかな斜面へと移行し標高4 m前後まで降下していく状況であったと推定される。

トレンチ4について Fig.173、PL.20

トレンチ4では、中世に削平を受けて上記の平坦面2が著しく改変されており、本来の形状を保ってはいなかった。平坦面1から1 m強の比高差を持って落ちており、段落ち直下の堆積土からは龍泉窯系青磁などの中世遺物が出土した。平坦面1の北東角の平面形状は鈍角をなし本来の形状が疑わし

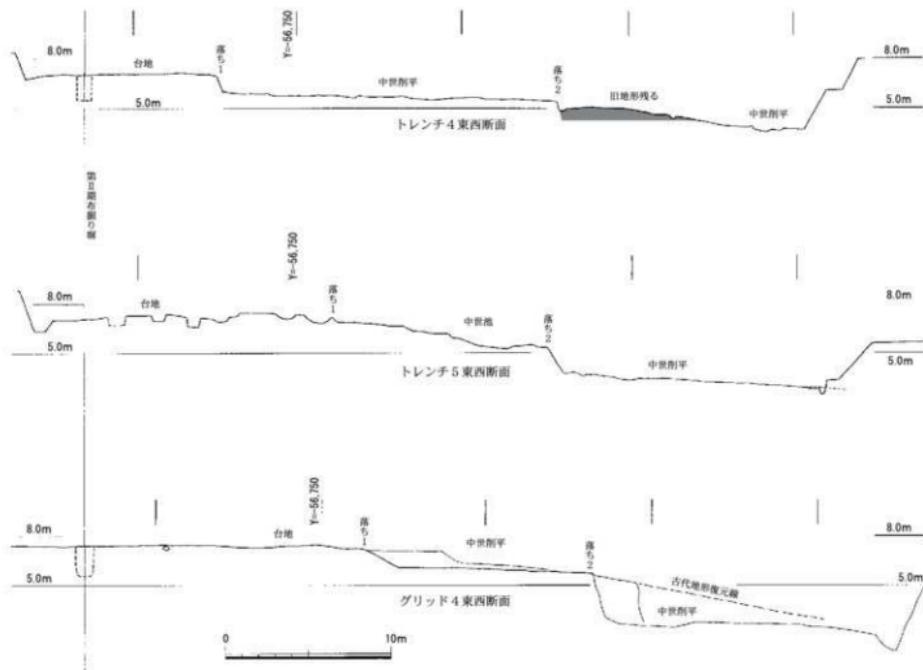


Fig.172 北館東面調査区の断面の比較 (1/300)

いが、段下は東西長 20 m の平坦面 2 となる。基盤土は風化頁岩粘土層である。平坦面 2 は中世に削平を受けており、古代遺構は全く認められない。平坦面 2 の東側は緩やかに下る斜面 SX21110 となる。傾斜角度は 8° 前後。基盤土は粘土層で、斜面下位では岩盤が変わる。斜面上には細砂が堆積し、これを中世末の灰青色粘土が覆う。本来はこの砂層が斜面全体を覆っていたと考えられるが、斜面の大部分は中世に削られて浅い溝状（登坂道か）になっており、細砂は北壁際だけにのみ残る。細砂を除去すると平面形が鈍角の L 字形をなす直線的な中世の小溝 SD21122 と、第 V 期（10 世紀後半～11 世紀前半）の土坑 SK21125 が現れる。古代土坑が削平を免れていることから、細砂に覆われた部分は古代末（第 V 期）の地形をある程度留めていると考えられる。細砂の堆積は小溝から東に 9 m 強で途切れており、その東側は中世削平により風化頁岩岩盤が露呈し、斜面下は水平となる。古代遺構面はこの削平面（標高 3.7 m）よりも高い位置にあったと推定される。

溝 SD21122 Fig.173・174、PL.20

斜面 SX21110 が緩やかに東へと落ち始める位置に、これを横断するように南北方向に 3 m 伸びる小溝で、南側は鈍角に屈曲して東へ 6 m ほど伸びている。屈曲部分から東は中世の削平により溝の片側の掘方を失っている。最大幅 50 cm、深さ 50 cm。覆土は黒褐色砂である。

SD21122 出土遺物 Fig.175

須恵器、土師器、中国産陶磁器（白磁・龍泉窯系青磁）、中世陶器が少量出土した。

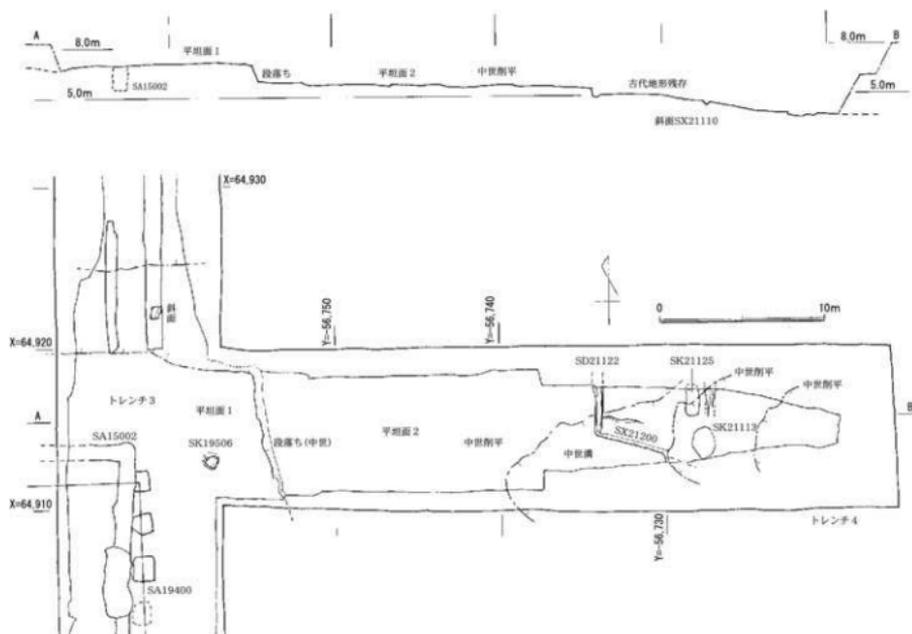


Fig.173 トレンチ 4 の古代遺構配置図 (1/300)

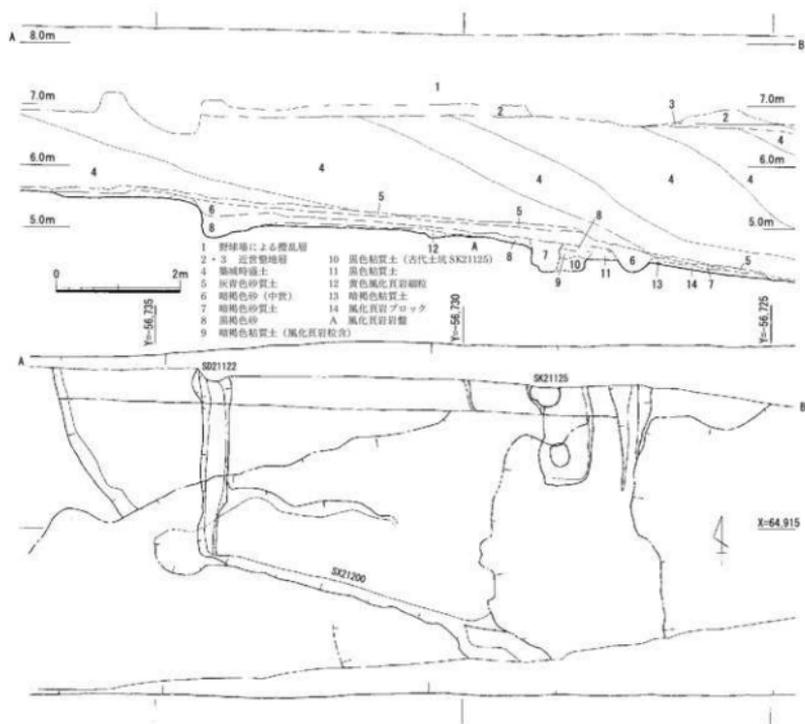


Fig.174 斜面 SX21110 周辺遺構配置図・土層断面図 (1/80)

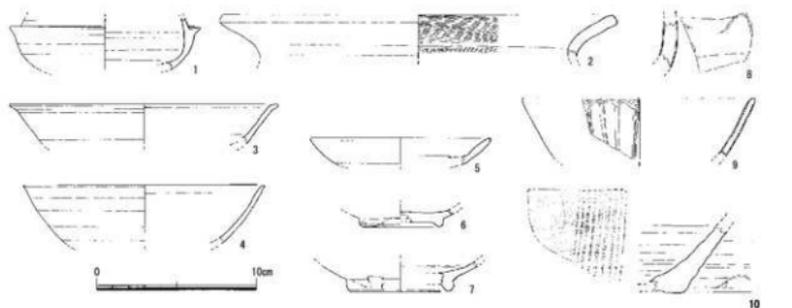


Fig.175 SD21122 出土遺物実測図 (1/3)

1 は須恵器坏身、2 は土師器甕、3～7 は白磁、8 は李朝象眼青磁、9 は龍泉窯系青磁碗、10 は備前焼き掃鉢である。1～3 は溝の下層、他は上層から出土した。中世の溝と考えられる。(吉武)

(6) トレンチ5 Fig.176、PL.20

第Ⅱ期東門から真直ぐ東へ設定した調査区で、東門へと入る鴻臚館の進入口の構造解明を目的としたが、中世に著しく削平を受けており当初の目的を果たせなかった。国土座標 Y=-56,735 のあたりで急斜面 SX23200 となって落ち、西側が台地部、東側が低地部となる。

台地部では、国土座標 Y=-56,748 のあたりから SX23200 にかけての範囲は東に下る緩斜面となり、この部分は地山が粘質土である。標高 7.0 m から 5.5 m まで降下するが、ただし中世に削平を受けている。この緩斜面上には中世の水溜まり状の遺構、水溜まりから東へ導水する小溝等が掘られ、小溝から 12 世紀中頃の初期龍泉窯系青磁等が出土している。斜面 SX23200 の落ち際には 11 世紀末頃の白磁碗 2 個体と鉄刀が包含層からまとまって出土しており、掘り方を失った土塚墓と考えられる。また、水溜まり状遺構の底面では古代の掘立柱建物 SB17701 の一部をなすと考えられる柱穴を検出した。柱穴の深さは 15 cm と残りが極めて悪いが、この緩斜面は中世に削平を受けてはいるものの、ある程度鴻臚館の地形のなごりを留めているものと考えることができよう。

SX23200 の途中で地山が風化頁岩に変わり、斜面下は 3.8 m で、東端は 3.0 m まで下がっていく。SX23200 の直下の低地部は中世の削平が著しく、古代の遺構は全く確認できなかった。SX23200 直下の底面から 16 世紀代の朝鮮王朝陶器船徳利が潰れた状態で出土したことからみて、斜面 SX23200 の掘削及び低地面の削平は中世末の段階で行われ、群在するピット群も同時期のものと考えられる。(吉武)

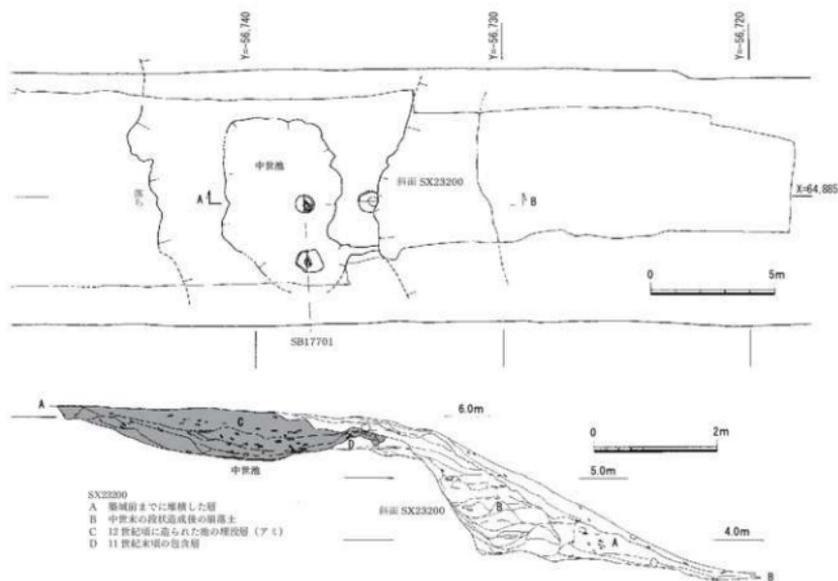


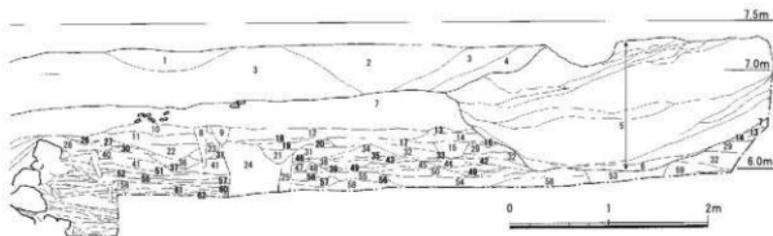
Fig.176 トレンチ5斜面 SX23200 実測図 (平面図は 1/200、土層断面図は 1/80)

(7) 第23次調査グリッド4 Fig.177～179

第23次調査の下層遺構面(古代)においては、遺構面は西から東へ大きく三段に下降する。最も西側は、第19次調査で鴻臚館第III期の礎石建物SB1228を検出した遺構面につながる。上段はグリッド1～グリッド3の中程から0.8mほど下降して中段となる。中段はグリッド4の半ばあたりまでわずかに傾斜しつつ下降し、約3mの落差で下段に下る。

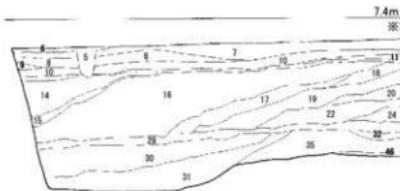
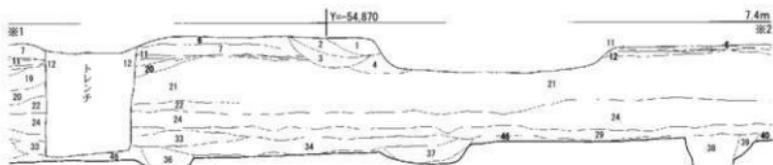
また、グリッド1～3の下層遺構の調査においては、遺構断面に表れた灰色砂質土による整地面を鍵層として、整地面の検出と精査を行った。これは均質な砂質土を平坦に敷いたもので、この整地面に伴う遺構は皆無であった。第19次調査で第II期の東門遺構を検出した遺構面につながるもので、東門の前面に奥行き20mほどの広場が設けられていたものと推定される。Fig.177の10・12層、Fig.178グリッド2南壁の52層、グリッド1南壁15層が、これにあたる。

福岡城築城直前の16世紀においては、西から東にかけて、段切り造成で屋敷地がつけられていた(Fig.179)。中段には、SD17033とSD17060で区画された屋敷地があり、A・B・Cの落ちとは、SD17033の段切りに伴って掘削されたものであろう。鴻臚館時代に作られた高低を利用したとすれば、古代にはおそらくDとFを結ぶ直線的なラインで段をつくっていたものと思われる。SX17194は、福岡城築城時の掘削であり、下段の屋敷地は区画溝を半ば切り込まれている。16世紀の屋敷地段階では、区画溝の西側から段切りの斜面が立ち上がったはずである。区画溝に応じた、弧を描いた段切りがなされていたとすれば、SX17194の上端よりも東側に落ち際があったであろう(J-K)。これも古代の地形を取り込んだとすれば、Hの直線的な落ちがこれにあたるだろう。東の谷から鴻臚館東門に、正面から上るには、若干急でも階段を設置した斜面をつくっていたはずである(H-D)。

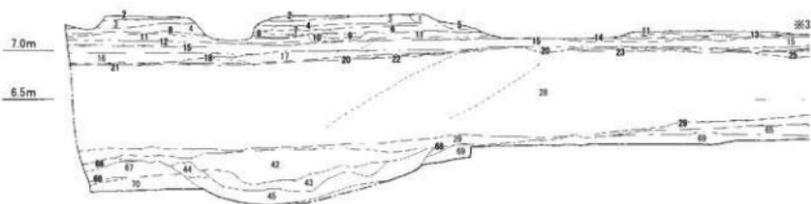


- 1: 茶色土 2: 赤茶色土 3: 黄茶色土、地山風化粘土ブロックを多く含む 4: 明茶色土 3・4層は近世初頭福岡城築城時の盛土層 5: 16世紀の溝の埋土 6: 灰色粘土、墳面に礫が集中し、鉄分が沈着して硬化、堀底道と思われる 7: 褐色粘質土、瓦破片を多く含む、中世の包含層 8: 暗褐色土、締りない、杭跡か 9: 暗灰褐色土、ゆるい 10: 赤茶色土、ベタツとしたきめ細かい均質土 11: 赤茶色粘質土、赤色の地山粘土ブロックまじり 12: 灰黄色粘土、白色の地山粘土ブロックを多く含む 13: 赤茶色土 14: 赤茶色土、赤色の地山風化質粘土ブロックを多く含む 15: 赤茶色土 16: 炭層 17: 暗灰色土、炭まじり 18: 灰色土、炭粒まじり、灰の堆積 19: 黄灰色粘質土、地山風化粘土ブロック多く含む 20: 明茶色土、地山風化粘土ブロックを若干含む 21: 赤茶色土 22: 暗褐色土、炭粒まじり 23: 明茶色土 24: 茶褐色土、円形ピット埋積土 25: 灰黄色粘質土、溝埋土 26: 赤茶色粘質土、27: 明茶色土 28: 茶色土 29: 黄赤色粘土、地山風化粘土ブロック多い 30: 暗灰褐色土、炭まじり 31: 黄灰色土、灰白色粘土ブロックを多く含む 32: 暗褐色土、夾雑土多い 33: 茶色粘土 34: 明茶色土 35: 黄灰色土、灰白色粘土ブロックを多く含む 36: 暗褐色粘質土、夾雑土多い 37: 炭・灰層 38: 灰褐色粘質土、夾雑土多い 39: 炭層 40: 暗褐色土、夾雑土多い 41: 暗褐色土、地山粘土ブロックまじり 42: 黄色土、地山風化粘土ブロック多い 43: 灰茶色土、地山粘土ブロックまじり 44: 黄灰色粘質土、灰色粒土まじり 45: 暗灰褐色粘質土 46: 灰色粘土 47: 褐色粘土 48: 炭層 49: 茶色粘土 50: 暗灰褐色粘質土 51: 灰茶色土、地山風化粘土ブロックまじり 52: 茶色粘土 53: 暗褐色粘質土、瓦まじり、遺構埋土 54: 灰色粘質土、黄白色の地山風化粘土ブロックを多く含む 55: 灰褐色粘質土、夾雑土多い 56: 灰色粘質土、炭まじり 57: 暗褐色粘質土、夾雑土含む 58: 暗褐色粘質土、夾雑土多い 59: 暗褐色粘質土、夾雑土含む 60: 暗褐色粘土、均質 61: 灰色粘土、夾雑土多い 62: 黄色～茶色粘質土、地山粘土に類似

Fig.177 第23次調査グリッド3・西壁土層実測図(1/50)



- 1: 茶褐色土 2: 褐色土 3: 灰褐色土 4: 淡褐色土、砂礫まじり 5: 黄灰色土 6: 黄褐色土
 7: 赤茶色土 8: 茶色壤土質土 9: 黄茶褐色土
 10: 黄褐色土、地山風化頁岩小ブロックまじり
 11: 明褐色土 12: 暗褐色土 13: 赤茶色土 (6~13一近世整地層) 14: 淡赤茶色土、地山風化頁岩小ブロックまじり 15: 黄茶褐色土 16: 灰白色土、地山風化頁岩ブロックまじり 17: 黄茶褐色土
 18: 灰土、地山風化頁岩ブロック多い



- 1: 茶色土 2: 灰褐色土 3: 茶色粘質土 4: 濃暗褐色粘土 5: 黄褐色粘質土 6: 暗褐色粗砂 7: 茶色粘質土 8: 灰白色粘質土 9: 茶褐色土 10: 黒褐色土 11: 濃茶色粘質土 12: 灰黄褐色土 13: 灰褐色粘土 14: 赤褐色粘土 15: 赤色土、ピンク色の地山風化頁岩ブロック多く含む 16: 橙色粘質土、白色・黄色・ピンク色の地山風化頁岩ブロック多く混じる。 17: 淡赤褐色土、白色の地山風化頁岩ブロックまじり 18: 赤色粘土 19: 灰色粘質土、白色の地山風化頁岩ブロックまじり 20: 黄褐色粘土 21: 黒褐色土 22: 赤色粘土 23: 灰褐色粘土 24: 黒灰色粘質土 25: 黒褐色粘質土 26: 暗褐色土 27: 濃褐色土 28: 黄色粘質土、白色、橙色等の地山風化頁岩ブロックまじり 29: 茶褐色粘質土 30: 明褐色土 31: 灰茶色土 32: 黒褐色土 33: 暗褐色土、締まりなくベタベタ、中世溝の埋土 34: 暗褐色土、締まりなくベタベタ 35: 褐色土 36: 明茶褐色土 37: 黄灰色砂質土 38: 赤褐色土、締まりなくベタベタ

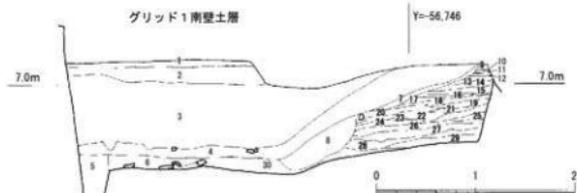
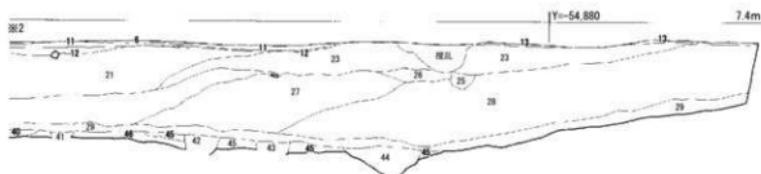
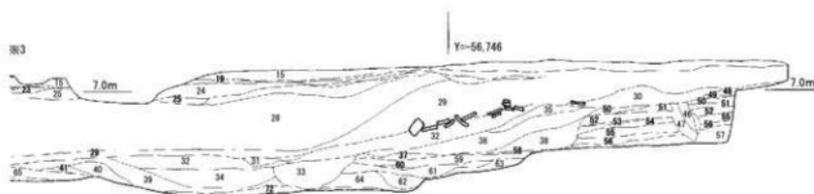


Fig.178 第23次調査グリッド1~4土層実測図 (1/50)



グリッド4西壁土層

19: 褐色土、地山風化頁岩ブロック多く含む 20: 灰色土、地山風化頁岩ブロック多い 21: 灰色～茶色土、地山風化頁岩ブロック多い、層理は水平方向 22: 茶褐色土、地山風化頁岩中程度ブロック多く含む 23: 暗茶色壤土質土、地山風化頁岩の小ブロック若干含む 24: 灰白色土、地山風化頁岩の大型ブロック多い 25: 黒褐色土 26: 暗褐色壤土質土 27: 茶色壤土質土、暗褐色土が左下がりの層位で数層混じる 28: 黒褐色壤土質土、茶色土が左下がりの層位で数層混じる 29: 茶褐色壤土質土(14～29-中世包含層) 30: 褐色土 31: 暗灰色土 30・31-中世土坑埋土 32: 黒褐色壤土質土 33: 暗茶褐色土 34: 暗茶色壤土質土 35: 濃茶色粘質土 36: 暗褐色土、溝埋土 37: 暗茶褐色粘質土 38: 暗灰色土、炭粒まじり 39: 褐色土 40: 暗褐色土 41: 暗灰色土 42: 暗褐色土、ビット埋土 43: 暗褐色土、ビット埋土 44: 暗褐色土、中世溝埋土 45: 暗褐色土 46: 濃赤茶色粘質土



グリッド2南壁土層

39: 暗褐色土、締まりない 40: 暗茶褐色粘質土、茶色粒土がブロック状に混じる 41: 暗褐色土 42: 暗青灰色粘質土 43: 褐色粘土、茶色粒土まじり 44: 濃褐色粘質土 45: 黒褐色粘土 46: 暗褐色土、柱痕跡 47: 灰白色土 48: 赤褐色土 49: 白色粘質土 50: 明茶褐色土 51: 明赤褐色土 52: 黄白色土 53: 赤色土 54: 灰赤色土 55: 明赤褐色土 56: 茶褐色土 57: 茶色土、地山風化頁岩の大型ブロック多い 58: 灰色砂 59: 茶褐色土 60: 灰白色粘土 61: 黄茶色土 62: 暗黄灰色土 63: 黄褐色土 64: 暗黄灰色土 65: 暗茶褐色土、茶色粘土粒を多く含む 66: 褐色粘質土 67: 褐色土、橙色の粒土ブロックまじり 68: 暗褐色土 70: 暗灰色粘質土 71: 赤茶色粘質土 72: 茶色粘質土

1: 赤黄色土 2: 暗褐色土 1・2-近世堆積土 3: 灰茶色粘質土、白色の地山風化頁岩粘土ブロックまじり、近世初頭築城時盛土層 4: 暗褐色土、瓦包含、中世包含層 5: 黒灰色土 6: 黒灰色土 7: 暗茶色土 5～7-中世堆積土 8: 暗褐色土、中世溝埋土 9: 暗褐色土 10: 暗赤茶色土 11: 黄褐色土 12: 赤茶色土 13: 黄灰色土 14: 茶色土 15: 灰～黄灰色砂質土(整地面) 16: 灰～黄灰色砂質土、15に比べ粘性大 17: 赤茶色粘質土 18: 赤褐色土、地山風化頁岩小ブロックまじり 19: 灰茶色粘質土 20: 暗灰色粘質土 21: 暗灰色粘質土 22: 明茶色土、地山風化頁岩小ブロックまじり 23: 黄灰色粘土 24: 明茶色粘質土 25: 茶色粘質土 26: 黄灰色粘質土 27: 黄灰色粘質土、26に比べ黄味強い 28: 赤褐色粘質土、地山風化頁岩ブロックまじり 29: 茶色粘質土 30: 黄灰色粘質土

以上の検討から作成した推定断面図を、Fig.179 下段に示す。O-P-Q-J-K-R が、16 世紀代、S-D-T-H-I-R が、鴻臚館第Ⅱ期・第Ⅲ期の推定断面である。SB17701・SB17702 は、東の谷から斜面（階段）を上って出た平坦面に建てられていたもので、建物の脇を抜けさらに数段の階段を上ったところで、左右に扉が伸びた東門を正面に見る広場に出るといった景観が復元できる。（大庭）

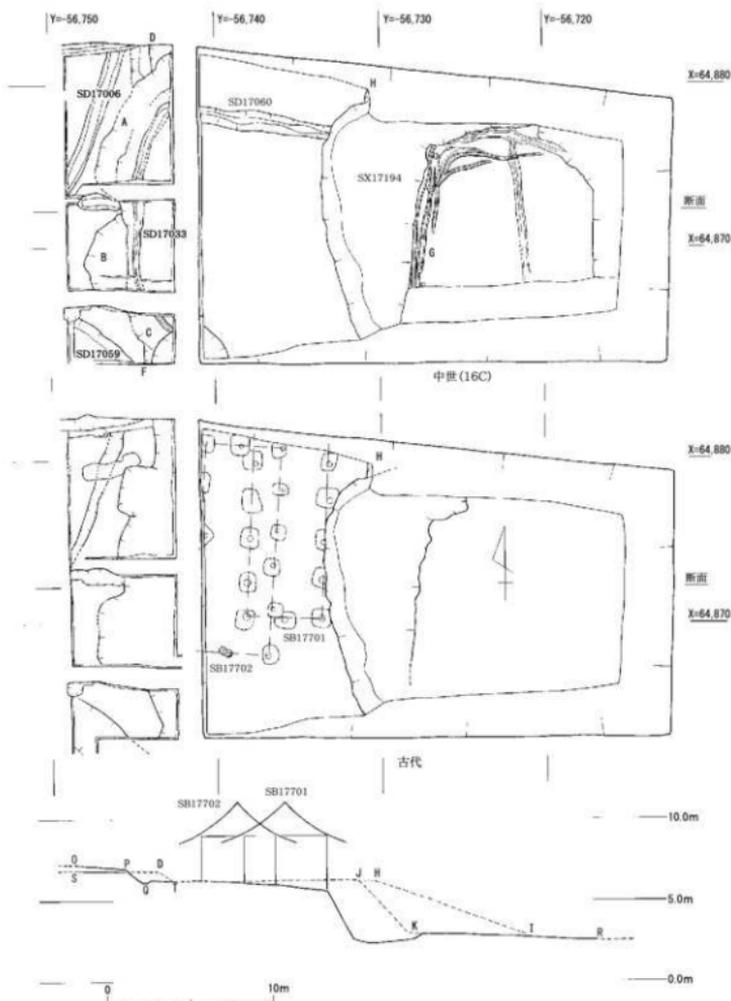


Fig.179 第23次調査グリッド1～4古代地形推定図(1/300)

5. 小 結

(1) 北館の主要遺構

第Ⅰ期の北館では、掘立柱列を長方形に巡らせた区画と、区画内に配された掘立柱建物1棟を検出した。柱列と平行する土留め石垣(高さ1.6m)が谷の北斜面に築かれている。主軸方位は南館と若干異なる。第Ⅰ期の建物は南館・北館ともに柱穴の残りが悪い。第Ⅱ期柱穴の残りが比較的良好ことから、第Ⅰ～Ⅱ期間に1m以上の大きな削平が行われ、土砂を周辺に押し出して敷地の拡張を行ったと考えられる。本来は北館の区画中には他の建物も存在したと想定される。

第Ⅱ期の北館では、布掘り塀1棟、東門1棟、便所遺構3基の遺構を検出した。主軸方位は南館と同一で、布掘り塀の規模や門の位置、便所遺構の配置など類似する。谷は整形して北斜面に高さ4.2mの石垣を築き(Ⅱ期以前の築造の可能性がある、詳細は後述)、谷の開口部の東側に土橋を架けている。谷頭には二つの池を設けるが、ひとつは第Ⅱ期のうちに埋没している。北館東門の東側の約1m低い平地には南北棟の掘立柱建物がある。北館の北側では基盤の風化頁岩の段落ちを盛土造成で拡張しており、今回確認した旧地形の矩形のコーナーと中央の堀の西側の立ち上がり、南館の西側の造成ラインはほぼ一直線上に並ぶことから、造成の設計の基準線の一部を示すものと推測される。斜面下は砂丘面に瓦を敷き、盛土整地を行っている。詳細は後述。

第Ⅲ期の北館では、礎石建物1(東西棟)を確認した。北側の斜面等に落ち込んだ礎石があることから、礎石建物は北側にも存在したと考えられる。想定復元では建物主軸は第Ⅱ期を踏襲しており、主軸を変えずに建物の拡張を行ったと考えられる。南館より一回り小さいものとされる。谷はさらに埋められて幅が狭くなり、木橋が架けられる。

第Ⅳ期以降は明確な建物遺構はなく、廃棄土壌等が見られ、以後も継続していたことは推測される。北側の斜面や斜面下は大きな改変はなかったと考えられる。

以上が、主要遺構の概要である。これ以外の遺構については、来年度刊行の「北館の報告(2)」で報告する予定である。(菅波)

(2) 第Ⅰ～Ⅱ期の建物遺構の変遷について

第Ⅰ～Ⅱ期にかけての建物構成や規模の変化等があり、整理すると以下のような変遷が追える。

成立期の第Ⅰ期であるが、南館と北館では方位も若干異なり、建物構成も異なっている。本来の南館建物群は口の字形を呈する配置であったと想定される。内部にある建物は中心建物であった可能性が高い。北館は建物を塀で囲むもので、内部に数棟程度の建物が想定される。遺構や地形などを考慮して復元したものをfig.180に示した。南館は推定復元であるが、規模は東西52m、南北37m程度となる。建物配置に注目すると、長舎が中心建物を取り囲む構造は初期の郡庁の建物配置に類似する。例えば、早良区有田遺跡群で確認された早良郡庁(7世紀後半から8世紀前半に比定)と比較すると、縦横の比率や中心建物の配置に相違はあるが、規模や長舎からなる構造は類似点が多い。郡庁は政務の実務的な場である一方で、儀式や饗宴の場としての機能も想定されている(註1)。また、時期はさかのぼるが、7世紀中ごろの斎明朝の饗宴施設とされる奈良県石神遺跡のA3期東区画建物群は、四面庇の中心建物を長舎で取り囲む構造で、饗宴施設の建物配置モデルとして取り上げられている(註2)。このようなことから第Ⅰ期の南館にも儀式や饗宴施設の機能を想定できるのではないかと考える。一方、北館の構造は建物を塀で取り囲むものであり、その構造から部外者との接触が避けられた外交使節が滞在する館(宿舍)と想定できるのではないかと考える。つまり、海側に近い北館は宿舍であり、一段高い位置にある南館は儀式や饗宴施設となり、外交使節の宿泊、管理、饗応の機能を備

えた施設の姿が浮かんでくる。

天武朝（672～686年）から持統朝（687～697年）にかけて、新羅使などの使節が頻繁に来朝しているが、天武8年（679）から持統4年（690）の間は入京せずに筑紫で饗応を受け、帰国している。筑紫での外国使節の饗応は京から遣わされた使者により行われ、川原寺から伎楽が運ばれるということもあった。おそらくその間には筑紫における外国使節に係わる制度面や施設面での整備が行われ、それが整ったものが筑紫館であり、先に示した構造の施設であったと推測する。

一方で、第Ⅱ期は中央の谷や周囲を埋め立てして敷地を拡張した上で、南館、北館ともに同一の規格のものとなる。塀の内部の建物構成は不明であるが、瓦葺建物を配置したと考えられる。第Ⅰ期と比較すると、塀で囲まれる構造は北館で見られたもので、第Ⅱ期では南館も同様の構造になっている。そのことから第Ⅰ期の北館で想定した宿舎機能は拡充する形で、南館も同様のものになったと考えることができる。それでは第Ⅰ期で想定した饗宴施設はどうなったのであろうか。この時期では新羅使の来朝はあるものの、筑紫館での饗宴の記事は見られない。大宰府政庁が整備された8世紀前半以降は、著客に係わる制度面、施設面も整ったことで、公的な饗宴は大宰府で行われ、鴻臚館の主たる役割は管理、宿泊、供給となったと推測される。（菅波）

注

- 1 山中敏史「古代地方官衙遺跡の研究」（塙書房 1994年）
- 2 小田裕樹「饗宴施設の構造と長舎」（『長舎と官衙の建物配置 報告編』第17回 古代官衙・集落研究会報告書 クバプロ 2014年）

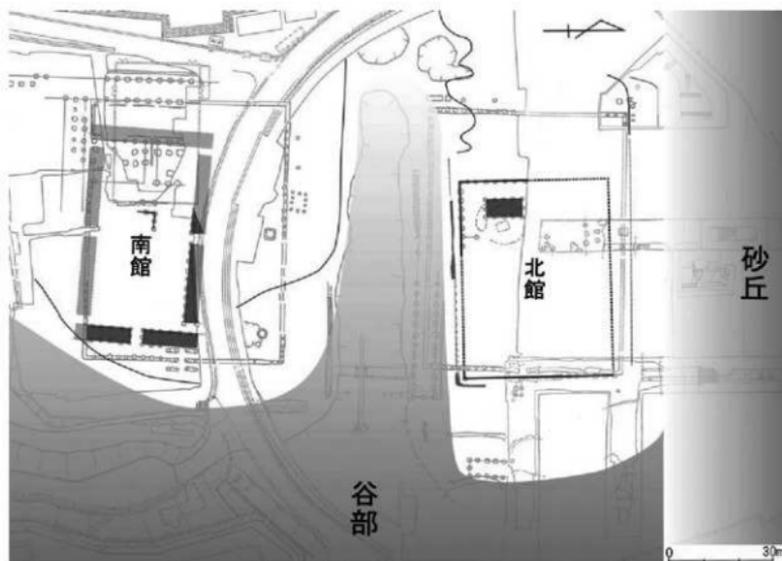


Fig.180 第Ⅰ期南館・北館想定復元図

(3) 石垣遺構について（および北館第Ⅰ期から第Ⅱ期の年代観について）

北館の調査では、第20次調査と第23次調査において、石垣遺構を検出した。古代の石垣として、類例は少なく、また鴻臚館の造営過程を考えるうえで重要な手掛かりを与える遺構であると考えられるので、若干の検討を加える。

① SX1245・SX14527について

鴻臚館第Ⅰ期の石垣遺構である。東西軸は、 $N-88^{\circ}-E$ （真北を基準、以下同様）にとり延長約52m、東端でほぼ真北に折れて約7mつづく。

鴻臚館の造成にあたっては、西から東方向に伸びる丘陵の尾根を削って谷を埋め、敷地を確保しており、第Ⅰ期石垣はこの盛土斜面上に築かれている。そのため敷地が最も谷に張り出した南東角で石垣は最も高く、北へは急激に、西へは徐々に高さを減じていく。すなわち、造成斜面を鏝つたものではなく、造成土上にさらに積み土した北館施設の境界の土止めとして築かれたものであろう。

鴻臚館第Ⅰ期は、南館では長舎風の掘立柱建物より構成されているが、柱穴から遺物が出土していないため、時期を判断することができない。北館では、掘立柱建物と柱列（塀）からなり、やはり遺物の出土は少ないが、7世紀後半の須恵器が出土した。第Ⅰ期石垣東角の調査では、石垣背後の盛土整地層であるⅠ層から7世紀中頃を下限とする須恵器が出土した。すなわち、鴻臚館第Ⅰ期を位置付ける資料はきわめて少ない訳であるが、7世紀中頃を大きくはくらない時期に造成が始まり、7世紀後半の内には塀によって区画された掘立柱建物による北館の施設が完成したものと考えられる。

② SX14528・SX17703について

従前、第Ⅱ期石垣とされてきたものであるが、本報告書においては、第Ⅰ期～第Ⅱ期間の遺構としている（後述）。

第20次調査地点をほぼ東西に横断し、東は第23次調査地点に達する。中央谷の北斜面上に築かれた石垣であるが、55頁で述べたように、第18次調査地点の中で谷は収束しているため、東西の延長は約100mにわたることが推定できる。東西軸は、 $N-88^{\circ}30'-E$ にとる。第23次調査では、石垣東端を確認していないため、屈折するか否かを含め、不明である。

また、SX14528はその東端部分において、崩壊と積み直しがあったことが確認できたが、SX14528とSX17703の中間にあたる、Y座標-56768で設定したトレンチ（第21次調査03-2トレンチ）では、石垣は検出されず、整地土による傾斜面が確認された。おそらく何ヶ所かの部分で早い時点で石垣が崩れるといった状況が見られたのであろう。石垣の石材は、附編の唐木田報告にあるように基本的に礫岩と玄武岩によるものであるが、いずれも鴻臚館が立地する丘陵に産するものではない。石垣築造には、かなりの手間と労力を要したものと考えるが、それでも短期間で埋め込んでしまった背景には、裏込めを行わない構造的な脆弱さがあったものと考えられる。

さて、SX14528・SX17703を特徴づける大きな特徴は、石垣が途中で屈折して角度を変えつつ、高さ4m付近まで積み上げられている点である。すなわち、基盤から1.4～1.5mは $74\sim 80^{\circ}$ 、それ以上は 55° の傾斜角をなしている。下から上まで、一気に急角度で積み上げることはできなかったためであろう。

③ 石積み目の検討

ところで、このような特徴を持つ石垣は、どこに由来するのであろうか。そもそも、古代における石垣遺構は、決して一般的ではない。古墳時代では、群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡などの関東の豪族居館には堀の護岸として石垣が用いられているし、飛鳥の宮都においては、苑池の護岸としても見られる。ま

た、大野城・基肄城・金田城などの古代山城においては、石塁遺構や文字通りの石垣として多用されている。しかし、官衙遺跡や東北地方の城柵遺跡で石垣が用いられることはない(註1)。また、前述した遺跡においても、途中で屈折して角度を変えながら高さを稼ぐ石垣は見られない。

しいて、類例を求めるならば、筑後地方の耳納山麓の一部の古墳で、墳丘の葺石と同様の特徴を見ることができる。久留米市田主丸町から浮羽郡うきは町にかかる狭い地域においては、田主丸大塚古墳・寺徳古墳・西館古墳・古畑古墳(以上、装飾古墳)などにおいて、大型の石材を丁寧に急角度で積み、「葺石というよりも石垣に近い印象を受ける」(田主丸教委 1996・2001)と形容される葺石が見られる。この中に屈折が見られる事例がある。すなわち、田主丸大塚古墳トレンチ1では、基部から0.75mほどは 60° 以上、それ以上は 45° 前後の傾斜となる高さ2.5mほどの葺石が調査されている。古畑古墳トレンチ1・4では、屈折はないが、傾斜角 55° 程度、高さ1.0~1.3mの石垣状葺石が検出された(Fig.181)。

これらは、石材を横に使い、横方向の目地をそろえて石を組み、隙間には土を充填するなど、鴻臚館の石垣遺構に共通する特徴を持つ。ただし、確認調査のため葺石の断ち割り調査はなされず、裏込

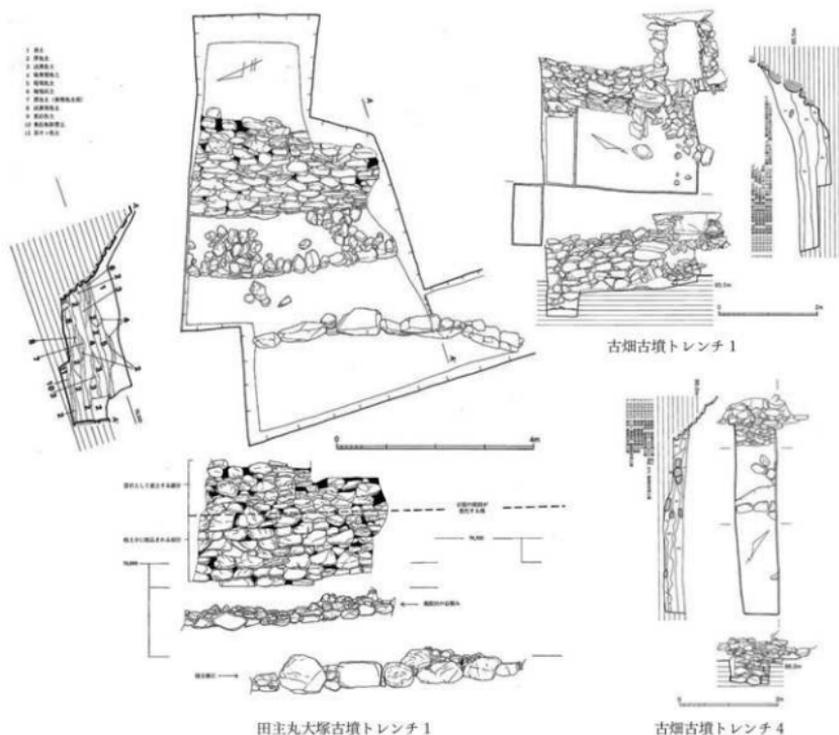


Fig.181 田主丸大塚古墳・古畑古墳葺石実測図(1/100)

めの有無は不明である。しかし、葺石であるということを考えれば、裏込めはなされていないと推測して大過ないだろう。

また、田主丸大塚古墳では、屈折部以下の石積みについては、葺石裾から2.5mほど手前に二重積みの列石が巡っており、その間を埋め込んで、葺石の中段付近から外周の列石にかけて積土による段が形成されていたとする。鴻臚館の石垣SX14528・SX17703では、屈折部以下を埋め込んだとみられる土層は確認できない。傾斜角に注目するのであれば、上記古墳にみられる葺石は、おおむね55°程度、田主丸大塚古墳で急傾斜とされた下半部分でも60°程度であり、SX14528・SX17703の下半80°と比較すると緩く、SX1245の60°、SX14528・SX17703の上半部の傾斜角55°に相当する。

これらの古墳は、6世紀後半に位置付けられており、田主丸大塚古墳は6世紀後半から末とされる。SX1245が築かれた7世紀後半は、白村江の敗戦を受けて西日本各所に古代山城が築かれた時代であり、北部九州においても665年に大野城・基肆城、667年に金田城が相次いで整備された。鴻臚館第I期は、これとほぼ同時かやや後出するものと思われるが、大規模な山城築城が急がれる中で、半ば防衛的性格を兼ね備えた外交施設のために在地の技術集団が動員されたとしたら、かつて耳納山麓の古墳で石垣的な葺石を積んだ経験を持つ集団が受け持ったということもありうるのかもしれない。その技術的な限界が、屈折を持って高さを稼ぐ工夫を生み、一方で崩壊を防ぐことができず短命な石垣にとどまったということができているのではなかろうか。

④ 造営時期の検討

第I期石垣SX1245・SX14527の築造年代については、①で記したとおり、7世紀後半と考えられる。ここでは、第I期～第II期間の遺構としたSX14528・SX17703について、若干の検討を行う。

まず、従前第II期としてきた年代観を改めた根拠であるが、SX14528とSX17703を結ぶ石垣の推定ラインが、第II期の指標である布掘り塀と交差することによる。実は、第20次調査時点から、その可能性は想定されていた。すなわち、石垣遺構の軸線方位(N-87°30'-E)と布掘り塀の軸線方位(N-91°30'-E)が異なり、第20次調査区の東端において、両者は極めて近接しており、塀のすぐ際が石垣斜面になる状況が想定されたのである。しかし、鴻臚館の時期区分をいたずらに細分することで、各時期の鴻臚館像があいまいになる可能性が懸念されたため、あえて大括りのまま、従来

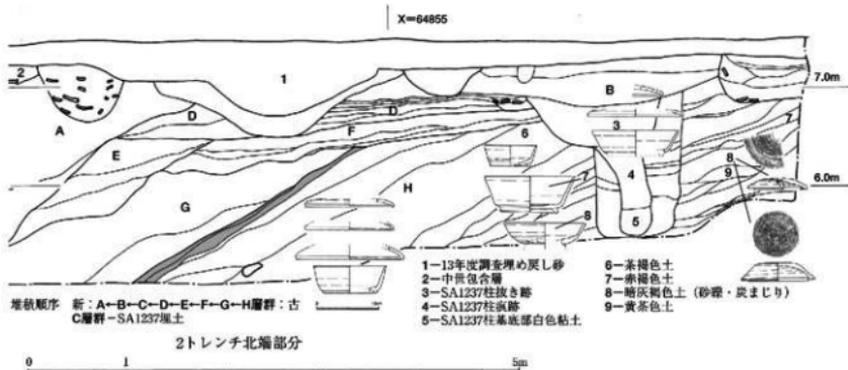


Fig.182 03-2トレンチ土層・出土遺物(土層は1/50、遺物は1/10)

の時期区分の中に納め、第Ⅰ期石垣の次の段階という意味合いを込めて第Ⅱ期石垣と呼んできたという次第である。

そのため、今回北館遺構の本報告を行うにあたって、改めて时期的位置付けを正し、第Ⅰ期～第Ⅱ期間の遺構とした。それでは、第Ⅰ期～第Ⅱ期間の遺構としてのSX14528・SX17703は、どのような実年代観に当てはまるものであろうか。

SX14528・SX17703の築造年代を示す資料は、すなわちSX14528・SX17703を中央谷に面する壁とした盛土造成の時期である。SX14528・SX17703にかかわる盛土中に瓦片が含まれることは、第20次調査のトレンチ02-1～3の調査ですでに知られていた。しかし、縄目叩きを持つ布目瓦の小片という以上の出土遺物は得られなかったのであるが、第21次調査の03-2トレンチにおいて、少量ではあるが検討に資する須恵器片を得ることができた。詳細はすでに「鴻臚館跡18」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1022集に報告しているので、主要な須恵器と出土層位のみFig.182に示す。

03-2トレンチでは、石垣遺構自体は検出できなかったが、石垣崩壊後に傾斜面を整えた暗灰色土層が、H層群を覆って斜面を形作っている。これが石垣築造後、どのくらい後になっての造作なのか明らかではないが、仮に遅れるとしても、石垣築造にかかわる盛土は、石垣想定線からみて、6層と7層の間の斜堆積以下の土層群であることはほぼ間違いない。新しい相違から順に出土遺物を見ると、H層群出土須恵器は、8世紀末～9世紀初頭の特徴を示す。6層はH層群に含まれる土層で、やはり同時期の様相を持つ。7層出土須恵器は、8世紀前半であろう。8層は7世紀後半～8世紀前半の幅を持つ。9層出土遺物は7世紀前半～中頃の特徴を持つ。SX17703の19層は、灰色砂質土による整地傾斜面で、64ページに記したように9世紀代の可能性を持つ。これがH層群を覆う暗灰色土の整地傾斜面に対応するとすれば、H層群の年代観とは整合する。

したがって、SX14528・SX17703にかかわる盛土の年代を7・8層が示す8世紀前半とし、SX14528・SX17703は8世紀前半の築造と考える。

⑤ 第Ⅱ期の年代比定について

03-2トレンチ出土遺物は、鴻臚館第Ⅱ期についても重大な課題を示す。すなわち、上述したH層群・6層は、あきらかに第Ⅱ期布掘り堀に先行する堆積層である。それが、9世紀に位置付けられるとすれば、第Ⅱ期布掘り堀の年代も9世紀以降に下るものとなる。実際、03-2トレンチのSA1237出土遺物は、8世紀末～9世紀初頭を示している。しかし、その場合、布掘り堀とともに第Ⅱ期の代表的な遺構である便所遺構(SK1124・1125)が、8世紀後半に位置付けられることは乖離する。これについては鴻臚館全体の年代観とも連動した問題であり、現時点では事実関係の指摘にとどめ、今後の検討課題としたい。(大庭)

田主丸町教育委員会 1996 「西館古墳」田主丸町文化財調査報告第6集

田主丸町教育委員会 2001 「田主丸大塚古墳」田主丸町文化財調査報告第15集

田主丸町教育委員会 2001 「国指定史跡 寺徳古墳」田主丸町文化財調査報告第18集

うきは市教育委員会 2007 「国指定史跡 屋形古墳群-珍敷塚古墳・原古墳・鳥船塚古墳・古畑古墳の史跡内容確認調査-」うきは市文化財調査報告書第2集

舟山良一 2008 「須恵器の編年」「牛頭窯跡群-総括報告書1-」大野城市文化財調査報告書第77集

註1 例外的に、秋田県弘田柵跡では門の両翼に低い石垣が袖状にとりついている。

(4) 築地塀の可能性のある整地遺構 SX19610 について

トレンチ 3 下層調査で検出した SX19610 は、下層の整地層と上層の粘土層からなる遺構である。うち、下層の整地層は赤褐色粘土と暗褐色砂質土を交互に約 5cm 厚で数枚重ねた地下事業であり、これに類似する整地については、トレンチ 1・6 においても瓦敷き遺構を覆う形で行われ、かさ上げが行われていたことが認められた。一方の上層の粘土層は、下位の明黄褐色層と、これが汚染された上位の暗黄褐色層の 2 層からなり、下位層は南北幅 2.5m、上位層は同じく 6.0m の範囲にあって、上位粘土が下位粘土をすっぽり覆っている。これらは 164 頁に述べた通り、下位の粘土層が塀の基底部、上位の粘土層が塀の積み土または積み土が崩壊堆積したものであると解釈することができよう。この粘土層から出土した遺物には越州窯系青磁五輪花大碗のほか、縄目叩きや平行叩き（2B 類）などの奈良期の瓦に混じって単線斜格子叩きの平安期の瓦が含まれている。また下層の整地層からは 5B 類の叩打痕のある瓦が出土しているが（小片のため図化していない）、この瓦は女原瓦窯跡の調査報告で「M 型」に分類された独特の叩き文様をもつもので、同窯跡で生産された瓦であるとみられる。女原瓦窯跡は 9 世紀中頃～10 世紀前半の創業時期が想定されていることから、SX19610 については鴻臚館時期区分の第 IV 期（9 世紀後半～10 世紀前半）以降に位置づけることが妥当であると考えられる。この SX19610 と南側台地北斜面下端との距離は 11m を測り、ここには縄目叩きの瓦のみを敷き詰めた遺構 SX19512 がある。SX19512 は南側と北側を中世に削平されて残りが悪く、斜面下端から約 6～9m の部分にのみ認められたが、本来は斜面下から SX19610 の南側まで広がっていた可能性がある（SX19610 とは重複していない）。

次に他のトレンチの状況を見てみる。トレンチ 1 の斜面下では、標高約 3m の砂丘面に瓦を敷き詰めて粘土で覆った整地層を確認した。斜面の下端から北側に 10m 弱の範囲まで瓦敷きが伸びる。整地に使用された瓦が縄目叩きの平瓦であることから、第 II 期（8 世紀前半）のものと考えられる。鴻臚館廃絶時までには約 60cm のかさ上げが行われている。トレンチ 2 では、近世遺構保存のために調査範囲が限定され、瓦敷き遺構も明確な整地層も確認してはいない。このトレンチで検出した SX18500 は風成砂上に瓦片がまもって散布する遺構だが、他の瓦敷きとは異なり意図的に並べたような状況ではなく、瓦の敲打痕からみて鴻臚館終末期（11 世紀半ば）までの遺物を含み時期も異なっている。SX18500 の南端では、瓦を多量に含む層の下層に粘土層が一部認められ、他のトレンチで確認された整地層に相当するとみられる。ちなみに砂丘上に瓦が散布する状況は更に海側（北側）にも認められ（トレンチ 3 の SX19606・19607）、砂丘上に局所的に瓦の散布が行われていた可能性がある。トレンチ 6 では、斜面下の砂丘上（標高約 3m）に瓦を敷き詰めて粘土で覆った整地層を確認した。調査区北側では途切れて砂丘となる。瓦の特徴から第 II 期の造作とみられ、鴻臚館廃絶時までには約 60cm のかさ上げを行っている。中世（15～16 世紀）の溝（幅約 3m、深さ約 50cm）が切り込むため、瓦敷き遺構の北端は不明である。

以上のことから、第 II 期には台地の北斜面下に瓦敷きの施設が幅 10m 前後で東西方向に長く伸びていたものと考えられる。トレンチ 1・6 では瓦敷き遺構の上層を覆う整地層を確認したが、トレンチ 3 に見られたような整地層の上に黄褐色粘土が厚い層をなすような状況は認められなかった。また、いずれのトレンチでも斜面下には中世（15～16 世紀）の溝が掘られており、斜面下では水が常時しみ出してぬかるむような状況であった可能性が考えられる。

Fig.183 は、SX19610 の下位粘土（幅 2.5m の塀基底部）が第 II・III 期建物と並行して東西に伸びる場合の推定位置を示した図である。この推定線と上記の遺構群の位置関係をみると、塀の推定線と瓦敷き遺構の北端がほぼ同じ位置にあたっており、これらの遺構よりも北側は砂丘となり鴻臚館に關

る明確な構造物は認められない状況にあることが分かる。よって、これが鴻臚館の外郭線を示す可能性があり、第Ⅱ期に比定される瓦敷き遺構の北端部に、第Ⅳ期に塀が造られたと解釈することができる。この想定が当たっているならば、鴻臚館の北面について以下のような風景が復元されよう。

鴻臚館の台地北側の斜面を下りた低地は、斜面裾からしみ出す湧水によって地盤が常時軟弱な状態であったため、斜面下に沿って瓦を敷き詰めたものと考えられる。敷かれている瓦からみて、これが造られたのは第Ⅱ期であったと考えられる。この瓦敷きは斜面下から10m前後の幅で東西に伸びており、この北側の瓦敷きが途切れて砂丘へと続く部分には何らかの外郭施設があったと考えられるが、第Ⅱ期の遺構については確認できない。このような状況がいつまで続いたのかは明らかではないが、第Ⅳ期（9世紀後半～10世紀前半）頃には、この瓦敷き遺構は整地によって既に埋められ、瓦敷きの外縁に当たる部分に粘土を積み上げた塀が造られており、おそらく鴻臚館終末期まで継続したものと思われる。この塀の外は自然砂丘であったが、砂丘上にも瓦を割ってざっと敷いた広場ないし局所的な簡易通路が設けられており、海岸部で行われた交易等の行為に益したものと想像される。（吉武）

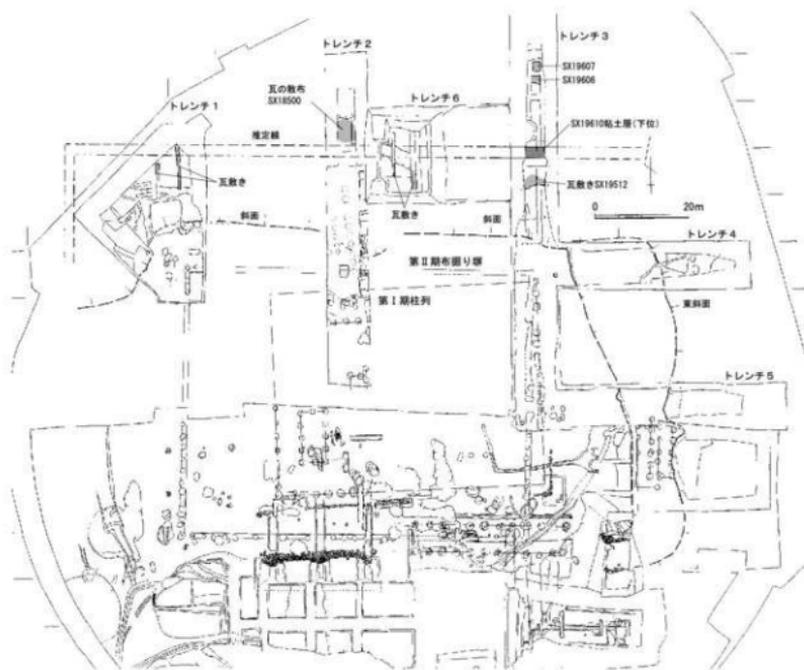


Fig.183 SX19610 推定線と関連遺構 (1/1,000)

鴻臚館跡における自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

ここでは、鴻臚館跡第 24 次調査で出土した炭化材を対象に放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築年代について検討する。

2. 試料

測定試料は、第 24 次調査 SX-18600 表土①より出土した炭化材 1 点である。

3. 方法

放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で 80°C で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表 1 にまとめた。

表 1 測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	24 次調査, SX-18600 表土①	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

4. 結果

年代測定結果を表 2 に示す。

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の

同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を校正することにより算出した年代(西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

2. 測定結果

試料名	測定No. (PEO-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代(西暦) ⁴⁾
No.1	776302	1360 ± 20	- 24.81	1360 ± 18	1σ : cal AD 650 ~ 670 (68.2%) 2σ : cal AD 640 ~ 680 (95.4%)

5. 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに暦年代校正を行った結果、SX-18600 表土①では 1σ の暦年代で AD 650 ~ 670 年の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾崎大真 (2005) INTCAL98 から IntCal04 へ、学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア No.3 - 炭素年代測定による高精度編年体系の構築 -, p.14-15.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法, 考古学のための年代測定学入門, 古今書院, p.1-36.

II. トイレ遺構分析

1. はじめに

便所遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示す。これらの特徴から他の堆積物と区別することができ、トイレ遺構を識別することが可能である。また、その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることができる。

2. 試料

分析試料は、鴻臚館跡第21次調査で検出された8世紀前半から中頃の便所遺構(SK-1124)から採取された堆積物(9層:最下層の一つ上の層、暗褐色土、木片多い)1点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 寄生虫卵分析

(1) 原理

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、便所遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができ便所遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。近年に始まった研究であり、現状では分析例も少ない。

(2) 方法

微化石分析法を基本に以下のように行う。

- 1) サンプルを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
- 8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行う

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行う。

(3) 結果

出現した寄生虫卵は、4種類である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、1cm³中の寄生虫卵数を図1に示す。出現した分類群は顕微鏡写真に示す。以下に出現した寄生虫卵の特徴を示す。

・回虫 *Ascaris (lumbricoides)*

回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられ、卵には受精卵と受精卵がある。遺跡の堆積物の分析では、堆積年数や薬品処理の影響から、受精卵と受精卵の区別は不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmあり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵に

なり経口摂取により感染する。

・鞭虫 *Trichuris (trichiura)*

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、 $50 \times 30 \mu\text{m}$ でレモン形あるいは蚊草ちようちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

・肝吸虫 *Clonorchis sinensis*

肝吸虫は、アジア地域に広く分布し、特に中国、日本、ベトナム、韓国に多い。日本では岡山県南部、琵琶湖沿岸、八郎潟、利根川流域などが流行地として知られている。虫卵は、およそ $30 \times 16 \mu\text{m}$ でなすび型で一端に陣笠状の小蓋を有する。卵殻の表面には亀甲状の紋理を認める。糞便とともに外界に出た虫卵は、水中で第1中間宿主のママタニシに食べられ、セルカリアになり水中に遊出し、第2中間宿主のモツゴ、モロコ、コイ、フナ、タナゴに侵入してメタセルカリアとなり、魚肉とともにヒトに摂取され感染する。

・異形吸虫類 *Metagonimus-Heterophyes*

日本各地でみられる横川吸虫や、瀬戸内海沿岸に多く、その他海に近い地域にかなり広く見られる有害異形吸虫は、中間宿主が異なるだけで発育史をはじめ形態なども良く似ている。卵はおよそ $27 \times 17 \mu\text{m}$ で、短楕円形または卵形、一端に小蓋を有するが、卵殻との境がほとんど突出せずスムーズである。卵殻表面は平滑で紋理はみられない。横川吸虫ではアユ、有害異形吸虫ではボラなどの生食により魚肉とともにヒトに摂取され感染する。遺跡の試料においては、小蓋がとれていたり、堆積環境や薬品処理などにより横川吸虫卵と有害異形吸虫卵の区別はつきにくいことから異形吸虫類とする。

分析の結果、SK-1124 (9層) より 1cm^3 中 1.4×10^3 個の寄生虫卵が検出された。寄生虫卵は分解がすすみ表面の痛みがひどく、特に鞭虫卵の変化が著しい。出現する寄生虫卵は、鞭虫卵と異形吸虫類卵が優占し、回虫卵、肝吸虫卵が伴われる。明らかな消化残渣などは検出されない。

(4) 寄生虫卵の特徴

鞭虫卵と異形吸虫卵が多い。鞭虫卵は、卵殻が厚く排卵数も多いため、遺跡においては比較的残存しやすい寄生虫卵である。一方異形吸虫類卵は、卵殻が薄く、蓋がはずれて分解されやすい。他に回虫卵、肝吸虫卵が検出された。これらの出現傾向や組成は、1994年福岡市埋蔵文化財調査報告書(第372集)の鴻臚館跡4に報告されているいずれの土壌とも異なり、密度も低い。

4. 花粉分析

(1) 原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

(2) 方法

寄生虫卵分析で2分しアセトリシス処理を施した沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成、検鏡・計数をおこなう。

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示す。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

(3) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉18、シダ植物胞子2形態の計34である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図2に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、クリ、シイ属ーマテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、サンショウ属、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、アリノトウグサ属ーフサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

SK-1124(9層)では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子が約30%を占める。草本花粉では、ヨモギ属とイネ科(イネ属型を含む)が優勢、アブラナ科、アカザ科ーヒユ科、ミズアオイ属、セリ亜科などが伴われ、ネギ属、ソバ属などが出現する。樹木花粉は、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、ブドウ属などが低率に出現する。

5. 種実同定

(1) 原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

(2) 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料 200cm³ に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(3) 結果

1) 分類群

樹木 3、草本 2 の計 5 が同定された。学名、和名および粒数を表 2 に示し、500cm³ 中の種実数を図 1 に示す。主要な分類群を顕微鏡写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

ヤマモモ *Myrica rubra* S. et Z. 核 ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

シマサルナシ *Actinidia rufa* Planch. ex Miq. 種子 マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。マタタビ、サルナシに比べ表面の穴が大きく深い。

[草本]

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に 4～8 本の針状の付属物を持つ。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。

2) 種実群集の特徴

SK-1124・9 層からは、ヤマモモ 2、ブドウ属 2、シマサルナシ 119、ホタルイ属 5、ナス 8 が検出された。ヤマモモ、ブドウ属、シマサルナシ、ナスは果実が食用となる。

6. 考察とまとめ

(1) 便所遺構の可能性と食生活について

SK-1124・9 層からは、鞭虫卵と異形吸虫類卵を主とするやや高密度の寄生虫卵が検出され、食用であるイネ属型を含むイネ科植物、ミズアオイ属、ネギ属、ソバ属、アブラナ科、セリ亜科、ウコギ科、サンショウ属、マメ科、薬用と考えられるアカザ科-ヒユ科の花粉およびヤマモモ、ブドウ属、シマサルナシ、ナスの種実が検出された。以上のことから、SK-1124・9 層は糞便を多く含む堆積とみなされ、SK-1124 が便所遺構である蓋然性は高いと判断される。

食生活としては、イネおよび雑穀類とソバの穀類、ミズアオイ属・ネギ属・アブラナ科・セリ類・ナス・マメ科の野菜類、ウドやタラなどのウコギ科やサンショウの木の芽や葉類、ヤマモモ・ブドウ属・シマサルナシの果樹類、沿岸の青魚・アユ・コイ科の魚類の食用が示唆される。アカザ科-ヒユ

科は寄生虫症の薬用で用いられた可能性がある。

(2) 周囲の環境

花粉の構成と組成および食用とならない種実の産出から、周辺または周辺地域で生育していた植物も反映されている。周辺はヨモギ属、イネ科などの草本が多く生育し、やや乾燥した環境であった。周辺地域には、シイ属-マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹が分布していたと推定される。

参考文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.
- 中村純 (1973) 花粉分析。古今書院, p.82-110.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第 10 号, p.21-30.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.
- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説。養賢堂, 494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類。弥生文化の研究第 2 巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種。月刊考古学ジャーナル No.409, ニューサイエンス社, p.15-19.
- 南木睦彦 (1991) 栽培植物。古墳時代の研究第 4 巻生産と流通 I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.
- 南木睦彦 (1992) 低湿地遺跡の種実。月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子。日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
- 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.2-14.
- 渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食。雄山閣, 187p.

表1 鴻臚館跡第21次調査における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群		SK - 1124
学名	和名	9層
Helminth eggs	寄生虫卵	
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>	回虫卵	15
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵	95
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵	15
<i>Melagoinimus-Heterophyes</i>	異形吸虫類卵	78
Total	計	203
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の寄生虫卵密度	1.4 × 10 ⁵
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉	
<i>Abies</i>	モミ属	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属 - マテバシイ属	12
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	20
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属 - ケヤキ	1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属 - ムクノキ	1
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1
<i>Vitis</i>	ブドウ属	6
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Moraceae-Urticaceae	クワ科・イラクサ科	2
Leguminosae	マメ科	9
Araliaceae	ウコギ科	11
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	70
<i>Oryza type</i>	イネ属型	10
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	15
<i>Allium</i>	ネギ属	6
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科	16
Cruciferae	アブラナ科	17
<i>Halenia-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属 - フサモ属	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1
Apiodeae	セリ亜科	11
Labiatae	シソ科	1
<i>Plantago</i>	オオバコ属	1
Lactucoideae	タンポポ亜科	4
Asteroidae	キク亜科	7
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	114
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	1
Trilate type spore	三条溝胞子	146
Arboreal pollen	樹木花粉	47
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	22
Nonarboreal pollen	草本花粉	279
Total pollen	花粉総数	348
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	4.5 × 10 ⁵
Unknown pollen	未同定花粉	16
Fern spore	シダ植物胞子	147
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)

表2 鴻臚館跡第21次調査における種実同定結果

分類群			SK - 1124
学名	和名	部位	9層
Arbor		樹木	
<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核	2
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	2
<i>Actinidia ufa</i> Planch. ex Miq.	シマサルナシ	種子	119
Herb		草本	
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	5
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	8
Total		合計	136
Unknown		不明	4

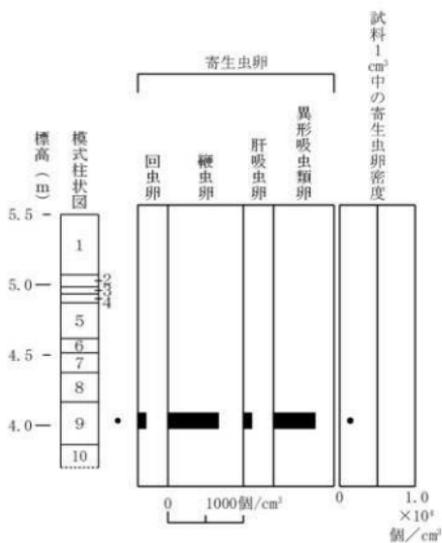
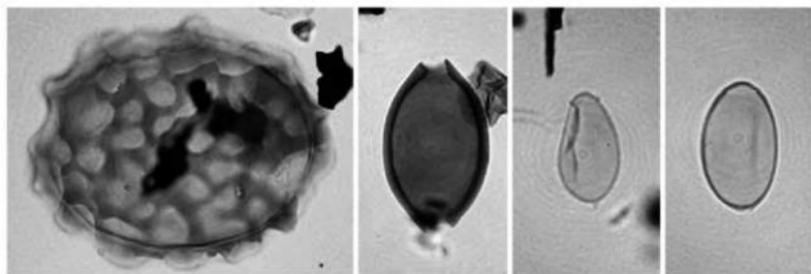


図1 鴻臚館跡第21次調査のSK-1124における寄生虫卵ダイアグラム

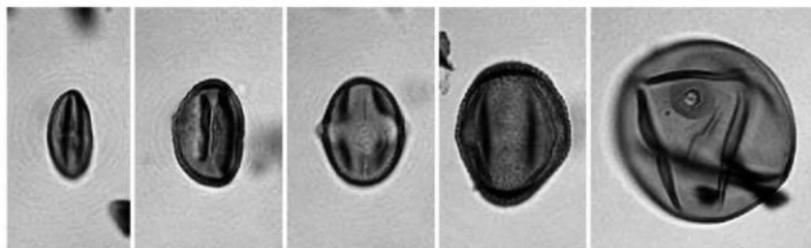


1 回虫卵

2 鞭虫卵

3 肝吸虫卵

4 異形吸虫卵



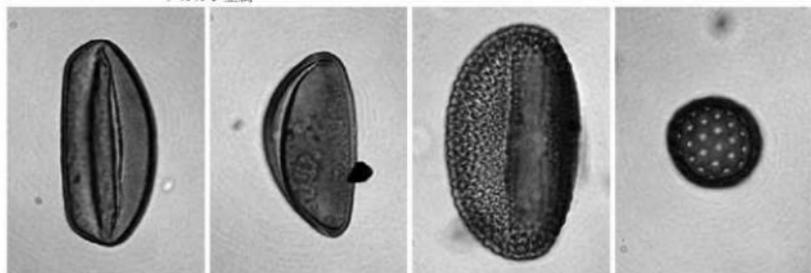
5 シイ属

6 コナラ属
アカガシ亜属

7 マメ科

8 ウコギ科

9 イネ属型

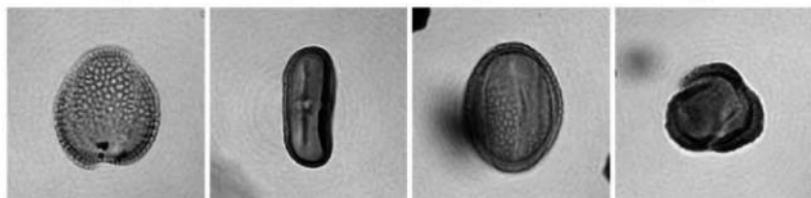


10 ミズアオイ属

11 ネギ属

12 ソバ属

13 アカザ科-ヒユ科



14 アブラナ科

15 セリ亜科

16 シソ科

17 ヨモギ属

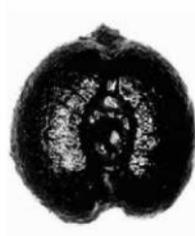
— 10 μm

鴻臚館跡第21次調査の種実



1 ヤマモモ核

1.0mm



2 ブドウ属種子



3 同左

1.0mm



4 シマサルナシ種子

0.5mm



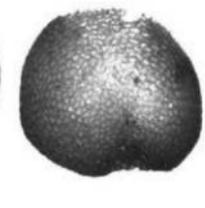
5 シマサルナシ種子

0.5mm



6 ホタルイ属果実

0.5mm



7 ナス種子

1.0mm



8 ナス種子

1.0mm

鴻臚館石垣の石材

西南学院大学名誉教授 唐木田芳文

1 まえがき

福岡市教育委員会の依頼により、2003年5月22、23日と27日の3日間にわたって現地調査を実施した。調査では、予め準備された石垣の実測図と写真からその位置を確認しながら、1個ずつ肉眼によって岩塊の岩石種を鑑定し、代表的なものは写真撮影した。

調査の結果、石材の大部分は礫岩（70～60%）を主とする堆積岩（80～75%）で、玄武岩（25～20%）がこれに次ぎ、花崗岩類がわずかに混入していることがわかった。

石材の出所を推定するために、石材の岩石種とその特徴を、博多湾周辺に分布する岩石と比較・検討した。生物侵食痕をもつ砂岩の存在は石材が海岸の転石であることを示しており、地理的關係も考慮すると、堆積岩の出所は西公園海岸がもっとも可能性が高いと推測される。博多湾周辺の能古島・今津半島毘沙門出・今山などに産する玄武岩のうち、オパサイト化した角閃石をふくむという石垣石材の岩質からみて、玄武岩は能古島産の可能性が大きい。なお、わずかの花崗岩類は、鴻臚館の創建以前にその用地にあった古い建造物（たとえば古墳）や付属物に使用されていた石材を再利用したものと考えられる。

謝辞 九州大学名誉教授浦田英夫氏・元九州大学助教授富田宰臣氏には古第三紀夷炭層について、九州大学理学部の下山正一博士には砂岩の生物侵食痕についてご教示をいただいた。これらの方々に厚くお礼を申し上げます。

2 石垣石材の岩石

i) 石材の岩石種

次の11種類が識別された：中礫礫岩・細礫礫岩・粗粒砂岩・中粒砂岩・細粒砂岩・シルト岩・泥岩・玄武岩・中粒花崗岩・細粒花崗岩・石英斑岩。記載の便宜上、岩石の成因を考慮してこれらを下記の6グループにまとめ、その性質をのべる。①～④は堆積岩、⑤は火山岩、⑥は深成岩に属する。

岩石種の記載

① 中礫礫岩（写真1・2、5・6・7、8）

径約5mm～数cmの礫をふくむが、大きい礫は少ない。礫は、チャート・珪質泥岩・砂岩・凝灰岩などである。ときに大小の黒色の珪化木破片をふくむ（写真1・8）。珪化木は炭田地域の堆積岩、いわゆる夷炭層に付随してよくみられる。

② 細礫礫岩（写真9・10）

径約2～5mmの礫をふくむ。

③ 砂岩（写真3・11・12）

径2mm以下の砂粒からなる。白っぽいアルコーズ質のものや黒くて硬いグレーワック質のものもある。ごくまれに、生物侵食痕あるいは貝殻侵食孔とよばれる、貝によってせん孔された丸い穴がみられる（写真12）。

この生物侵食痕は、満潮時には液に洗われ、干潮時には露出するような潮間帯に生息するせん孔性二枚貝（ニオガイ・カモメガイなど）や岩礁性巻き貝（マタキビ）などが、砂岩や泥岩、ときにかなり硬い火山岩などにあけた穴である。

写真12の粗～中粒砂岩の表面に刻まれている丸い穴は、現在実際に海岸でみられる生物侵食痕に形態的にそっくりである。したがって、この砂岩岩塊は波打ち際から採取されたものと考えることができる。

④ シルト岩・泥岩（写真13）

極細粒の砂と泥からなる。

⑤ 玄武岩（写真4・14）

石垣の玄武岩は一般に緻密であるが、多孔質のこともある。すべての岩塊において、暗灰色の石基中に長さ1～3mの細かい黒色斑晶が散在している（写真4・14）。この黒色斑晶は角閃石が変質したオパサイトとよばれる部分で、おもに鉄鉱粒の集合からなり、輝石をともなう。集合体の形は角閃石の結晶形を受け継いでいる。

⑥ 花崗岩類（写真15）

中粒花崗岩（1個）・細粒花崗岩（2個）と石英斑岩（1個）がみられる。中粒花崗岩は塊状で黒雲母をふくみ、福岡地域では早良花崗岩（唐木田、1985）のやや細粒のものに類似する。細粒花崗岩には黒雲母を比較的多くふくむものと、黒雲母と白雲母をふくむ両雲母花崗岩とがある。いずれも、早良花崗岩中の脈状としてみられる。石英斑岩は2mm大の石英斑晶をふくむ半深成岩である。

ii) 岩石種の分布

上記6岩石種のI期石垣における分布を図1・2に、II期石垣のものを図3・4に示す。一見、その分布状態はアトランダムで、石垣の構築に当たって、とくに岩石の物理的特性を考慮したようにはみられない。

iii) 岩石種の構成比

観察した岩塊数は、見落としや場所的に観察不可能なものを除き、I・II期合わせて965個になり、岩石種のグループ別構成比は表1に示したとおりである。I期とII期における構成比の違いが、本来のものか、あるいは石垣の発掘面積の大小によるものかは定かでないが、両者の違いは小さいとみられる。大きくみれば、I・II期とも同じように礫岩を主とした堆積岩がほぼ80%を占め、残り20%が玄武岩であるとみることができる。このことは、I期とII期石垣の構築環境にそれほど大きな変化がなかったことを示唆しているのかもしれない。

表1 石垣構成岩塊の岩石種と数・比率

岩石種	I 期 石 垣		II 期 石 垣	
	(数)	(%)	(数)	(%)
中礫礫岩	80	53	306	38
細礫礫岩	24	16	179	22
砂岩	18	12	122	15
泥岩・シルト岩	0	0	5	0.6
玄武岩	28	19	199	24
花崗岩類	0	0	4	0.5
合計	150	100	815	100.1

計測に当たっては原則として、石垣をつくる1つの岩塊を1個に数えた。例外的には、石垣を築く段階では一つの岩塊であったものが、構築後に岩石中の割れ目に沿って分離、移動してしまい、石垣実測図には別々の岩塊として描かれているものがまれにみられる。それらはそれぞれ2つ合わせて1個と数えた。またときに、礫岩と砂岩あるいは砂岩と泥岩の層が一緒に重なってみられる岩塊もある。この場合は、量の多いほうの岩石種として数えた。たとえば、写真2の中礫礫岩と砂岩からなる岩塊は礫岩がまさるので礫岩とし、写真13は泥岩と数えた。

3 石垣構成岩類の博多湾周辺における分布

この地域の地質は、おもに後期古生代石炭紀～ペルム紀の三郡変成岩、後期白亜紀の糸島花崗閃緑岩・北崎トータル岩・早良花崗岩、古第三紀層、新第三紀のアルカリ玄武岩および第四紀層からなっている（唐木田ほか、1994）。それらの分布を図5に示す。次に、石垣を構成する岩石種について説明する。

古第三紀層 この地層は夾炭層で、福岡炭田と粕屋炭田を構成している。博多湾内の沿岸部で夾炭層が露出する所は、愛宕山一小戸丘陵、鴻巣山一西公園丘陵北端の西公園さらに名島・香椎および能古島の南部などにみられる（図5）。これまでの研究によって層序区分された地層（表2）の中で、礫岩を比較的多くふくむのは野間層・名島層・須恵層・浦谷層である（富田・千々和、1994）。そのうち海岸に露出しているのは、西公園の野間層と名島の名島層である（図5）。

表2 福岡・粕屋地域の古第三紀層層序表
（富田・千々和、1994による）

地質年代 (百万年)	地域		福岡炭田	粕屋炭田
	漸新世	新第三紀	松下 (1949) ; 富田・千々和 (1994)	
23.3	漸新世	後期	姪浜層	欠
29.3			?	
35.4	新第三紀	前期	愛宕層	須恵層
				新原層
38.6	新第三紀	後期	浦谷層	名島層
			野間層	?
50.0	新第三紀	中期	野間層	宇美層
			福岡層	粕屋層
			残島層	高田層
				臼井層

新第三紀鮮新世のアルカリ玄武岩 この同類岩は北西部九州から北部九州の沿岸域、さらに東方の山陰・中国地方にまで広く分布する。玄界灘沿岸では、糸島半島の可也山・芥屋大門・毘沙門山・今山や能古島・姫島・玄界島・津屋崎、さらに北東方の響灘沿岸域では北九州市・下関市に、小規模だが広く分布している。

おもに2つの岩型が識別される。1つは①単斜輝石とかんらん石で特徴づけられるアルカリ玄武岩で、黒色、緻密な石基中に径約2mm以下の斑晶をふくむ。他は②単斜輝石・かんらん石のほかに角閃石をふくみ、灰色～暗灰色で葉片状構造を示す。径3mm以下の斑晶の一部は角閃石から変質したオパサイトである。博多湾岸の毘沙門山・今山には①が、能古島には①と②の両方が分布し、②が①より新期である(唐木田ほか、1994)。岩質的に、②が石垣の玄武岩に類似する。

花崗岩類 北部九州では15の花崗岩体が識別されている(唐木田、1985)が、そのうち福岡市とその近傍に分布するものは次の3岩体である(図5)。

- ① 早良花崗岩：長垂南部から鴻巣山丘陵の南部および油山にかけて広く分布する。
- ② 北崎トータル岩：能古島の北半部にみられる。
- ③ 糸島花崗閃緑岩：福岡市の周船寺・長垂・今山にわずかに露出する。これは糸島半島から続く岩体の東端部に当たる。

①は粗～中粒、灰白色、塊状(鉱物の配列がアトランダム)で、部分的に白雲母をふくむ黒雲母花崗岩である。大形のカリ長石による斑状組織を示すことが多い。②は長石が紫っぽく、黒雲母・普通角閃石を比較的多くふくむトータル岩である。③は粗粒で、黒雲母と普通角閃石が平行に配列して葉片状構造を示す花崗閃緑岩である。

石垣の中粒および細粒花崗岩はいずれも、早良花崗岩にともなう岩脈に類似し、石英斑岩は福岡地域の花崗岩や変成岩の分布域に貫入した岩脈として産する。

4 石垣石材の出所

礫岩を主とする堆積岩 礫岩は珪化木の破片をふくむことや固結度からみて、福岡付近に分布する古第三紀の爽炭層に由来することは明らかである。そして、貝によって穿たれた生物侵食痕をもつ砂岩がⅡ期石垣に見つかったことから、岩塊は海岸の潮間帯に存在していたものをふくむ一群と推測される。つまり、石材の出所は、礫岩を多くふくむ古第三紀層が崖をなして海岸に露出し、その転石が海中や岸辺にごろごろしているような環境の所ということになる。そうした条件を備えた場所は、地質の項でみたように、西公園と名島である。

名島海岸には、大珪化木の「名島の榎石」(国指定天然記念物)が礫岩に挟まって露出し、石垣礫岩の条件に合うようにみられる。しかし、大量の石材を産出するに足る崖のような場所は見あたらない。それに対して、鴻巣館跡の目と鼻の先にある西公園は、標高30m余りあり、当時は島であったらしい(福岡市教育委員会、1996)。現在でも東側には大きな崖崩れがあり、ところどころに砂岩をともなった礫岩が露出している。石垣用石材としての質・量ともに条件を満たし、運搬にも至便である。こうした理由から、西公園海岸を石垣用礫岩の出所の第一候補に挙げたい。

玄武岩 博多湾域のアルカリ玄武岩類は、前述のように①古期の単斜輝石かんらん石玄武岩と(診新期の単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩)からなる。石垣の玄武岩は、オパサイト化した角閃石をふくむ②に相当する。今山・毘沙門山・能古島のうち、前2者には①しかみられないので、石垣の玄武岩石材は能古島から搬入されたと考えるのが妥当であろう。

しかし、玄武岩の出所は能古島としても、石垣に利用されている量の少なさからみると、その主要な採石目的は別にあったのではと疑いたくなる。たとえば、玄武岩の緻密で堅い岩質に注目して礎石建物や柱の礎石に使用するのが第一目的で収集し、その中の粗悪なものを、礫岩を補足する形で石垣用に回したという可能性も考えられる。

また、玄武岩が利用された理由としてこれとは別の憶説も浮かんでくる。それは古い玄武岩石材の再利用である。福岡付近では豊富に産する玄武岩が古代からすでに石材としてたくさん利用されている。鴻臚館の建設用地の造成（福岡市教育委員会、2002）の際にも、古い建造物やその付属物が壊され、不要になった石材用玄武岩が生じたであろう。それを石垣に転用した可能性も完全には排除できないように思われる。

礫岩＋玄武岩 石垣の石材はほとんど礫岩と玄武岩で構成されているので、両者が一緒に産出するある1ヶ所から搬入されたという仮説が証明されれば、これが出所に対するもっとも明快な答えになる。そこで、これまで知られていないことであるが、西公園にかつて玄武岩が存在していたかどうか、その痕跡を探る調査をした。しかし、海岸は完全に埋め立てられていて不明であり、公園化した丘には、新たに搬入された庭石の玄武岩以外には、現地産とみられる玄武岩の破片など、その痕跡をまったく見いだすことができなかった。したがって、西公園における礫岩と玄武岩との共存説は現段階では考えにくい。

また、能古島には残島層と玄武岩がともに分布する。しかし、残島層の礫岩はそう多くなく、主体の基底礫岩もそれほど広くは露出してない。もし、礫岩と玄武岩と一緒に能古島から運ばれたとすれば、基底礫岩の下に存在する変成岩が、なぜ無視されたのかの説明がつかない。したがって、今回は礫岩の能古島からの搬入説はとらない。

花崗岩類 岩質からみて、花崗岩類は早良花崗岩体から採石され、石英斑岩は福岡付近の花崗岩や変成岩の分布域に由来するものであろう。しかし、その量の少なさから推して、石垣構築の目的で採石されたものではなく、それ以前の建造物、たとえば古墳などの石材を再利用したものであろうと考えられる。

以上、鴻臚館石垣の石材の出所について、可能性の低いものもふくめて広く考えてみた。その結果、現時点では地質学的に次の考え方がもっとも可能性が高いと推論される。

- ① 礫岩を主とする堆積岩は西公園海岸からの搬入、
- ② 玄武岩は能古島産、
- ③ 花崗岩類は建設用地にあった古い石材の再利用であろう。

引用文献

- 福岡市教育委員会（1996）鴻臚館跡 6. 福岡市埋蔵文化財調査報告書，第486集，36頁。
福岡市教育委員会（2002）鴻臚館跡12. 福岡市埋蔵文化財調査報告書，第733集，44頁。
唐木田芳文（1985）北九州花崗岩の地質学的分類，日本応用地質学会九州支部会報，6号，2-12頁。
唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊（1994）福岡地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），地質調査所，192頁。
松下久道（1949）九州北部における古第三系の層序学的研究，九州大学理学部研究報告（地質学），3巻，1-57頁。
富田宰臣・千々和一豊（1994）古第三系，唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊，福岡地域の地質，地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），地質調査所，73-102頁。

注 1) 写真中のスケールに付けられた観数字 (1~15) の単位は cm
2) 写真1~4は1層石理, 写真5~15は皿層石理

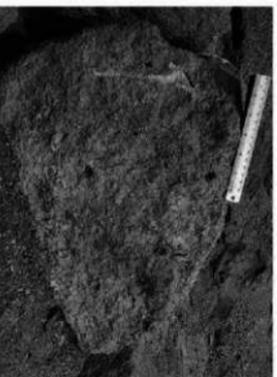


写真1 中層凝岩 (図2). 長さ5cm以下の黒色の柱状木炭片をふくむ。



写真2 中層凝岩と粗粒砂岩 (図1). 凝岩のほうが量的にまさり、粗粒に散在る。



写真3 粗粒砂岩 (図1)



写真4 凝灰岩 (図2). 細密な紺灰色の石灰中に1~3mmの黒色炭片が散在し、巻状に折れる (断面は写真14と参照)。



写真5 中層凝岩 (図4). おおむね粗粒砂岩の理が多い。



写真6 中層凝岩 (図4). チャート・粗粒砂岩・紫色凝灰岩などの理をふくむ。

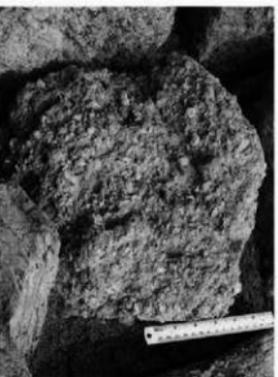


写真7 中層凝岩 (図3). 凝灰田層理が高く、大きさが比較的そろっている。



写真8 中層凝岩 (図4). 長さ30cm以上の黒色柱状木炭片を上層にふくむ。



写真9 細粒砂岩 (図3)。粗粒砂岩中に数mm大の礫が散在する。



写真10 細粒砂岩 (図4)。割れ目に沿って分離し、間に粘土が充填されている。



写真11 粗粒砂岩 (図3)。径1~3mmの砂からなる。



写真12 粗~中粒砂岩 (図4)。具による生物侵食痕が刻まれている。



写真13 シルト岩をはさむ泥岩 (図3)。シルト岩の厚さは4cmで、泥岩と数える。

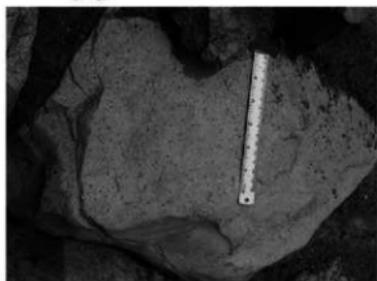


写真14 玄武岩 (図3)。板状に割れた面にみられる黒色斑品。

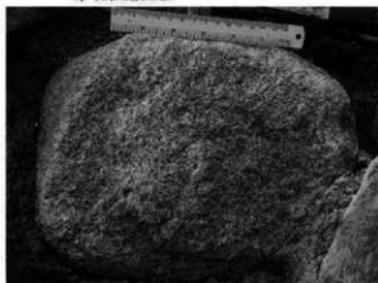


写真15 細粒花崗岩 (図4)。塊状で、黒色の黒角閃をふくむ。



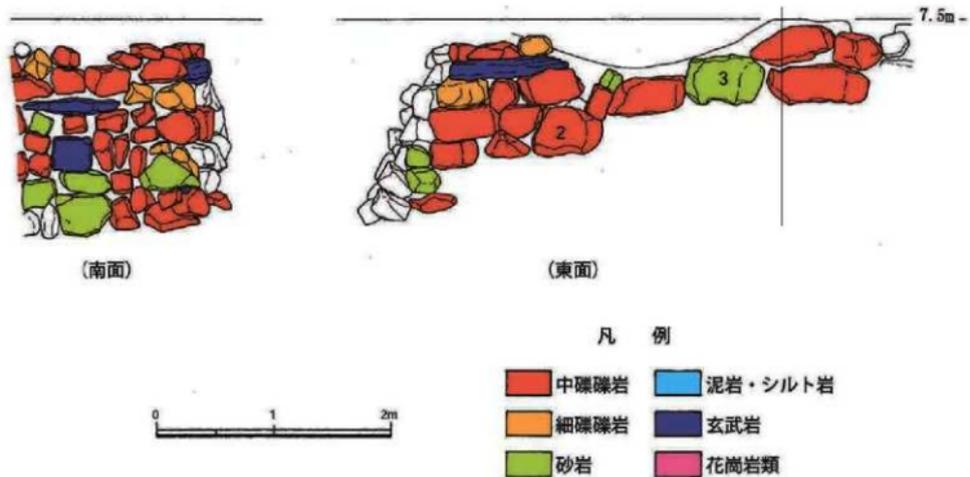


図1 I期石垣南東隅の石材分布
図中の番号2・3はそれぞれ写真の番号に対応

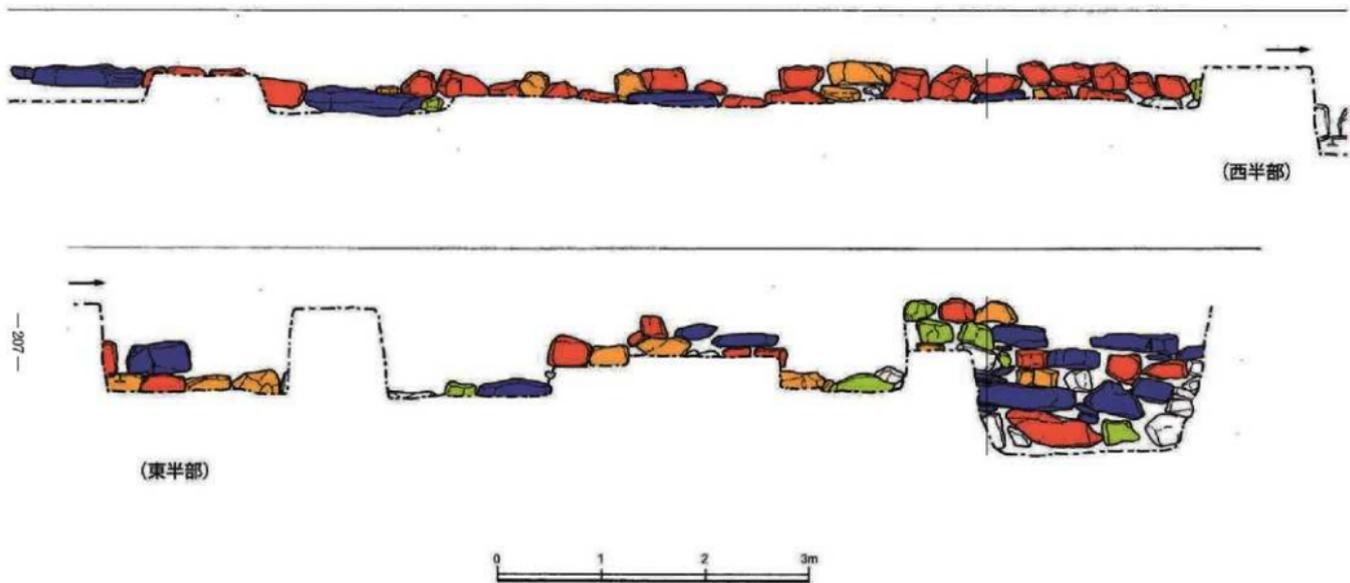


図2 I期石垣南面の石材分布
 凡例は図1に同じ；图中的番号1・4はそれぞれ写真の番号に対応



図3 II期石垣南面西半部の石材分布
凡例は図1に同じ；図中の番号7・9・11・13・14はそれぞれ写真の番号に対応

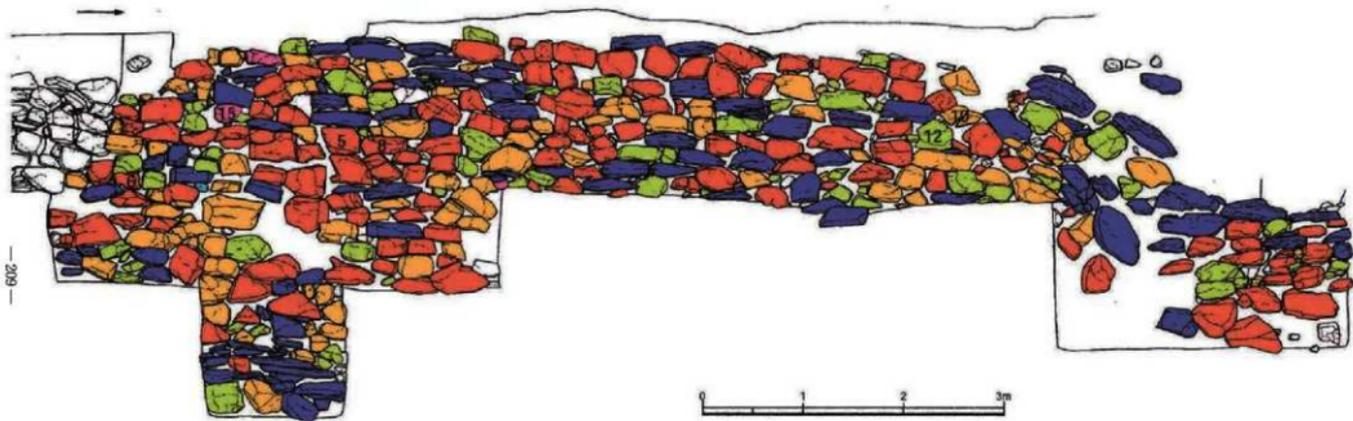


図4 II期石垣南面東半部の石材分布
 凡例は図1に同じ；図中の番号5・6・8・10・12・15はそれぞれ写真の番号に対応

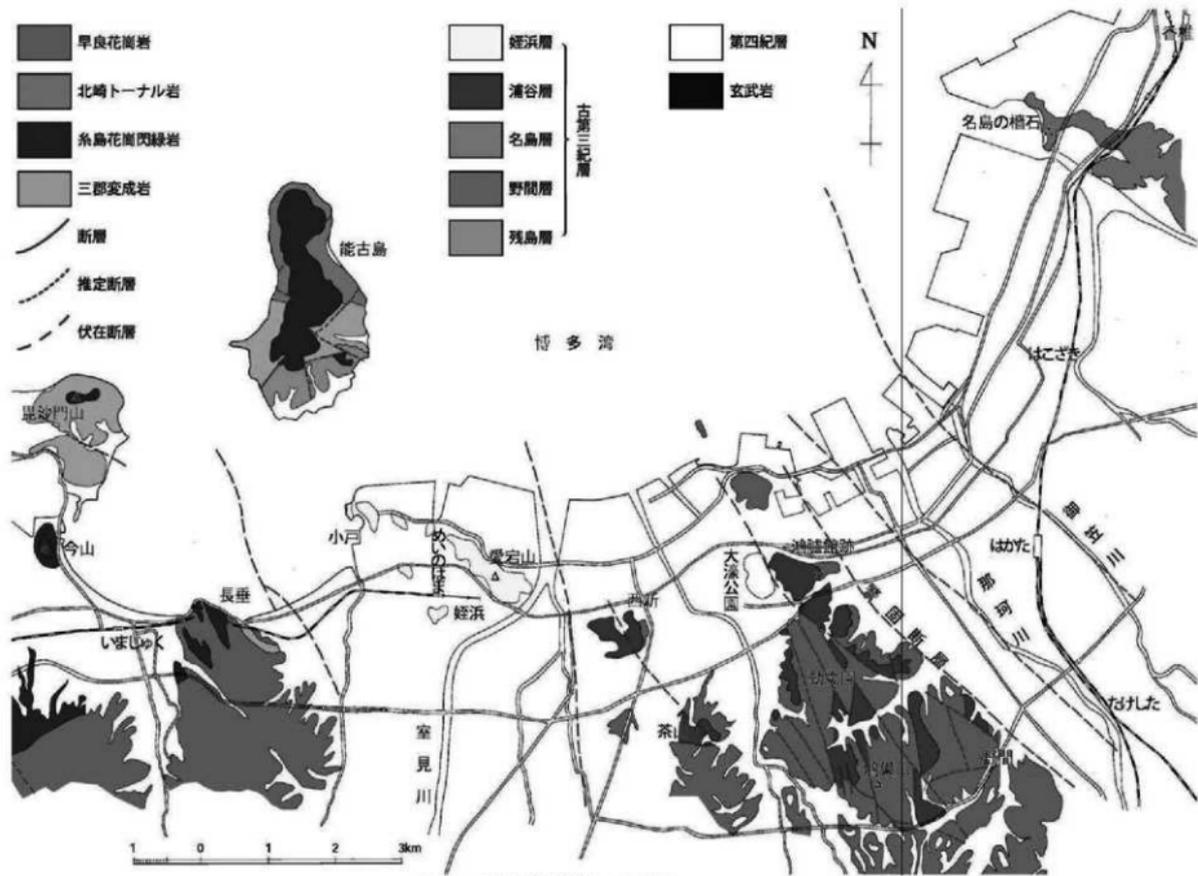


図5 博多湾南岸部の地質図
(青木田ほか、1994の一部を簡略化)



2 19次調査地点全景 (東から)



4 22、23次調査地点全景 (東から)



1 18次調査地点全景 (南から)



3 20次調査地点全景 (南から)



1 24次調査トレンチ2上層全景（北から）



3 25次調査トレンチ3上層全景（南から）



2 24次調査トレンチ2下層全景（北から）



4 26次調査トレンチ3下層全景（北から）



1 27次調査トレンチ4上層全景(東から)



3 29次調査トレンチ5上層全景(東から)



2 28次調査トレンチ4下層全景(東から)



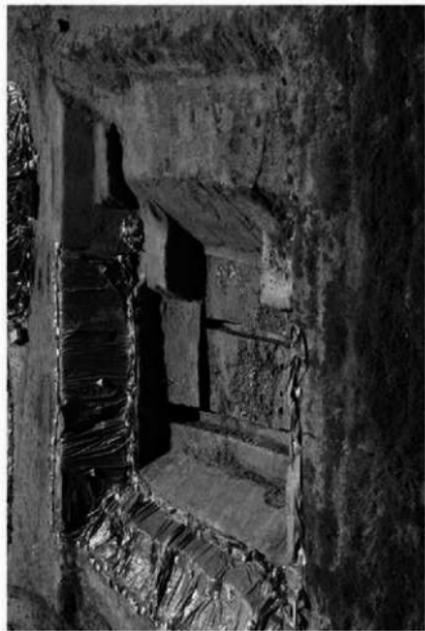
4 29次調査トレンチ5下層全景(東から)



1 30次調査トレンチ6上層全景(南から)



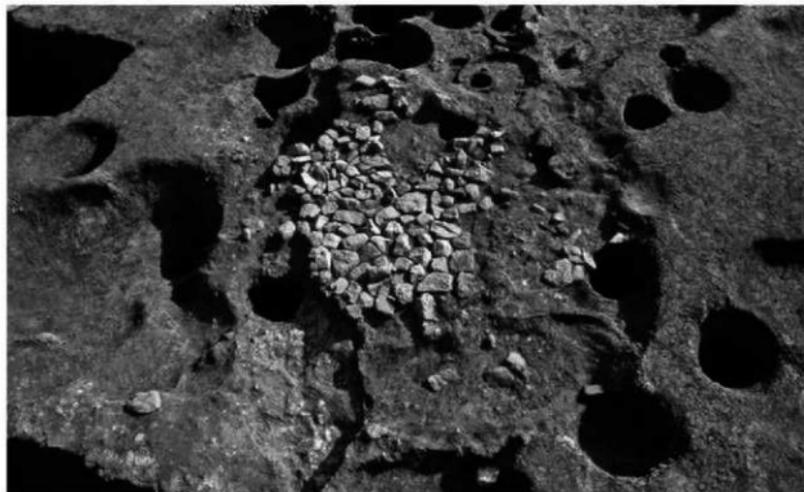
3 31次調査トレンチ1上層全景(南から)



2 31次調査トレンチ6下層全景(北から)



4 31次調査トレンチ1下層1(北から)



1 石室 SO14512 (南から)



2 SD14530 遺物出土状況 (南東から)



2 SB14601 (南から)



4 I期推定門遺構 SB23330 (東から)



1 SA14602、14603、SB14601 (西から)



3 SA19400・SA15002 (南から)



1 石垣 SX1245 (南東から)



2 SX1245 南面 (南から)



3 SX1245 隅角 (南東から)



4 SX1245 土層断面 (東から)



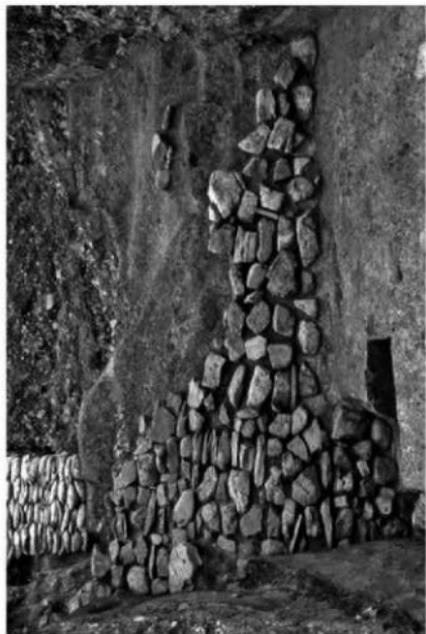
5 SX1245 石垣背後盛土土層 (東から)



6 SX14527 立面 (南から)



1 石垣 SX14528 (南から)



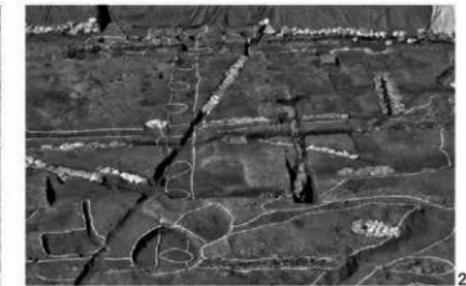
2 SX17703、17704 (南から)



3 SX17703 石垣 (南東から)



4 SX17704 (南東から)



1 布織り塚 SA1104 断ち割り (北から)

2 SA1237 検出状況 (南から)



3 SA25055 検出状況 (南から)

4 SA25055 断ち割り (東から)

5 SA25055 SP01 断ち割り (東から)

6 SA25055 SP02 (西から)

7 SA25055 西側トレンチ基盤断落ち (東から)





1 東門 SB1238 (北から)



3 SB1238 SP24303 土層 (東から)



2 SB1238 SP24305 土層 (東から)



4 SB17701, 17702 (北から)



1 SK1125、1124 (北西から)



2 SK1124 (北から)



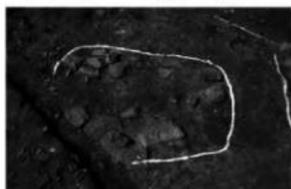
3 SK1124 (南から)



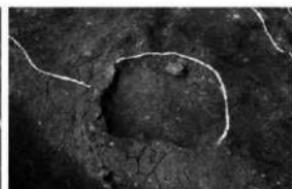
4 SK1125 (南から)



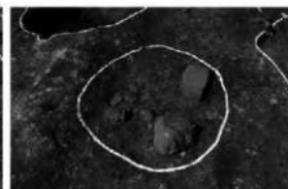
1 礎石建物 SB1228 (東から)



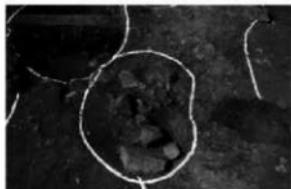
2-1 SB1228 礎石根石 NP02 (東から)



2-2 SB1228 礎石根石 NP0 (東から)



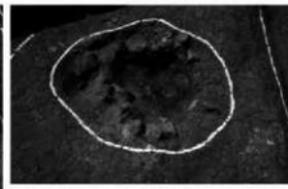
2-3 SB1228 礎石根石 NP1 (東から)



2-4 SB1228 礎石根石 NP2 (東から)



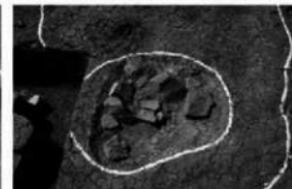
2-5 SB1228 礎石根石 NP3 (東から)



2-6 SB1228 礎石根石 NP4 (東から)



2-7 SB1228 礎石根石 NP5 (東から)



2-8 SB1228 礎石根石 NP7 (東から)



1 トレンチ1 北側斜面及び斜面下（北から）



2 トレンチ1 斜面下土層堆積（西から）



1 トレンチ1斜面下 T1 瓦敷層 (北から)



2 トレンチ1斜面下 T2 瓦敷層 (北から)



3 トレンチ1斜面下 T2 瓦敷層下層 (東から)



4 トレンチ1斜面下 T3 整地層 (北から)



5 トレンチ1斜面下 T4 整地層 (東から)



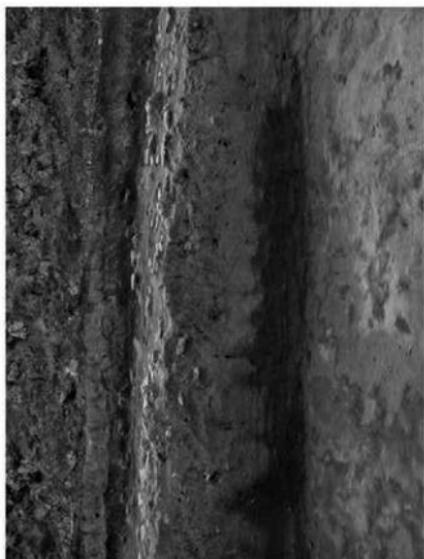
1 トレンチ2斜面 SX18600 (北から)



3 トレンチ2斜面下 SX18500 検出状況 (北西から)



2 トレンチ2斜面 SX18600 完掘後 (北西から)



4 トレンチ2斜面下 SX18500 西壁砂丘堆積ラミナ層 (東から)



1 トレンチ6斜面下 中世溝内瓦出土状況 (北から)



2 トレンチ6斜面下 T1 整地層土層 (東から)



2 トレンチ6斜面下 T2 瓦敷層 (北から)



4 トレンチ6斜面下 T2 瓦敷換出状況 (東から)



1 トレンチ6斜面下 T1 瓦敷層 (北から)



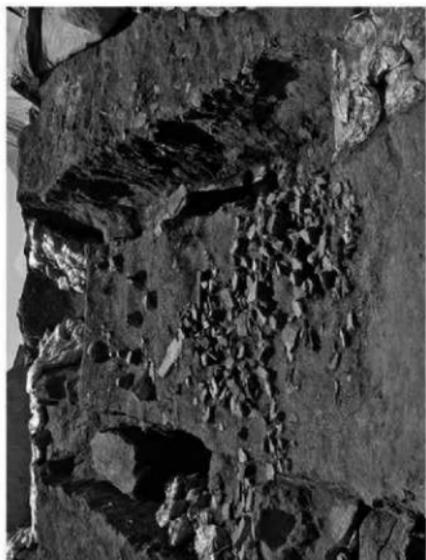
3 トレンチ6斜面下 T1 瓦敷換出状況 (東から)



1 トレンチ3北半 (北から)



2 トレンチ3北側斜面下 (北東から)



1 トレンチ3 SX19500 (北から)



2 トレンチ3 SX19512 (西から)



3 トレンチ3 推定築地掘遺構 SX19610 検出状況 (南東から)



4 トレンチ3 SX19610 サブトレ4 南端土層 (北西から)



1 トレンチ4斜面 SX21110 (南東から)



2 トレンチ5斜面 SX23200 (南東から)



3 トレンチ5斜面下 低地面 (北東から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき こうろかんあと
書 名	史跡 鴻臚館跡
副 書 名	－北館部分の調査(1)－
巻 次	鴻臚館跡 22
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1300 集
編著者名	吉武 学／大庭 康時／菅波 正人
編集機関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 - 1 電話番号 092-711-4784
発行年月日	2016 年 3 月 25 日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきこうろかんあと 史跡鴻臚館跡・ しせきふくおかじょうあと 史跡福岡城跡	ふくおかしちゅうおうく 福岡市中央区 じょうないー1 城内 1 - 1	40134	0192	33° 35' 12"	130° 23' 11"	000425 ～ 010316	1,750	範囲確認
						010521 ～ 020329	2,000	
						020513 ～ 030331	1,200	
						050404 ～ 060331	2,110	
						060401 ～ 070331	820	
						070401 ～ 080331	504	
						080701 ～ 090331	860	
						090401 ～ 100331	900	
						100602 ～ 110331	970	
						110601 ～ 111222	500	
120417 ～ 130329	1,180							
130701 ～ 140328	860							
							(計 13,654)	

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡鴻臚館跡・ 史跡福岡城跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	掘立柱建物 石垣 布振り塀 礎石建物 便所状遺構 溝 土坑 柱穴 整地層 包含層	須恵器 土師器 中国陶磁器 朝鮮陶磁器 瓦 石製品 鉄製品 銅製品	古代の客館である 鴻臚館（筑紫館） 跡の北館部分の遺構

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 22

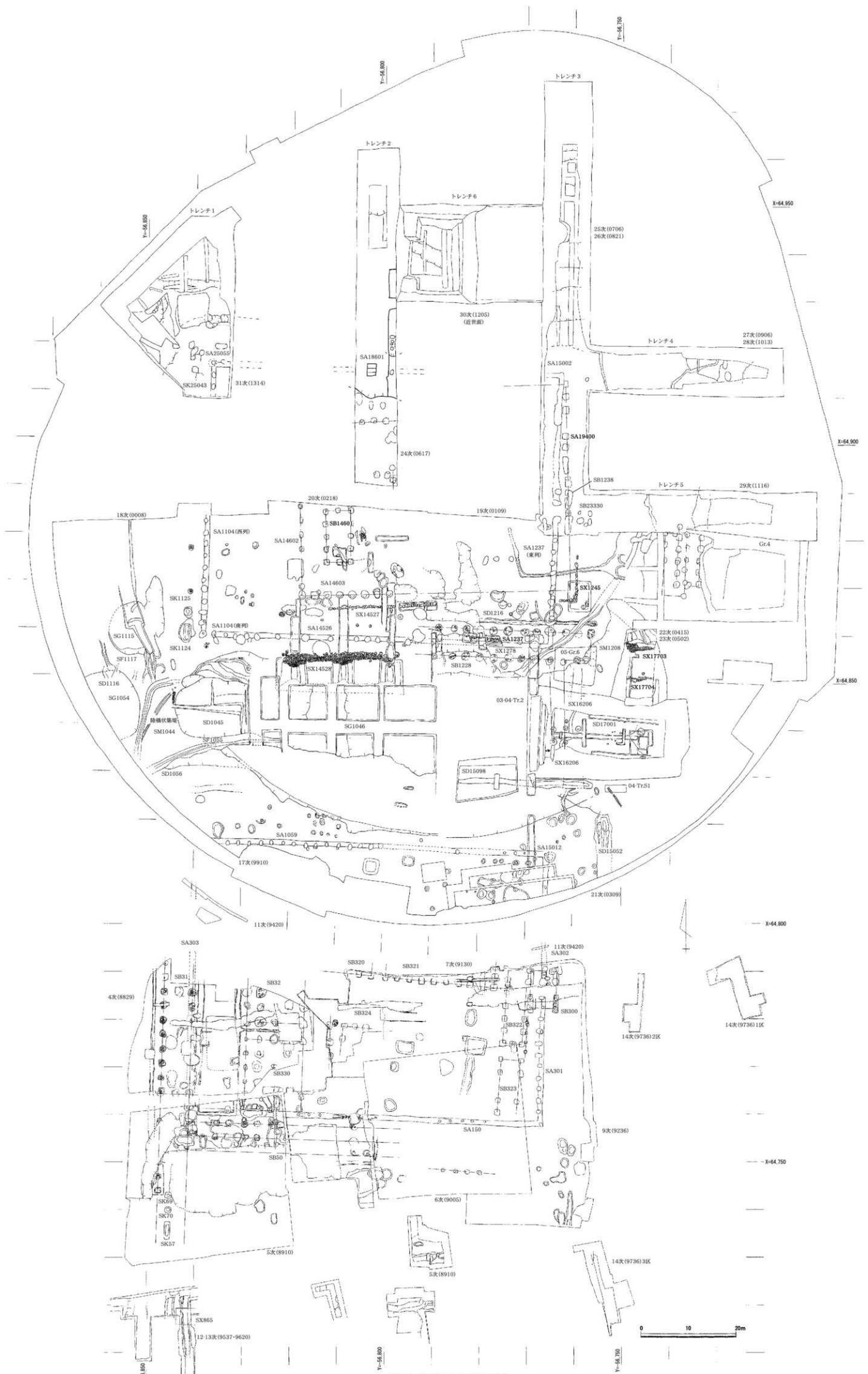
－北館部分の調査(1)－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1300 集

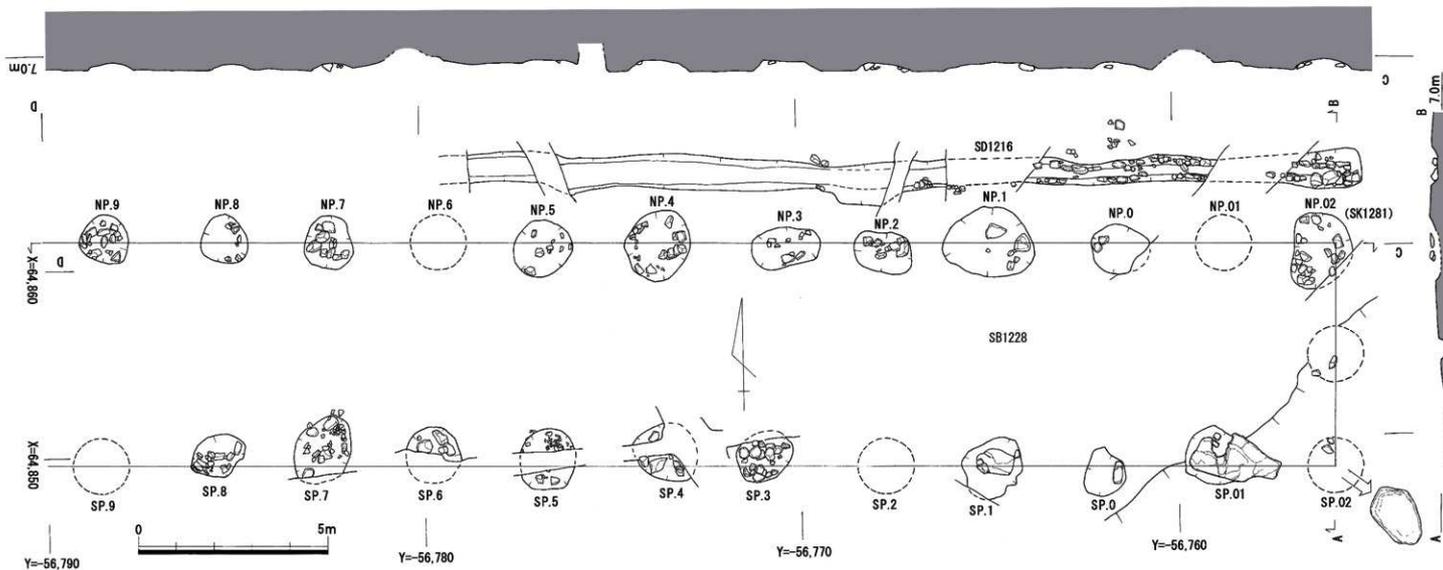
2016 年(平成 28 年)3 月 25 日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 - 1

印 刷 正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺 3 丁目 28 番 1 号



付図1 検出遺構配置図 (1/500)



付図3 礎石建物 SB1228・雨落溝 SD1216 実測図 (1/100)